

県営ほ場整備事業(神林村)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

てん のう まえ 遺 跡
天 王 前 遺 跡

あり あげ まと ば 遺 跡
有 明 的 場 遺 跡

いし かわ 遺 跡
石 川 遺 跡

1 9 9 8

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

県営ほ場整備事業(神林村)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

てん のう まえ 遺 跡
天 王 前 遺 跡

あり あけ まと ぼ 遺 跡
有 明 的 場 遺 跡

いし かわ 遺 跡
石 川 遺 跡

1 9 9 8

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

広大な水田を有する本県は、過去、幾度となく中小規模の水田整備を実施し、社会情勢に適応してきました。しかし、近年の整備は、格段に大規模なものになって来ています。これに拍車をかけたのがガット・ウルグアイラウンドで、その関連の施策はさらなる規模拡大と計画の促進を招きました。しかし、事業地内のいくつかの市町村では埋蔵文化財に対する調査体制が、この急速な展開に追いつかず、ほ場整備事業の大きな問題の一つとなって来ました。県教育委員会では、これらの状況を深刻に受けとめ、市町村の調査体制では対処できない調査量をもつものについて厳選し、発掘調査の協力をすることにしました。

本書はこの協力の一環として、発掘調査した岩船郡神林村「天王前遺跡」・「有明的場遺跡」・「石川遺跡」の調査記録であります。

「天王前遺跡」は旧石器時代、縄文時代、中・近世の遺跡で、その主体は近世の初め頃と考えられ、数多くの掘立柱建物を中心に井戸や道路が発見されました。また「有明的場遺跡」・「石川遺跡」は調査範囲が狭かったにもかかわらず、平安時代～近世の遺物・遺構が発見され、特に「石川遺跡」で発見した平安時代の土器は、今後県内の該期資料の基準の一つとして位置付けられるものです。

今回の調査結果が、今後の本県における平安時代および近世を初めとした考古学研究に資するとともに、県民の方々から埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機にしていいただければ幸いです。

最後に、本調査に参加された地元の方々並びに神林村教育委員会、神林村には多大なご協力とご援助を頂きました。また、県農地部および村上農地事務所には格別のご配慮を賜り厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例 言

- 1 本書は新潟県岩船郡神林村大字山屋字天王前に所在する天王前遺跡(てんのうまえいせき)、同村大字有明870番地ほかに所在する有明的場遺跡(ありあけまとばいせき)、同村大字桃川3060番地ほかに所在する石川遺跡(いしかわいせき)の発掘調査報告書である。発掘調査は県営ほ場整備事業に伴い、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団とする)が新潟県より受託して実施した。
- 2 発掘調査は新潟県教育委員会(以下、県教委とする)が主体となり、新潟県教育委員会からの依頼を受けて、埋文事業団が平成8年7月から同年11月に実施した。
- 3 整理および報告書作成にかかる作業は平成8年12月から平成9年3月にかけて埋文事業団がおこなった。
- 4 出土遺物および記録類は、報告書刊行後、神林村教育委員会が保管・管理する。遺物の註記は天王前遺跡が略記号「天」、有明的場遺跡が「的」、石川遺跡が「石」にそれぞれ出土地点および出土層位を併記した。
- 5 本書の作成は埋文事業団調査課職員があたった。ただし、第Ⅶ章の自然遺物の分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 6 天王前遺跡出土の墨書石の解説については、新潟大学人文学部教授小林昌二氏、県企画課藤森健太郎氏に指導、御教示を賜わった。
- 7 文中の註は章末に掲載した。引用・参考文献は著者および発行年(西暦)を文中に〔 〕で示し、巻末に掲載した。ただし、第Ⅶ章の自然科学的分析については、章末に掲載した。
- 8 既成の地図を用いた場合は、その出典を記した。
- 9 本書に掲載した遺物の番号は遺跡ごとに通し番号とし、実測図・写真とも共通の番号を使用した。
- 10 本書の作成作業は主に金子泰之が遺構を、鈴木俊成が遺物を担当し、遺物実測、トレース、図版作成等は、埋文事業団整理作業職員がおこなった。
- 11 本書は高橋保・鈴木俊成・金子泰之が分担執筆したもので、執筆分担は第Ⅰ章が高橋、第Ⅱ章・第Ⅲ章2-B・第Ⅳ章4(SB 357)・第Ⅴ章4・第Ⅵ章4が金子で、その他は鈴木である。そして編集は鈴木がおこなった。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示、ご協力を頂いた。記して御礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

安藤正美、磯部保栄、岩田 隆、遠藤孝司、大場喜代司、神林村、神林村教育委員会、小林昌二、齋藤久一、塩原知人、品田高志、高橋保雄、滝沢規朗、竹田和夫、田中耕作、田中真吾、田中 靖、田辺早苗、立木宏明、鶴巻康志、富樫秀之、藤森健太郎、水沢幸一、宮田進一、村上農地事務所、矢田俊文、山本幸俊、吉井雅勇、吉岡泰英、渡辺ますみ

目 次

第 I 章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
第 II 章 遺跡の環境	3
1 地理的環境	3
2 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第 III 章 調査の概要	9
1 発掘調査の方法と経過	9
A 確認調査(天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡)	9
B 発掘調査	9
(1) 天王前遺跡	9
(2) 有明的場遺跡	10
(3) 石川遺跡	11
2 整理経過および報告書の表記方法	11
A 整理経過	11
B 報告書の表記方法	11
3 発掘調査および整理作業の体制	13
A 発掘調査(天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡)の調査体制	13
B 平成8・9年度整理体制(天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡)	13
第 IV 章 天王前遺跡	14
1 遺跡の概要	14
2 調査グリッドの設定	14

3	遺跡の層序	14
4	遺構	18
5	遺物	29
A	旧石器～縄文時代	29
B	中・近世の遺構出土陶磁器・土器	29
C	中・近世の遺構外出土陶磁器・土器	31
D	中・近世の遺構出土石製品	32
E	中・近世の遺構外出土石製品	34
F	中・近世の遺構出土木製品	34
G	中・近世の金属製品・土製品	34

第 V 章 有明の場遺跡 35

1	遺跡の概要	35
2	調査グリッドの設定	35
3	遺跡の層序	35
4	遺構	37
5	遺物	40
A	遺構出土遺物	40
B	遺構外出土遺物	40

第 VI 章 石川遺跡 41

1	遺跡の概要	41
2	調査グリッドの設定	41
3	遺跡の層序	41
4	遺構	41
5	遺物	42
A	遺構出土遺物	42
B	遺構外出土遺物	44

第 VII 章	自然科学分析	46
1	はじめに	46
2	天王前遺跡の基本層序	46
A	試料	46
B	方法	46
C	結果	47
D	考察	47
3	柱根等の用材	48
A	試料	48
B	方法	48
C	結果	48
D	考察	49
4	種実遺体の種類	51
A	試料	51
B	方法	51
C	結果	51
D	考察	55
第 VIII 章	ま と め	58
1	天王前遺跡	58
A	旧石器時代および縄文時代について	58
B	中世・近世について	58
(1)	遺跡の時期	58
(2)	遺構の時期	58
(3)	建物群の配置と大型建物	59
(4)	石製品について	60
(5)	墨書石について	60
2	有明的場遺跡	60
3	石川遺跡	60
	《要 約》	62
	《引用・参考文献》	63

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	2
第2図	周辺の遺跡	4
第3図	天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡の調査工程	10
第4図	天王前遺跡のグリット設定および調査範囲	15
第5図	天王前遺跡の層序	16
第6図	縄文時代および旧石器時代に対する試掘坑位置・層序	17
第7図	有明的場遺跡・石川遺跡のグリット設定および調査範囲	36
第8図	天王前遺跡試掘坑42 T 柱状図および試料採取位置	46
第9図	土師器碗の法量分布図	61

表 目 次

第1表	天王前遺跡試掘坑42 T テフラ分析結果	47
第2表	樹種同定結果	50
第3表	天王前遺跡出土種実遺体の同定結果	52
第4表	石川遺跡出土種実遺体の同定結果	53
第5表	有明的場遺跡出土種実遺体の同定結果	54
第6表	検出された植物の用途と生育地	56
第7表	天王前遺跡陶磁器・土器観察表	65
第8表	天王前遺跡石製品観察表	71
第9表	天王前遺跡木製品観察表	73
第10表	天王前遺跡漆器観察表	73
第11表	天王前遺跡その他の遺物観察表	73
第12表	有明的場遺跡陶磁器・土器観察表	74
第13表	有明的場遺跡石製品観察表	75
第14表	有明的場遺跡木製品観察表	75
第15表	石川遺跡陶磁器・土器観察表	75
第16表	石川遺跡木製品観察表	80
第17表	石川遺跡石製品観察表	80
第18表	石川遺跡その他の遺物観察表	80

図版目次

図面

天王前遺跡(遺構)

- 図版1 遺構全体配置図 1 : 400
- 図版2 遺構全体実測図1 1 : 160
- 図版3 遺構全体実測図2 1 : 160
- 図版4 遺構全体実測図3 1 : 160
- 図版5 遺構全体実測図4 1 : 160
- 図版6 遺構全体実測図5 1 : 160
- 図版7 遺構全体実測図6 1 : 160
- 図版8 遺構個別実測図1 1 : 80 SB 345、SB 346、SB 348
- 図版9 遺構個別実測図2 1 : 80 SA 359、SA 360、SB 349、SB 350
- 図版10 遺構個別実測図3 1 : 80 SB 351、SB 352、SB 353、SB 354
- 図版11 遺構個別実測図4 1 : 80 SA 361、SB 358、SB 301
- 図版12 遺構個別実測図5 1 : 80 SB 357、SB 355、SB 356
- 図版13 遺構個別実測図6 1 : 40 SB 357(P 740、P 741、P 630、P 600、P 605、P 610、P 682、P 620、P 765、
P 700、P 676)、P 612
- 図版14 遺構個別実測図7 1 : 40 SB 357(P 650、P 705、P 658、P 670、P 675、P 661、P 710、P 726)、
SB 356(P 680、P 734)、P 659、P 679
- 図版15 遺構個別実測図8 1 : 20、1 : 40 SE 344、SE 343、SE 311、SE 320、SK 341、SX 328
- 図版16 遺構個別実測図9 1 : 20、1 : 40 SB 358(P 542)、P 730、P 660、P 720、SD 330、SD331
- 図版17 遺構個別実測図10 1 : 20、1 : 40 SD 335①、SD 330、SD 335②、SX 345、SD 337、SX 327、SD 332

有明の場遺跡(遺構)

- 図版18 遺構全体配置図と層序 1 : 40、1 : 400
- 図版19 遺構全体・個別実測図1 1 : 20、1 : 40、1 : 100 P 3、SE 15、P 19
- 図版20 遺構全体・個別実測図2 1 : 20、1 : 40、1 : 100 SE 25、SK 53、SE 30、SK 20、P 33、P 32
- 図版21 遺構全体・個別実測図3 1 : 20、1 : 40、1 : 100 P 44、SE 35、SE 50、SE 45
- 図版22 遺構全体・個別実測図4 1 : 20、1 : 40、1 : 100 SD 52、SK 51、P 46

石川遺跡(遺構)

- 図版23 遺構全体実測図と層序 1 : 80、1 : 200
- 図版24 遺構個別実測図 1 : 40、1 : 80 SD 1、SK 2

天王前遺跡(遺物)

図版25 旧石器・縄文時代の石器、中・近世の遺構出土陶磁器・土器(1)

SB 358(P 542)、SB 357(P 671、P 726)、SB 356(P 680)、P 698、P 884、P 1550、SD 324(自然流路)、P 730、
SD 325(自然流路)

図版26 中・近世の遺構出土陶磁器・土器(2) SD 330、SD 259、SD 335①

図版27 中・近世の遺構出土陶磁器・土器(3)、中・近世の遺構外出土陶磁器・土器(1)

SD 335②、SD 337、SX 327

図版28 中・近世の遺構外出土陶磁器・土器(2)

図版29 中・近世の遺構外出土陶磁器・土器(3)、中・近世の遺構出土石製品(1)

SB 357(P 600、P 605、P 620)、SB 358(P 628)、P 659

図版30 中・近世の遺構出土石製品(2) P 660、SB 357(P 676、P 682)、P 726、P 730

図版31 中・近世の遺構出土石製品(3) P 732、P 1641、SB 349(P 925)、SB 357(P 741、P 765)、P 1631、

SD 259(道路状遺構)、SD 324

図版32 中・近世の遺構出土石製品(4) SD 324(自然流路)、SD 325(自然流路)、SD 330、SD 337

図版33 中・近世の遺構出土石製品(5)、遺構外出土石製品 SD 335①、SD 335②、SX 327

図版34 中・近世の遺構出土木製品(1) SD 337、SB 357(P 620、P 582、P 650、P 670)、SB 358(P 531)、P 574、

P 578、P 518、P 669、P 865

図版35 中・近世の遺構出土木製品(2)、金属製品・土製品

P 675、P 679、P 778、SB 357(P 676)、SD 330、SB 301-11、SD 337、SD 335①

有明の場遺跡(遺物)

図版36 遺構・遺構外出土遺物 P 3、SE 35、SE 25、P 46、P 38、SD 40、P 33

石川遺跡(遺物)

図版37 遺構出土遺物(1) SK 2

図版38 遺構出土遺物(2) SD 1(1層)

図版39 遺構出土遺物(3) SD 1(1層)、SD 1(2層)、SD 1(3層)

図版40 遺構出土遺物(4) SD 1(3層)、SD 1(5層)、SD 1(層位不明)

図版41 遺構外出土遺物(1)

図版42 遺構外出土遺物(2)

写真

天王前遺跡(遺構)

図版43 遺跡全体

図版44 遺跡遠景 遺構配置(調査区全体)

図版45 遺構配置(BC XXXIV区) 遺構配置(CD XXXIII~XXXV区)

図版46 遺構配置(BC XXXIV区) 遺構配置(BC XXXIV区)

図版47 遺構配置(C XXXIV区) 遺構配置(CD XXXV区)

- 図版48 試掘状況 42 T 試掘坑断面および試料採取位置 遺構配置
- 図版49 SB 357-P 740・741断面・完掘 SB 357-P 630完掘 SB 357-P 600断面・完掘
SB 357-605断面・据石、根固石出土状況 SB 357-P 620・765遺物出土状況
- 図版50 SB 357-P 620断面 SB 357-P 620・765完掘 SB 357-P 700断面・完掘
SB 357-P 676柱根出土状況・据石出土状況 SB 357-P 650断面・柱根その他出土状況
- 図版51 SB 357-P 705断面・完掘 SB 357-P 670・675柱根、根固石出土状況・完掘 SB 357-710断面・完掘
SB 357-P 726据石、根固石出土状況・完掘
- 図版52 SB 356-P 734断面 SE 344断面・完掘 SE 343断面 SE 311断面・完掘 SE 320断面・完掘
- 図版53 SK 341断面 SX 328断面 SB 358-P 542断面・遺物出土状況 P 660断面、根固石出土状況
P 730遺物出土状況・断面・完掘
- 図版54 P 720断面 SD 330・331断面 SD 330 C XXXIV 2 区遺物出土状況 SD 335①・330断面
SD 335①・SX 345断面 SD 335②・337断面 SD 335 B XXXIV 17・22区遺物出土状況
- 図版55 SD 335① B XXXIV 17・22区・C XXXIV 2 区遺物出土状況 SD 335① C XXXIV 2 区底面礫出土状況
SD 335①・337 C XXXIV 6 区遺物出土状況 SD 337遺物出土状況・漆器出土状況 P 523柱根出土状況
SB 358-P 531柱根出土状況

有明の場遺跡(遺構)

- 図版56 遺跡遠景 調査西地区
- 図版57 調査東地区 調査西地区遺構配置
- 図版58 土層堆積状況 a・e・k・g・j 地点 P 3 遺物出土状況 SE 15断面 SK 15完掘
- 図版59 SE 25断面・完掘 SK 53断面・完掘 SE 30断面・完掘 SK 20断面・完掘
- 図版60 P 33断面・柱痕完掘 P 32断面・完掘 P 44断面 SE 50礫出土状況 SE 35断面・完掘
- 図版61 SE 45断面・完掘 SK 51断面 P 33礎板出土状況 P 46断面・遺物出土状況

石川遺跡(遺構)

- 図版62 調査地点遠景 調査地点近景
- 図版63 土層堆積状況 SD 1 西隣試掘坑断面 SK 2 木器出土状況・完掘 SD 1 木器出土状況・完掘・断面

天王前遺跡(遺物)

- 図版64 旧石器・縄文時代の石器 SB 357-P 542 P 671 P 698 P 680 P 726 P 884 P 1550 SD 324(自然流路)
P 730 SD 325(自然流路) SD 330
- 図版65 SD 259 SD 335①
- 図版66 SD 335① SD 335② SD 337 SX 327 遺構外出土土器
- 図版67 その他の遺構および遺構外出土土器
- 図版68 遺構外出土土器 SB 357-P 620 SB 358-P 628 SB 357-P 600 P 659 SB 357-P 605
- 図版69 P 660 SB 357-P 676 SB 357-P 682 P 730 P 726 P 732 P 1641 SB 349-P 925 P 1631
SB 357-P 741
- 図版70 SB 357-P 765 SD 259(道路状遺構) SD 324(自然流路) SD 325(自然流路) SD 330

図版71 SD 337 SD 335① SX 327

図版72 SD 335② 遺構外出土石製品 SD 337 SB 357-P 650 SB 357-P 620 P 574 P 518 P 669
SB 357-P 670 P 865 SB 357-P 675 P 679

図版73 P 778 SB 357-P 676 SD 330 SD 337 SD 335① 遺構外出土金属器

有明的場遺跡(遺物)

図版74 P 3 P 46 SD 40 SE 25 SE 35 P 33 P 38 遺構外出土遺物

石川遺跡(遺物)

図版75 SK 2 SD 1 (1層)

図版76 SD 1 (1層)

図版77 SD 1 (1層、2層、3層)

図版78 SD 1 (3層、5層)

図版79 SD 1 (層位不明) 遺構外出土土器

図版80 遺構外出土遺物

自然科学分析その他

図版81 天王前遺跡 SD 337出土柄 X線写真 SB 357 (P 620) 出土墨書石赤外線写真

図版82 砂分の状況 火山ガラス

図版83 木材(1)

図版84 木材(2)

図版85 木材(3)

図版86 天王前遺跡種実遺体

図版87 石川遺跡種実遺体

図版88 有明的場遺跡種実遺体(1)

図版89 有明的場遺跡種実遺体(2)

第 I 章 序 説

1 調査に至る経緯

従来、新潟県における県と市町村との埋蔵文化財発掘調査に関する事務区分は、県教委が国・公団等の関連事業（農業関連は除く）、市町村教育委員会（以下、市町村教委とする）がその他（県、市町村事業、民間開発等）の事業となっており、今も基本的区分は変わっていない。しかし市町村からの、県事業は県教委で実施してほしいという要望は従来から強い。平成4年度に埋文事業団が設立されて以来、今まで県教委で実施してきた発掘調査は、埋文事業団が県教委より受託してきたが、平成8年度以降は道路公団関係の事業量が減少傾向に向かうとの予測から、平成8年度からは、県事業に着手するとの見解が県教委から表明されていた。これを受けて、文化行政課では、どのような事業を受託するかの検討を平成7年度におこなった。現状では、市町村で実施している発掘調査で圧倒的な割合を占めているのが農業関連であり、そのほかの県事業は意外と少ない。また、平成8年度以降ガットウルグアイラウンド関連の施策が打ち出され、新潟県においても平成15年度にかけて、大規模なほ場整備事業が実施されることとなった。このようなことから、市町村において大規模な発掘調査が予想されるのは農業関連の事業であり、このことについて検討することとした。

検討の結果、県事業（農業関連については国営も含む）に関わる市町村との事務区分は従来通りとし、今回埋文事業団が受託するのは、あくまでも発掘調査面積が大きく、処理が困難と予想される市町村に対する協力であることを基本とした。その仕組みは以下のとおりである。

協力市町村の選定

平成8年度、埋文事業団の体制として、農業関連については、2班体制しか確保することができないことから、2市町村に対して協力することとした。またその選定は、諸条件を加味し、担当部局である県農地整備課、文化行政課、埋文事業団の3者による調整会議によっておこなった。

受託の方法

現在、発掘調査は、当該市町村と県農地とが費用の負担契約を締結して行っている。負担割合は、ほ場整備事業における個人農家負担分の割合に基づいて、文化財側が農家負担分の割合を持ち、その他が農地側となっている。今回埋文事業団が受託するのは、農地側負担の中からとし、文化財側負担分の発掘調査は、市町村とした。しかし、文化財側負担額がどれほどになるかは、当該市町村教委と埋文事業団の調査費合計によって決まってくる。そのため、県農地を含めた3者がお互いに下記の区分を把握しておく必要性があることから3者による基本協定を締結することとした。

文化財側負担分（農家負担分）———→当該市町村教委発掘

県農地側負担分———→当該市町村教委発掘・埋文事業団発掘

このような考え方から、平成8年7月1日付け農整第114号で県農地部長から県教育長に発掘調査依頼があり、県教委はこれを埋文事業団に再依頼した（平成8年7月1日付け教文第703号-2）。これを受けて埋文事業団は、委託者である新潟県知事と委託契約を締結し、7月より調査に入った。

1 調査に至る経緯



第1図 遺跡の位置 1/75,000

国土地理院 1:25,000 地形図
村上 坂町 越後門前 越後下関

第II章 遺跡の環境

1 地理的環境

神林村は新潟県の北部、岩船郡の南辺に位置している。北は浦田山丘陵で村上市と、南は荒川を境に北蒲原郡荒川町と、また東は岩船郡関川村に接し、西は日本海に面している。

村内の地形は大きく分けて、東から山地・丘陵・沖積地・砂丘と4分され、砂丘の西側で日本海に面している。新潟市付近で数条見られる砂丘列は、本村付近では一条となっている。この砂丘上に長松・北新保等の集落があり、付近には長松遺跡、大池遺跡群等が分布する。

現在村内の沖積地は大半が広大な水田地帯となっているが、沖積地の北部一帯はかつて岩船潟が存在する低湿地であった。岩船潟は現在の岩船港北岸の七日市から浦田山丘陵南西辺の七湊・志田平の集落、更に助淵川南側の助淵をへて、岩船港南岸の八日市までの間に広がっていたが、近世から明治期にわたって干拓され、現在の様な景観へ移り変わっている。旧岩船潟跡の沖積地は海拔が低く、僅かに0.5m程度である〔寺沢1989〕。村内を流れる小河川はいずれも東側の山地・丘陵に発し、西流し集約され日本海に注ぐ。その内石川・百川・助淵川・笛吹川・七湊川など、大半は旧岩船潟跡の低湿地へ流れ込み、石川に合流し岩船港で日本海に注いでいるが、堀川は沖積地の南部を流れ、荒川と河口付近で合流し日本海に注ぐ。有明の場遺跡・石川遺跡はいずれも笛吹川・百川によって形成された自然堤防上の微高地に立地している。

一方本村の丘陵は村域の北から東にかけて沖積地を取り巻くように存在する。これらの丘陵は新第3紀に堆積した地層が、第4紀の地殻変動で隆起してできたものである〔寺沢1989〕。山地は丘陵の更に東側にそびえ立っている。山地は関川村との境をなしているが、大平山・要害山等の山地はいずれも海拔600m程度の低いものである。天王前遺跡は村北西部の丘陵縁、丘陵を解析し西流する山屋川(助淵川)の右岸段丘上に存在する。

2 周辺の遺跡と歴史的環境

神林村内には合計196(平成7年現在)もの遺跡が存在しており、随所に古くからの人々の生活の痕跡が認められる。

縄文時代の遺跡は約60遺跡あるが、そのほとんどが村東側の山地・丘陵上、又はその縁辺に存在しており、砂丘及び沖積地に存在するものは僅かである。このことから現在見られる広大な沖積地は、当時は全体が低湿地であったものと考えられる〔田辺1991〕。次の弥生時代には遺跡は僅かであるが、金曲遺跡・大野地遺跡などは沖積地に存在し、この頃には低湿地が居住・生産の場に徐々に変貌していったことがわかる。該期の調査例としては長松遺跡〔田辺1991〕が挙げられ、弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが判明している。発見された遺構は弥生時代の土坑、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物、中世の墓墳・井戸・掘立柱建物等である。弥生時代の宇津ノ台式土器のほか、土師器・珠洲焼・青磁等が出土している。

神林村を含む現在の新潟県の北辺地域、古代の行政区画で磐舟郡と呼ばれる地域が史料上に現われるの



第2図 周辺の遺跡 (神林村発行「神林村平面図1」 1:10,000原図 平成7年)

周辺の遺跡一覧 (第2図に対応)

NO	種別	名称	所在地	時代	NO	種別	名称	所在地	時代
1	遺物包含地	大聖寺	指合字大聖寺	縄	104	遺物包含地	千作り	有明字千作り2395	他 平・中世
6	遺物包含地	城田	殿岡字城田	縄	105	遺物包含地	雷車田	今宿雷車田15-3	他 平
7	遺物包含地	山崎	七瀬字山崎	縄	106	遺物包含地	奉行松	飯岡字奉行松1175-3	他 平
9	遺物包含地	大野地	新飯田字大野地288-1	他 弥	115	遺物包含地	板越	南田中字板越583	他 平
12	遺物包含地	山王	牧ノ目字山王	平	116	遺物包含地	川崎1	南田中字川崎920-1	他 平
13	遺物包含地	高田	牧ノ目字高田	平	117	遺物包含地	川崎2	南田中字川崎825	他 平
14	遺物包含地	在ヶ付	南田中字野地元	平	118	遺物包含地	水ノ下4	南田中字水ノ下530-3	他 南
15	遺物包含地	山の館	飯岡字山の館	平	119	遺物包含地	水ノ下3	南田中字水ノ下315-2	他 平
17	遺物包含地	家の越	新飯田字沢田	平	120	遺物包含地	水ノ下1	南田中字水ノ下450	他 南
18	遺物包含地	宮の越	新飯田字宮の越34-2	他 平	121	遺物包含地	水ノ下2	南田中字水ノ下380	他 中世
20	遺物包含地	願敷添	北新保字願敷添	平	122	遺物包含地	田原道	牧目字田原道837-2	他 中世
21-1	遺物包含地	大池 I			123	遺物包含地	宮ノ下	湯瀬字宮ノ下282	中世
21-2	遺物包含地	大池 II			125	遺物包含地	宮ノ前	七瀬字宮ノ前434	他 平
21-3	遺物包含地	大池 III			126	遺物包含地	道印田	七瀬字道印田1476	他 平
21-4	遺物包含地	大池 IV			127	遺物包含地	六百地	七瀬字六百地1348-1	他 平
21-5	遺物包含地	砂山Ⅱ	北新保字砂山397	他 平	128	遺物包含地	大沢	七瀬字大沢1-3	他 縄
21-6	遺物包含地	砂山Ⅲ	北新保字砂山573-1	他 平	129	遺物包含地	桑跡沢	七瀬字桑跡沢1632	他 平
21-7	遺物包含地	砂山Ⅳ	北新保字砂山380	他 平	130	遺物包含地	七瀬願敷添	七瀬字願敷添1818-1	他 平
21-8	遺物包含地	在ヶ付Ⅱ	南田中字在ヶ付1791	他 平・中世	131	遺物包含地	明青田	下助道字明青田1738	他 平
21-9	遺物包含地	在ヶ付Ⅲ	南田中字在ヶ付1248-1	他 弥・平	132	遺物包含地	本屋敷	下助道字本屋敷1435	他 平
21-10	遺物包含地	砂山Ⅴ	牧目字砂山1219-1	平	133	遺物包含地	丸山	上助道字丸山1121	他 縄
21-11	遺物包含地	砂山Ⅵ	牧目字砂山1241	他 平・弥?	134	遺物包含地	前田	上助道字前田706	他 縄・中世
21-12	遺物包含地	砂山Ⅶ	牧目字砂山1300	他 平	135	遺物包含地	金曲	下助道字金曲875	他 弥
23	墳墓	七ツ塚	七瀬字七ツ塚	録	136	遺物包含地	ガラ田	上助道字ガラ田1	他 平
24	墳墓	小丸山	平林字小丸山	録	137	製鉄跡	鳥越	山屋字鳥越	
26-1	板碑	岩野沢板碑群	岩野沢山田	録・南	138	城館跡	内御堂 C	里本庄字内御堂43-1	中世
26-2	石塔	高野末五輪塔	山田	録	139	遺物包含地	内御堂 B	里本庄字内御堂169	他 平
26-3	板碑		山田	録・南	142	遺物包含地	大木戸	里本庄字大木戸1535	他 平
27	板碑	福転寺板碑	牧ノ目	録・南	143	遺物包含地	下引地	殿岡字下引地1302	他 縄
29	板碑	慈雲寺板碑群	飯岡	録・南	144	遺物包含地	宮ノ谷	里本庄字宮ノ谷1065-10	他 縄
30	板碑	嘉部堂板碑	九日市字堂ノ腰300	録	145	遺物包含地	引地Ⅱ	指合字引地	
33	石仏	十二神社石仏群	山屋	録	146	遺物包含地	大門(光明寺)	指合字大門	
35	石仏	飯岡石仏群	飯岡	録	157	遺物包含地	大聖寺Ⅱ	指合字大聖寺2164-1	他 縄
36	石仏	阿弥陀寺石仏群	山屋字山浜	録	158	遺物包含地	引地Ⅱ	指合字引地3074-1	他 平
37	石神	里本庄石神	里本庄	録	159	遺物包含地	内金鉢	殿岡字内金鉢	
38	板碑	地蔵堂板碑	北新保	録	160	遺物包含地	橋渡	殿岡字橋渡416-1	他 縄
39	板碑	香蔵院板碑群	牧ノ目字なし579	録	161	遺物包含地	龍潭寺	殿岡字川原	
40	板碑	桃川板碑群	桃川	録	162	遺物包含地	山下	小出字山下818-1	他 平
42	板碑	河内神社板碑	大塚	録	163	遺物包含地	浦山浜	小出字浦山浜973-56	他 縄
47	遺物包含地	中沢	牧ノ目字中沢	室	164	遺物包含地	堀下	有明字堀下1423-1	他 録
48	遺物包含地	輪の内	高御堂字堂の前54-3	他 室	165	遺物包含地	有明的場	有明的場521	他 録
50	塚	里本庄塚	里本庄字家の上88	録・室	166	塚	北山塚	桃川字北山西2874-29	他 室
51	塚	道祖神塚	七瀬	録	167	寺院跡	千眼寺塚	桃川字北山	
53	塚	王塚	大塚字大平	室	168	遺物包含地	野地山	桃川字野地山1180	他 縄
54	塚	うしろ山塚	殿岡字うしろ山	室	170	遺物包含地	細田	桃川字細田2177-1	他 縄
55	石造物	吉祥寺石仏	桃川	室	171	遺物包含地	古館	桃川字古館乙2546	他 縄
60	城館跡	飯岡城跡	飯岡字山ノ館	室	172	遺物包含地	館ノ内	桃川字館ノ内245-1	他 縄
61	城館跡	桃川館	桃川字古館	室	173	遺物包含地	沢田の二	飯岡字沢田の二712-2	他 縄
63	城館跡	牧ノ目館	牧ノ目字館ノ内	室	174	遺物包含地	飯岡赤谷 B	飯岡字赤谷1048	他 縄・平
67	塚	飯岡字みさぎ	飯岡字みさぎ	録	175	遺物包含地	飯岡赤谷 A	飯岡字赤谷1084	他 縄
71	板碑	光浄寺板碑	有明718	録	176	遺物包含地	山田赤谷	山田字赤谷144	他 平
73	城館跡	桃川古城	桃川字茶岡ノ上	他 録	177	遺物包含地	坂下	山田字坂下421	他 平
77	遺物包含地	通分	桃川	縄	183	塚	鳥越塚	山屋字鳥越1012	
78	遺物包含地	大岡平	桃川字大岡平1131	他 縄	184	塚	小山田塚群 1号	飯岡字小山田389	他 平
80	遺物包含地	桃川	桃川	縄	185	塚	小山田塚群 2号	飯岡字小山田391	他 平
81	遺物包含地	引地	指合字引地	他 中世	186	塚	小山田塚群 3号	飯岡字小山田392	他 平
83	遺物包含地	飯岡山崎	飯岡540-1	他 縄	190	遺物包含地	前坪	山屋字前坪896	他 平
87	遺物包含地	館跡	牧ノ目	古・古代	191	遺物包含地	綱鉄	山屋字綱鉄1672	他 平
88	遺物包含地	八幡山	上助道字八幡山678	他 弥	192	遺物包含地	フケ田	山屋字フケ田1189	他 中世
92	遺物包含地	志田平	志田平	縄	193	遺物包含地	天王前	山屋字天王前161	他 中世・近世
94	遺物包含地	糠山	糠山	縄	194	遺物包含地	水口沢	山屋字水口沢265	他 縄・近世
95	遺物包含地	内御堂	里本庄字内御堂23~25	他 古代・中世	195	遺物包含地	大場沢	山屋字大場沢579	他 中世・近世
98	石仏	長松石仏	長松	録	196	遺物包含地	石川	桃川字石川3343	他 古代・中世
99	板碑	里本庄板碑	里本庄	録	197	遺物包含地	草田	桃川字草田2730	他 古・中世
100	遺物包含地	里本庄 B	里本庄字宮の前995-1	他 平					

は、主に磐舟柵の設置以降のことである。

日本書紀によると大化4(648)年に「是歳、(中略)治磐舟柵、以備蝦夷、遂選越与信濃之民、始置柵戸、^{注1}」とあり、磐舟柵は北辺経営のために設置され、越と信濃の民がその経営に充てられた。7世紀中葉以前までの蝦夷との境界が、どの辺りであったかは明らかではないが、少なくとも磐舟柵設置の時点では柵の所在地周辺が畿内政権にとって北辺であったものと考えられる[桑原1986]。しかしながら、いったい磐舟柵が何処にあったのか、その所在地に関しては未だ不明のままである。昭和31(1956)年、村上市浦田山丘陵で石組遺構が発見され、磐舟柵跡ではないかと考えられたが、その後の発掘調査によって墳墓であることが判明している。以来今日に至るまで、磐舟柵の所在地は明らかにはなっていない。同地周辺

が有力視されているものの、確証がないまま諸説あるのが現状である。村内で古墳時代の遺構・遺物は、前述の長松遺跡のほか、高田遺跡[鈴木ほか1990]等で見つかっている。

平安時代に入ると、大池遺跡群をはじめとして、砂丘東縁や沖積地に広範囲にわたって多数の遺跡が立地する。このことから、この頃より沖積地の開発は本格化し、更には人々が居住するのに適した状態へと開発が進んだと解される。今回調査した石川遺跡の中心時期は平安時代の後半で、住居跡等の居住域は未発見であるが、多量の土師器碗の出土をみたSD1の様に、祭祀的色彩の強い遺構が検出されている。大規模遺跡である可能性が高く、沖積地開発の一拠点の遺跡と考えられよう。

この頃この地方には小泉庄という庄園が成立する。庄域は荒川以北の岩船郡のほぼ全域を含むものと見られているが、はっきりとした四至は不明である。立庄年代は明らかではなく、史料上の初見は中御門宗忠の日記「中右記」の保安元(1120)年3月23日条に見られる、「(前略)越後国小泉庄相博之事、(後略)」と^{注2}いう記述である。同4(1124)年8月8日の「右大臣藤原宗忠諫状写」によれば、同庄は宗忠の祖父俊家以

来、中御門流藤原家の所領であった^{注3}〔荻野1986、鈴木1985 a、大場ほか1986〕。また俊家の右大臣任官は承略4(1070)年～永保2(1082)年であることから、小泉庄の成立もこの頃であったものと考えられる〔阿部1968〕。

その後、小泉庄は代々中御門家に伝領された。長寛3(1165)年正月日の「越後国司庁宣案」によると、小泉庄は金剛心院領であり、鳥羽院庁下文によって中御門家はその領有を保証されていた^{注4}。ところが「吾妻鏡」文治2(1186)年3月12日条では、本所は新積迦堂に替わっており、また中御門家は預所職であったことが伺える^{注5}〔荻野1986、鈴木1985 a、大場ほか1986〕。小泉庄は建武4(1337)年、中御門冬定から息子である宗重に譲られており、南北朝期まで中御門家に伝領されていたらしい〔荻野1986〕。

小泉庄は本庄と加納の、大きく二つの地域に分かれていた。本庄とは立庄以来の本来の庄域であり、現村上市及び岩船郡北部一帯がこれに充たるとされる。「中右記」長承2(1164)年8月27日条によれば、当時は免田30町から成っていた^{注7}〔荻野1986〕。加納は後に開拓・墾田化が進められ、庄域に含まれていった地域である。建長7(1255)年3月27日の「將軍家宗尊親王政所下文」によれば、加納には現神林村の村域に相当する色部・牛屋の両条に加え粟島が含まれていた^{注8}〔大場ほか1986〕。

平安末期になって、越後北部の阿賀北地方は、在地領主城氏の支配下に置かれる。城氏の支配域は阿賀北地方全域に及んだとされるが、城氏の支配が小泉庄にも及んでいたかどうかを明確に示す史料はない。但し前述の長寛3年「越後国司庁宣案」に助永の濫妨を停止する旨が記されていることから、城氏は小泉庄に少なからず勢力を及ぼしていたものと考えられる〔荻野1986〕。城氏はその後源平の合戦に際し平氏方についたが敗れ、没落してしまう。

中世に入って阿賀北地方には、城氏に替わり鎌倉幕府の御家人が入部してくることになる。小泉庄ではその内の一人である平姓秩父季長が地頭となり、季長の後は本庄が子の行長に、加納が同じく季長の子である為長に分与された。その後行長の子孫は小泉氏、後に本庄氏を、為長の子孫は色部氏を称する〔阿部1968、阿部1987、鈴木1985 b〕。

為長以後色部氏は庶家を分出しつつ現神林村域である加納一体を支配してゆく。色部条は加納の中心であり、色部氏の本拠地であった。現在村内に小色部の地名が残っているが、これが色部条の遺称地であるかどうかは明らかではない。色部条と粟島は代々色部惣領に伝えられた^{注10}が、牛屋条は為永の子の公長の代に庶子に分け与えられ、その子孫が後に宿田氏・牛屋氏を称した。その後牛屋条は文明15(1483)年までには再び色部惣領の手に戻っていたものと見られる^{注12}〔阿部1968、大場ほか1986〕。

石川遺跡の所在する飯岡は正和5(1316)年惣領色部長綱から次男高長に譲られたらしく、高長とその子孫は飯岡氏を称した。色部惣領家は鎌倉幕府滅亡の際には反幕府方に、南北朝期には北朝方に属し戦功があったが、その際高長は独自に出陣し、惣領とは離れた行動をとっている〔阿部1968・1987、大場ほか1986〕。しかしこの飯岡も明応9(1500)年12月14日の「越後守護上杉房能知行宛行状写」によると、「飯岡跡之内」が新恩として惣領の昌長に充行われており、宿田・牛屋と同様この頃までに惣領家の元に戻ったらしい。後の「色部氏年中行事」によると飯岡氏から酒・魚等が贈られている記述が見られる^{注15}〔大場ほか1986〕。

一方神林村内には中世の城館跡(平林城跡・桃川城跡・飯岡城跡・宿田城跡・牧ノ目館跡等〔田辺1992〕)や集落、および石造物が多数発見されており、今回調査した天王前遺跡と有明的場遺跡・石川遺跡が含まれる地区では、板碑や礎石仏も発見されている^{注16}。天王前遺跡・石川遺跡は、中心時期とは言えないものの該期の遺物が少数出土していることから、中世段階における居住、ないしは生産域と考えられよう。また有明的場遺跡検出の遺構の中心時期は、限定が難しいものの大枠で中世にあたり、隣接する現集落は中世から続いた集落である一面を考古学資料からものぞかせている。

近世に入って神林村域は村上藩領となる。慶長4(1599)年、上杉氏会津移封後、村上には堀氏配下の村上氏が入封した。村上藩主は村上氏から堀氏、本多氏、松平氏、榊原氏等を経て内藤氏へと替わり、幕末まで至る。神林村域ははじめ全域が村上藩領に属したが、宝永6(1709)年、榊原氏から本多氏へと藩主が変わり15万石から5万石に減封された際、村上藩領と幕府領とに分けられた。村上藩領以外の村々はその後、幕領の他、館林藩領、一橋家領、会津藩領等となり、幕末へ至る(鈴木1985c)。

今回調査した遺跡からは近世の遺物も出土しており、特に天王前遺跡は16世紀末から17世紀初頭が中心時期となっている。文献資料は未調査であるが、以下それぞれの遺跡が含まれる地区の主だった概要について記す。

上杉氏時代の「瀬波郡絵図」(以下「郡絵図」)に「大国但馬分山屋村 下」と描かれている村が、天王前遺跡に隣接する現在の山屋集落と考えられる。これによると山屋村は上杉家重臣直江兼統の弟大国但馬守の領地であったことが知られる。堀氏入封以後山屋村は村上藩領となり、幕末に至る。享保19(1734)年の村明細帳には田畑合わせて55町4反5畝余、家数40軒、人数186人、馬11疋とある^{注17}[大場ほか1986]。

有明的場遺跡の所在する有明は、近世は上下2村にわかれており、明治19(1886)年に合併し一つの村となった。上有明村は前述の郡絵図に「色部分大国但馬分あり明村 上」と見られる。享保3(1718)年の村明細帳には、田畑40町5反8畝余、家数40軒、人数274人、馬20疋とある^{注18}。下有明村は同19(1734)年の村明細帳には、田畑42町1反余、新田畑2町3畝余、家数36軒、人数189人、馬9疋と記載される^{注19}。両村とも近世を通じて村上藩領であった[大場ほか1986]。

石川遺跡の所在する飯岡は、前述したように色部氏庶家の一つである飯岡氏の領地であった。しかし郡絵図に「色部分飯岡村 上」と記されていることから、既に惣領のもとに戻っていることが理解できよう。近世に入って、始め村上藩領であったが、宝永6(1710)年に幕府領、寛保元(1741)年から白河藩領、さらに一橋家領を経て幕末に至る。寛政3(1791)年の村明細帳には田60町1反3畝余、畑6町6反余、見取畑4反4畝余、家数47軒、人数244人、馬33疋、と記される^{注20}[大場ほか1980]。

注

注1 『新潟県史』資料編2 原始・古代二 文献編 25号 1981 新潟県

注2 『新潟県史』資料編2 原始・古代二 文献編 832号 1981 新潟県

注3 「越後国小泉庄、自大宮右大臣殿御時伝領此家也、(後略)」として、長男の宗能に譲り渡している(南部文書 『新潟県史』資料編2 原始・古代二 文献編 838号 1981 新潟県)。

注4 「(前欠)右件庄、金剛心院 勅免有限、随則鳥羽院序御下文明鏡也、(後略)」とあり、「瀬波河」の鮭漁について、また後述する城助永の濫行について記述される(南部文書 『新潟県史』資料編2 原始・古代二 文献編 1050号 1981 新潟県)。

注5 「小泉庄 新釈迦堂領 預所中御門大納言」となっている(『改訂増補 国史体系 吾妻鏡 第一』 1984 吉川弘文館)。

注6 冬定は宗重に小泉庄を譲る旨を記した2通の譲状を残している(「中御門冬定譲状案」南部文書 『新潟県史』資料編5 中世三 3196・3197号 1984 新潟県)。

注7 「(前略)今日、越後守清隆朝臣送小泉庁宣也、免田三十町任旧也、」とある(『新潟県史』資料編2 原始・古代二 文献編 882号 1981 新潟県)。

注8 亡父色部為長の前年11月8日の譲状により、「越後国小泉庄加納内色部牛屋除人事并庶子等粟島」他の地頭職が公長に安堵されている(反町英作氏所蔵色部氏文書 『新潟県史』資料編4 中世二 1034号 1983 新潟県)。

注9 「(前略)兼又城太郎助永濫行可停止、(後略)」とある。

注10 嘉禄3(1227)年4月9日の「鎌倉将軍家藤原頼経下文」(反町英作氏所蔵色部氏文書 『新潟県史』資料編4 中

世二 1025号 1983 新潟県)では為永から公長へ、文永7(1270)年8月25日の「色部行忍公長讓状」(同文書 同1026号)では公長から忠長へ、建治2(1276)年6月19日の「色部浄忍忠長讓状写」(米沢市立図書館所蔵「古案記録草案」所収文書 同2025号)で忠長から長信、また永仁7(1299)年3月7日の「色部浄忍忠長讓状案」(米沢市立図書館所蔵色部氏文書 同1947号)では忠長から孫の長綱へ譲られている。

注11 文永7(1270)年8月25日付けの「色部行忍公長讓状案写」2通(米沢市立図書館所蔵「古案記録草案」所収文書『新潟県史』資料編4 中世二 2021・2023号 1983 新潟県)で、公長は牛屋条の地頭職を長茂と氏長の2人の庶子に分け与えている。「古案記録草案」は長茂を宿田氏祖、氏長を牛屋氏祖としているが、実際譲られた所領は牛屋・宿田の位置関係が逆である[阿部1968、大場ほか1986]。

注12 文明15(1483)年12月13日の「色部朝長讓状」(光西寺所蔵文書『新潟県史』資料編5 中世三 3814号 1984 新潟県)には「一所 宿田分」、「一所 牛屋役」などが「右、件之所々者、朝長重代相伝之所領也、(後略)」と記される。このことから、宿田・牛屋の両地がこの頃までには惣領のもとへ戻っていたものと考えられる[阿部1968、大場ほか1986]。

注13 又童(高長)は正和5(1316)年4月19日の「色部長綱讓状案」(反町英作氏所蔵色部氏文書『新潟県史』資料編4 中世二 1051号(二) 1983 新潟県)により、「越後国小泉庄色部条内田在家并屋敷事田数在家注文有別紙、(後略)」を父長綱から譲られたが、この中に飯岡も含まれていたものと思われる[大場ほか1986]。

注14 「飯岡跡之内 為新恩可致知行者也、」(米沢市立図書館所蔵「古案記録草案」所収文書『新潟県史』資料編4 中世二 2040号 1983 新潟県)

注15 色部文書『新潟県史』資料編4 中世二 2361号 1983 新潟県

注16 板碑が山屋・有明で各1基、飯岡で10基、磧石仏が山屋で6基、飯岡で2基である。山屋阿弥陀寺の磧石仏は牛頭天王として祭られている[小野田1985]。

注17 「山屋村明細帳」板垣総兵衛氏所蔵文書『神林村史』資料編 下巻 1983 神林村

注18 「上有明村明細帳」板垣総兵衛氏所蔵文書『神林村史』資料編 下巻 1983 神林村

注19 「下有明村明細帳」板垣総兵衛氏所蔵文書『神林村史』資料編 下巻 1983 神林村

注20 「飯岡村明細村鑑帳」大滝正輔氏所蔵文書『神林村史』資料編 下巻 1983 神林村

第Ⅲ章 調査の概要

1 発掘調査の方法と経過

A 確認調査(天王前遺跡・有明の場遺跡・石川遺跡)

調査は平成7年12月11日～平成8年2月にかけて神林村教育委員会が県教委の協力を受けて実施した。調査対象は、県営ほ場整備神林第3地区(山屋・里本庄地区)、第2地区(桃川・有明・飯岡地区)である。第3地区の山屋地区に天王前遺跡、第2地区に有明の場・石川の両遺跡が含まれる。この確認調査で石川遺跡は新しく発見され、天王前遺跡と有明の場遺跡は遺跡の範囲が拡大した。

第3地区の山屋地区については調査対象面積400,000㎡であり、この内、天王前遺跡の範囲からは、遺構(井戸・ピット・溝)・遺物が少数検出・出土した。この時点での遺跡の評価は「遺構密度は希薄で、時期は出土遺物から中・近世の小規模な遺跡」とのことで、開発に対する取扱いについては、「現地表面より深く掘削する場合は発掘調査を必要とする」とのことであった。

第2地区の対象面積は約440,000㎡で実質調査面積は1,254㎡である。この内、有明の場遺跡の範囲とされたところには、約30箇所の試掘坑が開けられ、遺構(土坑・ピット)・遺物(土器・石器・木器・金属器)が少数、散発的に検出・出土した。この時点での遺跡の評価は「遺構・遺物の密度は薄いものの中世～近世の遺跡」とのことで、開発に対する取扱いは「現地表面より深く掘削する場合は発掘調査を必要とする」とのことであった。石川遺跡の範囲とされたところには、約70箇所の試掘坑が開けられ、遺構(土坑・ピット)・遺物(土器・木器)が少数、散発的に検出・出土した。この時点での遺跡の評価は「遺構・遺物の密度は薄いものの古代～近世の遺跡」とのことで、開発に対する取扱いは有明の場遺跡同様、「現地表面より深く掘削する場合は発掘調査を必要とする」とのことであった。

B 発掘調査

(1) 天王前遺跡

調査は層序の把握から始めた。BCD XXXIII 区および BCD XXXIV 区の北壁に地山面まで達するトレンチを設定し層序の観察をおこなった。この調査において調査範囲の多くは近現代の耕地造成により、多量の土砂を切り盛りしていることがわかった。また遺物包含層も部分的に削平を受けており、残存している地区でも遺跡の中心と目された高地(BC XXXIV 区)で5 cmに満たない場合が大勢であると予測された。そして各層を通じ出土遺物も少なく、出土土器から中世～近世にかけての遺跡であることが、大略理解された。また、堆積土の厚い低地(D XXXIV・XXXV 区)には時期は不明であるが遺構確認面が2枚存在する可能性も合わせて推測されている。これら盛土の存在や遺物含有状況から、堆積土の除去は法面バケットを装着したバックホーでおこなった。除去作業は調査員および作業員立ち会いの基に、概ね現耕作土、盛土、旧水田耕作土、遺物包含層の順で層位ごとに薄く何回にも分けて削り取り、出土した遺物は小グリッド単

位を基本に出土層位を記し取り上げた。特に遺物包含層の調査には慎重を期し、出土遺物が多い場合には人力での調査に切り替えた。この除去作業は7月上旬からおこなわれ、CD XXXV 区、C XXXIV 区、BC XXXIV 区をそれぞれ単位に西側高地から東側低地にかけて実施された。この除去作業が概ね終了したのは8月6日である。この間、除去が終了したところから遺構確認、遺構内調査に入っている。遺構調査は、雨天時に水没の危険性があった低地の CD XXXIII・XXXIV・XXXV 区を好天が予想される7月中旬から8月中旬に先行させ、高地の BC XXX・XXXV 区を8月中旬以降とした。

柱穴や井戸等の遺構調査は最終的に掘形まで調査し記録をとるが、その前に柱痕部と根固め部および井戸枠内とその外側の埋め土など使用時の遺構形状を出来る限り追求することに心がけた。

遺構の平面実測は平板で測量し、概ね20分の1で作図したが、遺物の出土状況等、細かな図化を要するものは10分の1で作図するなど適宜工夫した。

現場での記録写真はモノクロフィルムは6×7版カメラ、カラースライドフィルムは35mm一眼レフカメラ、カラーフィルムは35mmカメラを使用し撮影した。また、ラジコンヘリコプターにより広範囲にわたる遺構分布状況の写真を撮影した。

中・近世の遺構発掘が終了したのは8月末で、その後、調査中、散発的に出土していた旧石器時代および縄文時代遺物の性格を調査する意味で、合計41箇所の試掘坑をV層以下に開けた。しかし、この試掘坑より遺構・遺物は発見されず、これ以上の調査の必要性は無いと判断した。10月8日、埋文事業団事務局長・調査課長による終了確認を経て、全ての現場作業を終了した。

(2) 有明的場遺跡

調査は当初、10月初旬から開始する予定であったが、稲刈りの遅れにより実際に表土剥ぎに入ったのが10月16日である。表土除去は、遺物・遺構が希薄であろうという確認調査の結果に基づき、バックホーによる除去とした。調査範囲は低地のため湧水の害を最小限にすることに努め、人力により調査範囲の壁沿いに排水溝を設置した。

調査は西側から遺構確認面まで下げ、東側へと進んだ。遺構はB IV～VI 区、CD VI 区の有明集落西隣で発見されたのみで、他の地区は平安時代、中・近世の遺物が少量出土するものの遺構は皆無であった。

出土遺物の取り上げは天王前遺跡同様、小グリッド単位を基本とした。また実測も平板測量とし、遺構の発見されない範囲については100分の1で図化した。ラジコンヘリコプターによる航空撮影は11月7日実施した。

調査項目	調査期間				
	10日 ^{7月} 20日	10日 ^{8月} 20日	10日 ^{9月} 20日	10日 ^{10月} 20日	10日 ^{11月} 20日
表土除去	天			的	石
包含層調査 遺構確認	天			的	石
遺構調査	天			的	石
記録	天			的	石
その他				天□ (試掘坑) (空撮)	的-(空撮)(工事立会) 石-

天……天王前遺跡 的……有明的場遺跡 石……石川遺跡

第3図 天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡の調査工程

有明集落から西側の地区は11月18日に終了し、同日、村上農地事務所に終了の旨を連絡し引き渡した。東側の地区も11月20日には終了し、村上農地事務所に引き渡した。そして、内部の終了確認は11月21日に埋文事業団調査課長がおこなった。

(3) 石川遺跡

調査は有明的場遺跡と並行で実施された。表土剥ぎは10月30日から開始した。調査の方法等は有明的場遺跡と同様である。

調査は当初、出土遺物、検出遺構も少なかったため順調に進んだが、LIX・X区で幅約7m、深さ約90cmの自然流路(SD1)が検出され、覆土より平安時代を中心とする多量の遺物が出土したため、その記録保存に多くの期間と人力を投入した。

発掘調査を終了したのは11月27日で、11月29日に次年度以降、調査が継続される調査区東端(自然流路部分)の土留め補強をおこない現場での全ての作業を終了した。

2 整理経過および報告書の表記方法

A 整理経過

整理作業は平成9年1月から開始した。天王前遺跡出土遺物の水洗・注記については神林村教育委員会の協力により現場期間中にその大半を終了することができた。したがって1月からは主に石川遺跡出土遺物の水洗・注記・接合作業から開始している。この作業に並行し天王前遺跡・有明的場遺跡の遺物分類・選別・実測・遺構整理を実施した。遺物の実測が3遺跡ともほぼ終了したのは5月上旬で、その後、トレース作業・図版作成に移った。また、遺構・遺物の執筆に関する諸作業や挿図の作成は随時おこない、報告書にかかわる整理作業は平成9年11月に終了し、その後、片付け、梱包、校正等を実施している。

B 報告書の表記方法

遺構の記述・表記方法

個々の遺構を説明するにあたって、天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡の記述・表記方法を以下のよう統一した。

遺構の説明は各遺跡ごととする。説明した遺構は掘立柱建物(SB)・土坑(SK)・溝(SD)・井戸(SE)・柵列(SA)・ピット(P)及び性格不明遺構(SX)等であるが、ピットのように数の多いものや性格不明遺構については、規模が大きいもの、もしくは出土遺物から時期が限定できるもの等を選択して説明している。また、遺構の種別については前述のように略称とする。

掘立柱建物

- ① 位置は中グリッドまでを基本とし、「区」で表示した。複数のグリッドにまたがる場合はそれぞれの区を記した。
- ② 重複した遺構の新旧関係は、「新」・「旧」または「切る」・「切られる」等と表現した。
- ③ 柱間の多い方向を「桁行」(長軸)、少ない方向を「梁行」(短軸)とした。また、間数の同じ場合は「2×2間」などと記述した。

- ④ 建物の内側にある柱が、側柱を結ぶ線の交点に位置する場合は「束柱」とし、この建物を「総柱建物」とした。
- ⑤ 柱穴の「柱掘形」は確認面での形状、「柱痕」は柱穴に占める柱部分の覆土、「柱根」は残存した柱材である。
- ⑥ 平面の寸法や深さは確認面および確認面からの計測値である。
- ⑦ 方位は「桁行」（長軸）方向が、北を中心に東西に偏する角度で表わした。
- ⑧ 面積は長軸×短軸である。

土坑・井戸

- ① 位置は小グリッドまでを示し、「区」で表示した。複数のグリッドにまたがる場合は、それぞれの区を記した。
- ② 平面形の寸法等は確認面における最大値を計測しているが、部分的に極端な張り出しがある場合は、全体の形状をよく残していると思われる位置で計測している。
- ③ 深さは確認面からの最大値を計測した。

溝

- ① 位置の表示方法は掘立柱建物に準じた。
- ② 平面形及び断面形の寸法は、確認面および確認面から計測している。極端な形状を呈している部分については別に記述を加えた。

性格不明遺構

- ① 位置の表示方法は掘立柱建物・溝に準じた。
- ② 平面形及び断面形の計測方法は溝に準じた。

その他、ピットの平面図化は、掘形の上・下場と柱痕が検出された場合は、その上・下場を記入した。

遺構図面

天王前遺跡の遺構図面は、概ね3段階の縮尺を異にする図面で表わした。まず遺構配置全体を一枚の「遺構全体配置図」（1：400）で表わし、次に前記の全体配置図を拡大した「遺構全体実測図」（1：160）を用意した。また、この図面には任意の地点間のエレベーションを設け、地形傾斜および比高差を示した。

次に遺構個々の図面については、基本的に掘立柱建物を1：80縮尺で、土坑・井戸は1：40縮尺で図化している。性格不明遺構は前記の基準により選択したものを1：40縮尺で図化し、ピットについても同様に選択したものを1：40縮尺で図化した。溝については「遺構全体実測図」の中で断面図作成地点を示し、1：40縮尺で断面を図化している。

有明的場遺跡は水路部分の調査であり調査範囲が狭く、遺構数も少ない。また遺構が発見されたのは遺跡の西側（以下「遺跡西地区」と記す）調査区のみである。そのため個々の遺構の説明は各種類ごとにまとめることはせず、主に遺跡西地区で西側に位置しているものからはじめ、順次東側に位置するものを説明した。遺構それぞれの種類における記述・表記方法は天王前遺跡に準じる。遺構図面については、「遺構全体実測図」を1：100縮尺としたほか、「遺構全体配置図」については天王前遺跡に準じた。なお、遺構個々の図面については「遺構全体実測図」の周辺に、適宜レイアウトしている。また、調査区の地形傾斜については「遺構全体配置図」の土層柱状図を参考にしていきたい。個別遺構図の縮尺については天王前遺跡に準じた。

石川遺跡は「遺構全体配置図」（1：200）と「遺構個別実測図」で表わした。また、調査区の地形傾斜に

については「遺構全体配置図」の土層柱状図を参考にさせていただきたい。個別遺構図の縮尺については天王前遺跡に準じた。

3 発掘調査および整理作業の体制

A 発掘調査(天王前遺跡・有明の場遺跡・石川遺跡)の調査体制

主 体	新潟県教育委員会(教育長 平野清明)
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 平野清明)
管 理	藍原直木 (事務局長)
	山上利雄 (総務課長)
	亀井 功 (調査課長)
庶 務	泉田 誠 (総務課主事)
指 導	高橋 保 (調査課調査第3係長)
担 当	鈴木俊成 (調査課調査第3係主任調査員)
職 員	金子泰之 (調査課調査第3係文化財調査員)

B 平成8・9年度整理体制(天王前遺跡・有明の場遺跡・石川遺跡)

主 体	新潟県教育委員会(教育長 平野清明)
整 理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 平野清明)
管 理	藍原直木 (事務局長 平成9年3月まで)
	須田益輝 (事務局長 平成9年4月から)
	山上利雄 (総務課長 平成9年3月まで)
	若槻勝則 (総務課長 平成9年4月から)
	亀井 功 (調査課長)
庶 務	泉田 誠 (総務課主事)
指 導	高橋 保 (調査課調査第3係長)
担 当	鈴木俊成 (調査課調査第3係主任調査員)
職 員	金子泰之 (調査課調査第3係文化財調査員)

第Ⅳ章 天王前遺跡

1 遺跡の概要

調査面積は4,150m²、遺物の出土量は41箱(埋蔵文化財発見通知による。箱の法量は55×34×9.5cm)で、内訳は中・近世の土器・陶磁器類16箱、石製品10箱、木製品15箱、そして金属器が少量である。遺跡の時期は大きく旧石器時代・縄文時代・平安時代・中世・近世に分けられ、出土土器の7～8割ほどが16世紀末から17世紀前半までの肥前陶磁器である。調査中、各時代の層位的前後関係を捉えることはできなかった。そして、それぞれの遺構確認面もC XXXV 区のSB 301付近を除きV層上面であった。

発見した遺構は掘立柱建物14、井戸4、土坑1、道路状遺構2、溝17、不明遺構1、ピット多数で、その他、調査区のほぼ中央には自然流路およびクランク状の痕跡が多数発見された。上記の掘立柱建物を中心とする遺構群は、SB 301を除き自然流路帯から西側に集中して検出され、出土遺物もこの地区からのものが多い。しかし遺構から出土したものは少なく、遺構の時期を限定できないものが多い。また、道路状遺構は調査区の北側丘陵頂部に過去存在した「天王宮」〔神林村史1983〕への参道と考えられ、溝やいくつかの建物配置の軸がこの道路状遺構に合うことから、参道を中心とする規則性のある区画が想定される。

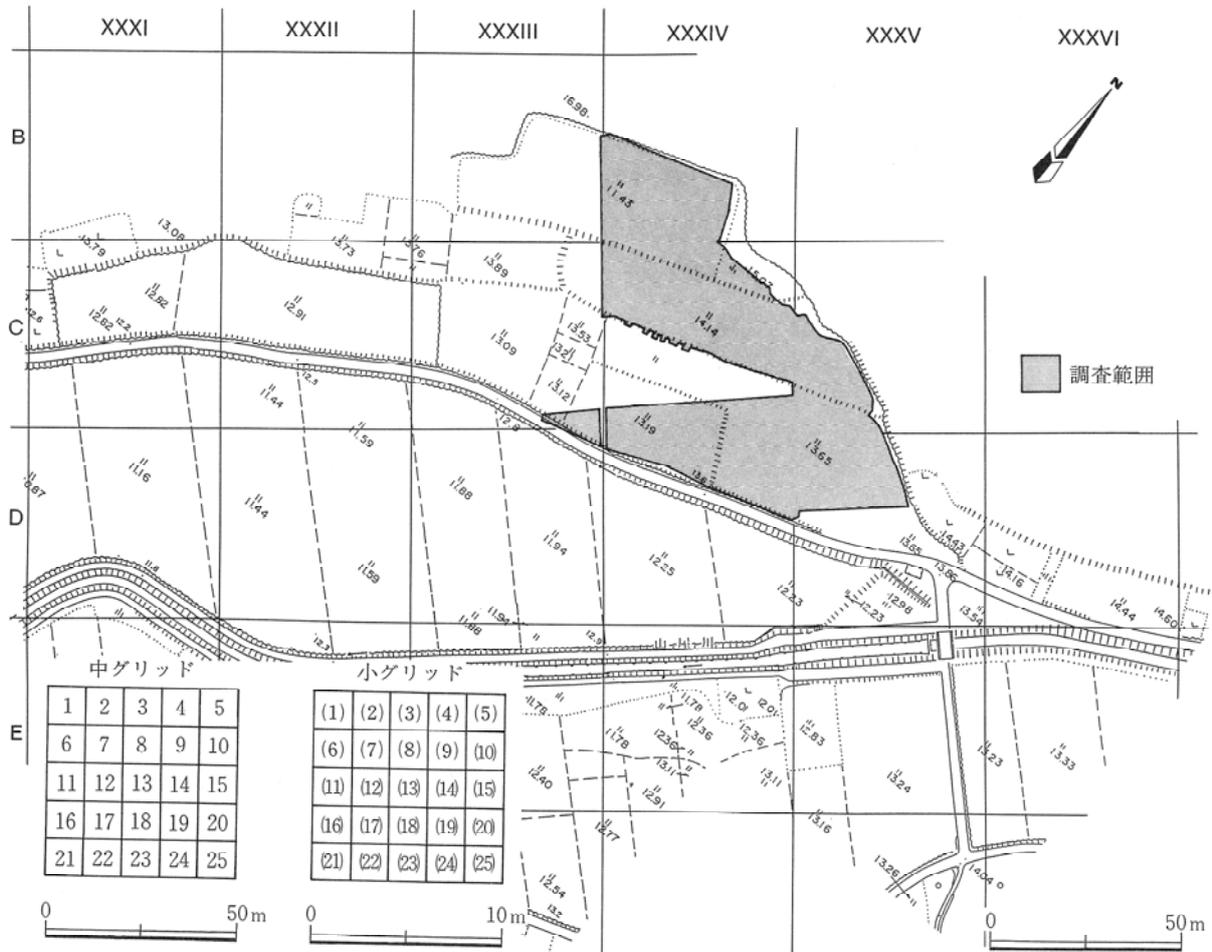
2 調査グリッドの設定

調査グリッドは広大な面積を対象とするほ場整備事業に一次調査～二次調査まで対応できるよう、事業年度・事業地区の地形等を考慮し設定している。したがって、事業地区が広大な場合は、長さ幅とも数kmにわたって統一的なグリッドの基に調査区を設定する場合がある。

グリッドは大・中・小グリッドに区分し、地形に沿って配した。大グリッドは50×50mを1区画とし、概ね南西コーナーを基点(X 244474.599、Y 85726.557。Yは真北から38°-51'-19"西編)に東西方向をローマ数字I・II・III・……、南北をアルファベット(大文字)A・B・C・……と呼んだ。中グリッドは、大グリッドの中をさらに細分し10×10mを1区画とした25区画である。呼称は同じく南西コーナーを基点に算用数字で表わした。小グリッドは中グリッドを細区画するもので、遺跡の調査では最小単位の区画となる。2×2mを1区画として、同じく中グリッドの南西コーナーを基点に()付の算用数字で表わした。それぞれの地点の呼称は大・中・小グリッドの順でB VIII 10(22)区とした。

3 遺跡の層序

遺跡はほぼ北から南に傾斜する緩斜面上に立地し、調査範囲の標高は約13～15.5mである。斜面に直行し幾段かの水田が造成され、これらの造成は削平・盛土によって成されたことが遺跡の層序観察により知ることができる。調査対象地の現況は大きく畑地1枚、水田3枚の合計4枚の段差をもつ耕作区画で構成されているが、これは昭和30年代以降といわれる度重なる造成の結果によるもので、過去にはより多くの



第4図 天王前遺跡のグリッド設定および調査範囲

耕作区画で細分されていたことがわかる。これら過去の耕作区画は、厚いところで40cm以上の盛土により以前の耕作土がそのまま埋もれているところや、逆に同一区画にもくろんだ地盤の高いところは削平を受け、その規模は地山(V層)面に達しているところも存在している。これら調査範囲内での削平・盛土の状況は、ほぼ地山傾斜に直行し東西方向の帯状に存在する。また、地山面上で検出される遺構も削平が著しいところでは破壊され、発見できない場合もある。

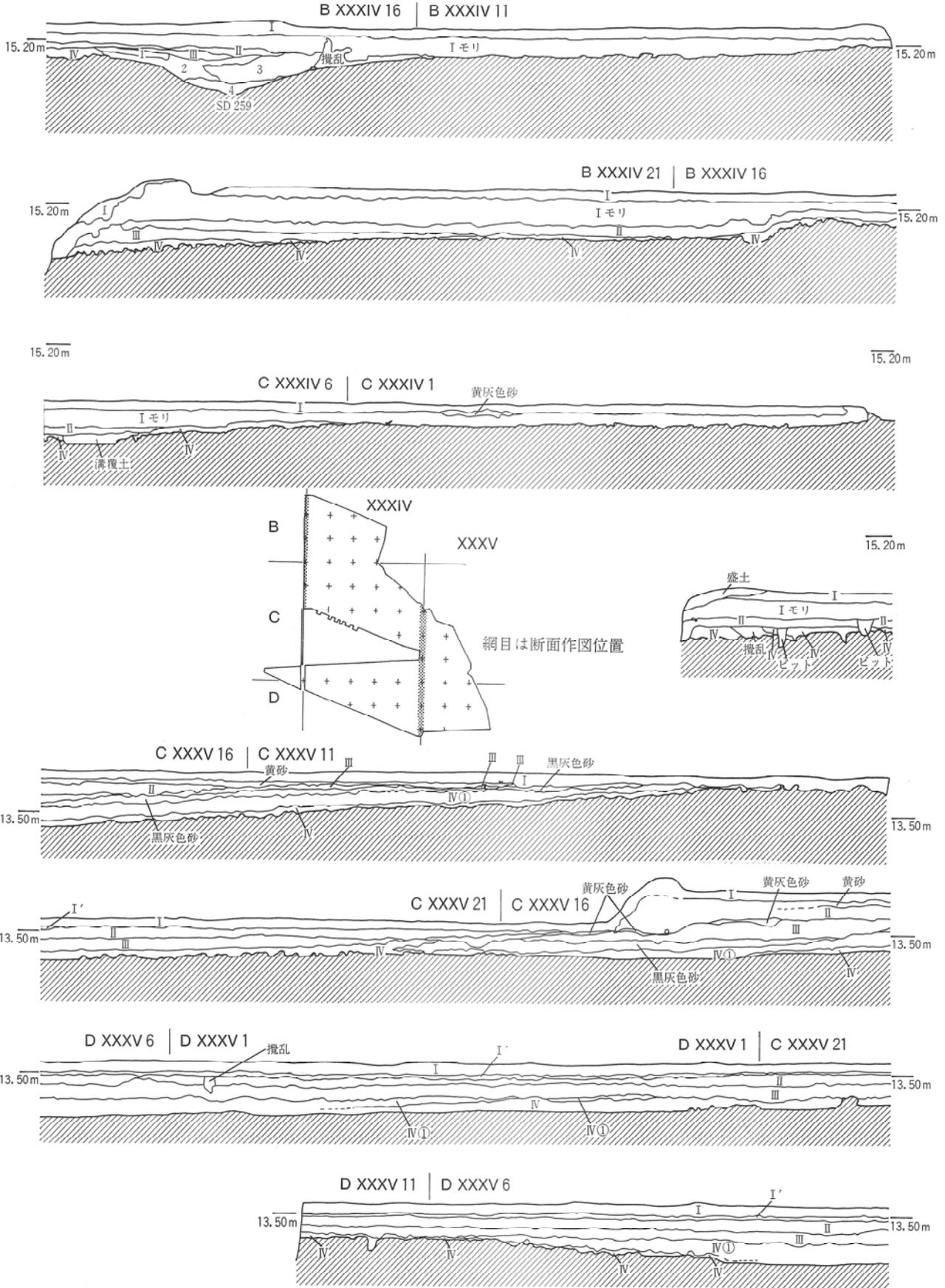
一方、CD XXXIII～XXXV区では、北側丘陵の切れ目を水源とする沢水が地山を浸食し、流路を形成したと考えられるが、その流路も16世紀末以前には殆どが埋りきったと考えられる。これら沢筋の影響範囲は土壌の堆積が厚く、耕作による地山の削平は無いものの、高地に存在しない土壌や含水量等による層色・層質の変化など高地と低地の層位的連続性の確認を困難にしている。そしてこれに地山面に達する削平による層の分断という要因も加わっていることは前述のとおりである。

下記の基本的層序は、上記した層位的連続性の把握が困難な状況を前提に、堆積土を可能な限り出土遺物や層の上下関係等をもとに検討し、整理したものである。しかし、区分した層と出土遺物との時期的な区切りはなく、中・近世の遺物がI～IV層にかけて混在する状況であった。

I層：暗黄灰色土。遺跡現況の耕作土である。1～5mm程の砂礫を含む。地山粒も少量含む。

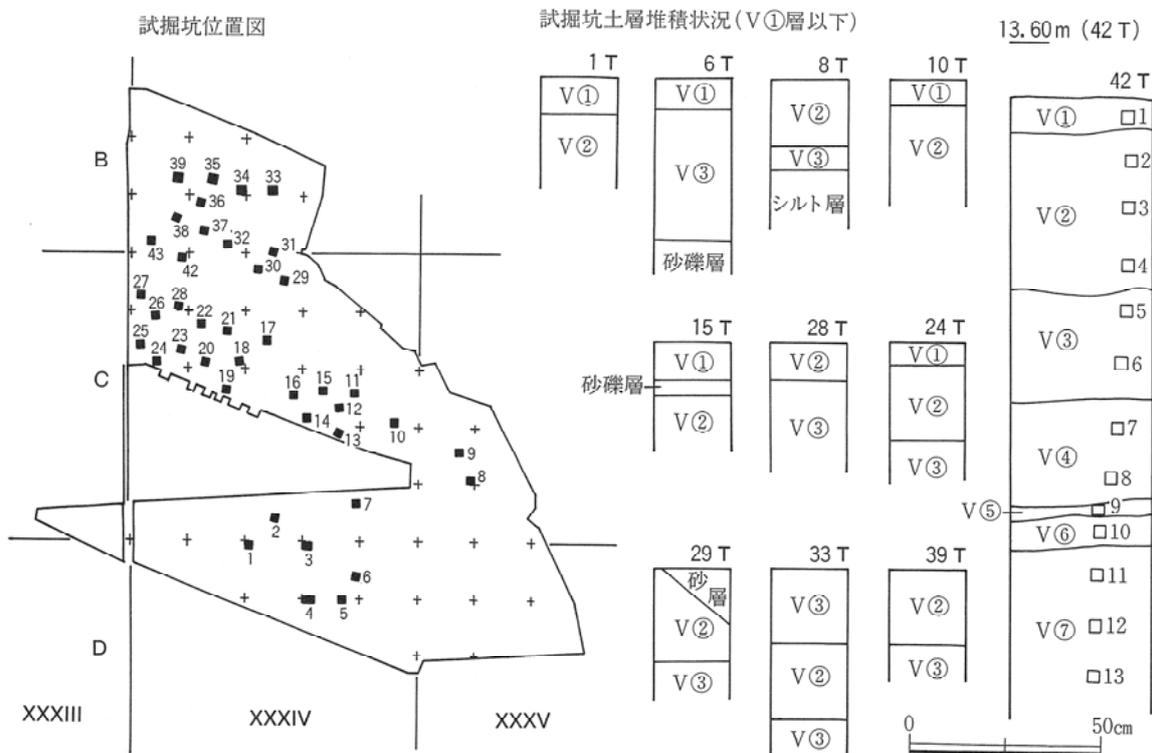
I'層：暗灰色土。遺跡現況の耕作土下に存在する層で、部分的に鉄分の沈澱が見られ、現水田の床土と考えられる土壌である。1～5mm程の砂礫を含み、炭化物も少量含む。

3 遺跡の層序



第5図 天王前遺跡の層序

- I モリ層：黄灰色土。耕地造成時の盛土である。耕地拡張時に削平した地山(V層)をブロック状に多量に含む。
- II層：暗灰色土。旧水田耕作土である。層上面はほぼ水平で層厚は一定である。本層中からビニールをはじめ、近世および中世の遺物が出土している。1～5mm程の砂礫を含む。
- III層：暗灰色土。旧水田耕作土(II層)下の鉄分沈殿が見られる層で、旧水田の床土とも考えられる。3mm程の炭化物を極少量含む。
- IV①層：暗灰色土。粘性が非常に強い。砂礫は含まないが、3cm以下の炭化物を少量含む。
- IV層：暗黄灰色土。粘性が強い。一部、下層の地山粒と混じり漸移的である。炭化物を少量含む。
- V①層：暗黄色土。粘性が非常に強い。上層から入り込んだ木根・クラック等の影響で、暗褐色土を部分的に混合する。
- V②層：黄褐色土。粘性しまり良好。全体的に酸化による赤色化が著しい。
- V③層：黄褐色土。粘性しまり良好。上層に比べ酸化の度合が少ない。部分的に砂のブロックを含む。
- V④層：黄褐色土。粘性しまり良好。若干、酸化により赤色化の部分があるものの、全体的には均質な粘質土である。
- V⑤層：灰色土。粘性しまりなし。火山灰層(第VII章参照)。
- V⑥層：黒灰色土。粘性良好。
- V⑦層：暗灰色土。酸化の影響をほとんど受けていない粘質土である。



第6図 縄文時代および旧石器時代に対する試掘坑位置・層序

4 遺 構

SB 345(図版 8)

B XXXIV 16区に存在する掘立柱建物で、規模は長軸(南北)4m、短軸(東西)3.3mの方形、主軸はN-18.5°-Wである。北コーナーおよび北東辺には柱穴が検出できなかった。間数もまばらで、北西・南西辺は柱間間隔180~150cm、200cmの2間、南東辺は間隔110cmの3間である。後述するSB 346と一部重複し向きも同じであることから同一建物の可能性がある。柱掘形は長軸で55~25cmの隅丸方形や楕円形で、ピットの多くには柱痕をもつ。柱穴の覆土は地山ブロックおよびIV層と地山ブロックが混合するものが一般的で、柱痕はP 988以外で確認され、覆土はIV層ないしIV層と地山粒の混合土である。柱穴の深さはP 966で他より20cmほど深いほぼ同様の深さである。

SB 346(図版 8)

B XXXIV 16区にSB 345と重複し存在する掘立柱建物で西辺に張り出しをもつ。規模は長軸(南北)5.2m、短軸(東西)3.3m、張り出し部で4.3m、主軸方向はSB 345とほぼ同じである。東辺および西辺の柱間間隔は1.5mの2間と張り出し部2.1mの合計3間とかなりしっかりしているものの、南辺はSX 328に破壊されたと考えられ未検出である。柱掘形は20~40cmの楕円形でピットの多くには柱痕をもつ。柱穴の覆土はP 1506・1507・950で地山ブロックの他は、IV層に地山ブロックおよび地山粒が混合するものである。柱痕はP 1507・969・959・922・990・984でIV層に地山ブロックが混合する以外、IV層を覆土とする。柱穴の深さは南東の地盤の低い方が相対的に深くなっている。P 1507から陶器片1点が出土している。

SB 348(図版 9)

B XXXIV 23区に存在する掘立柱建物で主軸方向は前記のSB 345・346とほぼ同じで長軸(南北)4.6m、短軸(東西)3.8mの方形であるが、南コーナーの柱穴は検出できなかった。柱間間隔は東および西辺で2.8mと1.8mの間隔の異なる2間、短軸方向は不等である。柱穴の覆土はIV層に地山ブロックが混合するものが多いがP 1577はIII層に地山粒を含む。柱穴の深さはP 1642・1572の地盤が低いところで深い。出土遺物はP 1581の柱痕より同一個体と考えられる越前焼の甕胴部片2点が、P 1645・1572・1642から礫が出土している。礫の内、前2者は根固めの用途であろう。またP 1582から柱根が出土している。

SB 349(図版 9)

B XXXIV 21・22区、C XXXIV 1・2区に存在する掘立柱建物で主軸はN-82.5°-Eの方形であるが、外方1m弱に庇状の張り出しを伴う可能性がある。建物規模は長軸(東西)6.3m、短軸(南北)4.9mで2間3間と考えられるが南辺は柱穴が検出されないものが多い。また、庇状の張り出しを含めれば長軸8.1m、短軸6m以上であるが柱間はまばらである。柱間間隔は長軸が1m前後、短軸1.3mと1.6mである。柱掘形は20~50cmの隅丸方形・円形・楕円形と様々に柱痕をもつものが多い。柱穴の覆土は建物でIV層に地山ブロックの混合であるが、柱痕覆土はほとんどがIV層で、P 919・953は柱痕平面形が半月形を呈し、半截材を使用したと考えられる。また、庇状の柱穴覆土は建物の柱穴と同様で、柱痕もIV層を主体とする。柱穴の深さは、地盤の低いP 551・936・854で深い。出土遺物はP 925で砥石2点、P 1634で礫1点が出土

しており、前者の砥石は、根固めとして再利用されたものである。

SB 350(図版9)

B XXXIV 21区、C XXXIV 1 区に SB 349と重複し存在する掘立柱建物である。主軸は N-60.5°-E で、長軸(北東-南西)4.4m、短軸(北西-南東)4 m の方形と考えられるが東コーナーや南東辺の柱穴は検出できなかった。柱間は桁行で1.4~1 m、梁行で1.8~2.1mである。柱掘形は40cm弱のほぼ円形でほとんどが柱痕をもつ。柱穴の覆土は P 559のIV層、P 926の地山ブロックを除きすべてIV層に地山ブロックを含むもので、柱痕の多くはIV層である。P 999は SB 349の柱穴と重複するが新旧関係は不明である。柱穴の深さは地盤の低い P 559だけが飛び抜けて深い。ピットからの出土遺物はない。

SB 351(図版10)

B XXXIV 21・22区、C XXXIV 1・2 区に存在する2間3間の掘立柱建物である。主軸は N-71°-E で長軸(北東-南西)7.5m、短軸(北西-南東)4.2mの方形と考えられるが南東辺の柱穴が部分的に検出できなかった。柱間は桁行2.4~2.6m、梁行2~2.3mと若干不規則である。柱掘形は径30cm前後の円形で多くに柱痕が検出できた。柱穴の覆土は地山ブロックやIV層と地山ブロックおよび地山粒の混合土で柱痕はIV層のものが多い。P 949の柱痕平面は半月形で、半截材を使用したものと思われる。柱穴の深さは P 875・904・883で深い。SD 335①・330、SK 341と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物は P 884から、中世の白磁皿片1点(図版25-13)、P 1640から砥石1・礫4、P 872から礫2、P 875・1634から礫各1点が出土して、それぞれ根固めと考えられる。

SB 352(図版10)

C XXXIV 2・3 区に存在する2間3間の、若干ゆがむがほぼ方形の掘立柱建物である。SB 353・354と重複するが新旧関係は不明である。主軸は N-62°-E で、長軸(北東-南西)6.5m、短軸(北西-南東)3.4mで、柱穴が抜けていたり柱間間隔が不規則な部分もある。柱間は北西辺の桁行で2.0・2.3・2.2m、南東辺で1.8・3.0・1.6m、梁行は南西辺で1.9・1.5mである。柱掘形は径53~22cmと様々に覆土はⅢ層に地山ブロックないし砂を混合するものが多い。柱痕覆土は P 859・1557でIV層に地山ブロックの混合、P 1514はⅢ層である。また、P 1529・859・1530・841で地山をテラス状に作り出している。柱穴の深さは20cm前後の差が存在する。ピットからの出土遺物はない。

SB 353(図版10)

C XXXIV 2・3・8 区にまたがり存在する2間3間の方形の掘立柱建物と考えておきたい。SB 352・354と重複するが新旧関係は不明である。主軸は N-82.5°-E で長軸(東西)8.3m、短軸(南北)5.7mと推定される。桁行南東辺は SD 330や水田の段切りにより検出できなかった。SD 330との新旧関係は、P 828が溝を切っている。柱間は北西辺の桁行で2.9・2.5・2.9m、梁行2.9mに復元が可能である。柱掘形は径30~50cmの円形が多く、北西の桁行にあるものは柱痕をもつものが一般的である。柱穴覆土はIV層・Ⅲ層に地山ブロックを混合するものやほぼ地山ブロックによっているものなど様々である。柱痕の覆土はIV層ないしそれに地山ブロックが混合されるものが一般的のようである。柱穴の深さは最大50cm弱の差が見られ均一でない。出土遺物は P 1549の柱痕底部から、礫1点が出土している。

SB 354(図版10)

C XXXIV 2・3・8区にまたがり存在する2間3間の方形の掘立柱建物と考えておきたい。SB 352・354と重複するが新旧関係は不明である。主軸はSB 353とほぼ同じ向きである。長軸(東西)7.7m、短軸(南北)4.9mでSB 353とほぼ同様な規模である。また、柱穴もSB 353同様、桁行南東辺はSD 331や水田段切りにより検出できなかった。柱間は北西辺の桁行で2.4・2.8・2.5m、南西辺の梁行で2.9・2.0m、北東辺で2.3・2.6mに復元が可能である。柱掘形は径25~60cmの円形ないし楕円形で、北側の柱穴に柱痕をもつものが多い。柱穴覆土はP 856・855・850・842・825・805などでⅢ層を主体とし地山ブロックが混合し、P 1546・1548・823などでⅣ層と地山ブロックの混合である。P 856は、SD 330に切られている。柱穴の深さはP 812が他に比べ深い。出土遺物はP 823から砥石1・礫2、P 855・842・800から各1点の礫が出土。また、P 1546から珠洲焼片2点が出土している。

SB 358(図版11・16)

C XXXIV 6・11区に存在する。SE 344を建物内に含むが、両者の新旧関係は不明である。南側は調査範囲外に伸びる。主軸はN-75°-Eで長軸(東西)7.7m。柱間間隔は1.3~2.0mと不等で、梁行は1.5~1.7mである。柱掘形は径50~25cmの円形ないし楕円形で、柱穴覆土はⅣ層や地山ブロックに黒色土や暗褐色土が混合されるものが一般的であり、柱根はP 531・561・696(図版34)で出土している。柱穴の深さは、P 531で浅い他は10cm前後の差である。出土遺物はP 628で石造物1(図版29-131)・礫2、P 630で砥石1・礫1、P 696で礫1が出土しており、根固めと考えられる。なおP 542は一応ピットに含めているが、平断面形および覆土の状況から柱穴の可能性は低い。平面形は、北側が強く張り出す不定形で、壁は大きく開き緩く立ち上がり、底部は若干丸底気味で壁との境も不明瞭である。覆土は2層に分層され、Ⅲ層近似的な黒色土を主体に細かな地山粒も混合する。若干、底部から浮いた2層中より、近世の陶器片が3個体(図版25-6~8)出土した。2個体は細片であるが、他は肥前陶器の砂目の皿でほぼ完形に近い。出土状況から地鎮の行為も考えられよう。また、小礫3点も出土している。

SB 301(図版11)

C XXXV 21・22区に存在する2間3間の掘立柱建物で、北東コーナーの柱穴は未検出であるものの総柱である。北東、南東隅にそれぞれSE 320・311の井戸をもち、北西隅には雨落溝と考えられるSD 309が配する。主軸はN-82°-Wで長軸(東西)7.3m、短軸(南北)4.6m、柱間間隔は梁行ではほぼ等間隔、桁行きの南東部は3m弱と広く、他は1.2mほどの等間である。柱掘形は径25~45cmほどの楕円形で覆土はⅣ・Ⅳ①層に地山ブロックが混合するものが一般的である。出土遺物は、P 11から柱根(図版35-205)が出土している。

SB 355(図版12)

C XXXIV 7・8・12・13区にまたがり存在する1間2間の方形の掘立柱建物で、SB 357と重複するが新旧関係は不明である。また北西桁行きの中央柱穴は発見できなかった。主軸はN-76°-Eで長軸(東西)4.8m、短軸(南北)3.6mである。柱間間隔は南東辺で2.2m、2.5mと多少不等である。柱掘形は30cm前後の円形ないし楕円形で、柱穴の覆土は全てがⅣ層ないし地山ブロックの混合である。柱穴の深さは10cm前後の差はあるものの、ほぼ均一と言えよう。P 660から石臼1・磨石1・礫5、P 703から礫2が出土し、

いずれも根固め石と考えられる。また石臼は P 660(図版30-137)と接合関係にある。

SB 356(図版14)

C XXXIV 12・13区に存在する1間2間の方形の掘立柱建物である。SB 357と重複するが新旧関係は不明である。主軸はN-48.5°-Eで長軸(北東-南西)6.6m、短軸(北西-南東)3.1mで桁行きの柱間間隔はほぼ等間である。柱掘形はP 644を除き径40~60cmのほぼ円形で、柱穴の覆土はP 680・664のIV層を除き、III層ないし黒色土である。東コーナーの石組は柱の根固めと考えられる(本来は柱穴と考えたいが、自然流路との覆土が区別しにくい)。また、P 680(図版14)にも根固め石が出土した。柱穴の深さはP 680が群を抜いて深いものの、他は20cm前後の差である。出土遺物は、P 680に肥前の鉄絵鉢(図版25-11)・鉄滓1・礫3、P 681から礫1が出土し根固めと考えられる。

SB 357(図版12)

C XXXIV 7・8・12・13区にまたがって存在する掘立柱建物で、IV層上面で確認されている。長軸はN-66°-E、面積は約135m²で、本遺跡で発見された掘立柱建物の中で最大の規模をもつ。発見された柱穴は柱掘形の長軸径が100cmを超えるものや、70cm以上の径をもつものが14基と、他の掘立柱建物と比べて柱穴の規模が著しく大きい。発見された25基の柱穴のうち16基に柱痕が検出され、6基から柱根が出土した。構築状況については、柱根もしくは柱痕直下に石を据え、根本の周囲を石で固める工法をとっているものも複数確認された。構築方法においても他の建物とは明かに一線を画している。建物は柱穴の規模・配列・構築方法等から、大きく分けて以下に説明する3つの部分から構成されているものと考えられる。

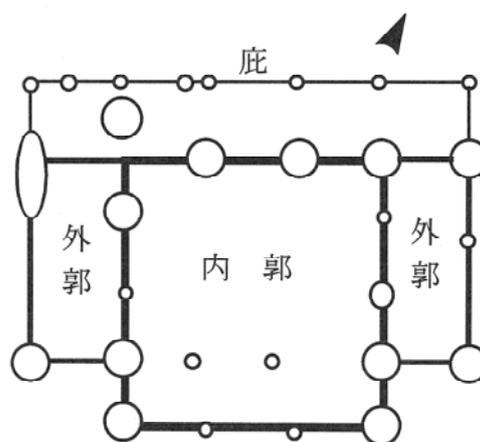
なお、「内郭」・「外郭」・「庇」は、説明するにあたって便宜的に用いたもので、詳細な部分名称については、今後の検討課題である。

内郭 桁行4間(6.0m)、梁間3間(5.8m)のほぼ正方形を呈し、面積は34.8m²である。関係する柱穴は重複を含め15基発見されたが、北西隅の柱穴は発見されなかった。柱穴の規模は柱掘形の長軸径が53~113cmで、うち70cmを越すものが10基ある。11基から柱痕が検出され、3基から柱根が出土した。

外郭 略図の様に、内郭の東西両側にそれぞれ幅が東西に1間(3.0m)、長さが南北に4.8mずつ張り出した形を呈する。柱穴の規模は、1基を除き柱掘形の長軸径が70cmを超える。全ての柱穴で柱痕が検出され、3基から根固石・据石が出土し、うち1基からは柱根も出土した。

庇 建物北側に幅1間(2.2m)、長さ5間(12.0m)にわたって存在する。発見された柱穴は6基で、柱穴の規模は柱掘形の長軸径が32~64cmと、内・外郭に比して著しく小さく、また深さも極めて浅い。柱根が出土したのは2基である。

建物は上記の3部分から構成されている。前2者は他の掘立柱建物の柱穴に比して規模が大きく、構築方法も異なる。それに比べて後者は他の掘立柱建物とほぼ同じ規模の柱穴から成っており、構築方法も他のものとはほぼ変わらない。以下3部分の主な柱穴について個々に説明することとする。



SB 357略図

SB 357—P 740(図版13)

建物外郭西側梁間の柱穴で、P 741と切り合っているが、新旧関係は不明である。平面形は北西—南東に長い楕円形で、確認面からの深さは38cmである。断面形は北側がやや低い底部から、壁面は急激に立ち上がる。柱痕が検出されており、径は25cmである。覆土は黒色土を主とする5層に分層され、柱痕は黒色土である。柱痕直下から据石と見られる礫1点が出土したほか、根固め石と見られる礫4点が出土している。前記の礫の中には石造物片2点(図版31)が含まれる。

SB 357—P 741(図版13)

P 740と切り合っているが、新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形で、確認面からの深さは33cm、断面形はほぼ円形の底部から、壁面は急激に立ち上がる。柱痕が検出されており、径は23cmである。柱穴覆土は2層に分層され、柱痕は黒色土である。柱痕直下から据石と見られる礫(石造物)1点(図版31-148)が出土したほか、根固め石と見られる礫10点が出土している。

SB 357—P 630(図版13)

建物外郭南西隅の柱穴で、平面形は隅丸正方形と推測されるが、南北両辺のはば中央にそれぞれ小さな張り出しが見られる。確認面からの深さは35cmで、断面形は柱痕底部が僅かに落ち込むほかは、ほぼ平坦な底部から、壁面は急激に立ち上がる。柱痕が検出されており、径は28cmである。覆土は濃黒褐色土で、柱痕は黒褐色土である。柱痕上部で砥石1と礫1が出土している。

SB 357—P 600(図版13)

内郭南西辺の延長上に存在する。平面形はほぼ円形で、確認面からの深さは21cm、断面形は平坦な底部から、壁面は急激に立ち上がる。柱痕が検出されており、径は30cmである。覆土は黒褐色土の単層で、柱痕は黒褐色土である。礫1点と、柱掘形からやや大きめの礫1点と砥石が出土している。

SB 357—P 605(図版13)

建物内郭西側桁行の柱穴で、平面形は不整形、南側に張り出しがある。確認面からの深さは35cmで、柱痕が3つ検出され、径は柱痕1からそれぞれ、20・28・33cmである。断面形は2つの柱痕底部が落ち込む不整形な底部から、壁面は外反して急激に立ち上がる。柱痕はそれぞれ切り合っており、数次にわたって建て替えがおこなわれたものと考えられるが、新旧関係は不明である。覆土は黒色土を主とする7層に分層され、柱痕は黒色土である。柱痕2の直下から据石と見られる石臼(図版29-134)と根固め石(図版29-135 砥石)1点、また柱痕3の直下から根固め石と見られる礫1点が出土している。

SB 357—P 610(図版13)

建物内郭西側桁行の柱穴である。P 611と南側で、P 612と東側でそれぞれ切り合っているが、新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形で、確認面からの深さは30cm、断面形は丸底から西壁が急激に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物はない。

SB 357—P 620(図版13)

建物内郭西側桁行の柱穴で、P765と南側で切り合っているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、確認面からの深さは43cm、断面形は平坦な底部から北壁は急激に、南壁は緩やかに立ち上がる。柱痕が検出されており、径は35cmである。覆土は黒褐色土を主とする4層に分層され、柱痕は黒褐色土である。柱痕直下から、据石として墨で呪いの書かれた墨書石(図版29-129、図版81)が出土している。そのほか根固石と見られる砥石1点(図版29-130)を含む礫4点と、木製品1点が出土している。また底部南西側には落ち込みがあり、その脇から方形に切り込み成形された根固め石と見られる礫が1点出土している。このことからこの落ち込みも柱痕で、建て替えがおこなわれていたと考えられ、北側が新・南西側が旧の関係にある。

SB 357—P 765(図版13)

P 620と北側で切り合っているが、新旧関係は不明である。平面形はほぼ楕円形で、確認面からの深さは25cmである。断面形は平坦な底部から、壁面は急激に立ち上がる。覆土は黒色土を主とする5層に分層される。根固め石や据石と見られる石臼2点(図版31-149)を含む礫が計7点出土しているが、柱痕は検出されなかった。

SB 357—P 682(図版13)

建物内郭南側梁間の柱穴で、平面形は南北にやや長い楕円形、確認面からの深さは25cmである。断面形は西側へ傾斜する底部から、壁面は急激に立ち上がる。柱痕が検出されており、径は30cmである。覆土は黒褐色土の単層で、柱痕も黒褐色土である。柱痕直下から据石と見られる礫2点が出土したほか、柱痕直上で性格不明の礫1点が出土している。

SB 357—P 700(図版13)

建物内郭北側梁間の柱穴で、平面形は南北に長いほぼ楕円形、確認面からの深さは33cmである。断面形は柱痕底部が落ち込んでいるほかは、ほぼ平坦な底部から、南壁は急激に、北壁は緩やかに立ち上がる。柱痕が検出されており、径は21cmである。覆土は黒色土の単層で、柱痕は黒色土である。覆土から、不明石器1点が出土している。

SB 357—P 676(図版13)

建物内郭南側梁間の柱穴で、平面形は東西に長いほぼ楕円形、確認面からの深さは57cmである。断面形は凹凸のある底部から、壁面は僅かに外反しながら急激に立ち上がる。柱根(図版35-206)が残っていた。覆土は黒褐色土の単層で、柱根下は黒色土である。柱根の直下から据石(砥石)が出土している。

SB 357—P 650(図版14)

底部分の柱穴で、平面形は西側が突き出た卵形、確認面からの深さは36cmである。断面形はやや凹凸のある底面から東壁は急激に立ち上がり、西壁は急激に立ち上がった後、緩いテラスをつくって再び急激に立ち上がる。柱痕が検出されており、径は32cmである。覆土は褐色系の2層に分層され、柱痕は黒褐色土である。柱根と見られる木片3点(図版34-188-190)が出土したほか、その直下から据石と見られる礫2点

と、根固め石と見られる礫3点が出土している。また、覆土から、中世?の青磁片1と肥前?陶器片1が出土している。

SB 357-P 705(図版14)

建物内郭北東隅の柱穴で、平面形は南北に長い楕円形、確認面からの深さは40cmである。断面形は柱痕底部が落ち込んでいるほかは、丸底の底部から壁面は緩やかに立ち上がる。柱痕が検出されており、径は30cmである。覆土は黒色土の単層で、柱痕も黒色土である。覆土から、胎土に砂粒を多く含む時期不明の土器片が出土している。

SB 357-P 658(図版14)

建物内郭東側桁行の柱穴で、東南側でP 659と切り合っており、当該柱穴の方が古い。平面形は北西-南東方向に長い楕円形で、深さは17cmである。断面形は平底から、北西側の壁面は急激に立ち上がる。南西側の壁面はP 659との切り合いのため不明である。柱痕は検出されていない。覆土は黒褐色土の単層である。

SB 357-P 661(図版14)

建物内郭東側桁行の柱穴で、平面形は不整形、確認面からの深さは24cmである。断面形は南東側が深く落ち込んでおり、東・南壁は底部から急激に立ち上がる。北・西側は底部から急激に立ち上がった後、それぞれ20cm、7cm高い所でテラスを形成し、その後また急激に立ち上がる。柱痕が検出されており、径は20cmである。覆土は黒褐色土の単層で、柱痕も黒褐色土である。また、礫1点が北東壁より出土している。

SB 357-P 670(図版14)

建物内郭東側梁間の柱穴で、平面形は東西にやや長いほぼ楕円形、確認面からの深さは53cmである。断面形は丸底から北壁は急激に、南壁はやや緩やかに立ち上がる。柱根(図版34-198)が出土している。覆土は黒褐色土の単層である。柱根直下から人頭大の据石が出土したほか、根固め石12個と16世紀末~17世紀初の肥前の皿片1点が出土している。

SB 357-P 675(図版14)

建物内郭東南隅の柱穴で、平面形は南北に長軸をもつ不整形である。確認面からの深さは30cmで、断面形は中央が高く南北両側に落ち込みがあり、南壁は急激に、北壁はそれよりもやや緩やかに立ち上がる。柱根(図版35-200)が出土している。覆土は黒褐色土の単層である。明確な柱痕は検出されなかったが、底部の構造から数次にわたって建て替えがおこなわれた可能性がある。

SB 357-P 710(図版14)

建物外郭北東の柱穴で、平面形はほぼ円形、深さは37cmである。断面形は平底の底部から壁面は急激に立ち上がり、東壁はやや外反している。柱痕が検出されており、径は30cmである。覆土は黒褐色土の単層で、柱痕も黒褐色土である。

SB 357—P 726(図版14)

建物外郭東南隅の柱穴で、自然流路のプラン上で検出されており、当該柱穴の方が新しい。平面形は南北に長いほぼ楕円形で、確認面からの深さは35cmである。断面形は東側がやや低くなった底部から、壁面は急激に立ち上がる。柱根が出土している。覆土は黒褐色土等の3層に分層される。柱根直下から人頭大の据石が出土したほか、柱根を取り囲んで大量(21個)の根固め石が出土しており、その中に砥石2(図版30-142・143)、石臼1が含まれる。そのほか肥前の陶磁器片(図版25-12)2点が出土した。

SE 344(図版15)

C XXXIV 11区に存在する井戸で、SB 358内に存在するが新旧関係は不明である。平面形は径110cmほどのほぼ円形で、断面形はU字形を呈する。覆土は9層に分層され、黒灰色土および黒色土を主体としており、覆土の上部と下部に地山ブロックを含む。遺構の掘り込みは、IV層上面からであるが、それ以上の層は削平を受けており不明である。覆土は水洗され、種実遺体が(第3表)8層より多数出土した。また7層より瓦質土器1点が出土している。

SE 343(図版15)

C XXXIV 15区に存在する井戸で、自然流路の落ち込みと重複し、両者の新旧関係はとらえられなかった。井戸周辺には建物を想定させるピット群は存在せず、単独の検出である。平面形は不明であるが、残存する南西壁の状況から楕円形と考えられ、断面形も播鉢状に底部から大きく外方に開いて立ち上がる。覆土は、調査上のミスで、底部付近に残るのみで、粘性の強い黒色土である。また、覆土は水洗したが種実遺体の発見は少ない(第3表)。

SE 311(図版15)

C XXXV 22区に存在する井戸で、SB 301の南東コーナー近くに位置する。平面形は長軸(北西—南東)195cmほどの楕円形で、深さは125cmほどである。断面形は確認面から10cm以下の浅い位置で、テラス状に屈曲し、ほぼ平坦な底部へとバケツ状に径を縮める。

テラス上には黄褐色粘質土が充填され、平面的には井戸の淵にドーナツ状に検出された。これは、意識的に充填したもので、壁際の崩壊等を防ぐため事前に軟質土を除去し、そこに粘性の強い土で補強したと考えておきたい。覆土は5層に分層され、地山ブロックを混合する。暗灰色土を主体とする最下層は、地山に黒色土が若干混入する程度で、砂礫を含んでいる。また、4層の上下には、有機物が腐食しきっていない層が薄くみられた。覆土は水洗され種実遺体が出土(第3表)したが数は少ない。出土遺物は2層より時期不明の土師器片1点と礫1点が出土している。

SE 320(図版15)

C XXXV 22区に存在する井戸で、SB 301の北東コーナー近くに位置する。平面形は長軸(南北)85cmほどの楕円形で深さは80cmと浅く、断面はU字状を呈する。覆土は2層に分層され、黒褐色土である。また、覆土は、水洗され種実遺体が出土している(第3表)。井戸の南に位置する2基のピットは、付属施設の可能性がある。

SK 341 (図版15)

C XXXIV 2 区に存在する浅い落ち込みで P 859 に切られている。平面形は、長軸(東西)150cmほどの楕円形で底部はほぼ平坦、壁はゆるく立ち上がる。覆土は、2層に分層され、地山ブロックが混入する。出土遺物は覆土より珠洲焼の甕片と礫各1点が出土している。

SX 328 (図版15)

B XXXIV 16 区に存在する落ち込みで、北東部分は改田時の段切りにより消失している。多くのピットと重複するが、ピットが旧の関係にある。断面形は、残存している北東壁から極めて緩く立ち上がり、底部との境も不明瞭である。覆土は3層に分層され、褐色土を主体に地山ブロックおよび炭化物を混合している。覆土から礫2点が出土している。

P 730 (図版16)

C XXXIV 13 区に存在し、SB 357 の東側コーナーに近い位置である。自然流路と一部が重複するが、流路よりも新しい。平面形は長軸(東西)1mの楕円形で、南西に地山テラスをもち、底部は広く平坦である。柱痕は4層と考えられ、この縁辺より根固めの石が多数出土しているが、覆土上部(1・2層)の礫配置は不規則である。また底部からは、据石と考えられる小型偏平礫が出土した。覆土は4層に分層されるが柱痕と考えられる4層以外は、黒褐色土を主体とする。据石および根固めに使用されたものの中には砥石4・礫32(図版30)・肥前の碗・皿・甕2・播鉢1(図版25)が含まれる。

P 660 (図版16)

C XXXIV 8・13 区にまたがり、SB 357 内の P 658・661 の中間に位置する。平面形は、長軸(東西)55cmの楕円形で、柱痕は東側に位置する。周縁には石臼(図版30-137)、磨石(図版30-136)が各1点と礫5点を根固めおよび据石として使っている。

P 720 (図版16)

C XXXIV 13(13) 区に存在し、P 730 に近い。平面形は、径約60cmの円形で、断面は、平坦な底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色・暗灰色土の3層に分層される。小礫1点が出土するのみである。

SD 330 (図版16)

C XXXIV 2・3 区に存在し、北東から南西方向に走る溝である。C XXXIV 3(16) 区で、SD 331 と、C XXXIV 2(10) 区で SD 332・339 と、C XXXIV 2(14) 区で SD 338 にそれぞれ結合し、C XXXIV 2(11・12) で SD 335① と合流する。各溝との切合い関係は、SD 331 が旧、SD 335① が新の他、際立った新旧関係は見られず、同時に存在していた可能性が高い。また新旧関係の認められた SD 331・335① も、SD 330 と結合または合流する平面的関係から、時期差というものは、それほどないものと考えられる。溝の幅は、80~100cm で、底部は比較的平坦、壁も開いて直線的に立ち上がる。底部のレベルから、SD 331 は一時期同時存在した可能性がある。覆土は北東の C XXXIV 3 区付近と C XXXIV 2 区付近では大きく異なり、SD 339・332・338 の影響と考えられる。前者の地区は、Ⅲ層に近似する黒灰色土と砂を多量に含む暗灰色土の基本的には2層に分けられ、後者の地区では、同様にⅢ層近似の暗灰色土および黒灰色土を主体とし、覆土の下部

は砂が比較的多く合計9層に分層された。これら、覆土下部に一応に存在する砂およびシルトの存在や、溝の発する位置が沢筋の自然流路付近であることは、溝の性格を用水路と考えてよさそうである。出土遺物は、最下層(9層)を中心に中世の珠洲焼甕片1・播鉢片1・越前焼甕片1である(図版26)。礫は合計62点でその中に砥石6・石造物5・不明石器3が含まれ(図版32)、多くは覆土上層のからの出土である。また木製品も少数出土した(図版35)。

SD 331(図版16)

C XXXIV 3区に存在し、東西方向に走りSD 330に合流する。溝底部のレベルはほぼ平坦で、流れの方向は不明である。溝の幅は約70cmほどで底部は緩い丸底となる。覆土は3層に分層されるが、最下層はSD 330の最下層と近似するため、時期差はあるもののその差は極めて短い。遺物は出土していない。

SD 336・332・338(図版1)

B XXXIV 22・23区、C XXXIV 2区に存在する一連の溝と考えられ、複数回にわたる掘り返しの痕跡と考えられるが、覆土上部の削平が著しく底部が残存するのみで、新旧関係等は不明である。地盤の傾斜に沿い、北西から南東に走りSD 330と合流する。覆土は黒灰色土のⅢ層近似層で、SD 330の1層と同様である。出土遺物はSD 338から、珠洲焼播鉢片1が出土している。

SD 335①・335②・337(図版2・3・17)

SD 335①はB XXXIV 17・22区でN-50°-E方向に走り、そのほぼ中央から南下をはじめC XXXIV 6区で南西方向に走るSD 337と結合する。また途中、SB 330、SD 335②、SX 345と合体合流するが、それぞれの新旧関係は、古い方からSD 335②→SD 337→SD 335①、SX 345の関係にある。断面形は、SD 335②合流点以北で、口が開くU字形を呈するが、以南では多くの遺構の切り合いにより形状を崩している。覆土は同じく以北では黒灰色、暗灰色の比較的単純な堆積、下層には砂礫を含み水が流れていたことを物語るが、特にC XXXIV 2区では、溝底面に径10cm前後の小礫が敷き詰められたように発見された。また多量の礫が覆土中～上位にかけて投げ込まれた様な状態で出土し、その中に五輪塔と考えられる破片や砥石などが多く含まれていた。土器についても中世から近世初頭にかけてのものもが覆土から混在して出土している。SD 335②は、C XXXIV 6(5)区でSD 335①から分岐し南西に走り、SD 337と合流する。SD 335①と同時存在も考えられるが、礫の出土が少ないなどの理由で両者を別物と判断した。断面の形状および規模、覆土の状況も、SD 335①と同様である。出土した礫や土器についても量的に少ないのを除けば、同様な傾向と考えられる。

SD 337はSB 357の建物内C XXXIV 7区で、削平され消失しているが南西方向に走る溝である。SD 335①新←→SD 337旧、SD 335②旧←→SD 337新、SB 357新←→SD 337旧の関係にある。断面の形状および規模・覆土についても、SD 335①、SD 335②と似ており、砂礫層の存在から水が流れていたと推定される。礫・遺物等も覆土上・中位を中心に投げ込まれたように出土したが、図版34-185、図版35-209は底部付近からの出土である。また、SD 337とSD 335間の細い溝は、両者よりも新しい関係にある。

SX 345(図版17)

C XXXIV 6・7区に存在し、SD 335②を切っているが、SD 335①との関係は不明で、同時に存在した可

能性もある。形状は南北2.2m、東西2.8mのほぼ方形と推定され、断面形は広く平らな底部から、壁は大きく開いて立ち上がる。深さは確認面から30cmほどである。覆土は暗灰色、黒灰色の粘土であるが、最下層には多量の細砂が混入している。遺構内の南壁上に2基、東壁上に1基のピットを検出したが、前者はSX 345を切っており、後者は同時かそれともSX 345よりも古いものである。

SX 327(図版17)

B XXXIV 22・23区に存在する。SD 335①・332そして、東西に走る段切りとに囲まれた範囲の落ち込みで、ほぼ方形のプランを呈する。壁の立ち上がりは緩く、底面は東側に緩く傾斜している。各遺構との新旧関係はSD 335①に切られ、SD 332とは同時期である。覆土は暗褐色土で2層に分層され、細かな砂礫を多量に含んでいる。遺物は主に上層に含まれ、SD 335①の上層出土遺物と層位的につながる。

SD 259(道路状遺構)(図版2)

B XXXIV 11・16区に存在する道路状遺構の東側の溝であり、西側には対になる溝が発見されている。B XXXIV 11区以北では、改田時の削平により道路部分が消滅しているが、B XXXIV 16(1)・XXXIII 20(5)区には、溝に直行する段が発見されている。この道路状遺構のつながりはB・C XXXIII 区で南方向に直線上に発見されており、深さは深いところで90cm前後である。遺物は破碎礫を中心に覆土の上位から多量に出土している。

SA 359・360(図版2)

B XXXIV 21区に存在する柵列である。両者は一部重複するが、軸はSB 345・346、SD 259(道路状遺構)とほぼ一致する。東側に隣接する建物に伴う可能性がある。覆土は両者ともIV層に地山ブロックが混合するものが一般的で、柱痕のみられるものがいくつかあるが、その覆土もIV層ないしIV層に地山ブロックが混合されるものである。出土遺物はなく、ピットの深さは20cmほどの差はあるものの、ほぼ均一である。

SA 361(図版3)

C XXXIV 6区に存在する。覆土はIV層ないしIV層に地山ブロックが混合するものである。調査範囲外に伸びる可能性があり、規模は不明である。

SA 362(図版5)

D XXXV 8区に存在する柵列で、柱痕は見られず覆土もしまりがない。極最近のものと考えられる。

SD 324・325(自然流路)(図版1)

BC XXXIV の東側およびD XXXIV・XXXV 区のはほぼ全域にかけて、自然流路跡が検出された。調査当初、水田域に引き込む用水関係の施設とも考えたが、平面形に人為的規則性がない事、断面調査においても覆土が地山に深く不規則に入り込んでいたりオーバーハングしたり、これも人為的と考えられず、調査区北側の丘陵切れ目を水源とする自然流路と考えるに至った。遺物の混入は、B XXXIV 18・19区に中近世の陶磁器・土器・石製品・木器が少量出土した他、縄文時代?の石器2点以外、出土はなかった。また、SB 356・357は、流路上に柱穴を作っているため、遺構の所属時期からおそらくとも17世紀前半にはほぼ埋

り切っていたものと考えられよう。

その他の遺構

その他、出土遺物を報告しているピットについては、その位置を遺構個別実測図に示した。

5 遺物

A 旧石器～縄文時代(図版25-1-5)

出土した遺物は石器のみである。この内、明らかに旧石器時代と考えられるものは1のナイフ形石器のみで、他は縄文時代の可能性が高いものの時期の限定はできない。石器は13点出土し、内訳はナイフ形石器1点、尖頭器(未成品?)1点、石錐1点、スクレイパー1点、石核1点、不定形石器5点、剥片3点である。出土位置にまとまりはなく、遺跡内に散在している。出土層位も一定せず、大半が中世以降の攪乱により表土近くまで浮いた状況で出土した。石材は硬質頁岩を主体に鉄石英・流紋岩・凝灰岩が含まれる。

1はナイフ形石器で、縦長素材を用い、二側縁に急角度のブランディングを施す。左側縁のブランディングは基部付近を主要剥離面から、また先端付近は正面から施される。風化またはローリング等により、全体的に磨耗が著しい。

2は尖頭器未成品と考えられる資料で、正・裏面に大まかな剥離を施した両面加工である。上下端部を欠損するが上端には欠損面への剥離が、下端には欠損面を打面とした剥離が見られることから再生が試みられた可能性がある。隣接する調査範囲(神林村教育委員会調査)から縄文時代草創期のいわゆる断面三角形の錐が出土していることから、本資料も該期の所産と考えておきたい。

3は左側縁と下端縁に鋸歯状の連続した二次加工が施されたスクレイパーである。二次加工は左側縁が裏面から、下端縁が正面から施されている。

4は縦長剥片の右側縁に細かな二次加工がつく不定形石器である。素材剥片の打面は小さく、正面への調整剥離も細かく丁寧である。

5は横長の剥片を素材として、ほぼ全周に二次加工を施し、一端を細く作り錐部とした石錐である。錐部先端の断面は三角形を呈し、先端部は磨耗している。左側縁の急角度の二次加工は鋸歯縁を作り出しており、左側縁の加工と異なる。

B 中・近世の遺構出土陶磁器・土器(図版25-27)

陶磁器・土器が出土した遺構は少ない。比較的多く遺物を出土した溝(SD)は中・近世が混在する状況で、しかもその多くが底部から浮いた状況で出土した。またピット(P)、井戸(SE)、土坑(SK)は出土量が少なく、そのほとんどが細片である。

SB 358-P 542(6~8)

図示したものは全て肥前陶器で、その他に産地不明の陶器の皿細片が1点ある。6は砂目の小皿で体部中位に段をもち、高台は無釉である。7は碗と考えられ、口縁部は外反肥厚し立ち上がる。8は叩き成形の甕で内面頸部下に当て具痕が見られる。

P 730(16~20)

出土した全てを図化した。全て肥前陶器である。16は胎土目の小皿、17は碗と考えられる。18は瓶子と考えられ胴部上位の内面には当て具痕が、外面には乳白色の釉がかかる。19は甕底部片と考えられる。20は播鉢で底部は回転糸切り、内面には8条の卸し目が粗く施される。20(17世紀前半)以外は、16世紀末の所産であろう。

SD 325(自然流路)(21~23)

中世から近世の遺物が混在している。図示したもの以外、珠洲焼の甕片7点、越中瀬戸?播鉢片1点、瓦質播鉢1点、肥前陶磁器片4点が出土しており、全て1層出土である。21は18世紀の関西系の京焼き風色絵碗で体部から口縁は内湾して立ち上がる。22は17世紀代の肥前陶器の片口鉢である。23は14世紀代と考えられる珠洲焼の甕である。

SD 330(24)

図示したもの以外、珠洲焼甕片2点、越前焼甕片1点があり、出土層位は1点を除き覆土下位の9層である。また、珠洲焼片はSD 335①(4層出土)と接合関係にある。出土土器から数少ない中世の遺構と考えられる。24は珠洲焼の播鉢で、かなり使い込んだと見られ、内面は磨耗し卸し目は見られない。

SD 259(28・29)

28は陶胎染付碗で、内面底部は釉はぎである。29は肥前の胎土目の皿で、外面体部下位から底部にかけての無釉部には煤が付着している。

SD 335①(25~53)

25~27・30・31・36は、肥前陶器の皿で、25・26は皮鯨手皿である。両者とも胎土目で灰釉は高台を除き厚くかけられる。31も底部破片ではあるが釉の状況や形状から皮鯨手皿の可能性はある。27は胎土目、30は胎土が砂っぽく異質である。36の口縁は波状で鉄釉がかかる。32~34・37は肥前陶器の碗で32の底部と体部は明瞭に屈曲し、口縁は外反する。33は口縁が直行する鉄絵碗である。34は若干外反して立ち上がり、37は口縁が肥厚し端部で若干内傾気味になる。35は瀬戸美濃の天目茶碗で口縁は内傾した後、端部は屈曲し外反する。38は肥前の鉢で高台の削り込みは少なく、高台内および畳付けの部分には榎殻の圧痕がついている。なお、SD 267の上層出土のものと同接合関係にある。39は瀬戸美濃の香炉と考えられ、底部は回転糸切りでその部分に煤が付着する。40は漳州窯の染付皿で高台畳付けには砂が、底部にはカンナ削りがみられる。染付は玉ダキシシ文か。41・42は肥前の大型の皿で、42は三鳥手、高台内にも釉がかかり畳付けに砂が残る。41の高台は方形に削られ無釉である。44は肥前の甕で不明瞭な肩部に沈線状の溝を2条もち、口縁部は肥厚し大きく外に張り出す。叩き成形であるが、その後のナデや艶ナデにより消去された部分が多い。43は肥前の鉢で口縁部は無釉で外方に屈曲し肥厚する。46は肥前の甕で底部外面には貝目がみられ、体部内外には当て具痕、叩き痕がつく。47も肥前の甕で底部外面に砂目がつき、体部外面は平行叩き、内面には不明瞭な当て具痕が見られる。45は壺で内外に鉄釉がかかり、口縁は小さく直行し端部が若干外反する。48~53は播鉢で、48の口縁部は屈曲し直行する。51は口縁部に鉄釉がかかり、端部は内側に張り出しをもつ。いずれも肥前である。49・52は越前焼で、いずれも口縁端部を外側に細く作り出し、

16世紀代であろう。50・53は珠洲焼で、前者の口唇には波状目が施される。後者の内面は使用により滑らかになり、卸し目は見られない。

SD 335②(54)

図化したもののほか越前焼と珠洲焼の播鉢片、肥前陶器、瓦質土器がそれぞれ1点出土しており、4層から前二者が出土している。54は肥前の鉄絵皿である。

SD 337(55~61)

図化したものも含め、中・近世の土器が17点出土したが、層位的には混在した状況である。

55~57は肥前で55は胎土目の皿、56・57は碗で前者の高台は深く削り込まれ、後者は鉄絵の碗で体部から口縁にかけてほぼ直行し、内面体部下位に3条の浅い沈線が巡る。58は舶載青磁碗で口縁端部は丸く肥厚し、体部内外面には不明瞭な陰刻が見られる。59~61は播鉢で、前二者は珠洲焼である。59の口縁は端部が外方に摘み上げられるもののほぼ平坦で、14世紀代の所産と考えられる。61は越前焼?、底部外面は無調整、卸し目は底部と体部にそれぞれ別に施される。また、断面に漆接ぎ痕が残る。

SX 327(62~66)

62~64は肥前陶器で62は口縁内面に溝をもつ溝縁皿、63は鉄絵皿で高台畳付けには回転糸切り痕が残る。64は砂目の碗で釉は高台も含め全面にかかる。65・66は甕の底部片で前者は越前焼、後者は珠洲焼である。

その他のピット、溝(9~15)

9はSB 357-P 671出土で肥前陶器の小皿である。不明瞭ながら胎土目と見られる。10はP 698出土で、17世紀後半の瀬戸美濃の皿である。底部内面蛇目釉剥ぎ、高台は逆三角形を呈す。11はSB 356-P 680、12はSB 357-P 726出土でいずれも肥前陶器の鉢である。11は鉄絵鉢で16世紀末、口縁部は大きく外反する。12は17世紀初で外面底部には煤が付着する。13はP 884の覆土上層より出土した白磁皿である。口唇部は平坦に作られ、透明釉がきれいにかかるが外面体部下半は露胎である。14・15はそれぞれP 1550、SD 324出土の中国産漳州窯(清初)の染付碗と考えられ、前者の口縁は直行ないし若干内湾気味に立ち上がり、胎土は陶質である。後者の口縁は外反し胎土も良質で染付の発色も良い。

C 中・近世の遺構外出土陶磁器・土器(図版27~29)

碗・皿(67~95) 67~73は肥前の皿で67は胎土目、68は鉄絵が描かれる。69・70・73は溝縁皿で前二者には砂目がつく。71・72も砂目である。74~76は肥前の碗で、74の体部から口縁は外側に直行し、75は高台畳付けに回転糸切り痕を残し、76は鉄釉が比較的厚くかかる。

77~79は瀬戸・美濃大窯の天目茶碗で前二者は16世紀後半、79は17世紀前半であろう。80は15~16世紀の瀬戸美濃皿。81は15世紀代の瀬戸の皿で口縁部にのみ釉がかけられる。

82~86は16世紀後半の舶載染付皿で、84・85は同一個体で清初のスワトウ・ウエアである。釉は高台内面の一部を除きほぼ全面にかけられ、高台畳付けには砂が残る。84の高台内には裏銘がある。

87~95は舶載青白磁である。87・88は肥厚した口縁端部が丸く外反する身の深い青磁碗で、前者の断面には漆接ぎ痕が残る。89は蓮弁の陰刻が深く、釉は比較的薄い。胎土も悪く陶質である。90の外面口縁下

は横位に陰刻され陵を成し、内面は縦位に細かい陰刻が並ぶ。段皿か。91は身の浅いタイプであろう。92・93は底部片で高台内は釉はぎされる。後者の胎土は陶質で釉も薄い。94・95は白磁皿で前者は口縁が大きく外反し、後者は内湾気味に立ち上がり口禿げの口唇である。

甕・鉢・瓶(96~103) 96~99は甕で全て肥前と考えられる。96・97の口縁は外方に折り曲げられる。97の口唇は釉が禿げ磨耗している。98は頸部の長いタイプである。100は瓶の底部片で後者の体部内面には当て具痕がつき、外面上位には鉄釉、下位には透明釉がかかる。

101は古瀬戸の壺または鉢で高台の削り込みは浅く、畳付けには回転糸切り痕が残る。102は信楽の壺で短い口縁は大きく外反し、端部を丸く収める。器形から16世紀末と考えられる。103は珠洲焼の壺口縁で若干外反し、端部の面も不明瞭である。

播鉢(104~128) 104・105・110~112は肥前の摺り鉢で、110は折り返し口縁である。16世紀末~17世紀代であろう。104・105の口縁は内側に折り返し、口縁のみに鉄釉がかかる。111は口縁部を外方に丸く折り返し、口縁部のみに鉄釉がかけられる。17世紀後半である。112の口縁部はほぼ直行し、口縁部の内外と体部外面に鉄釉がかけられる。16世紀末である。

106~109は越中瀬戸で、106・107は口縁下の屈曲部に隆帯を張り付け、口唇に前者は波状沈線を描き、後者は削り取られている。109は底部片で底部は回転糸切り、内面はよく使われており滑らかである。いずれも17世紀代である。

114・116・117は瓦質の播鉢で、114は口縁部がほぼ直行し卸し目もまばらである。116の口縁は外側に摘み上げられ、内面は炭素が吸着し黒色を呈す。117は胎土・焼成ともに116に似ており、内面の卸し目は密であり、炭素吸着が見られる。

118・120・121・122は越前焼である。118・120の口縁は内面に凹帯をもち外方に直行するが、後者の端部は尖る。121・122は底部片であるが、使用が著しく内面がよく磨耗している。

113・119は備前焼の播鉢で16世紀末~17世紀前半である。119の底部外面は凸凹が著しい。

123~128は珠洲焼で、123~126の口縁端部はいずれも明瞭な面をもち、123が傾く以外、ほぼ水平な面を成す。14世紀後半と考えられる。127・128は底部片で前者の卸し目の条は細かく、後者は極めて粗い。その他115は3条の卸し目が間隔を開けて配される。備前焼の可能性もある。

D 中・近世の遺構出土石製品(図版29~33)

132はSB 357-P 600から出土し、これ以外に自然礫が1点出土している。平坦な破碎面を作業面とした置き砥石である。129・130はSB 357-P 620から出土し、後者は一部破碎した扁平礫の片面に広い作業面をもった置き砥石で、一部に線状痕が見られる。129(図版81)は墨書石で柱痕下に置かれた据石であり、正面と右側面の二面に墨書されている。正面上位中央には「天罡」、下位には「伏以」が見え、その他にも墨痕が多数つくが判然としない。出土状況から地鎮のために据えられたものと思われるが、前時代のものも据石として転用した可能性も否定できない。図化したもの以外、自然礫3点が出土している。133はP 659出土の砥石で、裏面には部分的ではあるが磨耗の範囲が見られ、正面の溝状の痕跡は金属片などで削り取ったような鋭さがある。その他、自然礫1点が出土している。131はSB 358-P 628出土の五輪塔の水輪部片と考えられ、正面は工具痕が部分的に残るものの曲面に仕上げられ、内面は空洞部で工具痕が顕著である。他に自然礫2点が出土している。134・135はSB 357-P 605から出土し、135は横断面方形の礫の一面に広い作業面をもった置き砥石で、他の面にも部分的に線状痕が残る。134は下臼でほぼ完形

に近い形に接合した。裏面に放射状の溝が切られ中央部が膨らむ。正面は工具痕が粗く残り、中央の芯棒孔付近は擂鉢状に窪む。また全体に煤が付着している。その他、自然礫1点が出土している。136・137はP 660出土で、前者は楕円扁平礫の正・裏面に磨耗面をもつ磨石である。後者は上縁部に縁をもつ上臼で下面の放射状の溝は頻繁に使用したため部分的に残るのみである。側面には挽き木横打ち込み式の方形の孔が3箇所つく。また、破砕面以外には煤が部分的についている。その他、自然礫5点が出土している。138はSB 357-P 676出土で横断面逆台形状の礫の一面に作業面をもつ置き砥石である。部分的に煤が付着している。139はSB 357-P 682出土で横断面楕円の長大な礫の4面に作業面をもつ置き砥石である。その他、自然礫3点が出土している。140・141はP 730出土で、前者は手持ち砥石、後者は扁平礫の周縁を部分的に打ちかき、正面中央部には幅5mm前後の浅い溝状の擦痕が集合する。また、周辺部には厚い煤・タールが付着する。その他、19点の自然礫が出土し、ほとんどに煤が付着する。142・143はP 726出土で前者は断面方形の2面に溝状の作業痕跡が見られる。後者は横断面方形の礫の二面に作業面をもつ置き砥石である。その他自然礫16点と石臼片1点が出土し、石臼はSB 357-P 765(149)と接合関係にある。144はP 732出土の上臼の破片で、部分的に煤が付着している。その他、自然礫1点が出土している。148はSB 357-P 741出土で五輪塔の水輪部破片と考えられる。空輪の受け部は粗い窪みが設けられ、その部分には煤が付着する。その他、石造物の破片1点と自然礫7点が出土している。147はP 1631出土の置き砥石で、裏面の一部に砥面と正面中央には叩き痕と溝状の擦痕がつく。また、正面の周縁部には煤が付着する。その他、自然礫4点が出土している。146はSB 349-P 925出土の置き砥石の破片で、扁平礫の正・裏面に作業面をもつ。また、破砕後、被熱している。その他、砂岩製で煤の付着した砥石が1点出土している。145はP 1641出土の被熱した置き砥石で正・裏面を作業面としており、裏面には溝状の擦痕が複合する。その他、自然礫2点が出土している。149はSB 357-P 765出土の上臼で上縁部に縁をもち、上面中央付近には煤が付着する。下面には挿入孔から弧を描いた導入溝があり、よく使用され掘り溝のほとんどは磨滅している。側面には挽き木横打ち込み式孔が1箇所見られる。その他、自然礫3点が出土している。

150～154は、SD 259(道路状遺構)出土で、150は硯で内外にすり面をもつが、図上裏面は、使用の結果著しく窪む。151・154は石造物片で、前者は石鉢の底部コーナーの破片と思われる。正面図下半にみられる左右の平坦面のいずれか一面が底部の接地面となろう。後者は平坦な面構成をもつことから鉢片と考えておきたい。152・153は置き砥石で、一面にそれぞれ作業面をもつ。

155～157はSD 324(自然流路)出土である。155は欠損した置き砥石で、石質が石造物と同様であることから再利用した可能性がある。二面に作業面をもつ。156は扁平礫の正・裏面に不明瞭な磨面をもつ。157は手持ち砥石で三面に砥面をもつ。

158はSD 325(自然流路)出土の手持ち砥石で、断面方形に切られた二面に作業面をもつ。159～165はSD 330出土である。159は石造物と同質の砂岩製の置き砥石で三面に作業面をもち、部分的に工具痕を残す。160は節理上で欠損した楕円礫の一面に作業面をもつ砥石である。161は「L」字状の不明石造物片で内面には工具痕、外面は敲打調整面と磨面から成っている。鉢のコーナーの破片とも考えられ、器面には部分的に煤が付着する。165は叩きと擦りの複合型で縄文時代によく見る磨石類に近い。163・164は横断面方形の手持ち砥石で三面に作業面をもつ。また、後者は被熱している。162は扁平礫の一面に叩き痕をもつ。166～169はSD 337出土である。166は石鉢の破片と考えられ、正面には部分的に工具痕が見られるもののほぼ平坦で、内面と上面には工具痕が顕著に残る。167は横断面方形の手持ち砥石で四面に作業面をもち、

煤が部分的に付着する。169は横断面方形の自然礫の一面を作業面とする置き砥石である。168は上臼片と考えられ細い擦り溝が方向を変え配される。170～179はSD 335①出土で170は円礫を素材とし一面に作業面が残る手持ち砥石である。171は節理上で縦に破損した棒状礫を素材とし、節理面に擦り面、原石面上には多くの線状的擦痕や幅の広い溝状の擦痕がつく。172は扁平礫の一面に磨面をもつ砥石で、欠損前に被熱し部分的に煤が付着している。173・179は扁平礫の一面にほぼ同一方向に線状や溝状の擦痕がつく。174～178は石造物片で174・177は外面の曲面仕上げから五輪塔の水輪の一部と考えられ、内面は工具痕が残る。176は石鉢の口縁部片であろう。外面はほぼ平坦で口縁は丸く仕上げられる。175は若干曲面をもつものの工具痕を消しきってはいない。播鉢状の石鉢であろう。178の二面には金属刃物で削ったような加工痕がつく。181・181a・182はSD 335②出土の砥石で礫の一面ないし二面に作業面をもつ。また、182は被熱している。180はSX 327出土の五輪塔の水輪部と考えられ外面は曲面に仕上げられている。

E 中・近世の遺構外出土石製品 (図版33)

183は山形の頂部をもち、表面には陰刻がみられる。用途等は不明である。184は扁平な礫の三面に磨面をもち、線状的な擦痕もみられる。縁辺には細かな剝離なども見られることから、縄文時代の板状石器の可能性もある。

F 中・近世の遺構出土木製品 (図版34・35)

185～187はSD 337出土で前二者は挽き物の皿である。185は高台部と口縁を欠損し、内面の底部と体部の境には陵線状の段をもつ。高台内は黒漆地に赤漆で「大」が描かれ、その他の器面は黒→赤の順で漆が重ね塗りされる。186の高台は若干張り出し、外面は黒漆の下地に赤漆で紅葉様の模様が描かれる。内面は暗茶褐色の漆が塗られている。187は底板片で両端は弧状を成す。片面は使用の結果か部分的に黒化した部分が残る。その他、棒状の木片が数点出土しており、一部の資料には先端を尖鋭に加工し、杭としたものがある(207・208)。

191はSB 357-P 620出土の底板でかなり大きな物に復元される。側縁には木釘孔が一箇所存在する。

188～190・192～206は各ピット出土の柱根で、直径20～30cmの細い物と、50～70cmの太い物がある。横断面形は円形で未加工のものが主体であるが、中には196のように方形に面取りしたのものもある。柱根端部を尖らせるもの(188・189・193・201・203～205)とほぼ平坦に加工するもの(196・198・200・202・206)があり、前者の加工は径が細いものに、後者の加工は径が太いものに多用される。また、198・201には方形の目途穴や202の溝状の切り込みをもつものがある。

G 中・近世の金属製品・土製品 (図版35)

209は小柄でSD 337の底部から出土した。真鍮または銅の合金製と思われる。全体的に簡素な作りで、端部には同質の金属で釘がうたれている。また、X線解析では中子が柄の中に納まっている(図版81)。210は大型で厚いフイゴの羽口で、先端部は熱で溶解している。211は、指ぬきで格子条に滑り止めが設けられている。銅製か?。その他、図化していないがSB 358北東隅付近(図版11)のP 626の遺構確認から「祥符通寶」(北宋1009年初鑄)または「祥符元寶」の銭貨片が出土している。

第V章 有明的場遺跡

1 遺跡の概要

B～E VI区以西を西地区、以東を東地区と呼称する。調査面積は西・東地区を合わせて2,130m²であるが、水路部分のみの調査のため幅約3mの狭長な範囲である。遺物の出土量は8箱(埋蔵文化財発見通知による。箱の法量は55×34×9.5cm)で内訳は平安時代・中世・近世の土器1箱、木製品7箱である。遺跡の時期幅は平安時代～近世であるが、遺構から出土したものの大半は中世である。各時代の層位的前後関係は確認されず、遺構確認面はIV層上面である。

発見した遺構は、井戸6、土坑3、溝2、ピット30以上で、西地区の北側に集中して検出された。また、東側に関しては、現地表下20cmほどで河川の礫層や低湿地のガツボ層に変化するなど地盤は安定せず、遺構は皆無、遺物も極わずかの出土であった。また調査範囲が狭いため、検出された遺構を有機的に結びつけることは、不可能であった。

2 調査グリッドの設定

後述する石川遺跡を含め広範囲にわたるグリッドを設定した。座標軸は(X 242006.287、Y 85621.464、Yは真北から17°-29'-42"東偏)である。

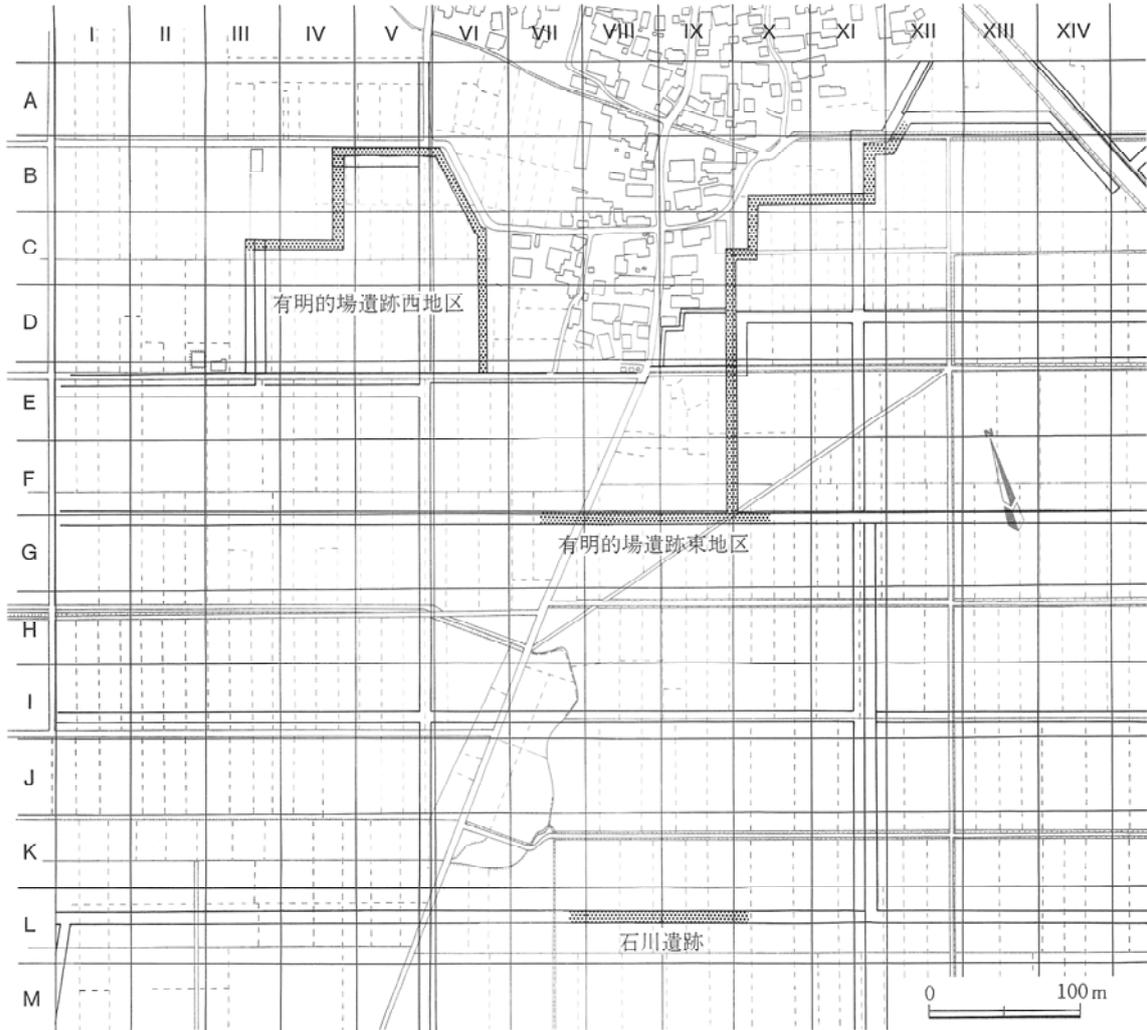
グリッドの区画方法および呼称は、天王前遺跡と同様である。

3 遺跡の層序

幅3m前後の水路部分の調査のため、各層の平面的な広がり、層厚の変化などを把握することはできなかった。I・II層は調査範囲全域ではほぼ安定しているものの、その直下は礫(IV①・IV②層)・青灰色土(IV層)などの河川堆積物の場合が多い。不安は残るものの遺物包含層と考えられるIII層はBC II・III区付近と東地区の地盤が粘性のある青灰色土(IV層)の地区に比較的安定して存在するが、若干、標高の高い地盤の範囲では、その存在が不明瞭または欠落している。また、有明集落に近い調査区では礫(IV層)、離れるとシルト(IV①層)の堆積が顕著で、有明的場遺跡を含む有明集落は自然堤防上の微高地に立地していることが分かる。以下に基本的な層序を記す。

I層：暗褐色土。粘性・しまりともない。一般的には現在の水田耕作土であるが、現況が畑地の場所は土質・土色等が異なっている。

II層：暗褐色土。粘性・しまりあり。5～15mmほどの礫と5～10mmほどの炭化物を少量含む層を基本とするが、含まれる礫の大きさ・量、そして土色の違いにより以下のように区別される。II①層(暗褐色土。粘性・しまりともにある。3cm前後の礫を多量に含む)、II②層(黒褐色土。粘性しまりはII層同様、5～10mmほどの炭化物を少量含む)、II③層(暗褐色土。粘性しまりともにある。3cm前後の礫を少量含む)、



第7図 有明の場遺跡・石川遺跡のグリッド設定および調査範囲
 青 調査時の現状
 黒 グリッド区画・計画水路および道路
 黒網目 調査範囲

県営ほ場整備事業 神林第2地区
 整地工計画平面図を改変・加筆

Ⅱ④層(褐色土。粘性・しまりともにある1~2cmほどの礫を少量含む)、Ⅱ⑤層(暗褐色土。粘性しまりともにある。5mm前後の礫を少量含む)。

Ⅲ層：黒灰色土。粘性しまりあり、5~10mmほどの炭化物を少量含む。平安~中世の遺物包含層である。調査範囲東地区では全体的に確認されるが、西地区の遺構集中区とそれ以东では存在していない。また、部分的に礫を多量に含む場合があり、含有量の違いによりⅢ①層(3cmほどの礫を少量含む)とⅢ②層(Ⅲ①層よりも礫を多量に含む)を区別した。

Ⅳ層：青灰色土。一般的には粘性強く、しまりがある層である。河川の影響下にある堆積土で、その成因によりⅣ①層(3~5cm前後の多量の礫に青灰色砂質土が混じる)、Ⅳ②層(1~2cmほどの礫を多量に含む)、Ⅳ③層(灰色土。粘性はあるがしまりない。2~3cm前後の礫を多量に含む)、Ⅳ④層(灰色土。粘性しまりともにある。1cmほどの礫を少量含む)を区別した。本層上面で遺構を確認している。

4 遺 構

SE 15(図版19)

遺跡西地区の北辺西寄りBV1(8)区に存在する井戸で、平面形は長軸93cm、短軸70cmの北東—南西方向が長い楕円形である。確認面からの深さは69cmで、断面形は平坦な底部から壁面が急激に立ち上がる。覆土は灰色土または黒灰色土の4層に分層され、1～3層は炭化物を少量含む。出土遺物は土師器片1点、礫13点が4層の底面から出土している。土師器片は、胎土に砂礫を多く含むものの細片で、時期・器形等は不明である。種実遺体が最下層より極わずかに出土している(第5表)。

SK 20(図版20)

遺跡西地区の北辺西寄りBV1(10)区に存在する土坑で、平面形は長軸が80cm、短軸が73cmのほぼ円形である。確認面からの深さは24cmで、断面形は緩やかな球状を呈する底部から壁面が緩やかに立ち上がる。覆土は黒灰色土の単層で、炭化物を含む。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

SE 25(図版25)

遺跡西地区の北辺中央付近BV2(13)区に存在する井戸で、平面形は一部緩やかな張り出しがあるがほぼ楕円形を呈する。長軸86cm、短軸は張り出し部分が最大値で73cmである。確認面からの深さは56cmで、断面形は緩い丸底の底部から壁面が急激に立ち上がる。覆土は黒灰色土と黒色土の3層に分層され、各層とも10～12cmほどの自然礫を多量に含んでいる。3層は部分的に植物遺体と炭化物を多く含み、杭状(図版36-218)や箸状の木製品が各1点と加工痕の見られない木片多数が出土している。加工のない木片には、火により炭化したものも一部含まれる。また、出土土器は、同じく3層から、珠洲焼の播鉢1点(図版36-216)、土師質土器1点、天目茶碗1点(図版36-214)、1・2層から同一個体と考えられる珠洲焼の瓶子片が3点出土している。

SK 53(図版20)

遺跡西地区の北辺中央付近BV2(8)区に存在する土坑で、平面形は長軸100cm、短軸90cmの東西に長い楕円形である。確認面からの深さは37cmであり、断面形はほぼ平坦な底部から壁がやや外反して急激に立ち上がるが、東壁は中ほどから屈曲し大きく外反する。覆土は黒灰色土の単層である。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

SD 40(図版20)

遺跡西地区の北辺ほぼ中央BV2区西側を北東—南西に調査区を横断して走る溝である。底面はほぼ平坦で、IV層下の礫層に達し、若干南西側に向かって傾斜する。幅は確認面で160cm前後であり、確認面からの深さは断面作成地点で16cm～20cmと浅い。断面形はほぼ平坦な底面から壁面が外反して立ち上がる。覆土は黒灰色土の2層に分層され、下層は微量の炭化物を含む。1・2層から18点の礫を採取しているが、1層出土の磨石(図版36-217)1点以外、加工痕は見られず、大半がIII層下の礫層からの混入と考えられる。時期が判る遺物は出土していない。

SE 30 (図版20)

遺跡西地区の北辺東寄り B V 5 (12)・(13)区にまたがって存在する井戸である。平面形は径84cmのほぼ円形で、確認面からの深さは78cmである。断面形は西から東へ緩やかに傾斜する底部から、壁面が急激に立ち上がる。覆土は黒灰色土を主とする6層に分層され、1～3・5層は礫を多く含む。2層から土師器細片1点、6層から鉄滓1点が出土している。また3・6層を中心に種実遺体・炭化物・木片が多数出土している(第5表)。

P 44 (図版21)

遺跡西地区の東側北寄り B VI 7 (17)区に存在するピットで、平面形は長軸が116cm、短軸が94cmの東西が長い楕円形である。確認面からの深さは15cmで、断面形は南側がやや深い丸底で、壁面は急激にほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒灰色土・灰色土等の7層に分層され、上層は炭化物・礫等を含む。遺物は覆土より土師器細片が少数出土している。

SE 45 (図版21)

遺跡西地区の東側北寄り B VI 12(25)区に存在する井戸で、平面形は南北方向がわずかに長い、ほぼ円形で、径は87cmである。確認面からの深さは41cmで、断面形はほぼ平坦な底部から両壁は急激に立ち上がるが、北壁に比して南壁は僅かに傾斜が緩い。覆土は礫が多量に混入した暗褐色土の単層である。底面から地山(IV層：青灰色土)にめり込む形で大型の礫が出土している。遺物は土師器片2点と縄文時代の石鏃1点が出土している。

SE 50 (図版21)

遺跡西地区の東側北寄り B VI 12(25)区に存在する井戸で、平面形は南北方向がわずかに長い、ほぼ円形で、径は88cmである。確認面からの深さは45cmで、断面形は平坦な底部から壁面が若干外反気味に立ち上がる。覆土は褐色系の4層に分層され、1・3層は炭化物を含む。遺物は出土していない。

SD 52 (図版22)

遺跡西地区の東側中央付近 C VI 4 区の北側を、調査区をほぼ東西に横切る。IV①層(青灰色土。礫を多量に含む)上面で確認された。幅は断面作成地点で170cmで、確認面からの深さは同地点で12cmと浅く西へ傾斜する。断面形は平坦な底部から北壁は急激に立ち上がり、南壁は立ち上がり緩やかである。覆土は濃黒灰色土の単層で、当該調査区の地山(IV①層)に近似し、礫を多く含む。遺物は出土していない。

SK 51 (図版22)

遺跡西地区の東側中央付近、C VI 4 (12)・(13)区にまたがって存在する。平面形は北西—南東方向が長い楕円形で、長軸117cm、短軸87cmである。確認面からの深さは8cmと比較的浅い。断面形は底部が南東側で平坦であるが、北東側は凹凸があり、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で、植物遺体を多く含む。遺物は出土していない。

P 46(図版22)

遺跡西地区最東部 C VI 9 (3)・(8)区にまたがって存在するピットで、平面形は長軸71cm、短軸58cmの北西—南東方向がやや長い楕円形である。確認面からの深さは15cmである。断面形は平坦な底部から北側は急激に立ち上がり、南側は北側よりもやや緩やかな立ち上がりを見せる。覆土は暗褐色土と淡灰褐色土の2層に分層され、どちらの層も礫を多く含む。底部から若干浮いた状態ではあるが、2層中より珠洲焼の播鉢(図版36-215)と漆塗り?の木製品(細片)1点、1層中より須恵器甕片1点、土師器と鉄滓の細片が少数出土している。また、同層からは炭化物・木片が比較的多く出土している。

SE 35(図版21)

調査西地区の東側北寄り B VI 7 (17・18)・(21・22)区にまたがり存在する井戸で、平面形は径90cmのほぼ円形である。確認面からの深さは76cmで、断面形は、緩い丸底から壁は急激に立ち上がる。覆土は、黒灰色土と黒色土の4層に分層され、3層には腐食した植物遺体が多量に含まれる。4層から長さ100cm、幅17cm、厚10cmの縦にさけた自然木が出土しているが、加工痕等は観察されない。また1層からは、土師器細片多数(図版36-213)が出土しており、3・4層からも同じく細片が出土している。そして、1・3・4層から種実遺体・炭化物・木片が比較的多く出土している(第5表)。

P 3(図版19)

調査西地区の北辺西寄り B V 1 (6)区に存在するピットである。平面形は径20cmほどの円形で確認面からの深さは約30cmである。断面形は若干ゆがんだU字形を呈し、覆土は黒灰色土の単層である。底部から若干浮いて、中世の土師質土器(図版36-212)が底を上にし伏せた状態で出土した。

P 19(図版19・20)

調査西地区のSK 20東側 B V 1 (10)・2(6)区にまたがり存在するピットで平面形は径22cmほどの円形、確認面からの深さは約25cmである。底面中央部は柱痕位置で深く、両脇は地山テラスを成している。覆土は2層に分層され1層は柱痕覆土であろう。

P 32(図版20)

調査西地区のB V 5 (6)区に存在し、P 33をコーナーにP 56・P 31を含め、掘立柱建物となる可能性がある。平面形は北西—南東方向を長軸とする隅丸方形で、長軸38cm、短軸34cm、深さは約20cmである。覆土は2層に分層され、柱痕覆土と考えられるものは1層である。

P 33(図版20)

P 32と隣接しB V 5 (12)区に存在する。掘立柱建物を構成する柱穴の可能性はある。平面形は南北方向を長軸とする隅丸方形で、長軸46cm、短軸38cm、深さは約30cmである。覆土および構造はP 32と同様である。底部の柱痕北側より礎板と考えられる板状の木製品(図版36-221・222)が出土している。

P 38

B IV 10(11・16)・9(15・20)区にまたがり存在する。平面形は、東西方向を長軸とする楕円形で、長軸

52cm、短軸35cm、深さは約10cmである。覆土はⅢ層に地山ブロックが混合する単層であるが東側がわずかに深く、そこには柱根(図版36-223)が出土している。

5 遺 物

A 遺構出土遺物(図版36)

212はP3出土の中世土師器皿でロクロ成形、回転ヘラ切り底である。内面と外面の一部には煤およびタールが付着し、灯明として使用されたものである。胎土には金雲母が目立つ。14世紀後半に位置付けられる資料であろう。213・219・220はSE35出土で、213は中世土師器皿である。風化著しく明瞭ではないが口縁部付近は横ナデ、体部から底部にかけては指頭圧痕であろう。219・220は竹の表面に紐で編んだ痕跡を残すもので、垣根または編み板などの一部と考えておきたい。214・216・218はSE25出土で214は瀬戸・美濃大窯の天目茶碗の可能性があり、216は珠洲焼播鉢で、218は細い棒状木の端部をカットし杭としたものか。215はP46出土の珠洲焼の播鉢で口唇部は比較的平坦に仕上げ、端部は外方に若干引き上げる。底部は静止糸切り痕を残す。15世紀前半と考えられる。217はSD40出土の置き砥石で、扁平礫の一面に作業面をもつ。221・222はP33出土の礎板で同一個体である。板は比較的厚く、全体は方形の板に復元される。223はP38出土の柱根で端部は細かな加工によりほぼ平らに仕上げられる。

B 遺構外出土遺物(図版36)

224~230は須恵器である。224・225は無台杯で両者とも器壁は厚く、底部は回転ヘラ切りである。前者は胎土に長石を多く含み粗い。226は有台杯で、高台は外方に張り出し体部は緩く立ち上がる。227~230は甕胴部破片で外面は平行叩き、内面は青海波であるが、228はその後、ハケナデされる。

231~236・239は珠洲焼である。233は径が不明であるが片口の鉢で内面には透明の自然釉がつく。231は播鉢で卸し目には直線と波状が併用される。232・234~236・239は甕胴部および肩部片(232)とともに外面は平行叩き内面は圧痕がつく。

240は方形の高台をもつ白磁碗で、白色の陶質の胎土をもち、高台内および畳付けは露胎である。15世紀前半と考えたい。

238は瀬戸美濃の摺鉢であろう。

237・241~246は肥前の陶磁器である。241・242は陶器皿で前者は砂目、底部は回転糸切りのままである。237・243は甕片で前者の内面には青海波が、後者は折り返した丸い口縁をもち乳白色の釉がかかる。244~246は18世紀の染付けで244は碗、245は仏飯器、246は皿である。

その他 247は底板片で、248は横断面方形の手持ち砥石で一面に作業面をもつ。

第VI章 石川遺跡

1 遺跡の概要

調査面積は365m²であるが、有明の場遺跡同様水路部分の調査のため範囲は狭長である。遺物の出土量は9箱(埋蔵文化財発見通知による。箱の法量は55×34×9.5cm)で、内訳は古墳時代・平安時代・近世の土器が6箱、その他は木器である。遺跡の時期は土器の時期と同様であるが、平安時代のものが多数で他の時期のものは数点と少ない。また各時代の層位的前後関係は確認されず、遺構確認面は、IV層である。発見した遺構は土坑1、ピット11、それに土器が多量に出土した自然流路(SD1)1と少ない。各々の遺構は、出土遺物から平安時代のものが大部分と考えられる。

2 調査グリッドの設定

前述の有明の場遺跡と同様のグリッド上で、表示方法も同じである。

3 遺跡の層序

有明の場遺跡同様、幅3m強の水路部分の調査のため、各層の平面的な広がり等を把握することはできなかったが、層序は比較的安定している。基本的な層序は以下に記すが、調査範囲南壁でみる限りⅢ層(遺物包含層)はL VIII 15(3)~IX 14(3)区間で層を厚くし、その下部では未分解植物遺体が混入し始めることから、今回の調査区の中であって一段と低湿地化の進んだ地区であろう。また、数は少ないが土坑・ピットの分布もこれら低地を避けて分布している。

I層：暗褐色土。現水田耕作土。

II層：暗褐色土。粘性しまり良好。炭化物を少量含む。

III層：暗褐色土。粘性しまり良好。炭化物を少量含む。地山(IV層)ブロックを含む。平安時代の遺物包含層である。また標高が低い地区では、黒褐色に変色する。

IV層：青灰色~黄灰色土。粘性土またはシルト質土。粘性良好。非常に軟質である。

V層：暗青灰色土。粘性良好、しまりなし。暗褐色の未分解植物遺体を多量に含む。(ガッボ化している層)

VI層：緑灰色土。粘性しまり良好。シルト分の強い粘質土である。

4 遺 構

SD1 (図版24)

遺跡の最東部L IX・X区の境界中央部を北東から南西に横切る自然流路である。IV層上面で確認されている。流路底面は大きく3段に分かれており、最低面の両側にテラス状の高まりをもつ。調査範囲が狭

いため判然としないが、最低面の北東側が最も深くなっている。幅は調査範囲内でおおよそ7mである。確認面からの深さは最深部で約90cmである。断面形はほぼ平坦な底面から北側では緩やかに立ち上がり、東西それぞれにテラス状の高まりを形成し、さらに上まで立ち上がる。南側では両壁ともに緩やかに立ち上がる。覆土は5層に分層され、1～3層及び5層は多量の植物遺体を含む。また、同層から11世紀代の土器が多量に出土している。中でも1層からの出土量が圧倒的に多く1～3層間では土器の接合関係が数例みられる。また1～3層には、板状の木製品や木材を縦に裂いたようなものが出土している。

SK 2 (図版24)

遺跡西側LVIII 8 (22)・13(2)区にまたがって存在する土坑で、IV層上面で確認されている。

平面形は南側がやや突き出た卵形で、長軸220cm、短軸203cmである。確認面からの深さは54cmで、断面形はほぼ平坦な小型の底部から東側は緩やかに立ち上がり、西側は底部から10cm程上がったところでテラスをもち立ち上がる。覆土は黒色土を中心とする5層に分層され、1層は植物遺体を多量に含む。遺物は1～4層にかけ平安時代の須恵器・土師器・小礫等が出土し、最下層の5層より板材が出土している。また3・4層を中心に種実遺体が多量に出土している(第4表)。

5 遺 物

A 遺構出土遺物(図版37～40)

SK 2 (249～264)

遺物は各層から出土しているが、特に3・4層からの出土が多く、土器の多くは底部から浮いた状況で出土した。また、55×45cmの薄い板が底部中央から出土した他、凝灰岩の小礫が底面に沿って出土したことは特筆される。

出土遺物の内訳は、土師器・須恵器・灰釉陶器・石製品および礫・鉍滓や羽口で、土師器は碗片35点、黒色土器片2点、甕その他6点である。このうち黒色土器は碗と考えられるが細片で図化していない。また、甕その他の破片についても細片のため図化していない。須恵器に関しては図化したもの以外、瓶および壺片7点、甕片4点である。灰釉陶器は細片1点で図下していない。礫その他の遺物については砥石としたものは全て図化し、その他図化したもの以外、羽口片2点、鉍滓1点、礫50点以上があり、礫のほとんどが凝灰岩で、9cm以下の小型のものである。以下に図化したものを中心に説明する。

249・250は底部回転糸切りの土師器碗で、前者は比較的広い底部から体部が外方にほぼ直行して立ち上がるのに対し、後者は小型の底部から体部が内湾気味に立ち上がる。251・252は長頸瓶の底部片で方形の高台をもつ。253は甕の口縁部片で口唇部は斜傾し陵を成す。254-1・2は横瓶で頸部から口縁と体部の破片は接合しないが、同一個体と考えられるので図上復元した。口唇はほぼ平坦で体部外面は平行叩きの後、カキ目を施し、内面は青海波である。255から259は甕体部片と考えられる。外面は平行叩き、内面は青海波(255・257)と平行(256・257)、放射状文の当て具(258)が見られる。260・264は砥石と考えている。264は扁平礫の両面に磨耗面と線状の擦痕がつく。260は横断面方形で二面に作業面をもつ。261は小礫に金属片でかきとったと考えられる痕跡が部分的に残る。多量に出土した同質の礫の中にこのような「かきとり痕」や擦痕が部分的につくものが数点含まれる。262は純度の高い鉍滓で表面の一部にはガス抜け孔

がみられる。263はフイゴの羽口で直径5cm以上に復元され、先端部であるため表面は溶解している。

SD1 (265~356)

層位ごとに遺物を取り上げた。遺物が出土した層は上から1・2・3・5層で、1・3層が特に多い。

1層出土遺物(265~318)

図化したもの以外、土師器多数の他、須恵器(瓶片1点、杯片1点、蓋片1点)3点、羽口2点、鉾滓1点、小型破碎礫6点が出土した。土師器は無台碗が浅箱1箱分出土し土器の中心を成し、その他、少数の黒色土器片9点、有台碗片5点、その他、胎土に砂礫を多く含む非ロクロの土器片12点、小型甕?片1点が出土している。以下に図化したものについて説明する。

土師器無台碗(265~295・297~306) 底部の残る物は全て回転糸切りである。形状からA~D類に大方は分類される。

A類：小型の底部から体部が内湾気味に立ち上がり、身が比較的深いもの(266・267・272)。

B類：広い底部をもち身が若干深く、体部が外方に急角度で立ち上がるもの(268・273・275~277・282・302)。体部は直行するものが一般的であるが302のように口縁部が外反するものもある。

C類：身が浅く体部は内湾して大きく開き、底部周縁ははみ出し、体部との境は窪み状となる(265・270・271・274・278・280・281・284・291・298・303)。法量には大小があるようである。

D類：比較的身が深く、体部が大きく開き内湾して立ち上がるものが一般的であるが、288・290のように口縁部が外反するものもある。全体的に大型のものが多く、292・294・304・306などロクロナデの凸凹が顕著なものも含まれる(269・283・285~288・290・292~295・304・306)。

その他、297は身が深く精巧な作りで他と区別される。底部が大きく体部は内湾して立ち上がり、口縁部で大きく外反する。

また、煤が付着したものが多く(284・292・295・299・302・305)、特に302・305は顕著で灯明に使用された可能性がある。器形が著しく歪んだもの(295・303・304・306)があり、304・306は口唇ラインが楕円形に歪み、303は口唇の一部が片口状に張り出す。

黒色土器(296・307・308・311) 無台(308)と有台(311)が存在する。296・307は内湾して立ち上がる体部から口縁は若干外反する器形で、内面と外面口縁部がミガかれ黒化している。308は体部が内湾状に立ち上がり、311は低い高台が大きく張り出し、両者ともミガキは底部中央から放射状に施される。

有台碗(309・310・312・313) 高台が完存するものは少ないが、310・312を見る限り高く外方に張り出す。身は比較的浅く、口縁部が外反するもの(309)と外反が少ないもの(313)がある。313は内外の口縁部を中心に煤が付着し灯明としての用途が考えられる。

小型甕(314) 底部片で底部回転糸切り、内面はロクロナデの凸凹が顕著である。

須恵器(315~317) いずれも甕胴部片と考えられる。315・316は外面平行叩き、内面青海波で、317は外面平行叩き、内面は平行の当て具痕である。

その他(318) 内径2.7cmの羽口で端部は溶解している。

2層出土遺物(図版39)

図化したもの以外全て細片で、土師器無台碗片約40点、内黒の有台碗片1点、胎土に砂礫を多く含む非ロクロの土器片4点、破碎礫4点が出土している。

土師器無台碗(319~323) 底部の残るものは図化していないものも含め全て底部回転糸切りである。A類

(322?)、B類(319・320)、D類(321・323)が出土している。他分類に含まれるものの存否は細片のため不明である。なお、図化していないが、灯明に使用したと考えられる煤が付着する破片2点が出土している。

3層出土遺物(図版39・40)

図化したもの以外、土師器無台碗片100点弱、黒色土器片3点、小型甕?片3点、胎土に砂礫を多く含む非ロクロの土器片約30点、自然礫5点、木製品が出土した。土師器無台碗の内7点は灯明に使用されたと思われる煤が器面に付着している。

土師器無台碗(324~333・335・336) 底部の残るものは図化していないものも含め全て底部回転糸切りである。B類(324・325)、D類(326~333・335・336)が出土している。図化していないがA類と考えられる小型の底部片も出土している。なお、D類に関しては1層出土のものに比べ大型で身の深いものが多いようである。また、全体的にロクロナデの凸凹が顕著なものが多い。335・336は灯明に使用されたと思われる煤が内外に付着している。

黒色土器(334) 広い上げ底気味の底部から体部は急激に立ち上がり口縁まで至る。内面全体と外面の口縁付近までミガかれ黒化している。また、外面の体部下半から底部にかけては削られその後ナデられている。

甕(337・338) 337は風化著しく細かい調整等は不明であるが、口縁端部は丸く仕上げられる。胎土に砂礫を多く含む。338の口唇は平坦で斜行し、端部は内側に張り出す。口縁外面は斜位のハケ目の後ナデ、その他はカキ目が施される。器壁は薄く砂礫が多量に含まれる。

非ロクロの土器(339~342) 339は器形から甕、340・341-aは鉢と考えられようか。口縁部は緩く外反し端部は先細りで丸く収まる。340・341-aの体部外面は粗いハケ目、340の内面はカキ目が施される。341・342は甕の底部片と考えられ、絞り込まれた底部から体部は開いて立ち上がる。後者の体部は縦位に削られる。古墳時代の遺物と考えておきたい。

木製品(343~345) 全て底板である。345の側面に釘穴がみられ、343の片面には黒色の付着が見られる。

その他(346) 大型礫に部分的に煤が付着する。

5層出土遺物(図版40)

図化したもの以外、土師器碗片3点、非ロクロの土器片10点弱、礫2点が出土している。

須恵器有台杯(347) 高台は外に踏ん張り、体部は急角度で立ち上がる。器形はかなり歪んでおり、高台内には墨が付着し器面が磨耗していることから、硯に転用されたと考えられる。

土師器無台碗(348~352) 全て底部回転糸切りで、A類(348・350・351)、B類(352)、C類(349)が存在する。348・350の体部外面のロクロナデの凸凹は顕著である。

その他、層位不明であるが、353~356を図化した。353・354・356は須恵器の無台杯である。前二者は器壁が薄く回転ヘラ切り底(353)で佐渡小泊産と考えられ、後者は底部回転ヘラ切りで胎土は白っぽく、砂礫を多く含む。355は回転糸切り底の無台碗でC類の可能性が高い。

B 遺構外出土の遺物(図版41・42)

出土遺物は土器・木器・土製品・石製品で調査区の北側(SD1付近)に行くにしたがい出土量が多くなる。出土層位はI~III層にわたるが中心はIII層である。出土品の中心は土師器無台碗であり、その他土師器有台碗、須恵器甕片と数を少なくする。なお、非ロクロの土器はLIX区以東のIII層を中心に出土する。

須恵器(357~363) 357は杯片で体部は直行する。胎土は長石を多量に含み粗い。358は短頸壺で口縁は

若干開き気味に立ち上がり、口唇は平坦に仕上げている。内面肩部下はカキ目で胎土は長石を多く含み粗い。359は長頸瓶の高台片で外側に踏ん張る。360・363は外面平行叩き、内面青海波。361・362は外面平行叩き、内面は平行の当て具痕と見られる。

土師器 土師器無台碗(364~383・391~393)と有台碗(386~390)、それに黒色土器(384・385)を図化した。364~367・369はA類と考えられ小型の底部から体部は内湾して立ち上がる。391は広い底部から体部が直線状に立ち上がりB類に似る。371~373・375・393はC類と考えられ、身が浅く体部は大きく開いて内湾する。370・376~378・380・392は身が比較的深く体部も直行するD類とみられるが、376・392は比較的身が浅く、377・378は他の物に比べ体部が大きく開き直行する。その他、379は大型で身が深く、砂礫を多く含む胎土も他と異質である。また、灯明に使われたと考えられる煤が付着するもの(374・391~393)も定量出土している。

黒色土器(384・385) 両者とも外面口縁と内面が黒色処理される。384の内面のミガキは斜位に385は横位に施される。

有台碗(386~390) 高台は高く外に大きく張り出すものが一般的である。器面はすべてナデで、387・389の底部には回転糸切り痕が残る。

その他の遺物(394~403) 数は非常に少ないが中世~近世にかけての資料(395~397)が出土している。この時期の遺物も平安時代同様Ⅱ・Ⅲ層を中心に出土した。395は珠洲焼の播鉢で卸し目は密に施される。396は砂目の肥前皿で高台畳付けは回転糸切り痕を残し、砂も三箇所につく。397は肥前の刷毛目鉢で、内面には部分的に鉄釉が垂れる。高台外面は削られ内傾する。また394は平安時代と考えられるが、土師器の内面に黒い漆?が塗られている。398は底板で側縁には木釘が残り、片面には使用の結果か黒色に光沢をもつ部分がある。399は連歯下駄で396に接して出土しており17世紀初頭と考えられる。前壺は前歯の直前中央に、後壺は後歯の内側に配され、後端部は欠損している。400は方形に切り出した木片である。401は枝の端部を斜めにカットした杭と考えられる。402はフイゴの羽口で端部は溶解し外径はおよそ6cm強に復元できる。403は砥石の破片で作業面には磨面と線状痕がつく。

第Ⅶ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

天王前遺跡・石川遺跡・有明的場遺跡は、いずれも神林村の丘陵・山地～沖積地にかけて位置する。天王前遺跡では縄文時代草創期および14世紀～17世紀前半、石川遺跡では10・11世紀および17世紀前半、有明的場遺跡では中世の遺構・遺物がそれぞれ検出されている。

本報告では、天王前遺跡の基本層序を確認するためにテフラ分析を、天王前遺跡・石川遺跡・有明的場遺跡における古植生と食料や生活用具・建築材などへの植物の利用状況について情報を得るために、柱材や木製品、さらに種実遺体の種類を明らかにする。

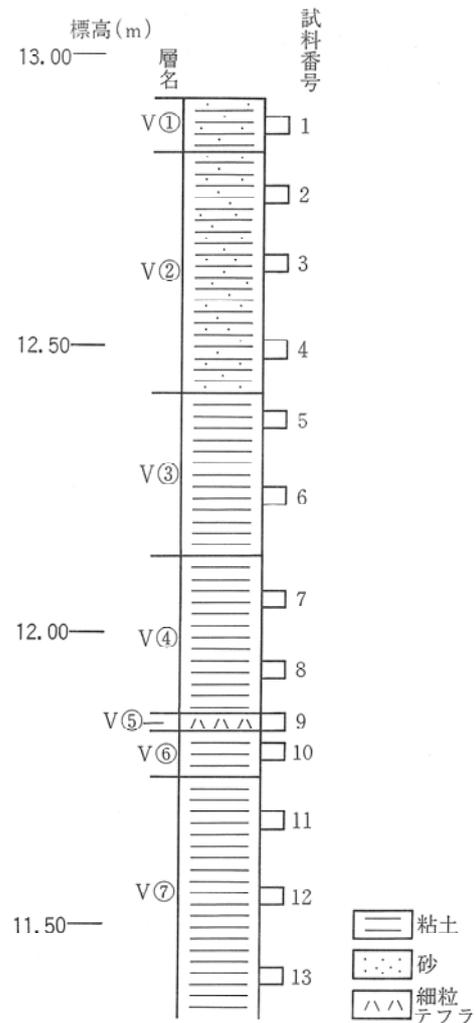
2 天王前遺跡の基本層序

A 試料

天王前遺跡の試掘坑42 T では、地山以下が上位よりV①～V⑦層に分層されている。V①層は暗黄褐色土、V②・V③層は黄褐色土、V④層は黄灰色土、V⑤層は灰色土、V⑥層は黒灰色土、V⑦層は暗灰色土とされている。分析時の観察では、V⑤層以外はいずれも粘土または砂混じり粘土、V層は砂質シルトでテフラに由来するブロックと考えられている。また、V①層の上面からは縄文時代草創期の遺物が出土している。試料は約10～15cm間隔で試料番号1～13が採取されており、この13点をテフラ分析に用いた。その断面図と試料採取位置を第8図に示す。なお、図中の凡例は分析時の観察に従った。

B 方法

試料は、適量を蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を実体顕微鏡下で観察、スコリア・火山ガラス・軽石の特徴や含まれる



第8図 天王前遺跡試掘坑42 T 柱状図
および試料採取位置

量の多少を定性的に調べる。

C 結果

結果を第1表に示す。火山ガラスは、試料番号1～6で無色透明の軽石型火山ガラスが中量～微量認められる。この火山ガラスは、その形態および産出層準から、浅間草津テフラ〔As-K：町田・新井1992〕に由来すると考えられる。As-Kは浅間火山を給源とし、浅間板鼻黄色軽石〔As-YP：新井1962〕と同一噴火輪廻のテフラで、降灰年代は約1.3～1.4万年前と考えられている〔町田・新井1992〕。給源から北北東方向に分布軸があり、上越国境を越えて新潟県湯沢町付近でも明瞭に認められ、遠隔地（とくに信濃川流域津南）では本テフラ層準に軽石型火山ガラスの濃集部が認められる〔町田ほか1984〕。当社による中魚沼郡周辺の実例でも、ローム層の最上部付近にAs-Kに由来する火山ガラスの濃集部が認められることが多い。本地域での検出例は少ないが、遠方では佐渡沖まで分布するとされる〔町田・新井1992〕。一般に、土壌中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い〔早津1988〕。これに従えば、本地点におけるAs-Kの降灰層準は、試料番号5のV③層上部付近の可能性がある。

また、V⑤層の試料番号9は、無色透明のバブル型火山ガラスのブロックである。バブル型火山ガラスは、さらに下位の試料番号10で中量、上位の試料番号8で少量、試料番号7・6で微量認められる。この火山ガラスは、その形態と色調および産出層準から、始良Tn火山灰〔AT：町田・新井1976〕に由来すると考えられる。ATは、鹿児島県の始良カルデラを給源とし、降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられている〔町田・新井1992〕。V⑥・V④・V③層で認められたATに由来する火山ガラスは、V⑤層からの拡散と考えられる。

なお、スコリアおよび軽石は全く認められなかった。

D 考察

今回の分析結果により、V⑥層以下はAT降灰以前すなわち約2.1～2.5万年前以前、V④層～V③層下部はAT降灰以降すなわち約2.1～2.5万年前以降からAs-K降灰以前すなわち約1.3～1.4万年前以前、V③層上部以上はAs-K降灰以降すなわち約1.3～1.4万年前以降に形成したと考えられる。

第1表 天王前遺跡試掘坑42Tテフラ分析結果

層名	試料番号	スコリア			火山ガラス		軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
V①	1	—			+	cl・pm	—		
	2	—			++	cl・pm	—		
V②	3	—			++	cl・pm	—		
	4	—			+++	cl・pm	—		
V③	5	—			+++	cl・pm	—		
	6	—			++	cl・pm>bw	—		
V④	7	—			+	cl・bw	—		
	8	—			++	cl・bw	—		
V⑤	9	—			++++	cl・bw	—		
V⑥	10	—			+++	cl・bw	—		
V⑦	11	—			—		—		
	12	—			—		—		
	13	—			—		—		

凡例 —：含まれない+：微量++：少量+++：中量++++：多量
cl：無色透明 bw：バブル型 pm：軽石型

3 柱根等の用材

A 試料

試料は、天王前遺跡から出土した36点(試料番号1~36)、石川遺跡から出土した5点(試料番号38~42)、有明の場遺跡から出土した4点(試料番号43~46)である。各試料の用途などについては、樹種同定結果とともに第2表に記した。

B 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

C 結果

樹種同定結果を第2表に示す。試料は、針葉樹3種類(スギ・ヒノキ・ヒノキ属)、広葉樹6種類(ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属・クリ・ケヤキ)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

- スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

- ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

- ヒノキ属(*Chamaecyparis*) ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~15細胞高。

上記のヒノキまたはサワラ(*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher)であるが、同定には至らずヒノキ属とした。

- ブナ属(*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~3個が複合、横断面では多角形、管壁厚は中庸~薄く、分布密度は高い。道管は単および階段穿孔を有し、壁孔は大型で対列状~階段状に配列する。放射組織は同性~異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合組織までである。

- コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管

は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

- コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

- コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

保存状態が悪く、道管の配列等は観察できない。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

以上の特徴からコナラ属と判断した。上記のコナラ亜属クヌギ節およびコナラ節、アカガシ亜属などの可能性があるが、種類の同定には至らなかった。

- クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

- ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～60細胞高で、結晶細胞が認められる。

D 考察

試料は、柱根を中心に、杭・ウルシ皿・底板・下駄・板・礎板・ウルシ塗り板がある。柱根は、その多くが落葉広葉樹のクリである。クリ以外では、落葉広葉樹のクヌギ節・コナラ節、針葉樹のヒノキが認められる。コナラ属は、種類の同定には至らなかったが、これらの結果を考慮すれば、クヌギ節またはコナラ節の可能性が高い。

ところで、天王前遺跡で出土した柱根には大径のものと小径のものとがあり、その配置が区別されている。大径のものが有力者の建物、小径のものがその配下の建物の可能性もある。樹種同定結果では、径の違いによる用材の差異は認められず、ほぼ同様の用材選択がおこなわれていたと考えられる。クリは、強度および耐朽性に優れた材質を有しており、柱材の用材としては適材といえる。北陸地方では縄文時代の遺跡からも出土しており〔古池1986〕、古くから柱として使用されていたことがうかがえる。また、クヌギ節・コナラ節の材も強度が高い。これらのことから、強度の高い木材を選択していたことがうかがえる。なお、有明の場遺跡の礎板にクリが確認されたが、柱材と同様の用材選択が指摘できる。一方、小径の柱根の中にはヒノキが2点認められた。ヒノキの材は、強度や耐水性に優れている。古くは、平城宮等の宮殿の柱に使用されていたことが知られている〔伊東・島地1979〕。材質や見た目の違い等を考慮すると、他とは異なる選択がおこなわれた可能性がある。今後、建物の性格・用途などと合わせて検討したい。なお、これらの柱材は、その大きさ等を考慮すると、遠方から運搬したとは考えにくく、周辺に生育していた木材を利用した可能性がある。

杭材は、基本的には周辺で入手が可能な種類や、加工の余材が使用されたと考えられる。また、中には

第2表 樹種同定結果

遺跡	番号	検出遺構など	用途など	樹種
天王前遺跡	1	P 523 No.1	柱根	クリ
	2	P 570 No.2	柱根	クリ
	3	P 578	柱根	クリ
	4	P 582 No.2	柱根	クリ
	5	P 689	柱根	コナラ属コナラ亜属タヌギ節
	6	P 609 No.1	柱根	クリ
	7	P 1527 No.1	柱根	クリ
	8	S B 301-11	柱根	クリ
	9	P 531 No.1	柱根	クリ
	10	P 671 No.5	柱根	クリ
	11	P 1582	柱根	ヒノキ
	12	P 722	柱根	コナラ属
	13	P 696 No.1, No.2	柱根	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	14	P 726 No.9	柱根	クリ
	15	P 672 No.1	柱根(大径)	クリ
	16	P 650 No.3	柱根	クリ
	17	P 574	柱根	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	18	P 688	柱根	コナラ属コナラ亜属タヌギ節
	19	P 570 No.1	柱根	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	20	P 650 No.4	柱根	クリ
	21	P 679	柱根(大径)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	22	P 865 No.1	柱根(大径)	クリ
	23	P 518	柱根(大径)	クリ
	24	S D 337 No.184	杭	クリ
	25	S D 337 No.164	杭	クリ
	26	P 778	柱根	クリ
	27	S D 330 No.10, No.30	柱根	ヒノキ
	28	P 676 No.1	柱根(大径)	クリ
	29	P 582 No.1	柱根	クリ
	30	P 669 No.1	柱根	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	31	P 650 No.5	柱根	クリ
	32	P 671 No.4	柱根(大径)	クリ
	33	S D 337 No.199 3層	ウルシ皿	ブナ属
	34	S D 337 No.198 4層	ウルシ皿	ブナ属
	35	S D 337 No.221 4層	底板	スギ
	36	P 620 No.5	底板	スギ
石川遺跡	38	S D 1 No.17 青ネバ	底板	スギ
	39	S D 1 No.2 青ネバ	底板	スギ
	40	L X 6(21) 青ネバ	底板	ヒノキ属
	41	L X 6(23) III層	下駄	ヒノキ
	42	S K 2 底部出土	板	スギ
	43	P 33	礎板	クリ
的場遺跡	44	P 46 No.2 2層	ウルシ塗り板	ケヤキ
	45	E X 21(11) 2層	底板	ヒノキ属
	46	P 38	柱根	クリ

廃材が転用される場合もある。同定されたクリは、柱根に多く利用されており、加工の余材が利用された可能性がある。

ウルシ皿は、いずれもブナ属、ウルシ塗り板はケヤキであった。いずれも漆器木地としては一般的な種類である。(橋本1979)は、漆器木地を材質や組織からいくつかに分類している。それによると、ブナ属は乾燥が難しく変形しやすいが、大量に入手できるため使用量は多いとされる。一方、ケヤキは靱性があり、薄手物に適するとされる。今回の試料は、皿と板とで出土遺跡は異なるが、時期はほぼ同じであることから、用途によって用材が異なっていた可能性がある。

底板および板には、スギとヒノキ属が認められた。遺跡によって時期が異なるが、用材の違いは認めら

れず、少なくとも10世紀頃～17世紀前半頃まで同様の用材がおこなわれたことが推定される。いずれも針葉樹材で木理が通直であるため板状の加工が容易であり、このことが選択された背景と考えられる。

下駄にはヒノキがみられた。同時期のヒノキの下駄は、東京都などを中心に多数確認されており、下駄の用材としては一般的であったことが推定される。しかし、東京都内でおこなわれた調査例では、使用者の階級、使用目的、年齢、性別等によって樹種が異なる可能性が指摘されており、ヒノキは下駄の材料として高級な部類に入ると考えられている[高橋1995]。今回の下駄についても、試料の蓄積を待って、使用状況と樹種との関係について検討したい。

本地域では、各時代の用材に関する資料が少ないため、その詳細は不明である。今後さらに資料の蓄積をはかりたい。

4 種実遺体の種類

A 試料

試料は、各遺跡の井戸から出土した種実遺体33点である。

B 方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。これらは全て乾燥されていたので種類ごとにケースに入れて保存する。

C 結果

天王前遺跡の結果を第3表、石川遺跡の結果を第4表、有明の場遺跡の結果を第5表にそれぞれ示す。以下に各遺跡で検出された種実遺体の形態的特徴を記す。

- オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura) クルミ科クルミ属
核が検出された。褐灰色。大きさは2 cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部はやや尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。
- ブナ (*Fagus crenata* Blume) ブナ科ブナ属
核斗の破片が検出された。黒色で大きさは1 cm程度。比較的厚くて堅く、表面には太い毛がある。
- ホウノキ (*Magnolia obovata* Thunb.) モクレン科コブシ属
種子が検出された。黒色で大きさは5 mm程度。側面観は卵形で、上面観は偏平である。一方が凸状に膨らむ。反対の面は中央部がややくぼむ。下端にへそがある。表面は堅くて薄く、ざらつき、縦方向に筋がみられる。
- クワ属 (*Morus* sp.) クワ科
種子が検出された。褐色。大きさは2 mm程度。倒卵型、表面は平滑で側面の隅に突起がみられる。
- モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属
核(内果皮)が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2 cm程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

第3表 天王前遺跡出土種実遺体の同定結果

種 類	SE311			SE320		SE343	SE344				
	1層	2層	3層	1層	2層	中層	2層	6層	7層	8層	9層
ブナ	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サクラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
ウメ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
スモモ	-	-	-	-	-	-	-	3	1	5	-
カラスザンショウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-
サンショウ	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	-	-	-	-	5	-	-	1	-	2	-
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	5	2	7	-
タマヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
エゴノキ属	2	-	5	1	5	-	-	-	-	1	-
イネ (胚乳)	-	-	-	-	-	-	1	8	1	25	-
イネ (穎)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
オオムギ	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
タワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	35	-
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-
アカギ科-ヒユ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多数	-
シソ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-
トウガン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
メロン類	-	-	-	1	-	2	-	1	52	51	1
ヒョウタン類	-	-	1	-	-	-	-	-	2	2	-
不能	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-

• ウメ (*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.) バラ科サクラ属

核が検出された。褐色、核の形は楕円形で偏平である。大きさは1 cm程度。丸く大きな臍点がありへこむ。側面の一方には縫合線が発達する。表面は不規則にくぼみが配列する。

• スモモ (*Prunus salicina* Lindl.) バラ科サクラ属

核(内果皮)の破片が検出された。黒褐色。大きさは1 cm程度。核の形は楕円形で、偏平である。下端には、丸く大きな臍点があり凹んでおり、上端は丸い。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は浅いくぼみが不規則にみられる。

• サクラ属 (*Prunus* sp.) バラ科

核(内果皮)の破片が検出された。黒褐色。大きさは5 mm程度。核の形は楕円形で、偏平である。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は平滑で木質、堅い。

• サンショウ (*Zanthoxylum piperitum* DC.) ミカン科サンショウ属

核が検出された。黒褐色、楕円形で大きさは4 mm程度。表面には浅い不規則な網目模様がみられる。

• カラスザンショウ属 (*Fagara* sp.) ミカン科

核が検出された。黒褐色で薄くて堅く、やや光沢がある。大きさは3 mm程度。表面には粗い亀甲状の網目模様がみられる。

• アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。大きさは3 mm程度。黒色でY字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

•ブドウ属(*Vitis* sp.) ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4 mm程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

•トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume)

トチノキ科トチノキ属

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色で、大きさは1 cm程度。

•クマヤナギ属(*Berberis* sp.)

クロウメモドキ科

核が検出された。大きさは5 mm程度。淡褐色で堅く、表面はざらつく。縦方向に二分する深い溝がある。

•タラノキ(*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核が検出された。茶褐色で側面観は半円形、上面観は卵形。長さ2 mm程度。核はやや厚く硬い。核の表面には不規則な瘤状突起がある。

•エゴノキ属(*Styrax* sp.) エゴノキ科

核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。大きさは1 cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

•クサギ(*Clerodendron trichotomum* Thunb.) クマツヅラ科クサギ属

種子が検出された。黒褐色で堅く、側面観は半月形。大きさは6 mm程度。背面には浅く荒い網目模様がある。

•ミズキ(*Cornus controversa* Hemsley) ミズキ科ミズキ属

核の破片が検出された。褐色で大きさは4 mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る溝がみられる。

•ガマズミ属(*Viburnum* sp.) スイカズラ科

種子が検出された。黒色、円盤状で、偏平。大きさは5 mm程度。一端が突出する。種皮は堅くてやや光沢があり、若干の凹凸がある。

•イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎及び炭化した胚乳が検出された。穎は大きさ8 mm程度。表面には微細な突起が縦に配列する。

胚乳の大きさは4 mm程度。胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

•オオムギ(*Hordeum vulgale* L.) イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており、大きさは7 mm程度。紡錘形で先端部は尖り基部は丸い。片面には1本の深い溝があり、その反対側の基部には胚の痕跡がありまるくくぼむ。

第4表 石川遺跡出土種実遺体の同定結果

種 類	SK2			
	1層	2層	3層	4層
ホウノキ	—	—	—	1
モモ	1	—	2	—
カラスザンショウ属	—	1	6	2
アカメガシワ	—	1	5	1
トチノキ	—	—	—	1
クサギ	—	—	—	2
ブドウ属	—	1	1	5
イネ (胚乳)	16	82	多数	多数
イネ (穎)	—	—	—	2
オオムギ	—	—	1	2
コムギ	—	—	52	多数
カナムグラ	—	—	—	18
タワ科	—	—	4	—
タデ属	—	—	18	—
不能	—	—	3	9

第5表 有明的場遺跡出土種実遺体の同定結果

種 類	SE15	SE25			SE30				SE35			SE45	SE50		SE52	P44	P46	不明
	4層	1層	2層	3層	1層	3層	5層	6層	1層	3層	4層	1層	3層	4層	1層	4層	1層	
オニグルミ	-	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ホウノキ	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モモ	-	-	-	-	-	3	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
スモモ	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ	-	-	-	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	-	-	-	6	-	3	-	1	1	1	-	-	-	-	2	-	-	-
ブドウ属	1	-	1	4	-	1	-	-	1	4	-	1	-	-	2	-	-	-
トラノキ	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサギ	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ガマスミ属	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ(穎・胚乳)	2	-	-	-	-	18	-	10	12	14	6	1	-	-	4	-	-	-
コムギ	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオムギ	-	8	9	66	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アサ	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カナムグラ	-	-	12	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	-	-	2	80	1	-	1	多数	-	4	-	-	1	1	43	-	-	7
タデ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
アカサ科-ヒユ科	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シソ属	-	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナス科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウガン	-	-	-	-	-	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
メロン類	-	-	-	11	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
チョウタン類	-	-	-	-	-	1	-	13	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
オナモミ属	-	-	-	4	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
不能	-	5	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
木の皮	-	-	-	-	-	-	-	17	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
堅果類の皮	-	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

• コムギ(*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており、大きさは4mm程度。楕円形で全体的に丸みを帯びている。片側には1本の深い溝があり、その反対側胚の痕跡がある。

• カヤツリグサ科(*Cyperaceae* sp.)

果実が検出された。大きさは2mm程度。側面観は楕円形。表面は薄くて柔らかく、弾力がありざらつく。先端部はやや尖る。

• アサ(*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

種子が検出された。灰褐色で楕円形。大きさは3mm程度。縦に全周する稜があり、下端におおきな「へそ」がある。表面は薄くて堅く、ややざらつく。

• カナムグラ(*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.) クワ科カラハナソウ属

種子が検出された。灰色で凸レンズ状、大きさは4mm程度。側面の一端に心形の「へそ」が存在する。種皮は薄く光沢がありやや硬い。表面は細かく不規則な凹凸がありざらつく。

• クワ科(*Moraceae* sp.)

前述のカナムグラに似るが、へその形状が不明瞭で、形状がやや楕円形に近いものをクワ科とした。

• タデ属(*Polygonum* sp.) タデ科

果実が検出された。黒色で、大きさは3mm程度。円形で偏平、先端がややとがる。表面は薄くて堅く、光沢がある。

- アカザ科—ヒユ科 (Chenopodiaceae-Amaranthaceae sp.)

種子が発見された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1mm程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

- マメ類 (Leguminosae sp.)

炭化した種子が発見された。黒色、腎臓形で、大きさ1cm程度。側面に縦長のへそが存在する。

- シソ属 (Perilla sp.) シソ科

果実が発見された。褐色。大きさは1.5mm程度。いびつな球形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

- ナス科 (Solanaceae sp.)

種子が発見された。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」を中心として同心円状に網目模様が発達する。大きさは1.5mm程度。褐色。表面は柔らかい。

- トウガン (Benincasa hispida Cogn.) ウリ科トウガン属

種子が発見された。種子は褐色。長さ13mm程度。長楕円形をしており、種皮は厚くやや堅い。上端に明瞭なへそがある。縁に段差があり、薄くなっている。

- メロン類 (Cucumis melo L.) ウリ科キュウリ属

種子が発見された。大きさは7mm程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑で、弾力がある。

- ヒョウタン類 (Lagenaria sp.) ウリ科ユウガオ属

種子が発見された。褐色で長さ10mm程度。長楕円形をしており、周辺の縁の部分が厚い。大きく明瞭な「へそ」が存在する。

- オナモミ属 (Xanthium sp.) キク科

果実が発見された。大きさは1.5cm程度。褐色、紡錘形で堅い。表面には鉤状の棘に覆われる。

- 堅果類の皮

コナラ属 (ドングリ類) やクリ、トチノキなどの皮の一部であると思われるが、細片であり、炭化して保存も悪いことから、詳細は不明。

D 考察

今回検出された種実は、保存状態が良好であった。これは、井戸などの中で水に浸かった状態で種実遺体が埋積され、嫌気的な状況下にあったためと考えられる。一方、種類構成に関して種実の有有用性を中心に着目して分類すると、第6表ようになる。食用あるいはその他の用途で用いられるものが多く、遺跡内で消費されていたものの一部であると考えられる。また、自生する植物に着目すると、林縁部に生育する低木や、人里植物を含む草本類が多い。遺跡の周辺は低地ですぐ背後には山地が広がっており、種実遺体の組成は遺跡の立地をよく反映している。

種実遺体組成は、栽培植物を含む有用植物が多い。有用植物の大部分は可食植物で、その種類は、オニグルミ、ブナ、ウメ、モモ、スモモ、サクラ属、サンショウ、ブドウ属、トチノキ、ガマズミ属、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類、シソ属、メロン類、トウガン、ヒョウタン類である。このうち、ウメ、モモ、スモモ、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類、メロン類、トウガン、ヒョウタン類は、本来日本には自生しておらず、栽培のために渡来した種類である。

第6表 検出された植物の用途と生育地

種類	用途・自生地	植物の用途		自生するもの		
		種実を食用	食用以外の用途	山地など	林縁部	草地など
オニグルマ	○			○	○	
ブナ	○			○		
ホウノキ			薬用	○		
クワ属	○			○	○	
モモ	○ (渡来)		薬用			
スモモ	○ (渡来)					
ウメ	○ (渡来)		薬用			
サクラ属	○			○		
サンショウ	○				○	
カラスザンショウ属					○	
アカメガシワ			薬用		○	
ブドウ属	○				○	
トチノキ	○			○		
クマヤナギ属					○	
タラノキ					○	
エゴノキ属			薬用		○	
ミズキ				○		
クサギ					○	
ガマズミ属	○				○	
イネ (穎・胚乳)	○ (渡来)					
コムギ	○ (渡来)					
オオムギ	○ (渡来)					
カヤツリグサ科						○ (人里植物)
アサ			薬用、繊維 (渡来)			
カナムグラ			薬用			○ (人里植物)
クワ科						○
タデ属			薬用			○ (人里植物)
アカザ科—ヒユ科						○ (人里植物)
マメ類	○ (渡来)					
シソ属	○					
ナス科						○
トウガン	○ (渡来)					
メロン類	○ (渡来)					
ヒョウタン類	○ (渡来)		容器			
オナモミ属						○ (人里植物)

植物の性格は、バリノ・サーヴェイ株式会社 (1995 a : 1995 b)、福島 (1994)、南木 (1991)、笠原 (1988)、辻 (1993)、粉川 (1983)、青葉 (1991) に記載されている事項を参考に作成した。

今回検出された種実の中には、薬用となるものも多い。中世の遺跡である草戸千軒遺跡では、多くの種実遺体が検出されており、その種類構成から出土植物の薬用性について指摘されている[福島1994]。これらを参考に、今回出土したもののうち、薬用とされるものを第6表に示した。これらが、全て薬用目的で使われたかどうかは定かではないが、食用と重複するものもあることから、両者を兼ねて利用されていたと考えられる。

種実遺体の大部分は、渡来種をのぞけば現在でも周辺の山野に自生しているものである。カナムグラやアカザ科—ヒユ科、オナモミ属などは、人里など開けた場所に草地を作ることから、当時の遺跡周辺の植生環境を反映していると思われる。また、サンショウやアカメガシワ、ブドウ属、タラノキなどは、林縁部に生育する低木類であることから、山地と平地の境に生育していたと考えられる。また、ブナやホウノキ、トチノキなどは、当時山地に生育していたと思われる。

引用・参考文献

- 青葉 高 1991 『野菜の日本史』 p. 317 八坂書房
- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10、4 pp. 1～79
- 福島政文 1994 「草戸千軒町遺跡出土の種実からみた薬用植物」『草戸千軒』225 pp. 2～7
- 橋本鉄男 1979 「ろくろ」『ものと人間の文化史』31 p. 444 法政大学出版局
- 早津賢治 1988 「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー—ATにまつわる議論に関係して—」『考古学研究』34 pp. 18～32
- 伊東隆夫・島地 謙 1979 「古代における建造物柱材の使用樹種」『木材研究資料』14 pp. 49～76
- 笠原安夫 1988 「作物および田畑雑草種類」『弥生時代の研究2 生業』pp. 131～139 雄山閣
- 古池 博 1986 「木柱根その他の木材ならびに大型堅果類の植物学的検討」『金沢市文化財紀要』60 『金沢市新保本町チカモリ遺跡—第4次発掘調査兼土器編—』pp. 203～226 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保本町第一土地区画整理組合
- 粉川昭平 1983 「縄文人の主な植物食料」『縄文時代の研究2 生業』pp. 42～49 雄山閣
- 町田 洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—」『科学』46 pp. 339～347
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』p. 276 東京大学出版会
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984 「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』pp. 865～928
- 南木陸彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究4 生産と流通I』pp. 165～174 雄山閣
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995 a 「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の植物種実同定報告」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ 南部地域北半部の調査』pp. 253～278 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995 b 「草戸千軒町遺跡第37次～45次・第48次調査出土の植物種実同定報告」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ 南部地域南半部の調査』pp. 201～228 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
- 高橋 敦 1995 「木製品の樹種について」『飯田町遺跡』pp. 419～420 飯田町遺跡調査会
- 辻 秀子 1983 「可食植物の概観」『縄文時代の研究2 生業』pp. 18～41 雄山閣

第Ⅷ章 ま と め

ここでは、各遺跡の遺構と遺物に関し若干のまとめをするが、それぞれの遺跡は今回の調査および報告で完結するものではない。事実、今回の調査と並行ないし継続して神林村教育委員会が周辺を調査しており、その成果公表の中で今回の調査成果についても総合的に述べられるべきものである。したがって、ここでは、遺跡全体の評価にはなるべく触れず、個々の遺構・遺物について、所属時期・性格について若干まとめてみたい。

1 天王前遺跡

A 旧石器時代および縄文時代について

今回の調査では該期遺構の発見はなかった。遺物も集中出土することなく、散発的にしかも出土層位も一定していない。遺物は数点の石器であるが当村では資料の少ない旧石器時代や縄文草創期と見られる石器も含まれ、今後、周辺の開発に対して調査の指標となる。特に火山ガラスの分析において検出されたAs-YK(1.3~1.4万年前降灰)とAT(2.1~2.5万年前降灰)は、今後の旧石器時代研究の大きな基礎データとして評価されるであろう。

B 中世・近世について

(1) 遺跡の時期

遺跡の始まりは青磁片(87)や珠洲焼播鉢の形状から14世紀代と考えられ、出土量に違いはあるものの18世紀代まで連綿と続いてきたようである。この間に遺跡に残された土器の動向を見れば、播鉢を中心とする雑器は14・15世紀と珠洲焼、その後、16世紀代は越前焼に取ってかわられ、16世紀末肥前の大量流入とともに肥前・越中瀬戸・備前・信楽が混在してくる。

碗、皿類に関しては14・15世紀と舶載青白磁を中心とし少量出土するが、15世紀中ごろから16世紀にかけて瀬戸美濃産、16世紀末から雑器同様肥前が大量流入し遺跡の最盛期を迎える。その後17世紀前半まで盛期を維持するが、この間、中国染付けが一部流入する。遺物を見る限りその後の遺跡は急速に衰退・縮小し、18世紀代の遺物は極端に少なくなる。

(2) 遺構の時期

上記のように、出土遺物から見れば中・近世と長期間存続した遺跡であるが、発見された遺構の中で時期のわかるものは極少ない。復元した建物(SB)を構成するピットから時期判断の可能な遺物が出土したものにSB 348・358・357・356がある。この中でSB 348で越前焼の甕片が出土したほか、他の建物ピットでは肥前のⅠ・Ⅱ期(16世紀末~17世紀初頭、のぼっても17世紀前半)のものである。多くは根固め中や柱根脇の埋土中からの出土で、建てた年代は出土土器と同時期もしくは、17世紀初頭以降と考えられる。また、

SB 357の一部のピットに見られる建て替えの痕跡は、さらに建築時期を上らせよう。

次にグリッド出土土器の分布を概観すれば、中世の遺物は調査区全体に数点ずつ散布するものの、中でもSB 348周辺のB XXXIV 17・21～23区、SB 301周辺のC XXXV 17・21、D XXXV 2・6・7区に若干の集中がみられる。SB 301に付属すると考えられるSE 311からは不明瞭ながら中世のかわらけ片[?]が出土しており、同じく付属するであろうSE 320も含め、中世の可能性が高い。

次に近世の遺物分布の集中は、前記した中世と重複する地区B XXXIV 17・21～23区と新しくSB 357周辺のC XXXIV 7・12・13区、そして、自然流路の集中するC XXXVI 21・22区、D XXXIV 1～4区に出土が多く、自然流路の集中する後者の地区は掘立柱建物が集中する前者の地区からの流れ込みの可能性が高い。

数多く発見された溝についてはSD 335①で中・近世(14～17世紀前半)の土器が覆土に混在しており、覆土下位より肥前の胎土目の皿が出土するなど、少なくとも16世紀末までは機能していたと考えられ、その後、大量の礫(石製品を含む)を投げ込み埋めている。また、SD 330・337、SX 327は出土土器の時期幅がSD 335①と同様で、接合関係にある土器も存在することから、同様の時期設定が可能である。そして、建物のいくつかは溝と切りあっており、そこから細かな新旧関係は不明であるものの時期の違いが想定できる。

少なくとも肥前Ⅱ期(17世紀前半)の遺物を柱穴の根固めおよび埋め土中からの出土をみたSB 356・357・358が存在した時期にはSD 330・335①・335②・337など主要な溝は人為的に埋め戻されていた可能性が高い。

(3) 建物群の配置と大型建物(SB 357)

建物配置

建物の向きには、細かくはいくつかの方向が存在する。しかし、中世の可能性が高いSB 301を除き大方は東西方向に走る段切りの帯に沿って配置されており、この段切りは概ね道路状遺構の一構造であるSD 259と直行する位置にある。この遺構分布は、近現代の水田造成による遺構破壊の結果偶然帯状となった可能性もあるが、土層の堆積状況および遺構深度からこのように極端な分布上の偏りは不自然で、むしろ元々の建物分布が道路状遺構に直行する帯状に配されていたものと考えられよう。建物自体の切り合いはあるものの、これらの帯状の規則性のある分布は、大小の溝が埋められた後の17世紀前半期と考えておきたい。

大型建物(SB 357)

平面の占有面積が他の建物と比べ著しく大きいというだけでなく、柱穴・柱痕・柱根の大きさ、そして柱の設置構造において他を圧倒している。また、墨書石の出土も特別(有力者)な建物との印象を強くする。建物の性格については後述の斎藤氏の教示に関連する建物、または当村の有力者の住まいとの両者が考えられるが、前者の考えは、前記したように五輪塔を含む石造物が投げ込まれた溝とSB 357とに時間差が想定されることから、直接的関係はなさそうである。また、SD 337出土の小柄の存在が気になるころであるが、同様に建物との時期差が想定され村の有力者(武士階級?)の建物とも一概に言えないのが現状である。この建物には前記した特徴以外、以下のような状況も見られる。柱穴の中に大型偏平礫で柱根下の据石とするものが多く発見されており、この据石は一応に煤が付着するものが多い。この煤は二次的付着

ではなく、礫自体が被熱し附着したものである。また、柱根端部には焼きしめた痕跡はなく、柱穴の中で火を焚いた痕跡もない。これらの状況が機能的なものか、それとも呪術的なものか今後の課題である。

(4) 石製品について

溝(特にSD 335①・335②・337・330)の覆土中位から上位にかけて大量に出土した礫の中には、数多くの石製品が含まれていた。石製品の内訳は砥石・硯・石臼・石造物である。

砥石には大小様々なものが多数出土しており、置き砥石、手持ち砥石に大きく分けられる。前者は地元産の扁平礫を利用するものが一般的であるが、手持ち砥石のいくつかには方形に切り出された凝灰岩製のものがあり、遠方で生産されたと推測され、これらの生産・流通に関しても今後検討していかなければならないであろう。

石造物という言葉に代表させたものの中に、明らかに五輪塔の一部と考えられるものや石鉢の破片が含まれる。時期的には遺構の切り合いから近世初頭以前の所産と考えられる。

山屋在住の斎藤久一氏からは①調査範囲付近に寺があったということ、そして②現在の「天王宮アト」(山頂部)に登る山道脇の『だいもん』と呼ばれる所からは、開墾時に骨甕らしきものが出土したなどの情報提供があった。出土した上記の五輪等は斎藤氏のいう『寺』と関係する遺物と考えておきたいが、これらは溝埋めに投げ込まれたもので、機能した原位置から移動しており、それに関連する遺構の存在も現段階では確認されていない。

(5) 墨書石について

墨書石の墨痕実測および釈文については解析中のため、今回の報告には墨書された石のみの実測図(図版29-129)と写真(図版81)を示した。今後、解析でき次第報告したい。

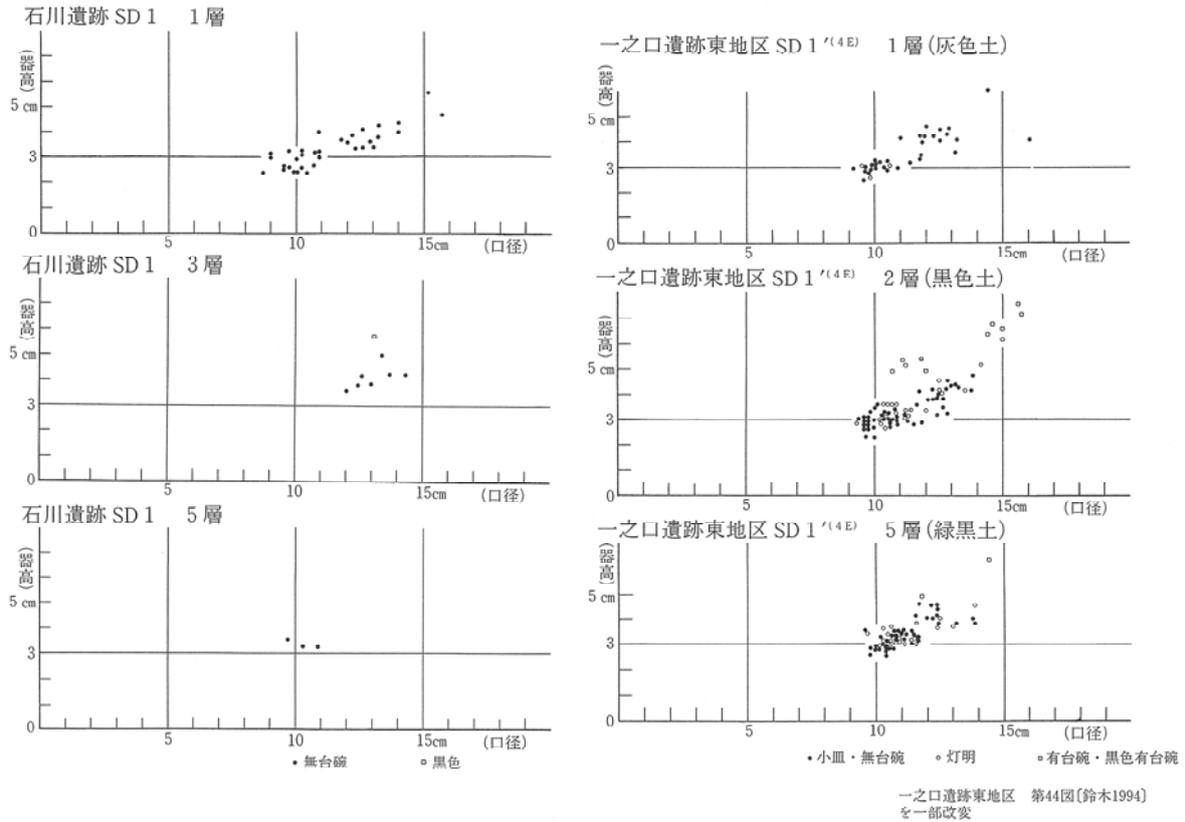
2 有明的場遺跡

調査面積が狭いため遺跡の詳細な内容は不明であるが、平安時代ないし中・近世(14~18世紀)にかけての遺跡で、発見された遺構の時期は出土遺物から中世に属するものが多いと考えられる。今回の調査範囲は遺跡の縁に相当するもので、現集落内にその中心が求められる。

3 石川遺跡

有明的場遺跡同様、調査範囲が狭いため遺跡の詳細な内容は不明であるが、平安時代の遺物が多量に出土したSD 1が特筆される。覆土は層位的に調査し遺物を取り上げたが、湧水の中での調査のため厳密な取り上げがどこまでできたかはなほ疑問である。また、出土遺物の中には時期の異なるものも少量含まれていることも事実である。遺物の主体をなすものは土師器碗で無台碗が圧倒的に多く、黒色処理碗、有台碗が少量含まれる。

遺物が出土した層は1・2・3・5層で、特に1層が多く3・5層がこれに次ぐ。第9図は1・3・5層出土の無台碗の口径と器高の分布図で、それぞれに異なった分布の傾向が見られる。3層出土のD類は1層に比べ大型で身の深い物が多いという形態・法量上の違いが見られたが、細片のため図化していない



第9図 土師器碗の法量分布図

ものの中にはより小型(A類)の資料が存在するなど、各層出土の無台碗には層位的な前後関係は存在するものの、それほど際だった時期差は見られないと考えておきたい。

ここでは資料が多く出土した1層の無台碗を中心に考えていきたい。第9図から法量には大きくa~bの三つの領域が存在する。aは口径8.5~11cm、器高2.4~4.0cm、bは口径11.7~14.0cm、器高3.4~4.4cm、cは口径15.2~15.7cm、器高4.6~5.6cmである。形態的には前述のように概ねA~Dの4種類に分けられ、法量aにはABCDの各類が含まれるがAB類は法量aのみに存在し、法量bはCD類に偏る傾向がある。第9図右側は上越市一之口遺跡東地区(鈴木1994)SD1'出土の土師器小皿・無台碗・有台碗の法量分布であるが、本遺跡と極めて近い分布状況を示す。また、有台碗、黒色処理碗の比較的安定した存在や、形態的にも両者は近似する部分が多く、石川遺跡A類が一之口遺跡東地区A1・A2類に、石川遺跡B類が一之口遺跡東地区B1・B2類、石川遺跡C・D類が一之口遺跡東地区C1・C2類にそれぞれ形態的には類似する。

時期判断の可能な遺物は石川遺跡で皆無のため、形態的・法量的に近似する一之口東地区SD1'の資料および分析から同様に11世紀初頭前後との時期を考えておきたい。

要 約

天王前遺跡

- 1 天王前遺跡は、新潟県の北部、岩船郡神林村大字山屋字天王前に所在する。遺跡は、日本海にほぼ並行し神林村東側を南北に伸びる丘陵を、ほぼ北東←→南西方向に開析し西方の日本海に流れ込む助淵川(山屋川)の右岸に位置する。標高は13~15.5mの南向き緩斜面で、調査範囲の現状は水田・畑である。
- 2 発掘調査は、県営ほ場整備事業にともなって平成7・8年度の2ケ年にわたって実施されたが、埋文事業団の調査は平成8年度である。調査範囲は、遺跡範囲の中で、県営ほ場整備により遺構・遺物が破壊される恐れがある所に限った。調査面積は4,150㎡である。
- 3 調査の結果、旧石器時代・縄文時代・平安時代・中世・近世の遺構ないし遺物を発見した。その中でも主体は16世紀末~17世紀前半の近世初頭から前半にかけてのものである。
- 4 近世初頭から前半にかけての遺構は、掘立柱建物群を中心とするもので、これら建物配置および建物軸に一定の規則性が見られる。また、建物群の中には特に大型のものが1棟存在し、柱穴据石の一つには、地鎮のためと考えられる墨書石が出土するなど、有力者の建物と考えられる。
出土遺物は、肥前陶器を中心に越中瀬戸・備前・信楽の各焼物や、砥石を中心とする石製品、柱根等である。

有明的場遺跡

- 1 有明的場遺跡は、神林村大字有明870番地ほかに所在する。遺跡は神林村東側に存在する丘陵端部の沖積地で、自然堤防上の微高地に位置する。標高は10m弱で現状は水田である。
- 2 発掘調査は県営ほ場整備事業にともなって、平成7・8年度の2ケ年にわたって実施されたが、埋文事業団の調査は平成8年度である。調査は水路部分幅3mほどの狭長で、調査面積は2,130㎡である。
- 3 調査の結果、平安時代・中世・近世の遺構ないし遺物を発見した。遺構については井戸・土坑・ピット・溝であるが、その数は少なく、いくつかの遺構からは中世の遺物が出土している。
- 4 調査範囲は遺跡の縁にあたり、主体は現有明集落を含む今回の調査区北側に存在すると考えられる。

石川遺跡

- 1 石川遺跡は、神林村大字桃川3060番地ほかに所在する。遺跡は百川の右岸沖積地に位置し、有明的場遺跡から南へ300mほどにある。標高は有明的場遺跡同様10m弱で、現状は水田である。
- 2 発掘調査の要因・調査年度は有明的場遺跡同様で、調査範囲も同じく水路部分(幅約3m)の調査である。調査面積は365㎡である。
- 3 調査の結果、古墳時代・平安時代・近世の遺構ないし遺物を発見したが、中心となる時期は平安時代である。
- 4 平安時代の遺構は土坑1で、その他に自然流路があり、その流路の覆土からは多量の土器が出土した。土器は、土師器碗が主体で、その法量・形態から上越市の一之口東地区SD1'の資料に近似し、11世紀初頭前後の位置付けがなされる。当該地方の標式的な資料となるであろう。

引用・参考文献

- 阿部洋輔 1968 「色部氏について」『色部氏史料集』新潟史学会刊
- 阿部洋輔 1987 「第一章 第一節 二 越後の地頭」『新潟県史』通史編2 中世 新潟県
- 伊藤政義 1993 「武士の館と生活」『日本歴史館』全1巻 小学館
- 今堀太逸 1993 「疫病と神祇信仰の展開」『仏教史学研究』36巻2号
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 小野田政雄 1985 「第三編 中世 第五章 中世の石造遺物」『神林村史』新潟県岩船郡神林村
- 大場喜代司ほか 1986 『日本歴史地名大系15 新潟県の地名』平凡社
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 春日真実 1997 「北陸北東部の様相」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
- 春日真実ほか 1996 『江内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第76集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 神林村 1983 『神林村史』資料編 下巻
- 川上貞雄・遠藤孝司 1983 「Ⅷ 総括」『馬場屋敷遺跡発掘調査報告書』新潟県白根市教育委員会
- 九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』
- 黒岩勝美・国史体系編集会 1984 『改訂増補 国史体系 吾妻鏡 第一』吉川弘文館
- 桑原正史 1986 「第五章 第一節 中央集権国家の建設と越の蝦夷」『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
- 志田原重人 1983 「天罡呪符について」『草戸千軒』No.123 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 志田原重人 1983 「草戸千軒にみる信仰と呪い」『草戸千軒』No.125 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 志田原重人 1986 「出土呪符にみる逐疫神の様相」『草戸千軒』No.151 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 志田原重人 1994 「天刑星と牛頭天王」『よみがえる中世』8 平凡社
- 品田高志 1991 「越後の中世土器一編年の研究の現状と課題一」『新潟県考古学談話会会報』第8号 新潟県考古学談話会
- 鈴木鉀三 1985 a 「第二編 第二章 古代」『神林村史』新潟県岩船郡神林村
- 鈴木鉀三 1985 b 「第三編 第一章 鎌倉時代」『神林村史』新潟県岩船郡神林村
- 鈴木鉀三 1985 c 「第四編 第一章 支配の変遷」『神林村史』新潟県岩船郡神林村
- 鈴木要作 1985 「第三編 第四章 中世の城郭」『神林村史』新潟県岩船郡神林村
- 鈴木俊成ほか 1990 『高田遺跡 発掘調査概報』神林村埋蔵文化財報告第2 新潟県岩船郡神林村教育委員会
- 鈴木俊成 1994 「第Ⅵ章 まとめ 1. 平安時代の土器」『一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田辺早苗 1991 『長松遺跡発掘調査報告書』神林村埋蔵文化財報告第3 新潟県岩船郡神林村教育委員会
- 田辺早苗 1992 『牧目館跡発掘調査報告書』神林村埋蔵文化財報告第4 新潟県岩船郡神林村教育委員会
- 田口昭二・井上喜久雄 1977 「美濃」『世界陶磁全集』3 日本中世 小学館
- 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 寺沢正夫 1985 「第一編 自然環境」『神林村史』新潟県岩船郡神林村
- 檜崎彰一 1977 「瀬戸」『世界陶磁全集』3 日本中世 小学館
- 檜崎彰一・金子健一ほか 1997 『瀬戸・美濃系大窯とその周辺』企画展図録 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 新潟県 1981 『新潟県史』資料編2 原始・古代二 文献編
- 新潟県 1983 『新潟県史』資料編4 中世二
- 新潟県 1984 『新潟県史』資料編5 中世三
- 新潟県 1987 「第1節 館と村と百姓」『新潟県史』通史編2 中世
- 萩野正博 1986 「第六章 第二節 荘園と国衙領」『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
- 増尾伸一郎 1993 「〈天罡〉呪符の成立—日本古代における北辰・北斗信仰の受容過程をめぐって—」『陰陽道叢書』4 特集 名著出版
- 水野九右衛門 1977 「越前」『世界陶磁全集』3 日本中世 小学館
- 水野正好 1980 「屋敷と家屋のまじないに」『草戸千軒』No.88 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 水野正好 1989 「魍魎魍魎・鬼鬼鬼鬼鬼」『草戸千軒』No.196 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 満岡忠成 1977 「伊賀・信楽」『世界陶磁全集』4 備前・丹波・信楽・伊賀 小学館

- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
山本幸俊 1996 「十六世紀の越後のムラ」『かみくいむし』第100号 かみくいむしの会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

第7表 天王前遺跡陶磁器・土器観察表

整理 No	図版 番号	遺 構	遺 構No	取 上げ No	グリッド			器 種	器 形	遺 存 率	法 量			胎 土	釉 薬 そ の 他	技 法 そ の 他	生 産 地	時 期	備 考	
					大	中	小				口径cm	器高cm	底径cm							
125	6 P	P	542	1				陶	皿	1/3	13.5	4.0	4.9	チミツ	内、外体灰釉 釉	高台ケズリ	肥前	17C初	P542, No2と接合。内面・墨付け砂目。	
126	6 P	P	542	2				陶	皿	1/2				チミツ	内外灰釉		肥前			
127	7 P	P	542	7				陶	碗	破	8.9			白、赤粒	内外鉄釉	口唇ケズリ、 内面青海波	肥前	16C末		
128	8 P	P	542	6				陶	甕	破	26			チミツ	内外鉄釉	内面青海波	肥前	16C末		
135	9 P	P	671	1				陶	皿	1/2				チミツ	内、外灰釉	体下ケズリ	肥前			
124	10 P	P	698					陶	皿	破			6.2	粗密	内外灰釉	内底軸ハギ	瀬戸	15~16C	C34, 141層出土品と同一個体	
136	11 P	P	680	2				陶	鉢	破	(17.9)			粗密	内外灰釉		美濃	16末~ 17C初		
121	12 P	P	726	13				陶	鉢	1/3			9.5	粗密	内外体灰釉	高台ケズリ	肥前		P726, No1, 2, 3, 4, 5, 8, 11, 16, 17, 18, 19, 31, P726, No17, 18の下と接合および同一個体。高台に黒付着。	
137	13 P	P	884					白磁	皿	破	10.1			粗密	内外透明釉		船載	15C		
142	14 P	P	1550					陶	碗	破	12.9			粗密	染付		船載	17C前	スワトウ。澤州窯。陶体染付。	
7	15 SD	SD	324					磁	碗	破片	10.4			粗密	染付		船載	17C前		
138	16 P	P	730	36				陶	皿	1/3	11.0	3.0	4.0	チミツ	内外体灰釉	底外ケズリ	肥前	16C末	胎土目。	
140	17 P	P	730	1				陶	碗	1/4			4.7	チミツ	内外体灰釉	底外ケズリ	肥前	16末~ C17初	高台に砂付着、砂目か？。釉はワラ灰釉？。	
122	18 P	P	730	16・37 ・45				陶	瓶	1/5			8.0	白粒	外体上釉	内面青海波	肥前	16C末	C34, IV層と同一個体。釉は乳白色。	
190	18							陶	瓶	破				白粒	外白泥	青海波	肥前	16C末	P730, No15, 37, 45と同一個体。	
139	19 P	P	730	2	C34	13	18	陶	甕	破			15.4	黒粒、砂			肥前			
120	20 P	P	730	15・34				陶	桶鉢	1/2			11.6	白粒	底回転糸		肥前	17C前		
26	21 SD	SD	325		C34	9	2	陶	片口	破	10.8				色絵		肥前	18C	京焼風色絵碗。	
23	22 SD	SD	325		C34	9	2	陶	鉢		17.1				内外体上灰 釉		肥前	17C		
29	23 SD	SD	325		C34	4	21	珠洲	甕	破	(28.0)			白粒		体外平行叩き	珠洲	14C		
119	24 SD	SD	330		C34	2	11	9 珠洲	桶鉢	破			11.9	砂濃多			珠洲			
87	25 SD	SD	335①	46				4 陶	皿	4/5	10.7	3.5	3.9	チミツ	内外体釉・ 口縁鉄釉	底外ケズリ	肥前	16C末	胎土目。内面の黒色付着あり、灯明か。成瀬手皿。釉はワラ灰釉？。	
164	26 SD	SD	335①	407				4 陶	皿	1/3	10.8	3.7	3.9	チミツ	内外体釉	底外ケズリ	肥前	16C末	SD335①, No408, 2層、SD337, No26, 2層と接合。胎土目。成瀬手皿。釉はワラ灰釉？。	
165	26 SD	SD	335①	408				2 陶	皿	1/5										
166	26 SD	SD	337	26				2 陶	皿	1/3										
54	27 SD	SD	335①		B34			陶	皿	1/3			4.8	チミツ	内、外体釉	底外ケズリ	肥前	16C末	胎土目。	

第7表 大王前遺跡陶磁器・土器観察表

整理 No.	図版 番号	遺 構	遺 構No.	取上げ No.	グリッド 大 中 小	出土層位	器種	器形	遺存率	法 量		胎土	釉薬その他	技法その他	生産 地	時期	備 考
										口径cm	器高cm						
169	28	SD	259	148			陶	碗	破		6.3	チミツ	染付		肥前	17後～ 18C前	陶胎染付。内面底部釉はぎ。
171	29	SD	259		C36	4	25	陶	皿	1/2	4.9	白粒	内、外体上 灰釉	底外ケズリ	肥前	16C末	煤付着。胎土目。
59	30	SD	335①		C34	2	3	陶	皿	1/2	4.8	砂粗多	内、外体灰 釉	底外ケズリ	肥前	16末～ 17C初	
68	31	SD	335①	409			2	陶	皿	破	4.0		内、外体上 灰釉	底外ケズリ	肥前	16末～ 17C初	SD335①、No410, 2層と同一個体。釉はワラ灰釉。
90	32	SD	335①	150			3	陶	碗	1/3	11.4	6.7	内、外体灰 釉、口縁鉄 釉	底外ケズリ	肥前	16C末	
93	33	SD	335①	151			3	陶	碗	破	9.4		内、外体上 外鉄絵 釉		肥前	16C末	
60	34	SD	335①				層位不明	陶	碗	破	10.8	チミツ	内、外体灰 釉		肥前		
89	35	SD	335①	6			4	陶	天目 碗	破	(12.4)	チミツ	内、外体上 鉄釉	体下・底ケズ リ	瀬戸 美濃		内面全部と外面体部下都まで鉄釉。
57	36	SD	335①		C34	7	7	陶	皿	1/4	13.5		内、外体上 灰釉、口縁 鉄釉		肥前		
56	37	SD	335①		C34	7	7	陶	碗	破	11.2	チミツ	内、外体上 灰釉		肥前		P754の胎より出土。
519	38	SD	335①	44			1	陶	鉢?	破		7.0	内、外体上 灰釉	外体下ケズリ	肥前		SD287, No21, B34, 25上層と接合。底部外面に粉殻圧痕。
520	38	SD	267	21	B34	25		陶	鉢?	破					肥前		
91	39	SD	335①	151			3	陶	香炉	破		10.5	チミツ	底回転糸		瀬戸 美濃	6脚はりつけ脚?。
81	40	SD	335①	77			3	磁	皿	破		6.1		高台内カンナ ケズリ	柏載	15～16C?	高台内にも釉。畳付けに砂?
148	41	SD	335①	149			3	陶	皿?	1/4		10.4	白粒	内、外体上 灰釉	肥前		SX327 B34, 22⑨I層と接合。
160	42	SD	335①	382			2	陶	皿	破	23.6	5.4	内外釉		肥前	17～18C	C34, 13⑩IV層と同一個体。三馬手。
158	43	SD	335①		C34	2	11	陶	鉢	破	22.2		内外体灰		肥前	16C末	C34, 7, 旧河川流路, 1層上面確認面と同一個体。口縁部無釉。
646	44	SD	335①	51			1	陶	壺	1/4	11.8	18.6	内外鉄釉	外体下叩き	肥前	16C末	SD335①, No54, 1層, SD335①, No46, 1層, C34, 7, 旧河川流路と接合。
51	45	SD	335①		C34	7	1	陶	壺	破	9.5		内外鉄釉		肥前		

整理 No.	図版 番号	遺 構	遺 構 No.	取 上 げ No.	大	中	小	出土層位	器 種	器 形	遺 存 率	法 量		胎 土	釉 薬 そ の 他	技 法 そ の 他	生 産 地	時 期	備 考	
												口 径 cm	器 高 cm							底 径 cm
111	46	SD	335①	147				3	甕	破			16.5	チミツ、 白粒	底面に自然 灰	外体平行印 き、内背海波	肥前	16C末	底部外面に貝目。	
441	47	SD	335①	113				3	甕	破		16.8			外面鉄釉	外体平行印 き	肥前		SX 327, B34, 23(1)1層と接合。底部外面砂目。	
442	47	SX	327		B34	23	1	1									備前?			
75	48	SD	335①	69				4	搦鉢	破		26.4		白・黒粒						
156	49	SD	335①	151				3	搦鉢	破		31.4		白粒				越前	16C	SD 335①, No249, 3層と接合。
157	49	SD	335①	249				3												
106	50	SD	335①	298				4	土器 搦鉢	破		33.0		白粒				珠洲	15C前	口唇波状文。
159	51	SD	335①	333				2	搦鉢	破		32.7			口縁鉄釉			肥前		C34, 21(8)I・III①層と接合。D36(2)II上層と同一個体。
151	52	SD	335①	450				4	陶 搦鉢	破		28.9	チミツ				越前	16C	SD 335①, No402, 4層, SD 335①, No324, 2層, SD 335①, No408, 2層, D35, 6(3)II上層, D35, 1(2)II上層, B34, 22 I モリと同一個体。	
104	53	SD	335①	76				3	土器 搦鉢	破			13.2	長、黒粒				珠洲		
105	54	SD	335②	3				1	陶 皿	1/3			6.3	白粒	内、外体上 灰釉、内面 鉄絵	外体下・底ケ ズリ	肥前	16C末		
38	55	SD	337	298				2	陶 皿	1/3			3.9	チミツ	内、外体上 灰釉	外体下・底ケ ズリ	肥前	16C末	胎土目。	
46	56	SD	337	107				2	陶 碗	破			4.7	白粒	内、外体鉄 釉	底外ケズリ	肥前		C34, 8(向)I モリと接合。	
388	56				C34	8	15													
36	57	SD	337		C34	10	8		陶 碗	1/5		9.8			内、外体灰 釉、鉄絵		肥前	16C末		
40	58	SD	337	290				4	青磁 碗	破		12.0					船載	16C末	内外に陰刻線があるが不明瞭。	
41	59	SD	337	287				2	土器 搦鉢	破		(29.5)	長				珠洲	14C		
45	60	SD	337	39				4	土器 搦鉢	破				10.8	長、黒粒		珠洲			
47	61	SD	337	127				4	陶 搦鉢	破				15.2	長		備前?			破砕面に漆掻き痕。外面底部に細い凸凹多い。
33	62	SX	327		B34	23	1	1	陶 皿	破		(12.0)	チミツ		内外灰釉		肥前	17C初	溝縁皿。	
168	63	SX	327		B34	22	5	1	陶 皿	破			5.7		内、外体上 灰釉、内鉄 絵		肥前	16C末	SD 335①, No75, 3層と同一個体。置付けに回転糸切り痕。	
30	64	SX	327		B34	22	5	1	陶 皿・ 碗?				4.3	チミツ	内外釉		肥前	17C初	砂目。釉は乳白色。	
32	65	SX	327		B34	22	9	1	陶 甕	破			(24.4)		内面自然釉		越前			

第7表 天王前遺跡陶磁器・土器観察表

整理 No.	図版 番号	遺構 No.	取上げ No.	グリッド			出土層位	器種	器形	遺存率	法量			胎土	釉薬その他	技法その他	生産地	時期	備考
				大	中	小					口径cm	器高cm	底径cm						
34	66 SX	327		B34	23	6	1 土器	寛	破				炭母、 白・黒粒		体外平行叩き	珠洲		外面底部から体部にかけて煤付着。	
464	67			C34	21	9	Ⅲ・Ⅲ①層	Ⅲ	1/3		11.1	3.1	4.2	チミツ	内、外体上 灰軸	外体下・底ケ ズリ	肥前	16C末	胎土目。C34, 22(7)Ⅲ・Ⅲ①層と接合。外面無軸部分に煤付着。
465	67			C34	22	7	Ⅲ・Ⅲ①層								内、外体上 灰軸、内鉄 ズリ	肥前	16C末	胎土目。外面無軸部分に煤付着。	
253	68			C34	13	3	I層上面 河川	Ⅲ	1/3				4.4		内、外体上 灰軸、内鉄 ズリ	肥前	17C初	砂土目。内面底部付近に部分的に黒色付着(漆か?)。溝縁皿。	
631	69			C34	22	7	Ⅲ・Ⅲ①層	Ⅲ	1/2		12.7	4.2	4.4		内、外体上 灰軸	肥前	17C初	砂土目。内面底部付近に部分的に黒色付着(漆か?)。溝縁皿。	
176	70			C34			Ⅳ	Ⅲ	1/4		12.5	3.8	4.0	白粒	内、外体上 灰軸	肥前	17C初	砂目。	
430	71			D34	4	23	Ⅳ	Ⅲ	2/3		11.6	3.2	3.7		内、外体上 灰軸	肥前	17C初	砂目。	
193	72			C34	13	23	旧河川確認 I層上面	Ⅲ	1/3				4.0		内外灰軸	肥前	17C初	砂目。C34, 13(23)旧河川I層上面と同一個体か?	
194	73			C34	13	23	旧河川確認 I層上面	Ⅲ	1/5		14.1				内外灰軸	肥前	17C初	C34, 13(23)旧河川確認面と同一個体。C34, 13(23)旧河川I層上面と同一個体 か? 溝縁皿。	
435	74			D34	9	9	I①層	碗	破		11.7				内外灰軸	肥前			
460	75			C34	22	25	Ⅲ・Ⅲ①層	碗	1/3				4.0	粗密	内、外体上 軸	肥前		C34, 2(5)Ⅳ層と接合。壺付けに回転糸切り痕。被熱。	
461	75			C34	2	8	I												
180	76			C34	13	3	旧河川確認 面	碗	1/3				4.0		内、外体上 鉄軸	肥前		C34, 13(3)旧河川I層上面と接合。	
616	77			C33	25	25	Ⅱ	碗	破		(11.0)				内外鉄軸	瀬戸 美濃	16C後	天目茶碗。大窯Ⅲ期。	
618	78			D34	9	3	Ⅳ①層	碗	破		(10.1)				内外鉄軸	瀬戸 美濃	16C後	天目茶碗。大窯Ⅲ期。	
478	79			C34	21	25	Ⅳ	碗	破		10.8				内外鉄軸	瀬戸 美濃	17C前	D34, 4(2)Ⅳ層、C34, 7I層と同一個体の可能性あり。大窯V期。	
294	80			D34	7	18	Ⅱ上層	Ⅲ	破		10.5			白粒	内外灰軸	瀬戸 美濃	15~16C		
620	81			C34	21	19	Ⅳ	Ⅲ	破		10.4				口縁軸	瀬戸	15C	古瀬戸。軸は縁軸。	
227	82			C34	13	14	旧河川確認 I層上面	Ⅲ	破		14.4				染付	船載	16C後		
637	83			C34	21	9	Ⅲ・Ⅲ①層	Ⅲ	破		13.0				染付	船載	16C後		

整理 No	図版 番号	遺 構	遺 構No	取上げ No	グリッド 大 中 小	出土層位	器種	器形	遺存率	法 量		胎土	釉薬その他	技法その他	生産 地	時期	備 考
										口径cm	器高cm						
518	84	SD	267			上層	陶 皿	破							船載		SD265, №37, B35, 25上層と同一個体。スワトウ。濠州窯。
516	85					Ⅲ・Ⅲ①層	陶 皿	1/4			12.3				船載		SD265, №37, B33, 25上層と接合。量付けに砂付着。スワトウ。
517	85	SD	265	37		上層	陶 皿	1/10									C34, 21(8)Ⅲ・Ⅲ①層と都合。SD267, C33, 4(2)上層と同一個体。量付けは砂付着。
200	86					I・モリ	磁 皿	破			5.0				船載	16C	裏名。
633	87					Ⅲ・Ⅲ①層	青磁 碗	破		16.0					船載		漆接ぎ。
635	88					Ⅱ・Ⅲ層	青磁 碗	破		13.4					船載	14~16C	体部外面に運弁。
630	89					Ⅳ	青磁 碗	破							船載	14C	体部外面に運弁。
636	90					I・モリ	青磁 碗	破		(12.1)					船載		内面口縁・体部に陰刻。
632	91					Ⅲ・Ⅲ①層	青磁 碗	破		(11.6)					船載		
628	92					Ⅱ	青磁 碗	破			5.0				船載		体部外面に陰刻。
223	93					Ⅱ	青磁 碗	1/5			4.8				船載	15~16C	
337	94					Ⅱ	白磁 皿	破		12.0					船載	16C	
645	95					Ⅰ	白磁 皿	破		11.0					船載	15C	
373	96					Ⅲ・Ⅲ①層	陶 甕	破		10.6					肥前	16C末	
450	97					Ⅱ	陶 甕	破		15.0					肥前		口唇部は摩耗。
367	98					Ⅲ	陶 甕	破		15.0					肥前		
374	99					Ⅲ・Ⅲ①層	陶 甕	破			8.0				肥前		
384	100					Ⅲ・Ⅲ①層	陶 甕	破			6.7				肥前	16末~ 17C前	C33, 25(2)Ⅱ層と接合。底面外面に切欠。
427	100					Ⅱ	陶 甕	破									C34, 21(2)Ⅲ・Ⅲ①層と接合。
627	101					Ⅱ	重or 鉢	破			9.5				瀬戸		古瀬戸。釉は緑釉。
277	102					Ⅱ	壺	破		22.7					瀬戸		底面口縁系後、ケズリ出し高台
496	102					Ⅳ	陶 甕	破							瀬戸		体内指頭三真
286	103					Ⅱ	土器 甕	破		(19.5)					瀬戸		体内指頭三真
186	104					Ⅲ・Ⅲ①層	陶 甕	破		30.8					肥前	17C	
526	105	SD	265	68		上層	陶 甕	破		(30.9)					肥前	17C	C34, Ⅳ層, C34, Ⅳ層, C34, Ⅲ層と同一個体。
358	106					Ⅲ	陶 甕	破		32.4					越中 瀬戸?	17C	口唇波状文。

第7表 天王前遺跡陶磁器・土器観察表

整理 No.	図版 番号	遺 構	遺 構 No.	取 上 げ No.	グリッド		出土層位	器 種	器 形	遺 存 率	法 量		胎土	釉薬その他	技法その他	生 産 地	時 期	備 考	
					大	小					口径cm	器高cm							底径cm
249	107				C34 13	10	層位不明	陶	擂鉢	破	25.0		長			瀬中瀬戸	17C	口縁部かきとり。	
492	108				C34 2	7	II	陶	擂鉢	破	26.8		長	内外鉄釉		瀬中瀬戸	17C		
175	109				C35 17	15	III	陶	擂鉢	破		11.0	長	内外鉄釉	底回転糸	瀬中瀬戸	17~18C		
434	110				D34 9	9	IV①層	陶	擂鉢	破	28.0		チミツ			肥前?	17C前		
300	111				D35 6	11	II上層	陶	擂鉢	破	(23.6)		チミツ	口縁鉄釉		肥前	17C後		
404	112				C34 14		I	陶	擂鉢	破				口縁鉄釉		肥前	16C末		
270	113				C34 7		旧河川流路 I層上面	陶	擂鉢	破	(30.0)		白粒、チ ミツ	外口縁鉄釉		備前	16末~ 17C前		
514	114				C34 3	17	旧河川流路 I層上面	瓦質	擂鉢	破			白粒			不明		SD325, C34, 4(7) I層上面と接合。在地産?。	
515	114	SD	325		C34 4	17	I層上面	瓦質	擂鉢	破									
482	115				C34 22	18	IV	土器	擂鉢	破		14.4	チミツ		底無調整	備前?			
488	116				D34 4	15	II・III層	瓦質	擂鉢	破	(24.0)		白粒			不明		在地産?。	
472	117				C34 21	21	IV	瓦質	擂鉢	破		14.0				不明		C34, 21(7)IV層と同一個体の可能性あり。	
469	118				B34 16	11	II	陶	擂鉢	破	31.4		長			越前	16C		
467	119				D34 2	20	III・III①層	陶	擂鉢	破		13.8	長、赤・ 白色泥		底凸凹	備前	16末~ 17C前	C34, 12(5)IV層と同一個体の可能性あり。	
493	120				C34 21	8	III・III①層	陶	擂鉢	破	(37.9)		白粒、長			越前	16C		
491	121				C33 15	25	II	陶	擂鉢	破		11.0	白粒			越前			
503	122				B34 19	17	攪乱	陶	擂鉢	破		11.0	白・黒粒			越前			
534	123				C35 21	17	II上層	土器	擂鉢	破	(25.5)		白・黒粒			越前	14C後	C35, 17(7)II層, B34, 11(6) I・II, SD21, C34, 25(3)層, C35, 21(4)II上層と同一個体の可能性あり。	
229	124				C35 21	23	II上層	土器	擂鉢	破	(28.9)		白粒			珠洲			
325	125				D35 2	21	II上層	土器	擂鉢	破	(37.8)		白粒			珠洲			
521	126				D34 4	11	IV	土器	擂鉢	破	(24.4)		白粒			珠洲	13C後~ 14C後	SX286, N.21, C33, 5下層と接合。	
522	126	SX	266	21	C33 5		下層	土器	擂鉢	破			白粒			珠洲		D34, 4(1)IV層と接合。	
530	127				C35 17	17	II	土器	擂鉢	破		18.0	白・黒粒			珠洲		B33, 19(1)層, B34, 11(6) I・II, SD21, C34, 25(3)層, C35, 21(4)II上層と同一個体の可能性あり。	
285	128				C34 13		II	土器	擂鉢	破		16.3	白粒			珠洲			

第8表 天王前遺跡石製品観察表

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構No	取り 上げ No	器種名	石材	グリップ			出土層位	法 量			加工・使用				付 着		備 考			
							大	中	小		長さ cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	剥離	磨耗	接痕	その他	タール		その他		
1103	1				ナイフ形石器	頁岩	C34	13		I	6.2	1.7	1.0	8.8									
1116	2				尖頭器	頁岩	D34	10	7	IV	8.3	4.9	2.1	74.0									未成品。
1102	3				不定形石器	頁岩	D34	4	22	IV	6.6	6.8	1.2	42.9									スクレイパー。
1082	4				不定形石器	流紋岩	C34	2	21	II	4.0	2.5	0.6	4.8									
1115	5				石鏃	頁岩	D34	9		IV	6.8	2.5	1.1	16.2									「天罫」その他。据石。
1136	129	P	620	1	墨書石	硬砂岩					23.1	14.5	5.8	2990.0									破砕。
1370	130	P	620	2	砥石	硬砂岩					37.1	17.2	9.5	8340.0			○						破砕。五輪塔水輪または石鉢。
1305	131	P	628	1	石造物	砂岩					18.8	11.8	6.3	1179.4									破砕。裏面に煤付着。
1288	132	P	600	1	砥石	硬砂岩					23.6	15.9	7.9	3760.0									破砕。
1306	133	P	659	2	砥石?	粘板岩					8.5	7.0	4.0	302.7									破砕。据石。
1134	134	P	605	3	石臼	安山岩					直径30.5		高さ10.2	3110.0									破砕。P 726, No.6, P 660, No.3と接合。
1366	135	P	605	1	砥石	砂岩					30.4	12.7	12.3	7860.0									破砕。据石。
1204	136	P	660	1	磨石	花崗岩					9.2	7.7	4.5	446.8									
1124	137	P	765	4	石臼	安山岩					18.0	15.1	9.8	2600.0									
1128	137	P	726	6							26.4	14.7	10.2	3760.0									
1181	137	P	660	3							7.7	8.1	6.2	441.0									
1256	138	P	676	2	砥石	安山岩					20.8	12.9	8.6	3250.0									
1290	139	P	682	2	砥石	輝緑岩					15.0	11.8	8.4	2290.0									
1357	140	P	730	17	砥石	凝灰岩					8.5	4.4	2.5	94.2									
1276	141	P	730	23	不明	凝灰岩					17.9	15.3	6.6	2220.0									
1154	142	P	726	20	砥石	凝灰岩					8.4	7.5	6.7	475.8									
1387	143	P	726	33	砥石	輝緑岩					29.3	12.5	11.3	6420.0									
1324	144	P	732	1	石臼	安山岩					12.7	8.9	8.6	591.2									
1248	145	P	1641	5	砥石	砂岩					12.6	10.0	5.7	818.5									
1228	146	P	925	2	砥石	安山岩					12.5	6.6	6.6	633.0									
1317	147	P	1631		不明	硬砂岩					18.4	11.3	6.9	1700.0									
1363	148	P	741	6	石造物	砂岩					直径21.0		高さ11.7	6020.0									
1125	149	P	765	6	石臼	安山岩					29.7	16.0	9.0	4680.0									
932	150	SD	259	177	硯	凝灰岩					9.0	6.8	2.2	175.6									
1027	151	SD	259	55	石造物	砂岩?					14.4	7.0	5.8	278.3									
1004	152	SD	259	2	砥石	砂岩					26.9	15.8	13.1	7430.0									
904	153	SD	259	81	砥石	変成岩					6.3	5.6	3.2	149.1									
895	154	SD	259	75	石造物	砂岩					11.2	7.5	3.4	293.6									
751	155	SD	324	25	砥石	砂岩					20.8	9.4	4.2	773.8									

第8表 天王前遺跡石製品観察表

整理 No.	図版 番号	遺構 名	遺構 No.	取り 上げ No.	器 種 名	石材	グリッド		出土層位	法 量			加工・使用				付 着		備 考
							大	小		長cm	幅cm	厚cm	重g	剥離	摩擦	擦痕	その他	ター	
1289	155	P	730	20						16.6	8.3	3.3	352.5						
749	156	SD	324	26	砥石	砂岩				11.9	6.6	3.5	412.2						
765	157	SD	324	16	砥石	凝灰岩				10.4	6.8	4.6	332.2						破砕。
2	158	SE	325		砥石	凝灰岩	C34	3	20	9.0	4.0	1.8	76.0						破砕。
845	159	SD	330		砥石	砂岩	C34	2	13	30.3	17.0	12.3	6430.0						石造物の可能性あり。
860	160	SD	330	23	砥石	花崗岩				19.8	14.3	11.5	3280.0						破砕。表面剥離付着。
844	161	SD	330		石造物	砂岩	C34	2	13	15.3	12.2	9.7	1470.0						破砕。浅鉢または火鉢
862	162	SD	330	26	不明	粘板岩			8	27.0	15.2	7.2	4200.0						破砕。台石？
854	163	SD	330	24	砥石	凝灰岩				11.0	4.8	4.5	253.3						破砕。被熱。
839	164	SD	330	5	砥石	凝灰岩				4.8	4.6	3.3	114.1						破砕。被熱。
830	165	SD	330	4	磨石	砂岩				13.0	5.1	3.9	406.2						破砕。
770	166	SD	337	280	石造物	砂岩		2		16.8	14.1	5.6	1560.0						破砕。
564	167	SD	337	191	砥石	凝灰岩		4		8.1	5.3	4.0	241.9						破砕。裏面に煤が部分的に付着。
551	168	SD	337	196	石臼	不明		4		9.6	7.5	5.8	501.9						破砕。
801	169	SD	337	256	砥石	砂岩		2		24.7	12.5	9.8	4220.0						破砕。
55	170	SD	335①	373	砥石	凝灰岩		2		6.7	4.4	3.3	91.8						小型円盤を素材とする。
371	171	SD	335①	112	砥石	粘板岩		3		10.7	3.1	2.1	133.5						破砕。
132	172	SD	335①	224	砥石	砂岩		3		13.0	4.8	4.8	368.4						破砕。被熱。
35	173	SD	335①	363	砥石	安山岩		2		13.7	13.2	9.2	2460.0						破砕。
490	174	SD	335		石造物	砂岩	C34	10	8	21.4	23.9	9.5	4030.0						SD337, C34, 10(8)上層と接合。五輪塔水輪。
491	174	SD	337		石造物	砂岩	C34	10	8	21.4	23.9	9.5	4030.0						
251	175	SD	335①	248	石造物	砂岩		3		12.9	10.5	4.4	525.6						破砕。石臼。
226	176	SD	335①	312	石造物	砂岩？				15.4	5.3	4.2	357.9						破砕。SD335①, M284, 2層と接合。石臼。
175	177	SD	335①	473	石造物	砂岩？		4		9.9	8.0	5.2	331.2						破砕。五輪塔片？
314	178	SD	335①	442	石造物	砂岩		4		12.5	8.8	6.0	789.1						破砕。正面自然面には部分的に煤付着。上から下に長い刃を削り込み。
95	179	SD	335①	5	砥石	不明		2		10.2	8.2	4.0	463.8						破砕。
1121	180	SX	327		石造物	砂岩	B34	22	9	14.0	9.5	5.0	545.0						破砕。五輪塔水輪。
414	181	SD	335②	37	砥石	硬砂岩				13.6	11.4	5.6	1127.1						破砕。
422	181-a	SD	335②	22	砥石	粘板岩		4		10.7	5.8	2.8	229.5						破砕。タタキはつきりしない。
426	182	SD	335②	35	砥石	砂岩				7.6	4.8	4.3	245.2						破砕。全体に被熱し表面は煤か？
1086	183				石造物	砂岩	B34	21	1	11.8	9.0	6.3	574.4						破砕。陰刻。
1114	184				砥石	凝灰岩	D34	1	3	3.8	2.6	1.0	9.9						破砕。

第10表 天王前遺跡漆器観察表

図版 番号	遺構 名	遺構 No	取り 上げ No	器種 名	材質	グリッド			出土 層位	器形	遺存 率	法 量			備 考
						大	中	小				口径cm	器高cm	底径cm	
185	SD	337	198	漆器	ブナ				4	皿	1/2		8.0	34	高台が全て残っている。
186	SD	337	199	漆器	ブナ				3	皿	3/4		6.6	33	高台が全て残っている。

第11表 天王前遺跡その他の遺物観察表

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構 No	取り 上げ No	器種 名	材質	グリッド			出土 層位	法 量	備 考			
							大	中	小				長cm	幅cm	厚cm
1544	209	SD	337	204	柄	金属				4	9.2	1.3	0.5	28.6	銅製か？。
1545	210	SD	335①		フイコ羽口	土器				不明	6.5	4.9	4.9	95.4	直徑1cm前後に電圧可能か？。
1546	211				指ぬき	金属	C34	13	13	II	2.1	2.0	0.8	2.5	

第9表 天王前遺跡木製品観察表

図版 番号	遺構 名	遺構 No	取り 上げ No	器種 名	材質	グリッド			出土 層位	断面 積	備 考			
						大	中	小				長cm	幅cm	厚cm
187	SD	337	221	底板	スギ				4	29.6	4.0	1.1	35	黒色付着物あり。
188	P	650	3	柱根	クリ					20.6	直径10.4		16	加工痕あり。
189	P	650	5	柱根	クリ					20.4	直径10.6		31	加工痕あり。
190	P	650	4	柱根	クリ					13.8	直径10.3		20	加工痕あり。
191	P	620	5	底板	スギ					29.7	4.5	1.2	36	釘痕あり。
192	P	531	1	柱根	クリ					21.5	直径8.0		9	
193	P	574		柱根	コナラ					17.0	直径8.0		17	加工痕あり。
194	P	582	2	柱根	クリ	C34	7	14		14.4	直径6.6		4	木目不明。
195	P	578		柱根	クリ	C34	7	8		12.0	直径9.6		3	加工痕あり。
196	P	518		柱根	クリ	C35	17	17		43.8	16.3		23	加工痕あり。
197	P	669	1	柱根	コナラ					20.5	10.7		30	木目不明。
198	P	670	4	柱根	クリ					41.2	24.2		32	目達穴。
199	P	865	1	柱根	クリ					38.9	直径11.7		22	
200	P	675	1	柱根	クリ					30.1	直径18.8		15	加工痕あり。
201	P	679		柱根	コナラ					36.8	11.6		21	加工痕あり。目達穴。
202	P	778		柱根	クリ					47.2	9.8		26	加工痕あり。
203	SD	330	10	柱根	ヒノキ				上層	33.4	11.5		27	加工痕あり。
204	SD	330	30	柱根	ヒノキ				上層	42.5	12.0		27	加工痕あり。
205	SB	301-11		柱根	クリ					19.2	10.5		8	加工痕あり。
206	P	676	1	柱根	クリ					56.6	直径21.0		28	加工痕あり。
207	SD	337	184	杭	クリ					62.0	直径4.0		24	加工痕あり。
208	SD	337	164	杭	クリ				2	85.1	直径4.7		25	加工痕あり。

第12表 有明の場遺跡陶磁器・土器観察表

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構 No	取り 上げ No	グリッド			出土 層位	器種	器形	遺存率	法 量			胎土	釉薬その他	技法その他	生産地	時期	備 考	
					大	中	小					口径cm	器高cm	底径cm							
40	212	P	3	1				土師	皿	ほぼ完		7.6	1.5	6.1		内、外体ロクロナデ。底回転ヘラ			14C後	煤付着。	
46	213	SE	35				1	土師	皿	破		(12.5)				口縁ナデ、体圧痕		瀬戸美濃?			
54	214	SE	25	3			3	陶	碗	破		11.6						珠洲		天目茶碗。大窯?。	
43	215	P	46	1			2	土器	槽鉢	1/10		33.0	12.1	12.5		底静止糸			15C前	P 46, No.3, 2層と同一器体。	
44	215	P	46	3			2											珠洲			
53	216	SE	25	3			3	土器	槽鉢	破											
1	224							土器	杯	破											
34	225				E10	11	1	須恵	杯	破				10.6		内、外体ロクロナデ。底回転ヘラ					
82	226				G8	2		須恵	杯	1/5		10.0	2.9	6.4		内、外体ロクロナデ。底回転ヘラ					
29	227				E10	6	16	須恵	有台杯	破				6.3		内、外ロクロナデ				高台貼付け。	
8	228				E10	11	21	須恵	甕	破						外平行タタキ、内青海波					
11	229				B5	1	12	須恵	甕	破						外平行タタキ、内青海波のちハケ					
35	230				B10	22	15	須恵	甕	破						外平行タタキ、内青海波					
72	231				B10	25	13	須恵	甕	破						外平行タタキ、内青海波			珠洲	13C前?	
89	232				B10	24	14	土器	槽鉢	破									珠洲		
7	233				表採			土器	甕	破						外平行タタキ、内圧痕			珠洲		風化著しい。
10	234				B5	2	14	土器	片口鉢	破		(14.0)				内外ロクロナデ			珠洲		
33	235				B4	9	14	土器	甕	破						外平行タタキ、内圧痕			珠洲		
6	236				B4			土器	甕	破						外平行タタキ			珠洲		出土区不明。
12	237				G8	2	15	土器	甕	破						外平行タタキ			珠洲		
71	238				B10	22	15	陶	甕	破						内青海波			肥前	16C末	
4	239				C3	14	8	陶	槽鉢	破						内外鉄軸?			瀬戸美濃	17~18C	
61	240				C4	13	8	白磁	皿	1/4				3.7		外平行タタキ			珠洲		出土区不明。
32	241				G9	2	8	陶	皿	2/3				4.2		底回転糸			船載	15C前	高台置付け露胎。漆接ぎ。
30	242				E10	11	21	陶	皿	1/5		12.0				内、外上釉			肥前	17C初	砂目。
65	243				C4	9	10	陶	甕	破		16.4				内、外体上灰軸			肥前		
57	244				B4	15	16	磁	碗	破		11.0				内外口縁軸			肥前		軸は乳白色。
25	245				B4	19	20	磁	仏飯器	破		8.4				染付			肥前	18C	被熱?。
27	246				B4	14	25	磁	皿	1/5		8.4	1.9	4.4		染付			肥前	18C	

第13表 有明的場遺跡石製品観察表

図版 番号	遺構 No	遺構 No	遺構名	器種 名	石材	グリッド		出土		法量		加工・使用痕		附着		備考	
						大	中	小	層位	長cm	幅cm	厚cm	重g	剥離	磨耗		線痕
217	SD	40	1	砥石	花崗岩				I	13.1	10.7	5.8	1195.6	○			
248				砥石	凝灰岩	C10	2	22	II	10.0	3.9	3.1	170.2	○	○		

第14表 有明的場遺跡木製品観察表

図版 番号	遺構 名	遺構 No	遺構 No	器種 名	材質	グリッド			出土 層位	法量		断面 形状	備考	
						大	中	小		長cm	幅cm			厚cm
218	SE	25	3	杭				3	10.8	2.1			加工痕あり。	
219	SE	35			タケ			3	14.4	4.5			締め痕と線状痕あり。	
220	SE	35			タケ			3	23.1	2.8			締め痕あり。	
221	P	33		礎板	クリ				22.1	6.7			図版番号222と同一個体。	
222	P	33		礎板	クリ				24.8	9.8			木目不明。図版番号221と同一個体。	
223	P	38		柱根	クリ				24.1	13.5			加工痕あり。	
247				底板	ヒノキ	E10	21	11	2	12.9	8.2	0.6		45

第15表 石川遺跡陶磁器・土器観察表

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構 No	器種	出土 層位	グリッド			器形	遺存率	法量		胎土	技法その他		備考
						大	中	小			口径cm	器高cm		底径cm	内面	
102	249	SE	1	土師	3			碗	1/5	10.0	2.8	6.2	長、金雲母、赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転糸		
108	250	SE	1	土師	2			碗	1/5		4.4	4.4	ナミツ	内、外体ロクロナデ。底回転糸		
74	251	SE	1	須恵	1			瓶	破			13.7	白・黒粒	ロクロナデ		
71	252	SE	1	須恵	3			瓶	破			16.8	微細な白粒多	ロクロナデ		
118	253	SE	1	須恵	2			甕	破	22.6			白粒	ロクロナデ		
77	254-1	SK	2	須恵	1			横瓶	破	12.9	24.6		微細な黒・白粒多	口縁ナデ。内体青海波。外体平行タタキ後カキ目	SK2,3層、表採と接合。図版254-2と同一個体。	
79	254-2	SK	2	須恵	1			横瓶	1/5					行タタキ後カキ目	SK2,3,4層、L8,8(2),7(2),12(2)皿層、L9,9(2)層と接合。	
115	255	SK	2	須恵	3			甕	破				長、英	外平行タタキ。内青海波		
122	256	SK	2	須恵	1			甕	破				白粒、英	外平行タタキ。内平行	断面に黒色付着物。	
114	257	SK	2	須恵	3			甕	破				長	外平行タタキ。内平行	外面煤付着。	
117	258	SK	2	須恵	3			甕	破				白粒、英	外平行タタキ。内波付状		
124	259	SK	2	須恵	3			甕	破				長、英	外平行タタキ。内青海波		
39	265	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	1/4	8.7	2.4	4.8	赤色泥岩、長少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外風化。
10	266	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	1/5	9.0	3.0	3.3	長、赤色泥岩微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外風化。
44	267	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	1/5			3.5	(長・赤色泥岩)少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外風化。
26	268	SD	1	土師	1	L10	6	23	碗	1/5	9.0	3.1	4.2	長、赤色泥岩、白色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外風化。
37	269	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	1/5	9.7	2.6	3.9	赤色泥岩、長少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
5	270	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	完	9.5	2.6	5.0	赤色泥岩、(英・長)微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
98	271	SD	1	土師	1	L10	6	25	碗	1/5	9.5	2.5	4.5	赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
35	272	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	1/5	9.7	3.3	3.5	赤色泥岩、長少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
64	273	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	1/3	10.2	3.1	4.8	粗礫多	内、外体ロクロナデ。底回転糸	SD1, L9, 10(2)皿層と接合。
29	274	SD	1	土師	1	L9	10	25	碗	1/2	10.0	2.4	4.8	赤色泥岩、長少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	SD1, L10, 6(2)I層と接合。

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構 No	グリッド			出土 層位	器種	器形	遺存率	法 量		胎 土	技法その他		備 考
				大	中	小					口径cm	器高cm		底径cm	内 面	
91	275	SD	1	L10	6	23	1	土師	碗	1/4	10.2	2.6	5.5	長、金雲母	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
14	276	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/3	10.0	2.9	6.5	(長・赤色泥岩)微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
20	277	SD	1	L10	6	22	1	土師	碗	1/2	10.2	3.3	5.4	(長・赤色泥岩)微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	底部は極めて薄い。
93	278	SD	1	L10	6	23	1	土師	碗	1/4	10.4	2.4	6.5	長	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
125	279	SD	1	L9	10	25	3	土師	碗	1/5	10.0			長、赤泥岩	内、外体ロクロナデ	SD1, L9, 10(Ⅱ) I層、L9, 10(Ⅱ) III層と接合。
25	280	SD	1	L10	6	22	1	土師	碗	1/4	10.7	2.7	5.0	(長・赤色泥岩)少量含む	内、外体ロクロナデ。底回転糸	口縁内面に煤附着。内外風化。
24	281	SD	1	L10	6	22	1	土師	碗	1/4	10.7	3.2	5.1	チミツ	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
58	282	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	1/5	10.9	3.3	6.3	長少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	青灰色で須恵器の色調に似る。L9, 10(Ⅱ) III層と接合。
2	283	SD	1	L9	15	5	1	土師	碗	1/3	10.9	4.0	5.9	長少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	器面全体風化著しい。加熱か？
31	284	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/3	12.3	3.4	6.1	赤色泥岩微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内面に煤附着だが風化のため部分的に残るのみ。SD1, L10, 6(Ⅱ) I層と接合。
45	285	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/2	12.6	3.4	6.1	赤色泥岩、長少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	風化著しい。SD1, L9, 10(Ⅱ) I層と接合。
34	286	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	略完	12.0	3.6	6.0	赤色泥岩、長	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
13	287	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	1/2	12.2	3.9	5.6	(長4mm台・赤色泥岩)少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
89	288	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/4	13.0	3.4	6.0	長、赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
33	289	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/3	13.1			金雲母、長、赤色泥岩少量	内、外体ロクロナデ	SD1, L10, 6(Ⅱ) I層と接合。
27	290	SD	1	L10	6	22	1	土師	碗	1/3	(13.2)	(3.9)	5.9	金雲母、長、チャート？	内外体ロクロナデ。底回転糸	全体的に風化著しい。
16	291	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/3	12.9	3.6	5.4	赤粒、(白色泥岩・金雲母)微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	体部外面は風化。
6	292	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	3/4	14.0	4.0	5.8	海面骨針、チミツ	内、外体ロクロナデ。底回転糸	外面煤附着。
3	293	SD	1	L9	15	5	1	土師	碗	1/5	13.2	4.3	5.9	チミツ	内、外体ロクロナデ。底回転糸	二次焼成か？
30	294	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/3	13.2	3.8	5.6	チミツ	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内面の一部に煤附着。全体にゆがんでいる。
17	295	SD	1	L9	10	24	3	土師	碗	略完	13.7	4.3	6.2	(長・白色泥岩・赤色泥岩)少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外煤附着。SD1, L9, 10(Ⅱ) I層、SD1, L10, 6(Ⅱ) I層と接合。 ゆがんでいる。
90	296	SD	1	L10	6	23	1	土師	内黒碗	1/5	15.4			長、金雲母、赤色泥岩	外体ロクロナデ。内体ミガキ？	風化著しい。
28	297	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	略完	15.2	5.6	7.5	(長・赤色泥岩)微量	内外体ロクロナデ。底回転糸	内外面に暗褐色の塗りが施されるか？煤の可能性あり。外面は風化。
41	298	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	1/5			4.6	白色泥岩微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
19	299	SD	1	L10	6	25	1	土師	碗	1/5			5.2	チミツ	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外面に煤附着。L10, 6(Ⅱ)付近層位不明と接合。
36	300	SD	1	L10	6	21	1	土師	碗	1/4			6.0	赤色泥岩、長5mm少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
92	301	SD	1	L10	6	23	1	土師	碗	1/4			7.4	長、赤泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
67	302	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	略完	9.9	2.4	5.5	赤色泥岩、長微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外面に煤附着。底部は極めて薄い。L9, 10(Ⅱ) III層と接合。
12	303	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	略完	11.8	3.7	5.1	茶色泥岩、チャート6mm、砂岩6mm少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
38	304	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	略完	12.6	4.1	5.6	赤色泥岩微量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	
7	305	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	略完	10.9	3.0	7.0	金雲母、長、チャート、赤色泥岩少量	内、外体ロクロナデ。底回転糸	内外面に煤附着。
70	306	SD	1	L9	10	25	1	土師	碗	略完	14.0	4.4	6.0	チミツ	内、外体ロクロナデ。底回転糸	全体的にゆがんでいる。

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構 No	グリップ			出土 層位	器種	器形	遺存率	法 量		胎 土	技法その他		備 考
				大	中	小					口径cm	器高cm		底径cm	内 面	
97	307	SD	1	L10	6	21	1	土師	内黒碗	破	13.3		チミツ	外体クロロナデ。内体ミガキ		
94	308	SD	1	L9	15	5	1	土師	内黒碗	1/5		6.3		外体クロロナデ。内ミガキ。底回転糸		
22	309	SD	1	L10	6	21	1	土師	有台碗	1/4	15.7	4.7	長、赤色泥岩	内、外クロロナデ。底回転糸 高台貼付け。		
32	310	SD	1	L10	6	22	1	土師	有台碗	1/5		7.5	赤・白色泥岩、長微量	内、外クロロナデ。底回転糸 高台貼付け。		
15	311	SD	1	L9	10	25	1	土師	黒台碗	1/5		6.1	長少量	外体クロロナデ。内ミガキ。底回転糸	L9,10Ⅲ層、L9,10Ⅱ層位不明と接合。高台貼付け。	
100	312	SD	1	L9	10	25	1	土師	有台碗	1/5		7.0	長、赤色泥岩	内、外体クロロナデ。底回転糸	高台貼付け。	
18	313	SD	1	L10	6	21	1	土師	有台碗	1/4	13.5	(4.3)	(8.3) 赤色泥岩、長微量	内、外体クロロナデ。底回転糸	内外面に煤付着。SD1, L10, 6ⅡI層と接合。高台貼付け。	
88	314	SD	1	L9	15	5	1	土師	小型甕	破			8.0	長、赤泥岩	内、外体クロロナデ。底回転糸	
139	315	SD	1	L9	15	5	1	須恵	甕	破				外平行タタキ。内青濤波		
138	316	SD	1	L9	10	25	1	須恵	甕	破				外平行タタキ。内青濤波		
137	317	SD	1	L9	10	25	1	須恵	甕	破				外平行タタキ。内青濤波		
23	319	SD	1	L10	6	23	2	土師	碗	4/5	9.9	2.4	5.5 (長、赤色泥岩)少量	内、外体クロロナデ。底回転糸	底部は非常に薄い。意識的に穿孔か否か不明。	
21	320	SD	1	L10	6	23	2	土師	碗	略完	10.5	2.9	5.1 (長、赤色泥岩)微量	内、外体クロロナデ。底回転糸		
103	321	SD	1	L10	6	22	2	土師	碗	破片	10.8			内、外体クロロナデ		
109	322	SD	1	L10	6	22	2	土師	碗	1/5			4.0	長、赤色泥岩	内、外体クロロナデ。底回転糸	
106	323	SD	1	L10	6	21	2	土師	碗	1/5			5.2	長、金雲母	内、外体クロロナデ。底回転糸	
40	324	SD	1	L10	6	25	3	土師	碗	1/4	(10.8)	(2.6)	5.7	長、チャート	内、外体クロロナデ。底回転糸	
42	325	SD	1	L10	6	25	3	土師	碗	1/3	12.0	3.6	6.7 (長・赤・白色泥岩)少量	内、外体クロロナデ。底回転糸	内外風化。	
1	326	SD	1	L9	15	3	3	土師	碗	3/4	12.5	3.8	5.6 赤・白色泥岩、長微量	内、外体クロロナデ。底回転糸		
87	327	SD	1				3	土師	碗	略完	13.0	3.9	5.8	長、赤・白色泥岩	内、外体クロロナデ。底回転糸	
8	328	SD	1	L9	15	5	3	土師	碗	完	13.4	5.0	5.7	長、金雲母、赤・白色泥岩	内、外体クロロナデ。底回転糸	内外風化。
43	329	SD	1	L10	6	25	3	土師	碗	1/3			6.5 (長・赤色泥岩)微量	内、外体クロロナデ。底回転糸	風化著しい。	
104	330	SD	1	L9	10	25	3	土師	碗	1/3			4.8	長、金雲母	全体的に若干風化。	
110	331	SD	1	L9	10	25	3	土師	碗	1/5			7.0	白色泥岩	全体的に風化。	
105	332	SD	1	L10	6	25	3	土師	碗	1/5			9.8	長、白色泥岩	全体的に風化。	
107	333	SD	1	L9	10	25	3	土師	碗	1/5			5.2	赤・白色泥岩	全体的に風化。	
9	334	SD	1	L10	6	25	3	土師	内黒碗	1/5	13.1	5.8	7.2	長少量	内ミガキ。外体上クロロナデ。 外体下ケズリ。底ケズリ	
69	335	SD	1	L9	10	25	3	土師	碗	4/5	12.6	4.2	5.9	長、白・赤色泥岩	内外面に煤付着。	
11	336	SD	1	L9	15	5	3	土師	碗	完	14.3	4.2	6.1	チミツ	内外面に煤付着。	
112	337	SD	1	L10	6	21	3	土師	小型甕	破	13.6			長、英	風化著しい。	
4	338	SD	1	L9	15	4	3	土師	甕	破	20.4			長多量	内外体カキ目	
113	339	SD	1	L9	15	3	3	土師	甕	破	26.0			長、赤色泥岩	非クロコ。	
116	340	SD	1	L10	6	22	3	土師	甕	破	18.6			長、英	非クロコ。口縁部に煤付着。	
101	341	SD	1	L9	15	5	3	土師	甕	破			9.8	チャート、長、粘板岩	非クロコ。風化著しい。	

第15表 石川遺跡陶磁器・土器観察表

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構 No	グリップ			出土 層位	器種	器形	遺存率	法 量		胎 土	技法その他		備 考
				大	中	小					口径cm	器高cm		底径cm	内 面	
119	341-a	SD	1	L10	6	25	3	土師	羹	破	25.0		長、赤色泥岩	外体ハケ目	非ロクロ。風化著しい。	
96	342	SD	1	L9	10	24	3		壺?	破			長、英多量、泥岩	内外体ハケナデ	非ロクロ。	
73	347	SD	1	L9	15	4	5	須恵	有台杯	4/5	14.1	4.7	長	内、外体ロクロナデ。底回転へラ	転用靨。器面全体がなかりゆがんでいる。	
144	348	SD	1	Ⅱ			5	土師	碗	4/5	10.0	3.3	4.0	赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転系	内外に部分的に煤附着。内面剥落。
142	349	SD	1				5	土師	碗	1/3	10.3	3.3	4.8	赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転系	内外ともに風化著しく剥落している。
141	350	SD	1				5	土師	碗	1/2	9.7	3.6	3.6	長	内、外体ロクロナデ。底回転系	内面はなめらか。
143	351	SD	1				5	土師	碗	1/4			3.4	赤・白色泥岩	内外とも剥落。	
140	352	SD	1	Ⅱ			5	土師	碗	完	10.9	3.1	5.9	長	内、外体ロクロナデ。底回転系	外面の一部に煤附着。内面はなめらか。
72	353	SD	1				不明	須恵	無台杯	1/5	11.1	2.9	7.5	白粒(長?)少量	内、外体ロクロナデ。底回転系	底部中央に煤附着。佐渡産か?
84	354	SD	1				不明	須恵	杯	1/5	13.2			白粒(長?)少量	内外体ロクロナデ	佐渡産か?
96	355	SD	1				不明	土師	碗	1/4			6.0	長、金雲母	内、外体ロクロナデ。底回転系	底部の一部に煤附着。風化著しい。SD1, L10, 6212層と接合。
85	356	SD	1				不明	須恵	無台杯	破片			6.7	英、長	内、外体ロクロナデ。底回転系	
82	357			L7	15	1	Ⅲ	須恵	杯	破片	(11.6)			白粒(長?)多量	内、外体ロクロナデ	
75	358			L9	15	5	Ⅲ	須恵	壺	1/5	11.6			長、英、黒粒	内、外体ロクロナデ	L9, 624層位不明と接合。外面自然軸。
83	359			L8	12	3	Ⅱ	須恵	瓶	破			22.1	白・黒粒多量	L8, 723Ⅱ層と接合。	
126	360			L9	8	24	Ⅱ	須恵	羹	破				長、英	外平行タタキ。内青海波	外面の一部摩耗。砥石として使用か?。
135	361			L8	8	25	Ⅲ	須恵	羹	破				長、英	外平行タタキ。内平行?	
128	362			L8	9	24	Ⅲ	須恵	羹	破				長、英	外平行タタキ。内平行	
131	363			L9	15	5	Ⅲ	須恵	羹	破				長、英	外平行タタキ。内青海波	
99	364			L9	10	25	Ⅰ	土師	碗	1/5			3.5	長、英、赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転系	
62	365			L9	10	25	Ⅲ	土師	碗	1/4	9.5	3.3	3.7	(長・赤色泥岩)少量	内、外体ロクロナデ。底回転系	
49	366			L10	6	21	Ⅲ	土師	碗	1/2	10.5	3.5	4.0	長、赤色泥岩少量	内、外体ロクロナデ。底回転系	
48	367			L10	6	21	Ⅲ	土師	碗	1/5	9.3	2.9	3.8	(赤・白色泥岩)微量	内、外体ロクロナデ。底回転系	
57	368			L9	15	5	Ⅲ	土師	碗	1/4	10.6	3.2	5.5	チミツ、赤色泥岩微量	内、外体ロクロナデ。底回転系	底部は薄い。L9, 624層位不明と接合。
61	369			L9	10	25	Ⅲ	土師	碗	1/3	11.2	3.6	5.0	(長・赤・白色泥岩)少量	内、外体ロクロナデ。底回転系	内外風化。
55	370			L9	15	4	Ⅲ	土師	碗	1/3	11.0	4.0	5.0	チミツ	内、外体ロクロナデ。底回転系	L9, 15(5)Ⅲ層と接合。
52	371			L10	6	21	Ⅲ	土師	碗	1/4	10.5	2.0	4.7	(金雲母・砂礫)極少量	内、外体ロクロナデ。底回転系	
68	372			L9	10	25	Ⅱ	土師	碗	完	11.0	2.4	5.5	(長・チャート・赤色泥岩)少量	内、外体ロクロナデ。底回転系	内外風化。L9, 10(5)Ⅲ層と接合。
80	373			L9	10	25	Ⅲ	土師	碗	1/2	10.6	2.9	5.8	長、赤・白色泥岩少量	内、外体ロクロナデ。底回転系	底部極めて薄い。内外風化。
123	374			L10	6	21	不明	土師	碗	1/4	10.4	2.8	6.0	赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転系	タール附着。灯明。
47	375			L10	6	21	Ⅲ	土師	碗	1/2	(13.4)	(3.2)	5.5	長8mm、砂岩13mm、赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転系	外面風化。
60	376			L9	10	25	Ⅲ	土師	碗	1/4	12.3	3.6	6.0	チミツ、赤色泥岩微量	内、外体ロクロナデ。底回転系	内外風化。
46	377			L9	10	24	不明	土師	碗	1/2	(13.3)	(3.7)	6.5	(長・赤色泥岩)微量	内、外体ロクロナデ。底回転系	
111	378			L10	6	21	Ⅲ	土師	碗	1/4	14.4	4.3	6.4	長・赤色泥岩	内、外体ロクロナデ。底回転系	

整理 No	図版 番号	遺構 名	遺構 No	グリッド		出土 層位	器種	器形	遺存率	法 量			胎 土	技法その他		備 考
				大	小					口径cm	器高cm	底径cm		内 面		
54	379			L9	15 5	Ⅲ	土師 碗	碗	1/4	16.4	6.3	7.7	黒雲母、長多量	内、外体クロロナデ。底回転糸	底部内外面に煤付着。	
121	380			L9	10 25	Ⅲ	土師 碗	碗	1/5	14.4			(長・赤色泥岩)微量	内、外体クロロナデ		
50	381			L10	6 21	Ⅲ	土師 碗	碗	1/4			4.6	(長・赤色泥岩)微量	内、外体クロロナデ。底回転糸		
65	382			L9	10 24	Ⅲ	土師 碗	碗	1/4			4.5	(長・赤色泥岩)微量	内、外体クロロナデ。底回転糸	内外風化。	
53	383			L9	15 5	Ⅲ	土師 碗	碗	1/5			4.9	(長・赤色泥岩)少量	内、外体クロロナデ。底回転糸	L9, 15(4)Ⅲ層と接合。	
129	384			L9	11 5	Ⅱ	土師 内黒碗	碗	破	12.0			赤ミツ	内ミガキ。外クロロナデ。		
127	385			L10	6 21	Ⅲ	土師 内黒碗	碗	破	14.9			赤ミツ	内ミガキ。外クロロナデ。		
56	386			L9	15 5	Ⅲ	土師 有台碗	碗	1/5			7.8	赤ミツ	内、外体クロロナデ。底回転糸	内外風化。底面外面に油しみこみあり。L9, 10(4)Ⅲ層と接合。	
51	387			L10	6 21	Ⅲ	土師 有台碗	碗	1/5			8.2	赤ミツ	内、外体クロロナデ。底回転糸	内面煤付着。	
130	388			L9	10 25	Ⅲ	土師 有台碗	碗	1/5			6.0	赤色泥岩	内、外体クロロナデ。底回転糸	内外風化。	
120	389			L10	6 21	Ⅲ	土師 有台碗	碗	破			6.8	赤ミツ	内、外体クロロナデ。底回転糸	内外風化。	
132	390			L9	10 24	Ⅲ	土師 有台碗	碗	破			7.5	長・赤色泥岩	内、外体クロロナデ。底回転糸	風化著しい。色調全体的に赤っぽい。	
66	391			L9	10 25	Ⅱ	土師 碗	碗	略完	12.1	3.7	6.2		内、外体クロロナデ。底回転糸	内外面に煤付着。	
63	392			L9	10 25	Ⅲ	土師 碗	碗	1/3	12.5	3.6	6.4	(長・赤・白色泥岩)少量	内、外体クロロナデ。底回転糸	底面外面に煤付着。	
59	393			L9	15 5	Ⅲ	土師 碗	碗	1/3	9.2	2.4	4.5		内、外体クロロナデ。底回転糸	底面外面に煤付着。L9, 10(4)Ⅲ層と接合。	
145	394			L9	9 24	Ⅱ	土師 碗	碗	破					内、外体クロロナデ。底回転糸	内面漆?。	
133	395			L8	14 3	Ⅲ	土師 榑鉢	榑鉢	破				長			
78	396			L9	5 23	Ⅲ	陶 皿	皿	1/5			4.4		高台ケズリ	砂目。皿付け回転糸切り。内、外上体灰釉。肥前。17C初。	
81	397			L9	7 22	Ⅱ	陶 鉢	鉢	1/5			13.6		外体下底ケズリ	刷毛目鉢。肥前。17C	

第16表 石川遺跡木製品観察表

図版 番号	遺構 番号	遺構 No.	器種 名	材質	グリッド		出土		法 量			樹種 同定	備 考
					大	中	小	長cm	幅cm	厚cm	重g		
343	SD	1	17 底板	スギ			3	24.5	7.1	0.9		38	
344	SD	1	17 底板				3	21.9	6.2	0.8			
345	SD	1	2 底板	スギ			3	12.7	12.7	1.0		39	
398			底板	ヒノキ	L10	6	21	11.9	11.8	0.9		40	黒色付着物。釘穴あり。
399			下駄	ヒノキ	L9	6	23	12.9	7.1	2.5		41	工具痕あり。肥前。図版98併載。
400			角材		L9	10	24	7.3	8.2	2.2			
401			杭		L8	10	25	14.6	4.6				

第17表 石川遺跡石製品観察表

整理 No.	図版 番号	遺構 番号	遺構 No.	器種 名	石材	グリッド			法 量			加工・使用痕 剥離 磨耗 細線 その他	着 付 所 の 他	備考	
						大	中	小	出 土 層 位	長cm	幅cm				厚cm
1	290	SK	2	砥石	凝灰岩				3	5.4	2.6	2.1	24.4	○	
2	251	SK	2		凝灰岩				3-4	4.5	2.3	0.8	8.0	○	砥石?
4	254	SK	2		変成岩				2	14.1	7.0	2.7	346.9	○	
5	346	SD	1	25	輝緑岩				3	43.5	22.5	15.5	147.1		
6	403				凝灰岩	L9	10	25	Ⅲ	2.8	2.2	0.6	3.1	○	破砕。

第18表 石川遺跡その他の遺物観察表

整理 No.	図版 番号	遺構 番号	遺構 No.	器種 名	石材	グリッド			出 土			法 量			備 考
						大	中	小	層 位	長cm	幅cm	厚cm	重g		
3	262	SK	2		鉄				2	2.5	1.7	0.8	8.1	金属塊。	
67	263	SK	2	ファイゴ羽口	土器				3・4	5.2	3.5	1.9	23.9	長石を多量に含む。	
134	318	SD	1	ファイゴ羽口	土器	L9	10	25	Ⅰ	5.7	6.3	3.1	71.4	端部溶解。	
80	402			ファイゴ羽口	土器	L9	10	25	Ⅲ	6.6	5.2	3.0	69.8	長石少量。赤石器。端部溶解。	

観察表の表示について

「グリッド」 大グリッドのローマ数字は算用数字とした。小グリッドは () なしで表示している。遺構出土のものは基本的に出土グリッドの表示を省いている。

「遺存率」 破片の大きさは1/5まで表示し、それ以下の小さな破片については「破」とした。

「法量」 () 付の計測値は不確実のものである。

「胎土」 「白・黒粒」はそれぞれの色調の粒であるが、鉱物名は不明である。「白・赤色泥岩」は非常に軟質な泥の様な塊のことである。「長」は長石、「英」は石英のことである。

「釉薬その他」・「技法その他」 「内」は内面、「外」は外面、「体」は体部、「底」は底部、「上」は上半部、「下」は下半部などと部位をあらわし、それぞれを組み合わせて表現した。

「回転糸」は回転糸切りのことである。釉の種類で不明瞭なものは「釉」表現し、備考で色調等を補足した。

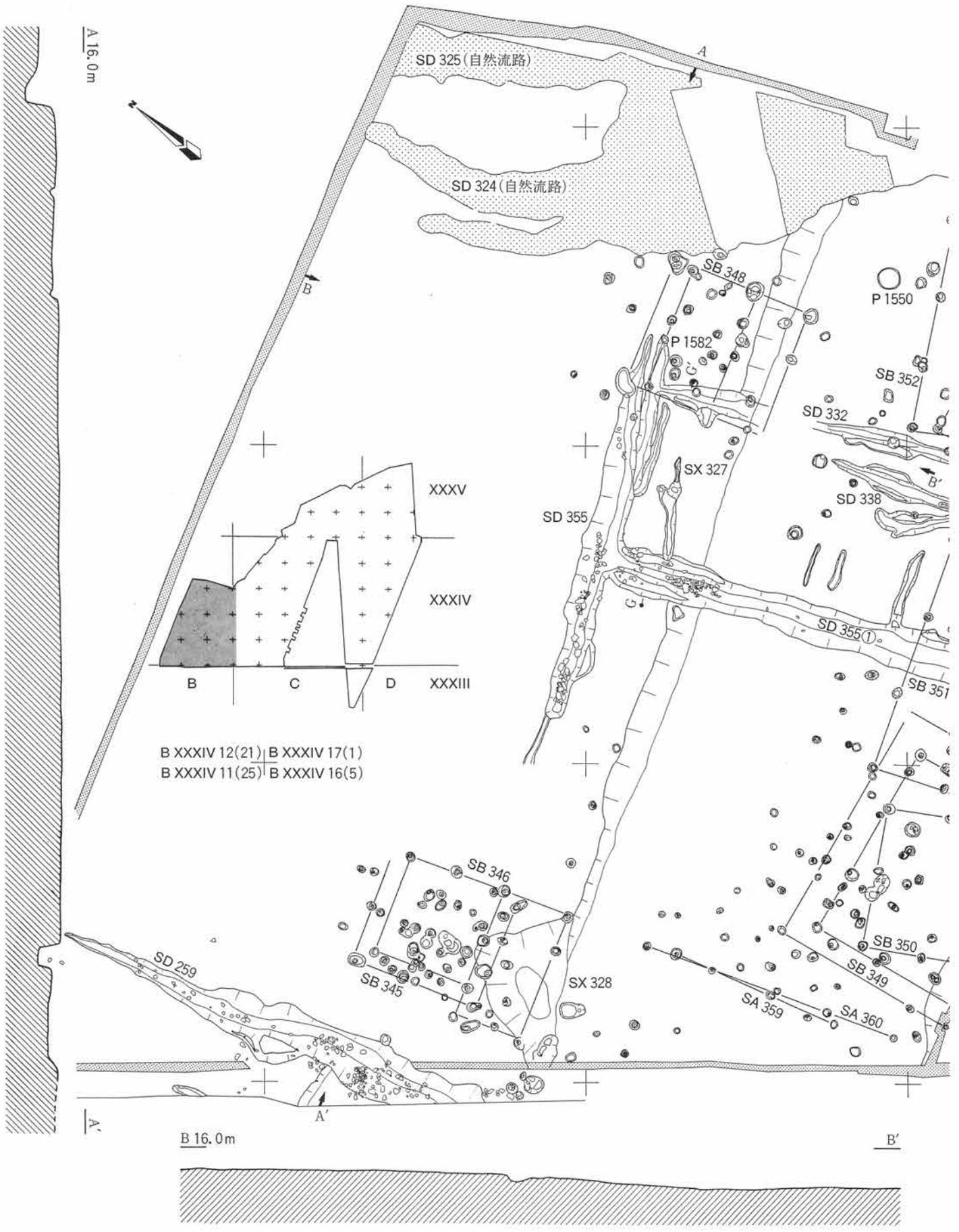
「生産地」 「舶載」は外国産のものをあらわし、備考で補足した。

「時期」はなるべく世紀(C)であらわした。「初」は初頭、「前」は前半、「後」は後半、「末」は末葉のことである。

肥前陶磁器の編年観は、大橋(1989)による。
 珠洲焼の編年観は吉岡、(1994)による。

版 圖

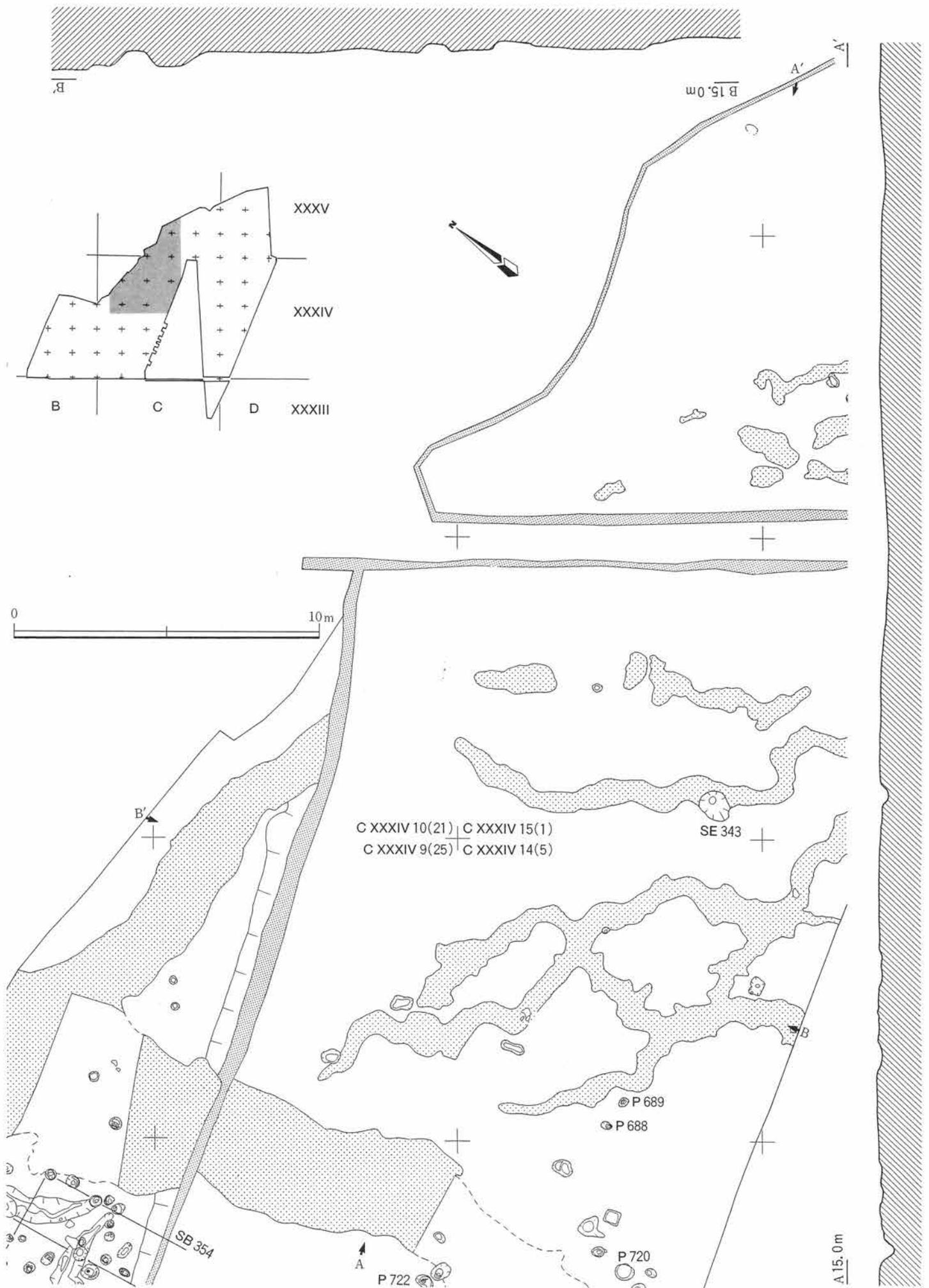


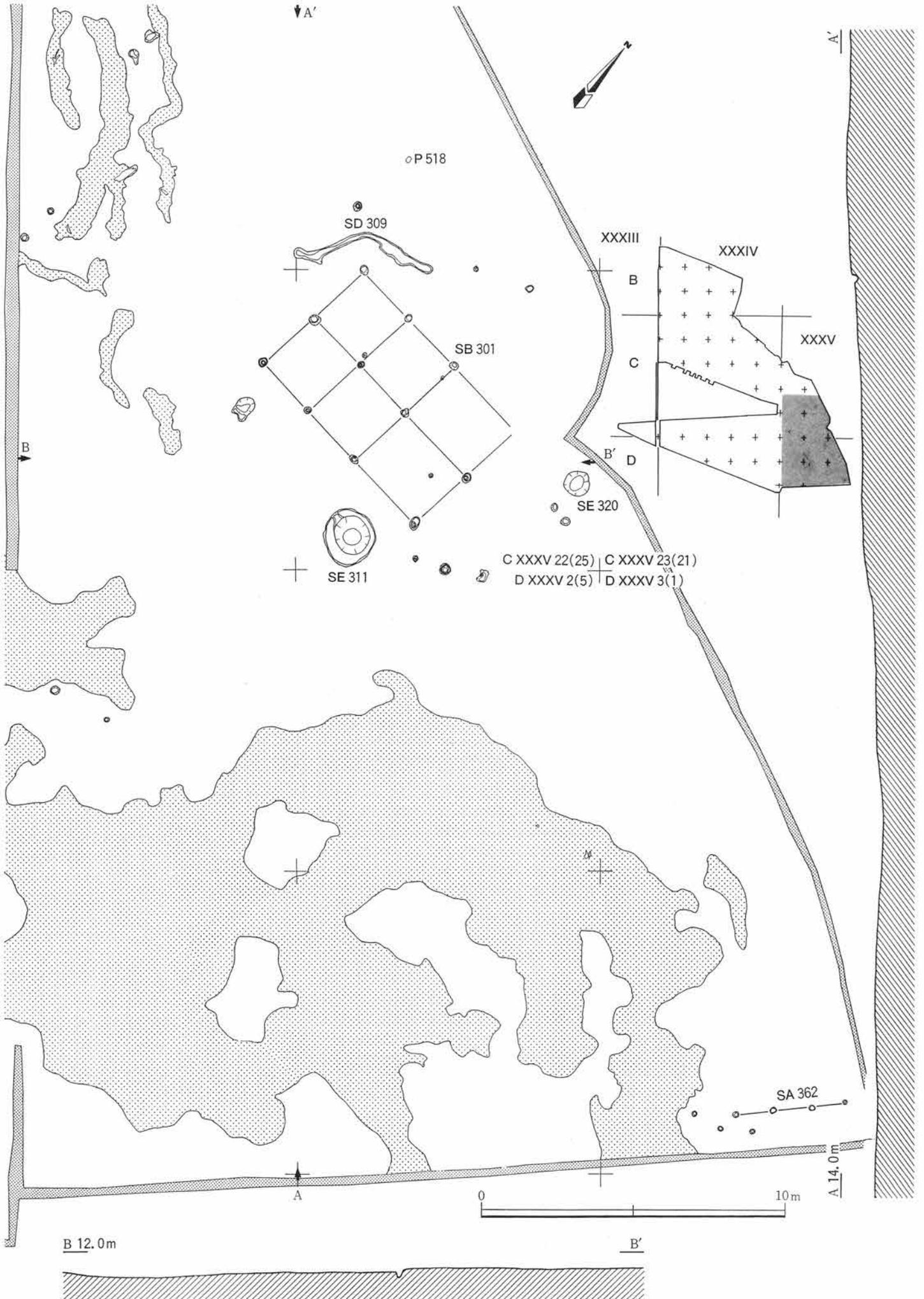


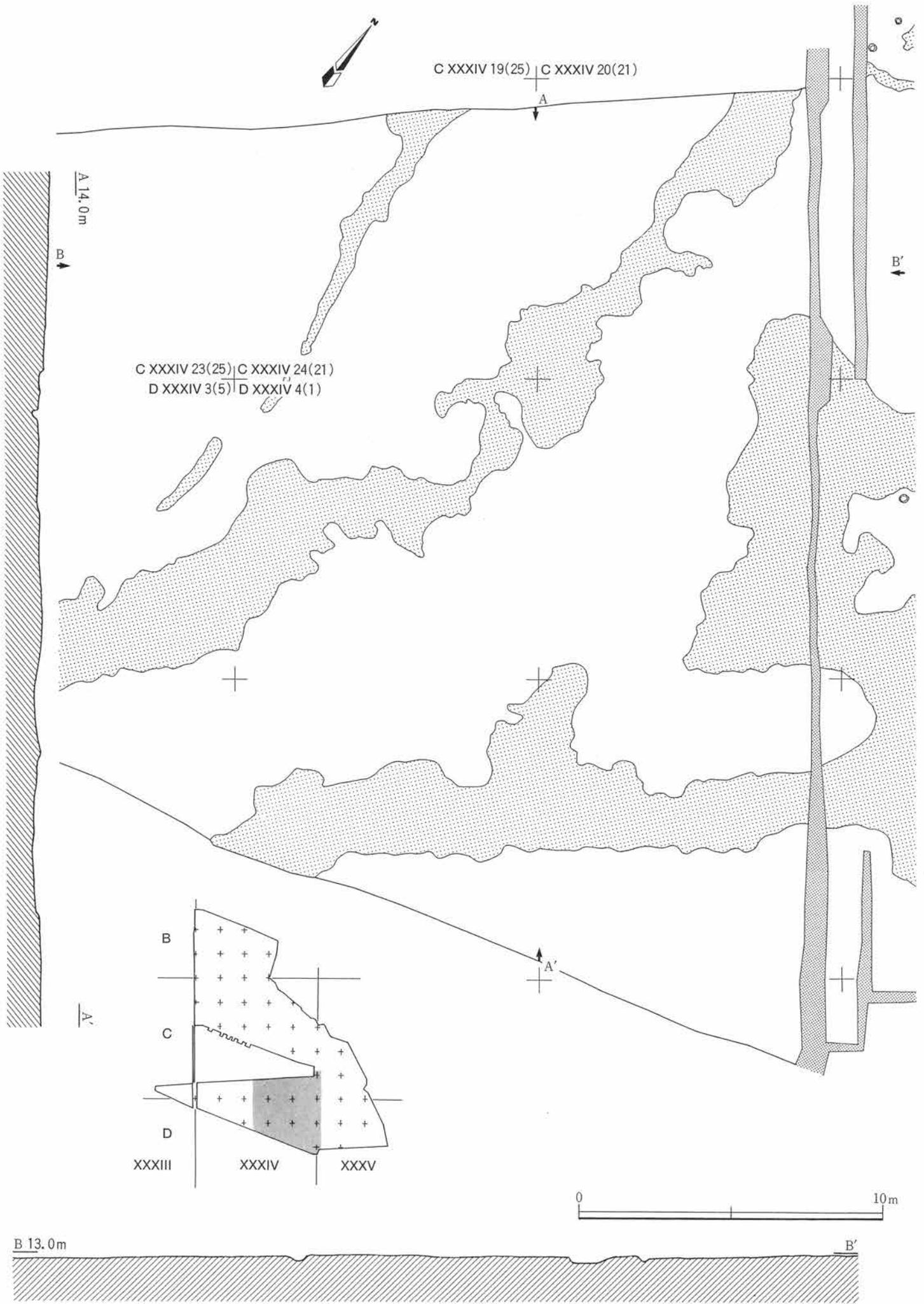
B XXXIV 12(21) | B XXXIV 17(1)
 B XXXIV 11(25) | B XXXIV 16(5)

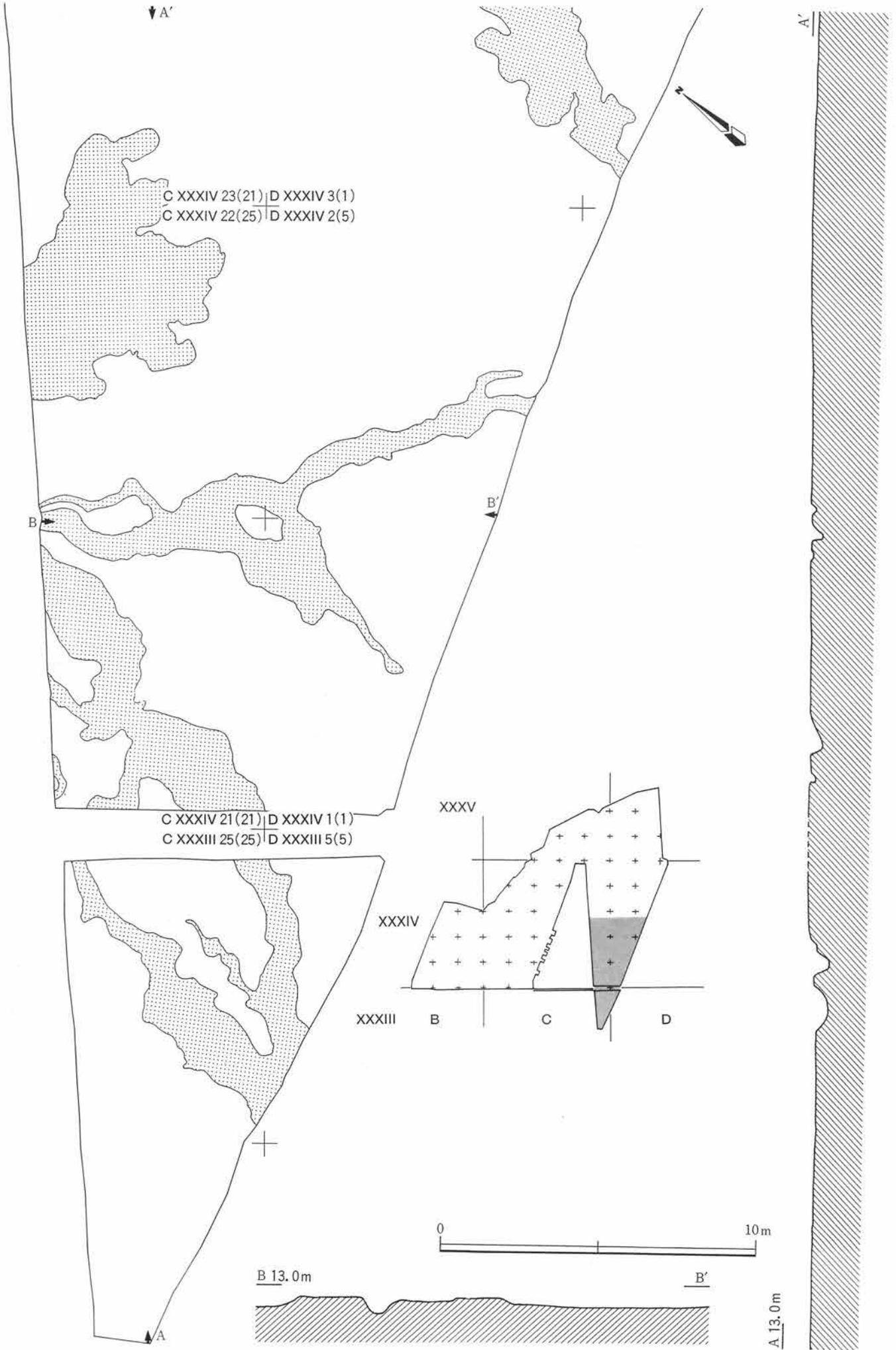
0 10m

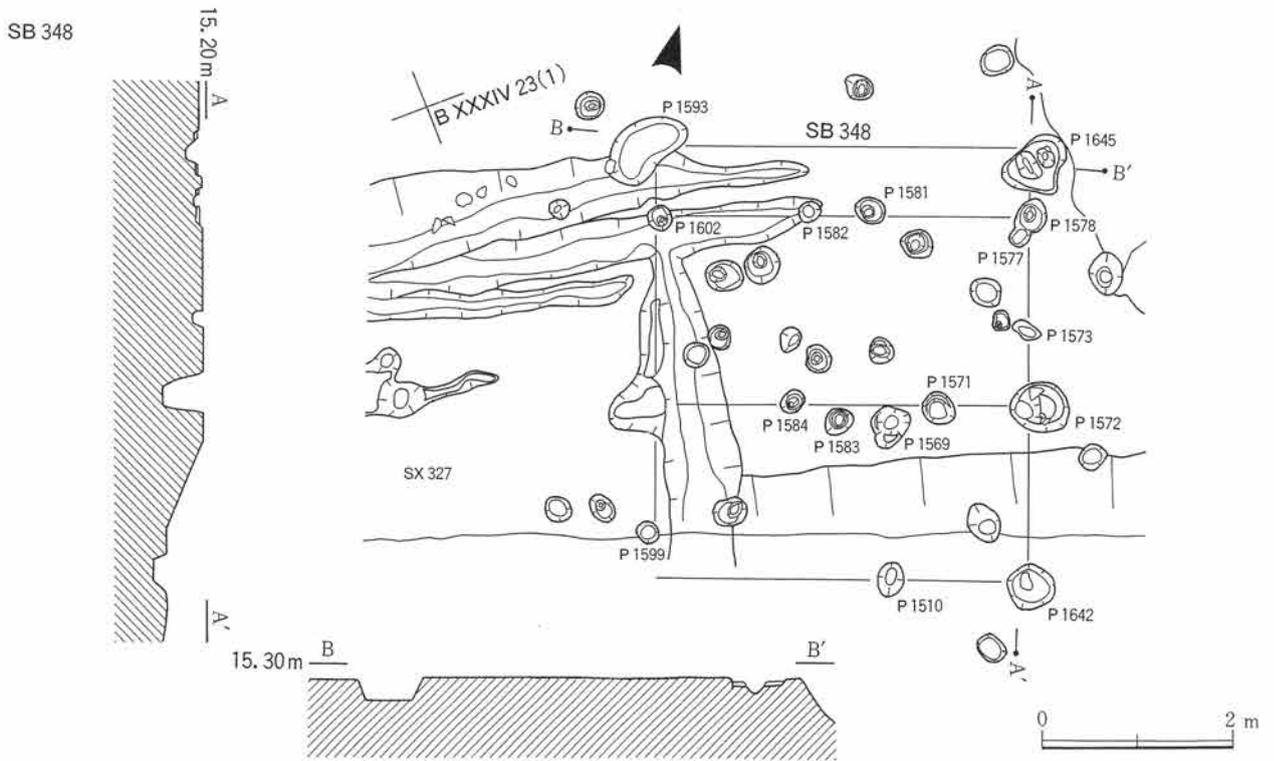
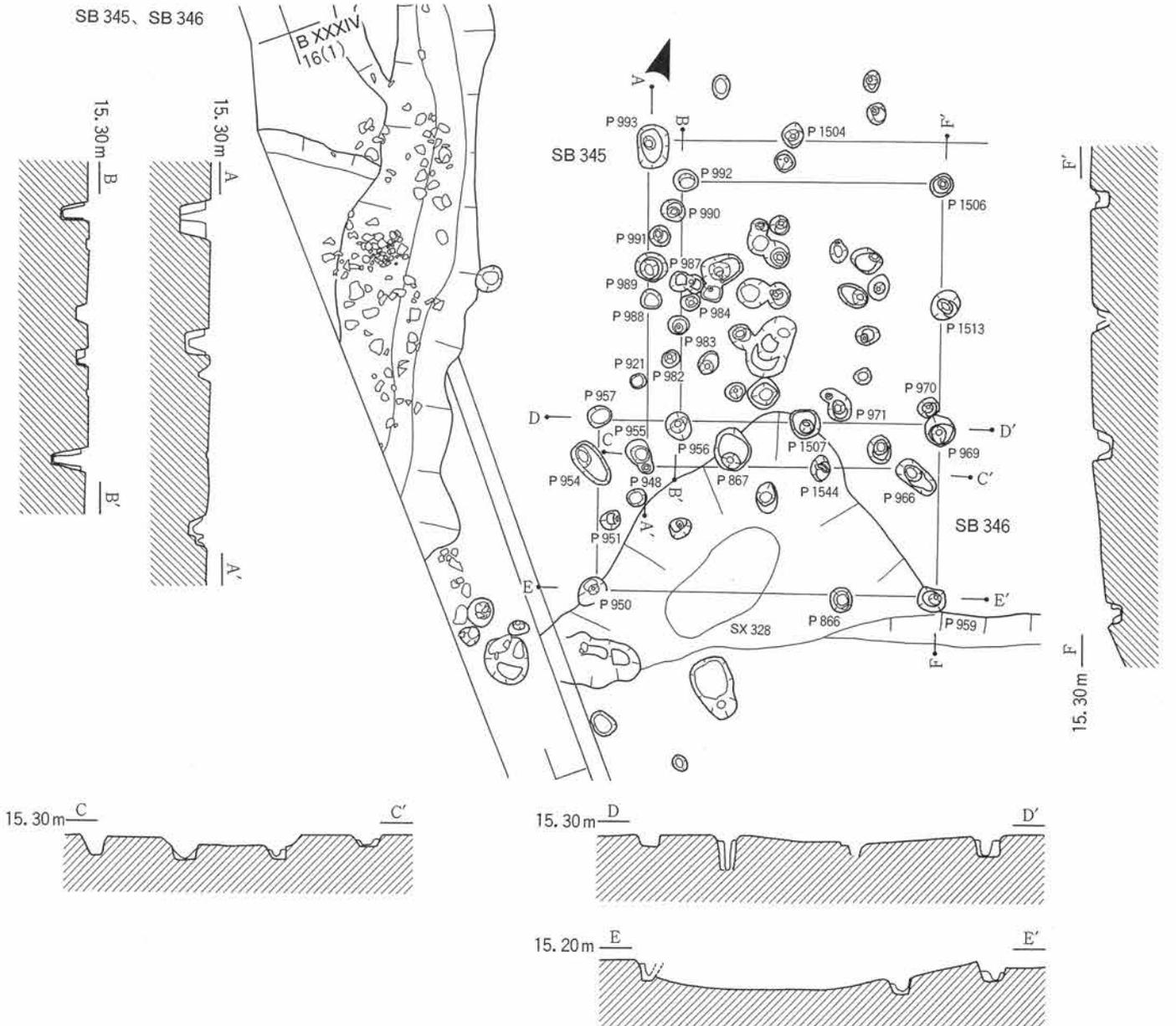


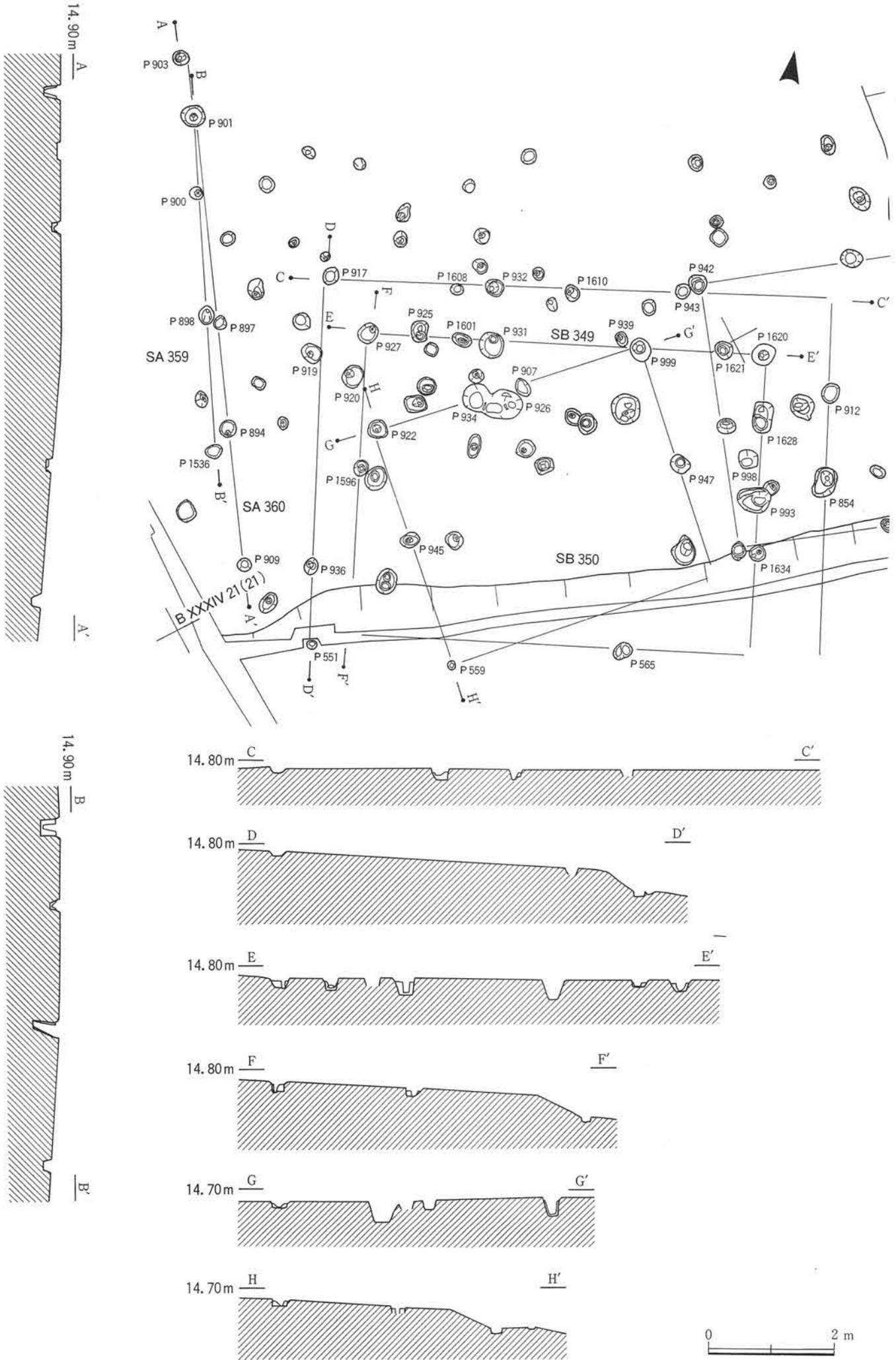




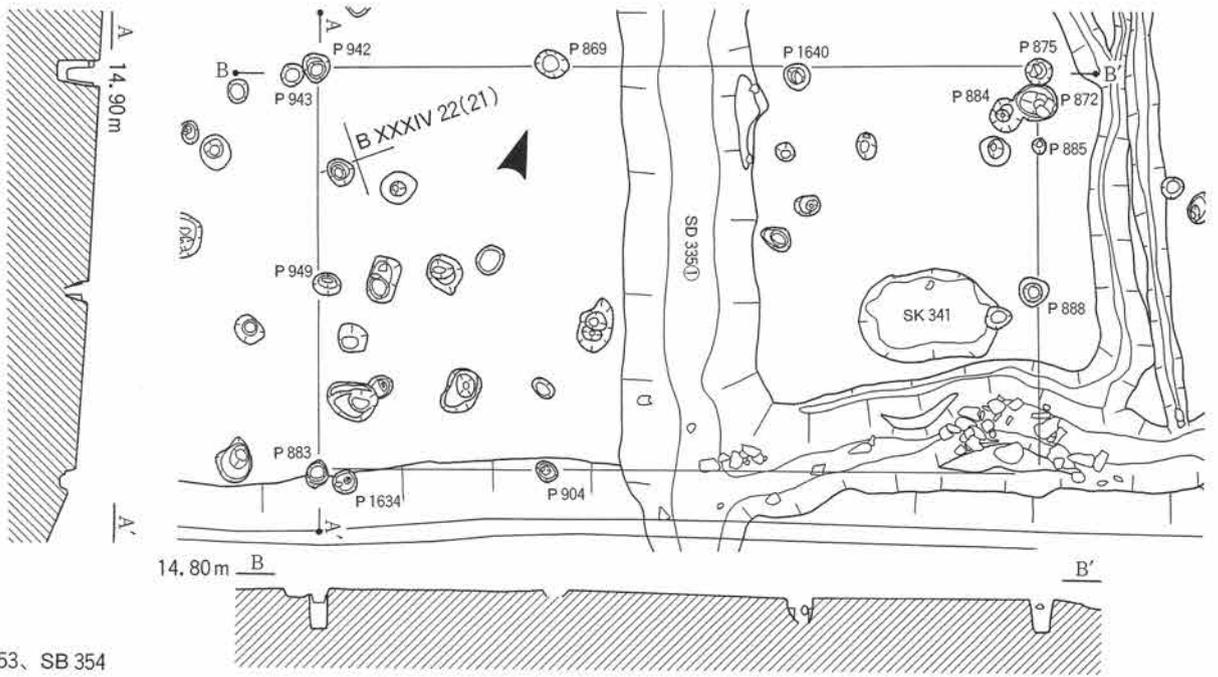








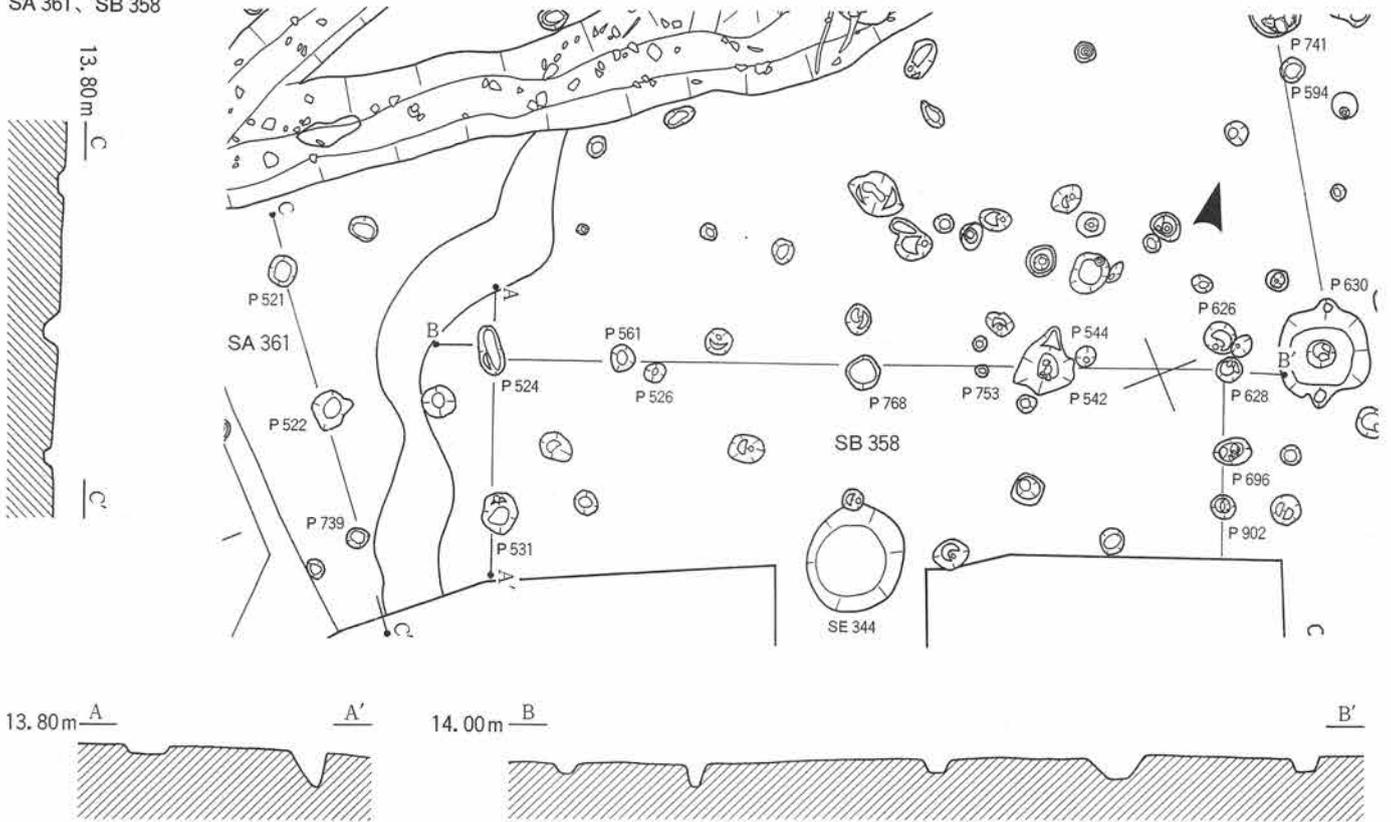
SB 351



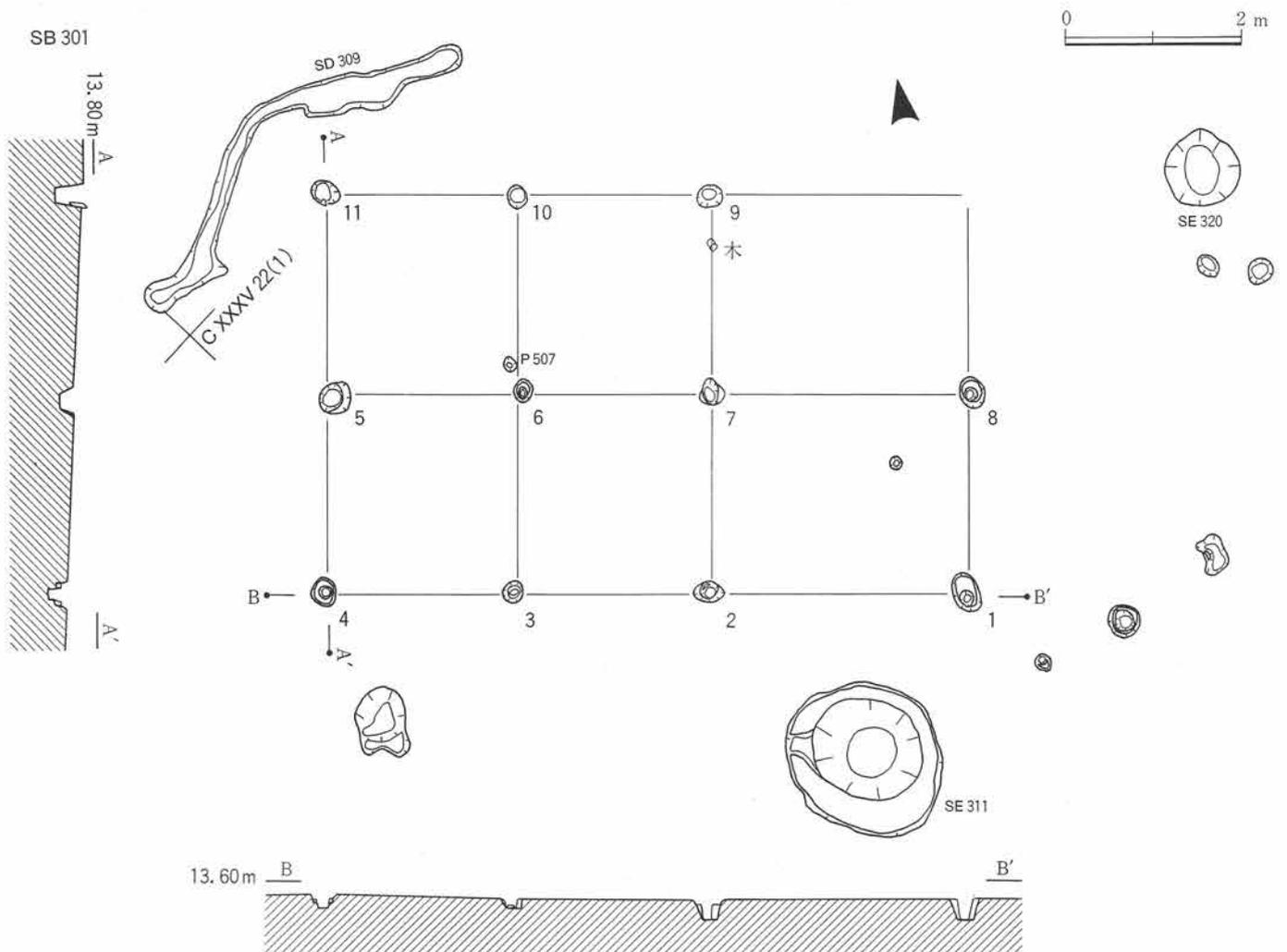
SB 352、SB 353、SB 354



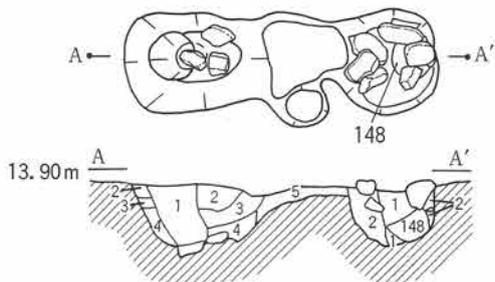
SA 361、SB 358



SB 301



SB 357-P 740



P 740

- 1 黒色土 粘性・しまりともにある。柱痕。
- 2 黒色土 粘性・しまりともにある。1層に比ベツヤがある。φ1cm程度の炭化物を僅かに含む。僅かに地山(青灰色土)ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 粘性・しまりともにある。地山ブロックを4割程度含む。基本土層IV層近似。
- 4 黒色土 2層に近似するが2層よりも粘性・しまりともに強い。
- 5 黒褐色土 粘性・しまりともにある。酸化鉄の沈殿がある。基本土層IV層近似。

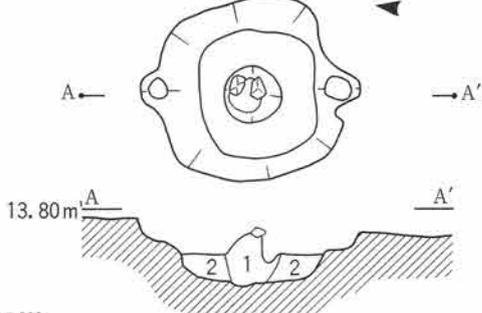
P 741

- 1 黒色土 1層よりも粘性・しまりともに強い。柱痕。
- 2 黒色土 粘性・しまりともにある。P 740の4層に近似。細砂を多く含む。

SB 357-P 741



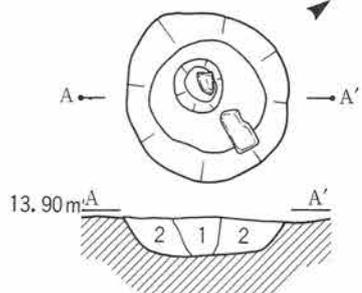
SB 357-P 630



P 630

- 1 濃黒褐色土 粘性・しまりともにある。柱痕。
- 2 黒褐色土 粘性・しまりともにある。酸化鉄の沈殿がある。

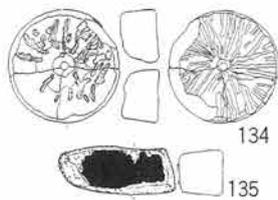
SB 357-P 600



P 600

- 1 黒褐色土 粘性・しまりともにある。地山(黄褐色土)ブロックを僅かに含む。基本土層IV層近似。柱痕。
- 2 黒褐色土 粘性・しまりともにある。地山ブロックを鹿の子状に含む。僅かに酸化鉄の沈殿がある。

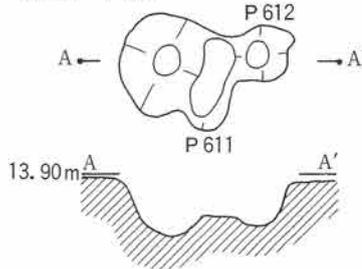
SB 357-P 605



P 605

- 1 黒色土 粘性・しまりともにある。僅かに地山(黄褐色土)粒を含む。柱痕。
- 2 黒色土 粘性・しまりともにある。1/3程度地山ブロックを含む。
- 3 黒色土 粘性・しまりともにある。地山との混合層。
- 4 黄褐色土 粘性・しまりともにある。僅かに黒褐色土が混入する。
- 5 黒色土 粘性・しまりともにある。柱痕。
- 6 濃黒色土 粘性・しまりともにある。地山ブロックを含む。柱痕。
- 7 黄褐色土 粘性・しまりともにある。地山ブロック。

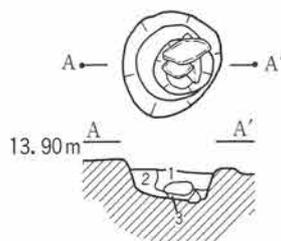
SB 357-P 610



P 765

- 1 黒色土 粘性・しまりともにある。
- 2 黒色土 粘性・しまりともにある。半分程度地山(黄褐色土)ブロックを含む。
- 3 黒灰色土 粘性・しまりともにある。半分程度地山ブロックを含む。
- 4 黒色土 粘性・しまりともにある。砂を多く含む。
- 5 黄褐色土 粘性・しまりともにある。地山に近似するが僅かに黒褐色土が混入する。

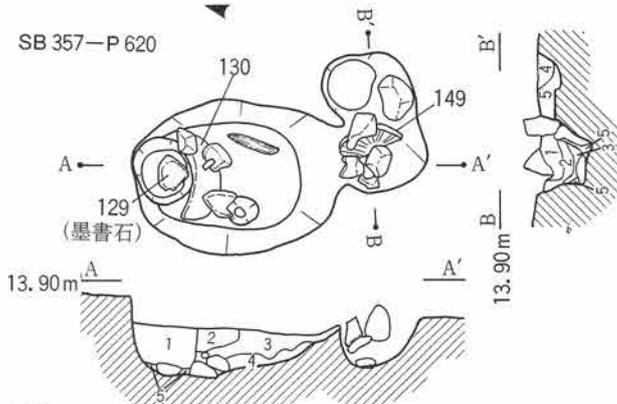
SB 357-P 682



P 682

- 1 黒褐色土 粘性がありしまりも強い。地山(黄褐色土)ブロックを僅かに含む。柱痕。
- 2 黒褐色土 粘性はないが少ししまりがある。地山が半分程度混入する。
- 3 黄褐色土 粘性・しまりともにある。地山ブロック。

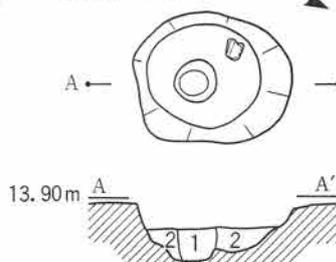
SB 357-P 765



P 620

- 1 黒褐色土 粘性はないがしまりはある。基本土層IV層近似。柱痕。
- 2 黒褐色土 粘性はないがしまりはある。地山(黄褐色土)ブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 粘性はないがしまりはある。地山ブロックを多量に含む。
- 4 黄褐色土 粘性・しまりともにある。黒褐色土が僅かに混入する。
- 5 黄褐色土 粘性・しまりともにある。地山ブロック。

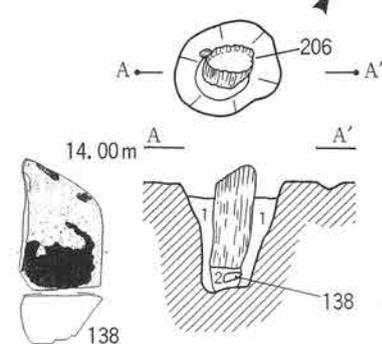
SB 357-P 700



P 700

- 1 黒色土 粘性はあるがしまりはない。柱痕。
- 2 黒色土 粘性があり少ししまりがある。地山(黄褐色土)が1/3程度混入する。

SB 357-P 676

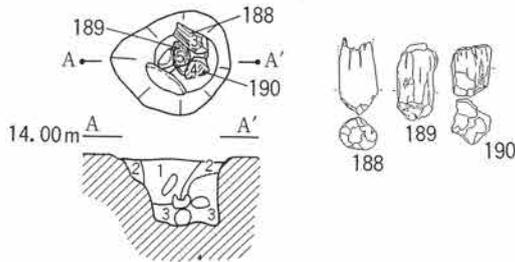


P 676

- 1 黒褐色土 粘性はないがしまりはある。基本土層IV層近似。
- 2 黒色土 粘性・しまりともにある。

SB 357(P 650、P 705、P 658、P 670、P 675、P 661、P 710、P 726)、SB 356(P 680、P 734)、P 659、P 679

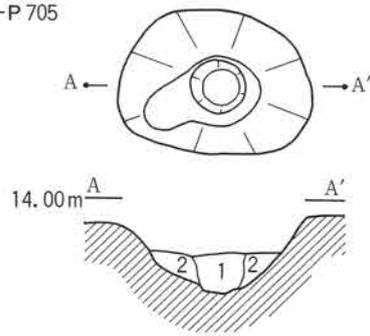
SB 357-P 650



P 650

- 1 黒褐色土 粘性・しまりともにある。地山(黄褐色土)ブロックを僅かに含む。基本土層IV層近似。柱痕。
- 2 黒褐色土 しまりはあるが粘性はない。地山ブロックを多く含む。
- 3 淡褐色土 粘性・しまりともにある。

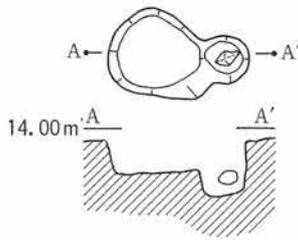
SB 357-P 705



P 705

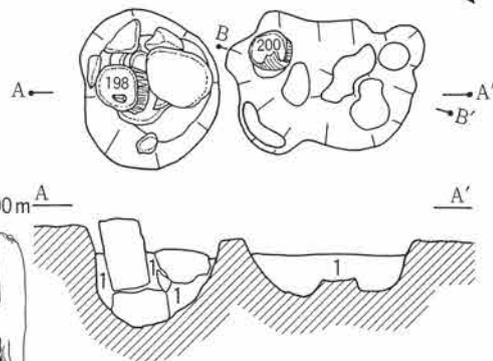
- 1 黒色土 粘性・しまりともにある。柱痕。
- 2 黒色土 粘性・しまりともにある。大きめの地山(黄褐色土)ブロックを多く含む。

SB 357-P 658



P 659

SB 357-P 670



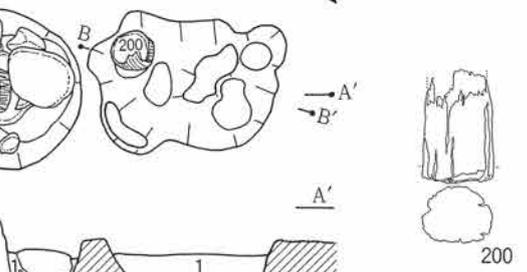
P 670

- 1 黒褐色土 粘性・しまりともにある。地山(黄褐色土)ブロックを多く含む。基本土層IV層近似。

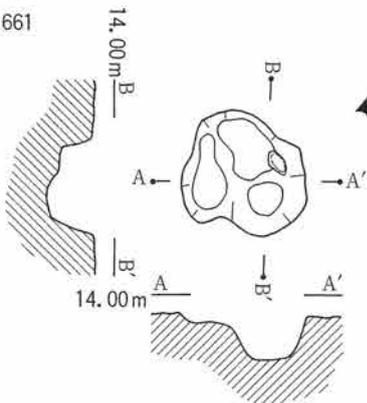
P 675

- 2 黒褐色土 粘性・しまりともにある。φ5~7cm程度の地山(黄褐色土)ブロックを多く含む。

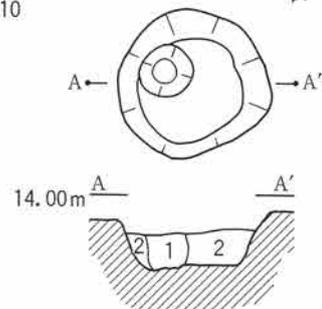
SB 357-P 675



SB 357-P 661



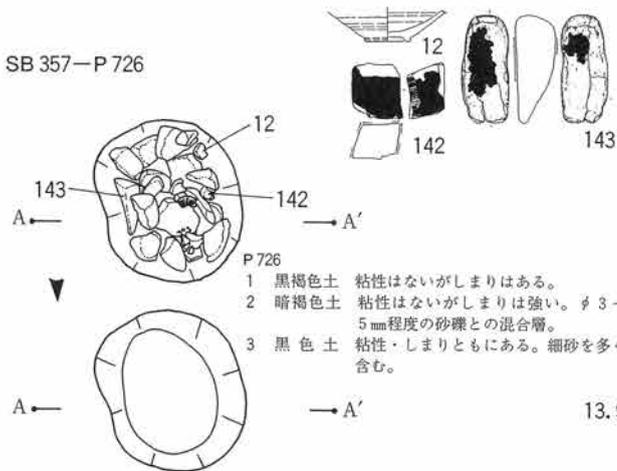
SB 357-P 710



P 710

- 1 黒褐色土 粘性・しまりともにある。φ1~3cm程度の地山(黄褐色土)ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 粘性・しまりともにある。6~7割地山が混入する。

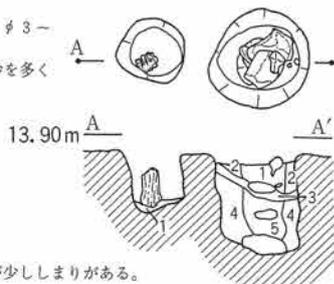
SB 357-P 726



P 726

- 1 黒褐色土 粘性はないがしまりはある。
- 2 暗褐色土 粘性はないがしまりは強い。φ3~5mm程度の砂礫との混合層。
- 3 黒色土 粘性・しまりともにある。細砂を多く含む。

P 679

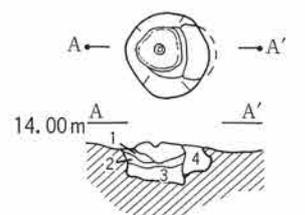


SB 356-P 680

P 680

- 1 濃黒褐色土 粘性・しまりともにある。僅かに酸化鉄の沈殿がある。
- 2 黒褐色土 僅かに粘性がありしまりもある。僅かに地山(黄褐色土)ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 僅かに粘性がありしまりもある。φ1~3cm程度の地山ブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 粘性・しまりともにある。僅かに地山ブロックを含む。
- 5 濃黒褐色土 粘性・しまりともにある。

SB 356-P 734

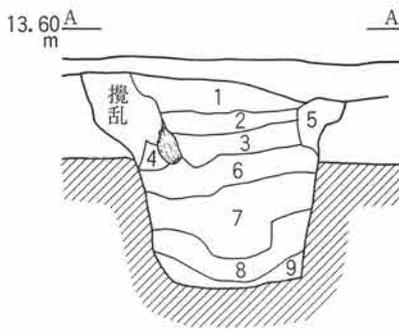
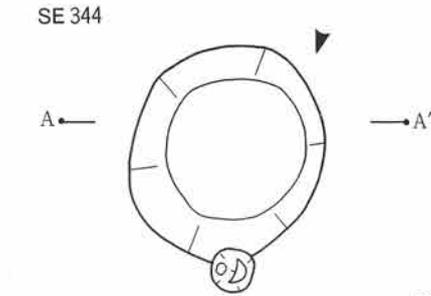


P 734

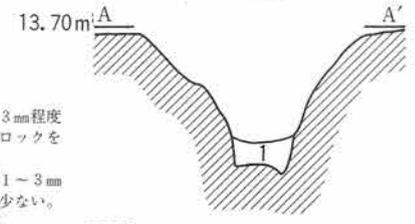
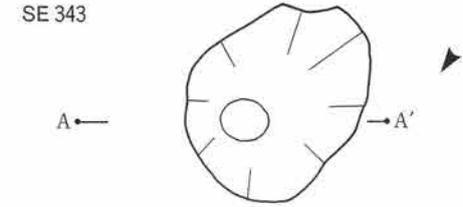
- 1 黒褐色土 少し粘性がありしまりもある。
- 2 黒褐色土 粘性はないがしまりがある。地山(黄褐色土)ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 粘性・しまりともない。多量の砂礫との混合層。
- 4 黒褐色土 粘性・しまりともにある。僅かに地山ブロックを含む。

(平面図の数字は遺物 No.)

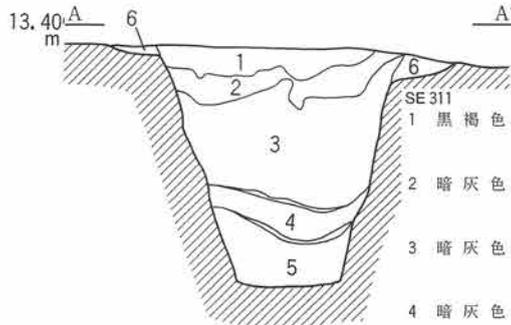
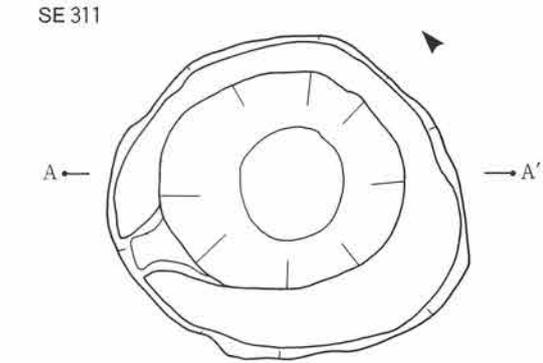




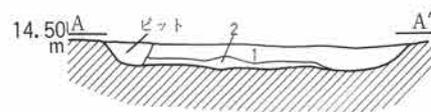
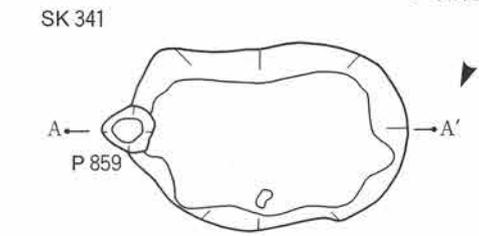
- SE 344
- 1 黒灰色土 粘性はないがしりがある。φ1~3mm程度の砂を多く含む。地山(黄褐色土)ブロックを少量含む。
 - 2 黒灰色土 僅かに粘性がありしりもある。φ1~3mm程度の砂を含むが割合は1層よりも少ない。地山ブロックを1層よりも多く含む。
 - 3 黒灰色土 粘性・しりともにある。
 - 4 黒褐色土 粘性・しりともにある。
 - 5 淡黒褐色土 粘性・しりともにある。
 - 6 黒色土 粘性は強いがしりは弱い。地山ブロックを多く含む。
 - 7 黒色土 粘性は強いがしりは弱い。極細砂を多く含む。地山ブロックを含むが割合は6層よりは少ない。
 - 8 黒色土 粘性は強いがしりは弱い。極細砂を含む。
 - 9 黒色土 粘性は強いがしりは弱い。半分程地山ブロックを含む。



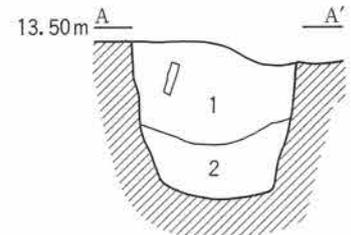
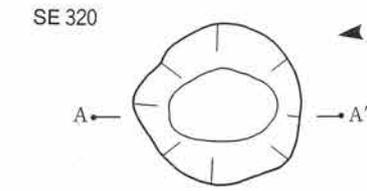
- SE 343
- 1 黒色土 粘性が非常に強いがしりは弱い。



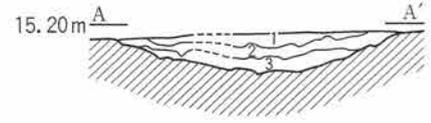
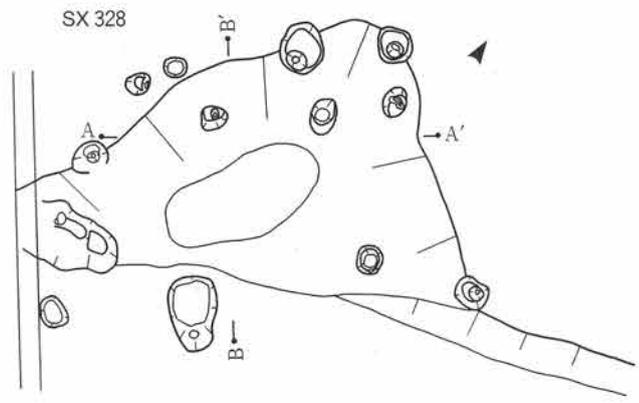
- SE 311
- 1 黒褐色土 粘性は弱いがしりはある。地山(黄灰色土)ブロックを多量に含む。
 - 2 暗灰色土 粘性・しりともにある。地山ブロックを若干含む。基本土層IV①層近似。
 - 3 暗灰色土 粘性・しりともにある。φ1~10cm程度の地手ブロックを多量に含む。
 - 4 暗灰色土 粘性・しりともにある。地山ブロックを多量に含む。
 - 5 暗青灰色土 粘性はあるがしりはない。砂礫を含む。地山粘土に黒色土が若干混入する。
 - 6 黄褐色粘質土 地山ブロック。平面形は1層の周囲にドーナツ状に検出される。



- SE 341
- 1 黄灰色土 粘性・しりともにある。地山(黄褐色土)ブロックを多量に含む。
 - 2 暗灰色土 粘性・しりともにある。基本土層III層に地山ブロックが混入する。



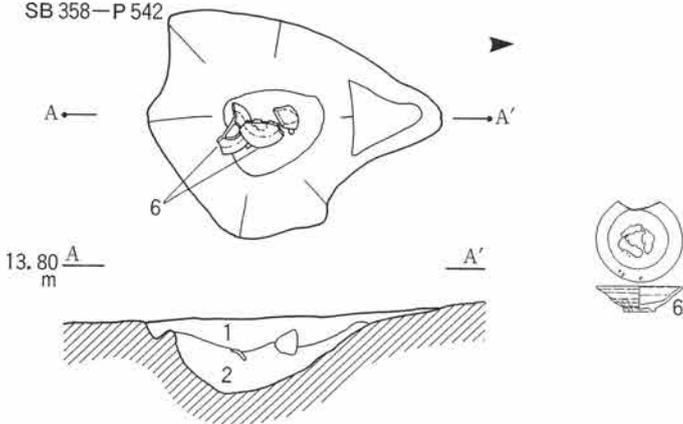
- SE 320
- 1 黒褐色土 粘性・しりともにある。φ1~3cm程度の地山(青灰色粘質土)ブロックを多量に含む。
 - 2 黒褐色土 粘性はあるがしりは弱い。



- SX 328
- 1 茶褐色土 粘性・しりともにある。φ1~2cm以下の地山(黄褐色土)ブロックを少量含む。φ5cm以下の炭化物を少量含む。
 - 2 黄茶褐色土 粘性・しりともにある。φ5cm以下の大型の地山ブロックを多量に含む。炭化物の含有量は1層と同様。
 - 3 褐色土 粘性・しりともにある。1層と同程度の地山ブロックを含むが、炭化物を多量に含む。

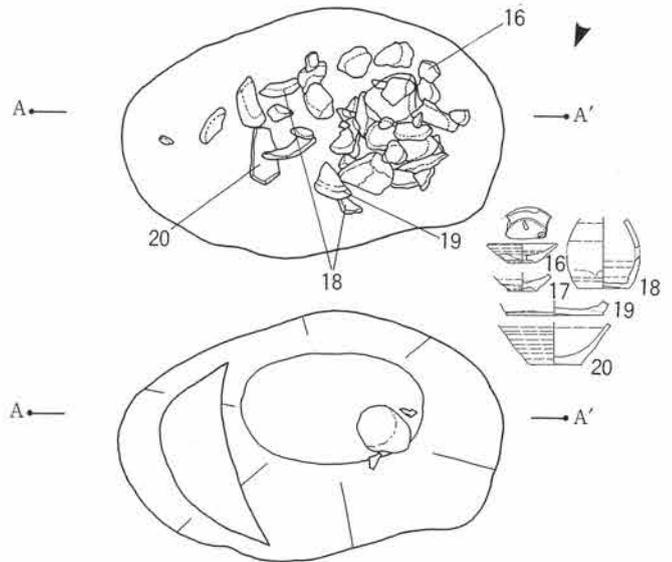


SB 358—P 542



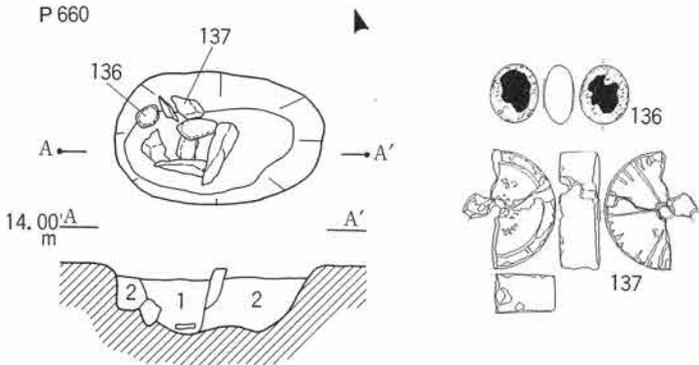
- P 542
- 1 黒褐色土 粘性・しまりともにある。細かな地山(黄褐色土)粒を含む。基本土層Ⅲ層近似。
 - 2 黒色土 粘性はあるがしまりは弱い。

P 730



- P 730
- 1 暗褐色土 粘性はないがしまりは弱い。細砂を多量に含む。
 - 2 黒褐色土 粘性・しまりともにある。僅かに地山(黄褐色土)ブロックを含む。
 - 3 黒褐色土 粘性・しまりともにある。半分程地山ブロックを含む。
 - 4 極淡黒褐色土 粘性・しまりともにある。
 - 5 黒褐色土 粘性・しまりともにある。

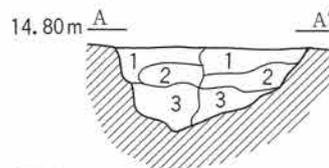
P 660



- P 660
- 1 黒褐色土 粘性はないがしまりは強い。基本土層Ⅳ層近似。
 - 2 黒褐色土 粘性はないがしまりは強い。地山(黄褐色土)が多く混入する。

SD 330

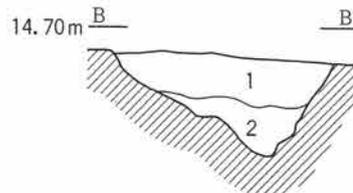
SD 331



- SD 330
- 1 黒灰色土 粘性はないがしまりがある。φ1-2mmの角砂を少量含む。基本土層Ⅲ層近似。
 - 2 暗灰色土 地山ブロックと黒色土の混合。
 - 3 暗灰色土 粘性・しまりともない。砂を多量に含む。

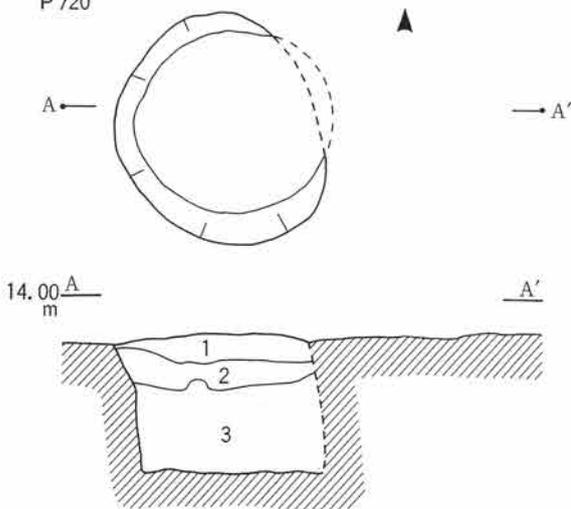
- SD 331
- 1 暗褐色土 粘性・しまりともにある。基本土層Ⅳ層近似。
 - 2 暗褐色土 粘性・しまりとも弱い。1層に近似するがしまりが弱い。
 - 3 暗灰色土 SD 330の2層に近似。

SD 330



- SD 330
- 1 黒灰色土 粘性・しまりともにある。φ2-3mmの角砂を含む。基本土層Ⅲ層近似。
 - 2 暗灰色土 粘性・しまりともない。砂質分を多量に含む。

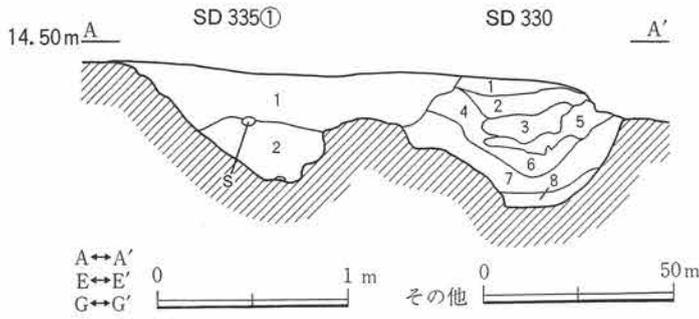
P 720



- P 720
- 1 黒褐色土 粘性はないがしまりがある。細かな礫を僅かに含む。
 - 2 黒褐色土 粘性はないがしまりがある。暗灰色土ブロックを多量に含む。
 - 3 暗灰色土 粘性・しまりともにある。酸化鉄の沈殿がある。

(平面図の数字は遺物 No.)

P 542、SD 330(A-A')・(B-B') 0 1 m その他 0 50cm



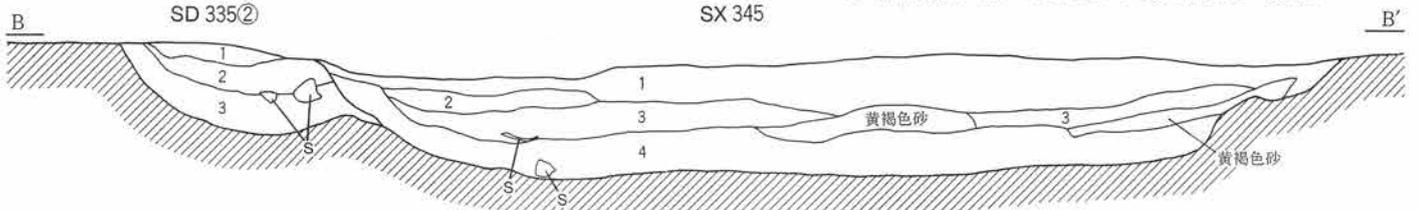
A↔A' 土層説明

SD 335①

- 1 黒灰色土 粘性・しまりともにある。基本土層Ⅲ層近似。
- 2 暗灰色土 粘性・しまりともない。細砂粒。

SD 330

- 1 暗灰色土 粘性はないがしまりはある。基本土層Ⅲ層近似。
- 2 暗黄褐色土 粘性はないがしまりはある。地山(黄褐色土)粒・礫を少量含む。
- 3 暗灰色土 粘性はないがしまりはある。地山粒を若干含む。基本土層Ⅲ層近似。
- 4 暗灰色土 粘性・しまりともにある。基本土層Ⅲ層に近似するが礫はあまり含まない。
- 5 暗黄色土 粘性・しまりともにある。上層と地山粒との混合層。
- 6 暗緑色土 粘性はあるがしまりはない。シルト質土。
- 7 黒灰色土 粘性・しまりともにある。基本土層Ⅲ層に近似するが礫は少ない。均質な粘土。
- 8 黒灰色土 粘性・しまりともにある。上層と砂との混合層。



B↔B' 土層説明

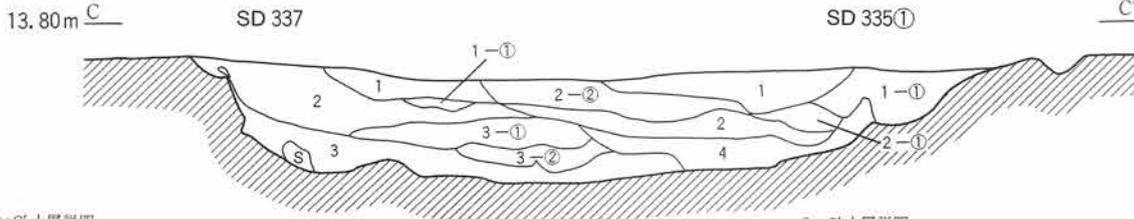
SD 335②

- 1 暗灰色土 粘性はないがしまりはある。
- 2 暗灰色土 粘性はないがしまりはある。細砂粒を若干含む。
- 3 暗褐色土 粘性はないがしまりはある。上層と多量の細砂の混合層。

B↔B' 土層説明

SX 345

- 1 暗灰色土 粘性はないがしまりはある。
- 2 暗灰色土 粘性が若干ありしまりもある。地山(黄褐色土)粒を若干含む。
- 3 黒灰色土 粘性・しまりともにある。均一な粘質土。
- 4 黒灰色土 粘性・しまりともにある。上層と多量の細砂の混合層。



C↔C' 土層説明

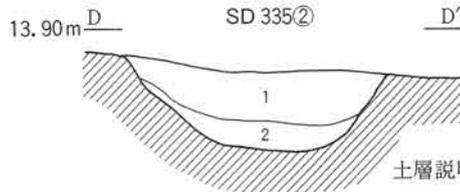
SD 337

- 1 黒褐色土 粘性はないがしまりはある。
- 1-① 黄褐色土 粘性・しまりともない。多量の砂礫との混合層。
- 2 濃黒褐色土 粘性はないがしまりはある。
- 2-① 褐色土 粘性・しまりともない。多量の砂礫との混合層。
- 2-② 暗褐色土 粘性・しまりともない。多量の砂礫との混合層。
- 4 黒灰色土 僅かに粘性がありしまりもある。

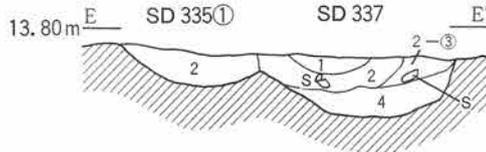
C↔C' 土層説明

SD 335①

- 1 暗灰色土 粘性はないがしまりはある。
- 1-① 暗褐色土 粘性はないがしまりはある。多量の砂礫との混合層。
- 2 濃暗褐色土 僅かに粘性がありしまりもある。
- 2-① 暗褐色土 粘性はないがしまりはある。砂を多く含む。
- 2-② 黄褐色土 粘性・しまりともない。多量の砂礫との混合層。
- 3 濃暗褐色土 粘性・しまりともない。



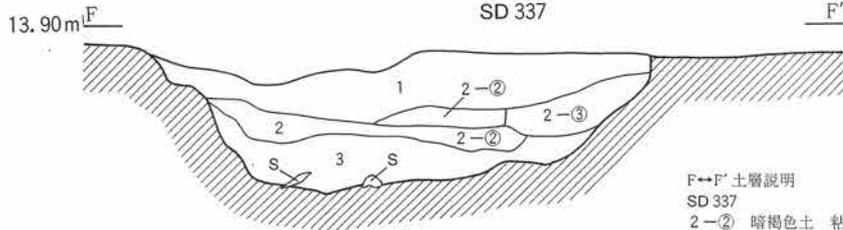
土層説明は B↔B' と同じ



E↔E' 土層説明

SD 337

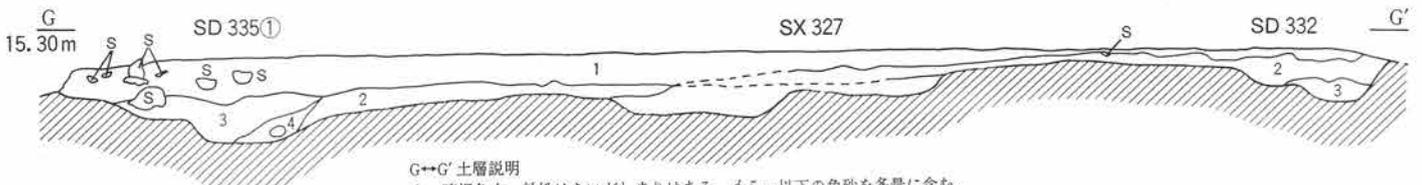
- 1 黒褐色土 粘性はないがしまりはある。φ1mm程度の礫を少量含む。基本土層Ⅲ層近似。
- 2 暗褐色土 粘性・しまりともない。細かい砂礫の層。
- 3 暗褐色土 粘性はないがしまりはある。φ1mm程度の礫を少量含む。僅かに地山(黄褐色土)ブロックを含む。
- 4 暗灰色土 粘性・しまりともにある。細砂を多く含む。酸化鉄の沈殿がある。基本土層Ⅲ層近似。



F↔F' 土層説明

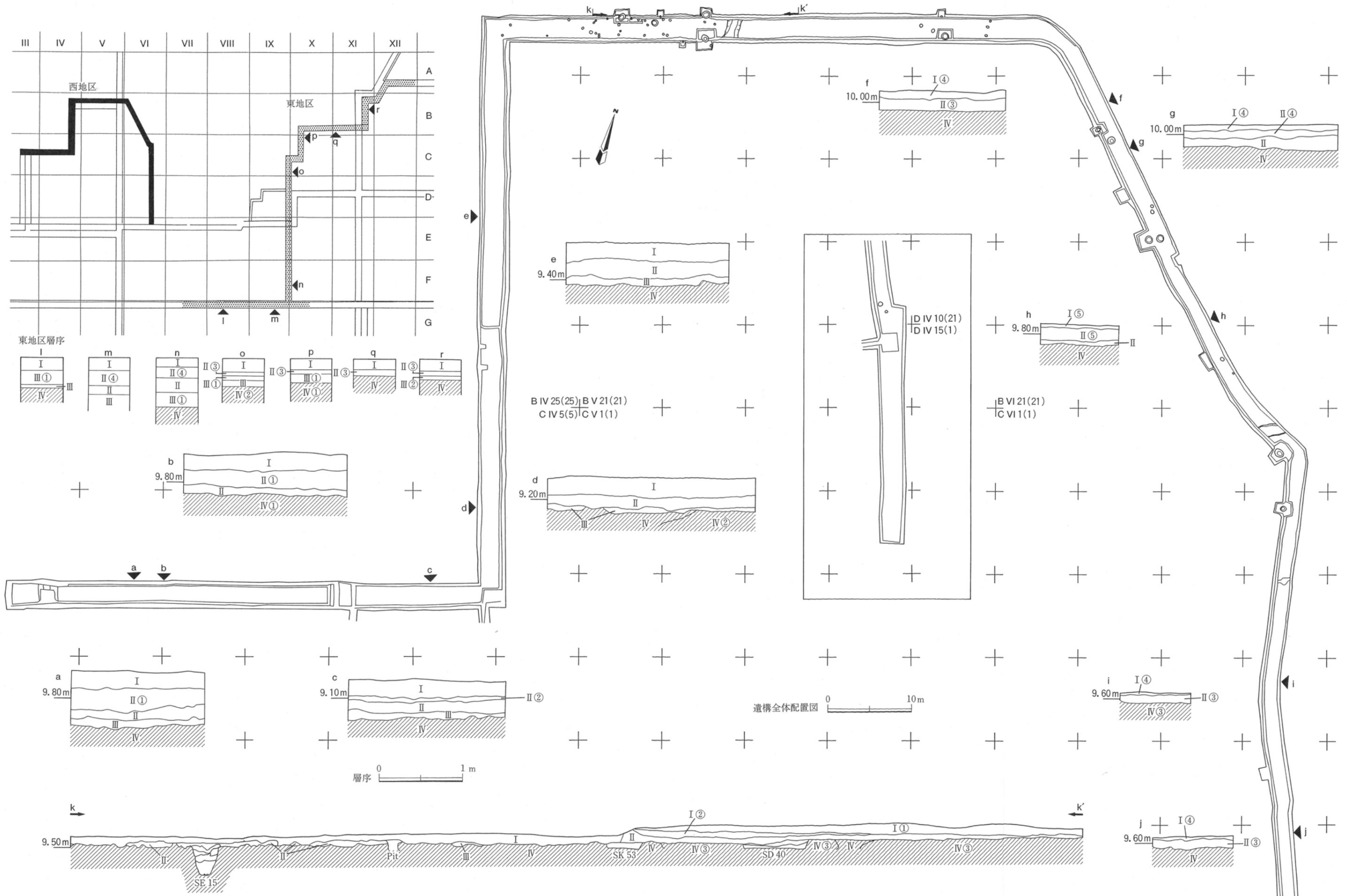
SD 337

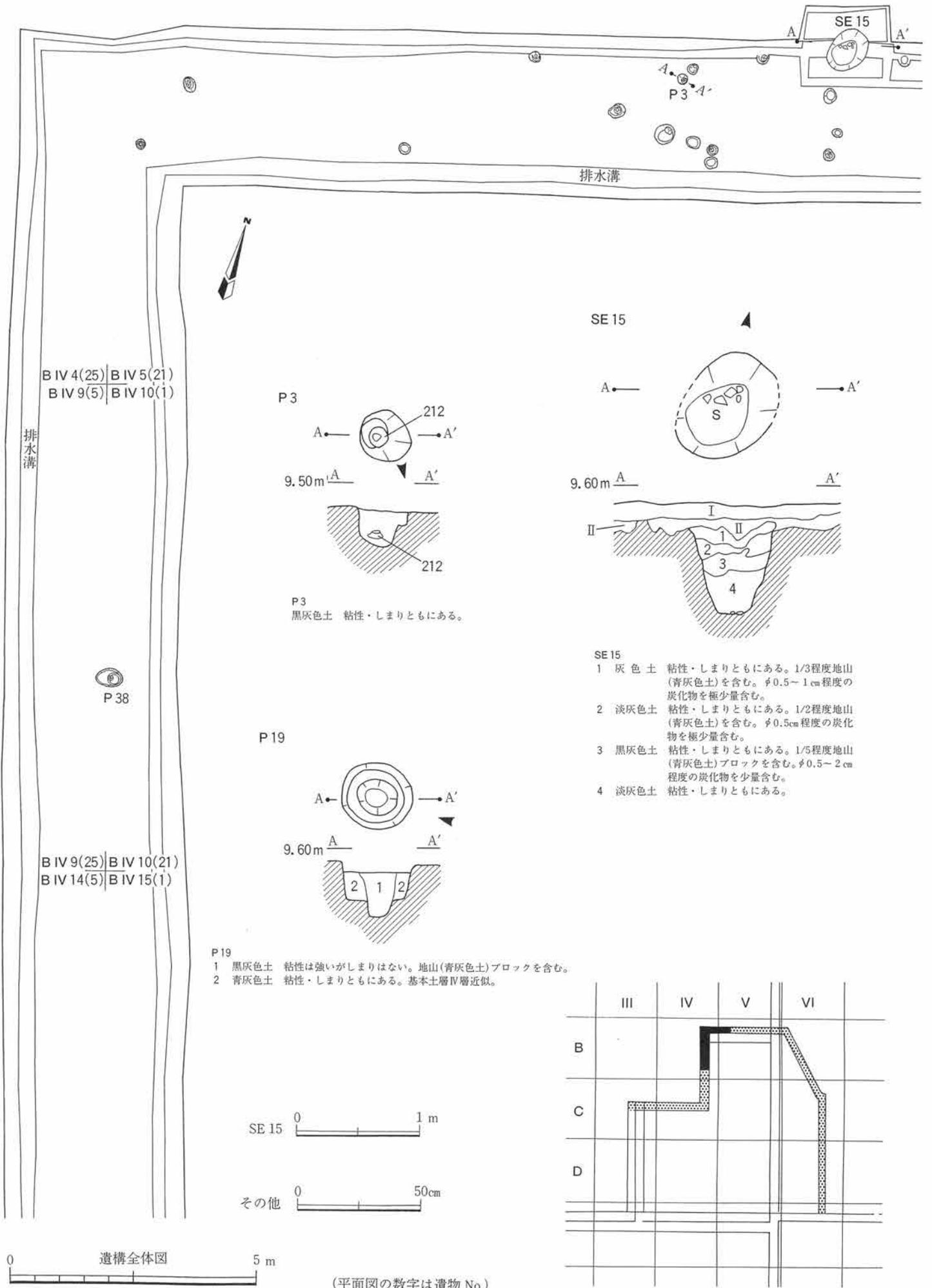
- 2-② 暗褐色土 粘性はないがしまりはある。細砂を多く含む。
- 2-③ 暗褐色土 粘性・しまりともない。φ5~7mm程度の砂礫を多く含む。

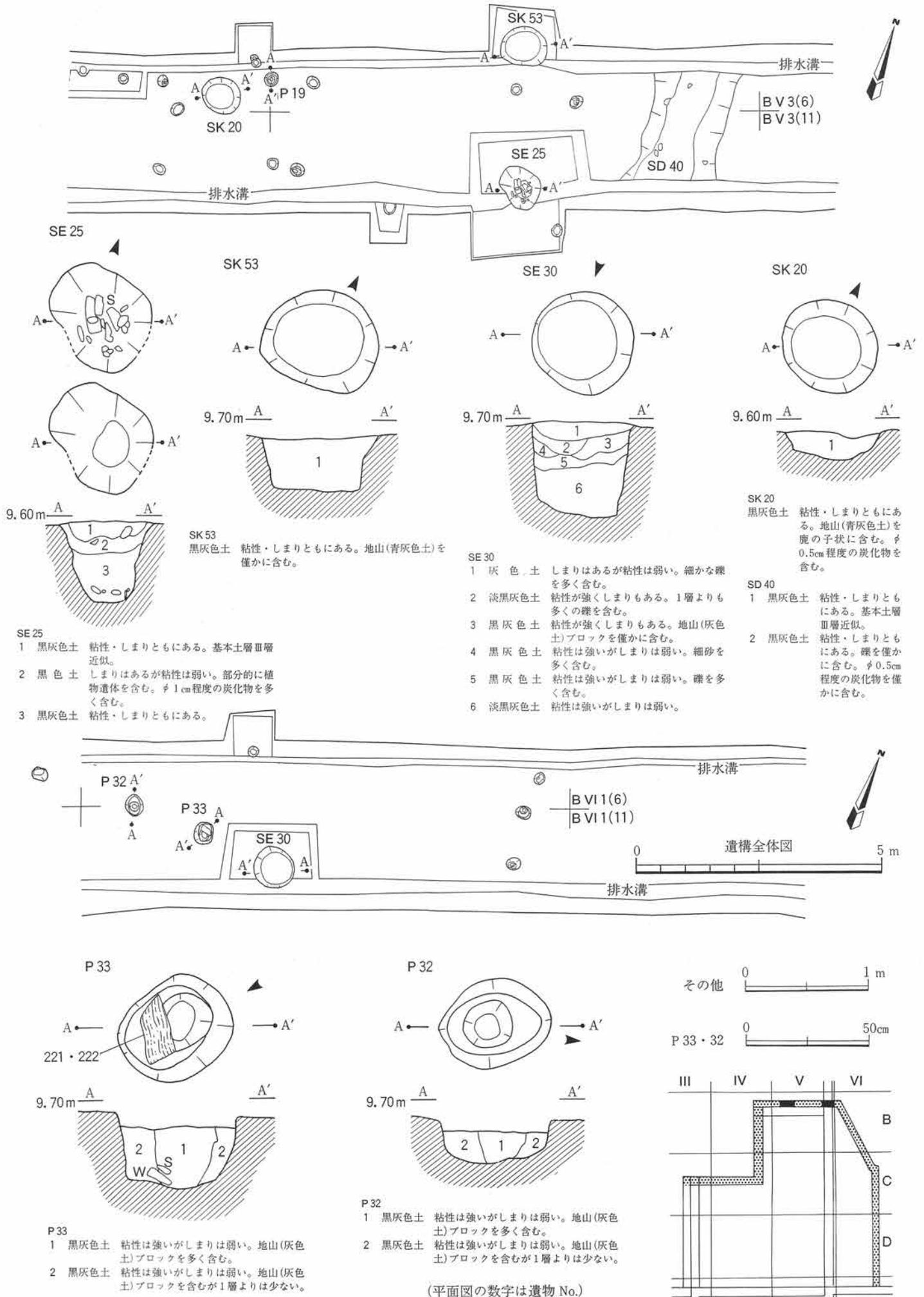


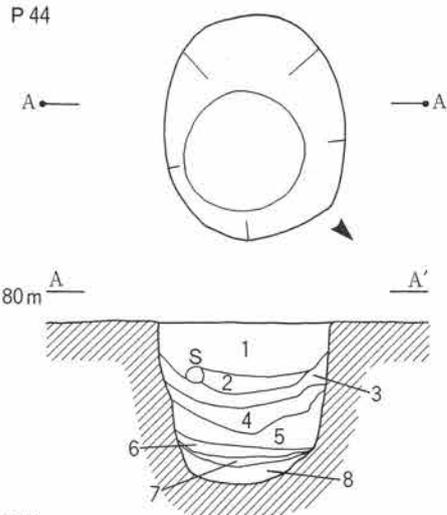
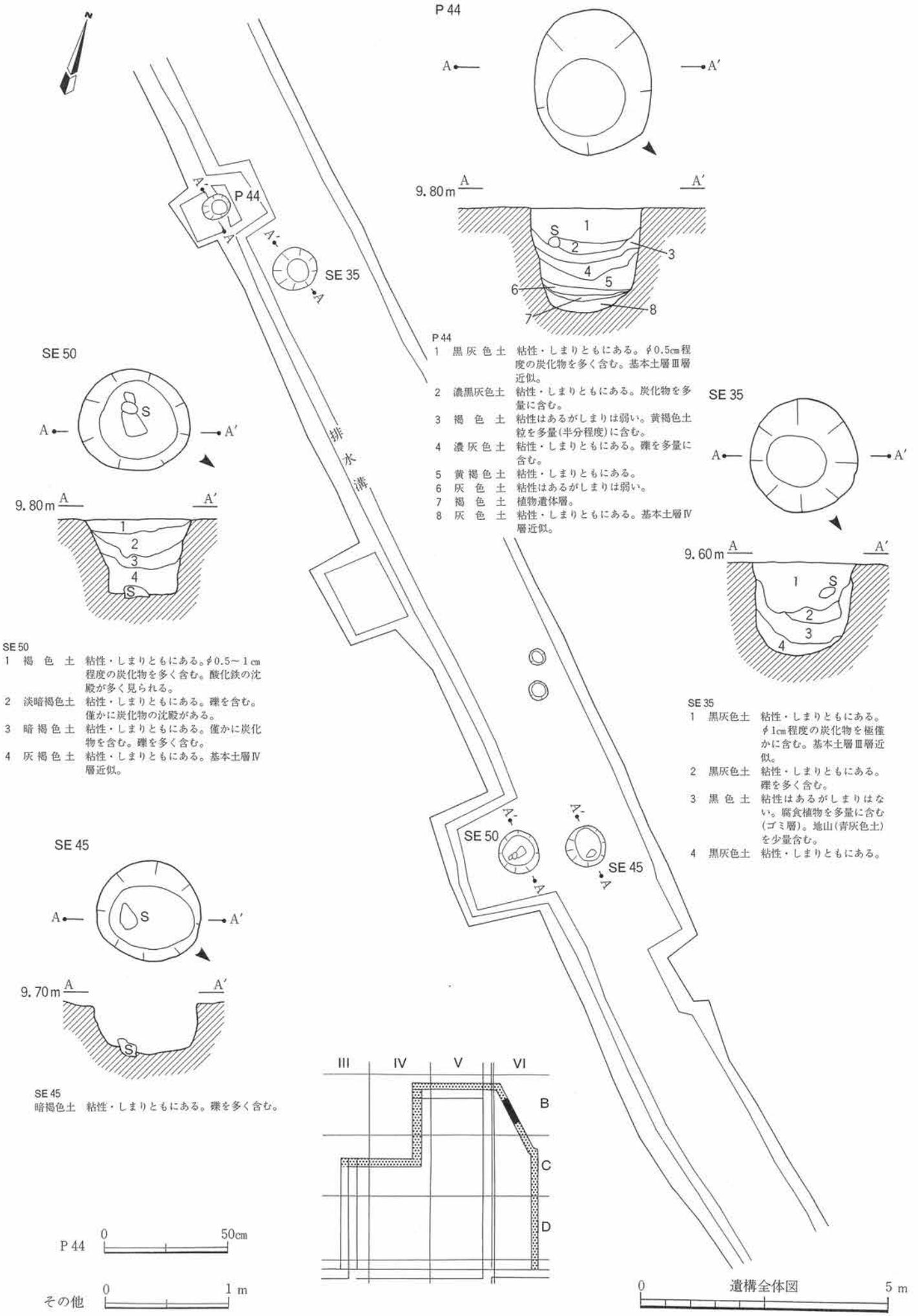
G↔G' 土層説明

- 1 暗褐色土 粘性はないがしまりはある。φ5mm以下の角砂を多量に含む。
- 2 暗褐色土 粘性・しまりともにある。地山(黄褐色土)ブロックを少量含む。角砂は1層と同様。
- 3 暗褐色土 粘性・しまりともにある。角砂は入らない。
- 4 暗灰色土 粘性・しまりともない。細砂層。

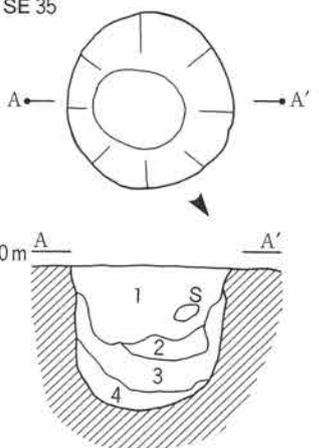






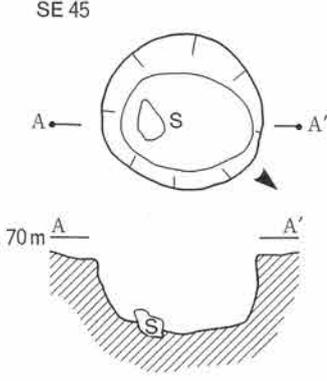


- P 44
- 1 黒灰色土 粘性・しまりともにある。φ0.5cm程度の炭化物を多く含む。基本土層Ⅲ層近似。
 - 2 濃黒灰色土 粘性・しまりともにある。炭化物を多量に含む。
 - 3 褐色土 粘性はあるがしまりは弱い。黄褐色土粒を多量(半分程度)に含む。
 - 4 濃灰色土 粘性・しまりともにある。礫を多量に含む。
 - 5 黄褐色土 粘性・しまりともにある。
 - 6 灰色土 粘性はあるがしまりは弱い。
 - 7 褐色土 植物遺体層。
 - 8 灰色土 粘性・しまりともにある。基本土層Ⅳ層近似。

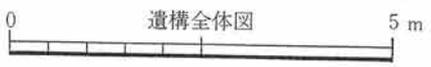
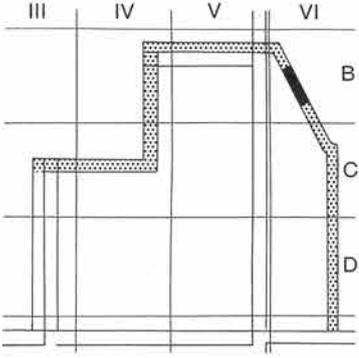


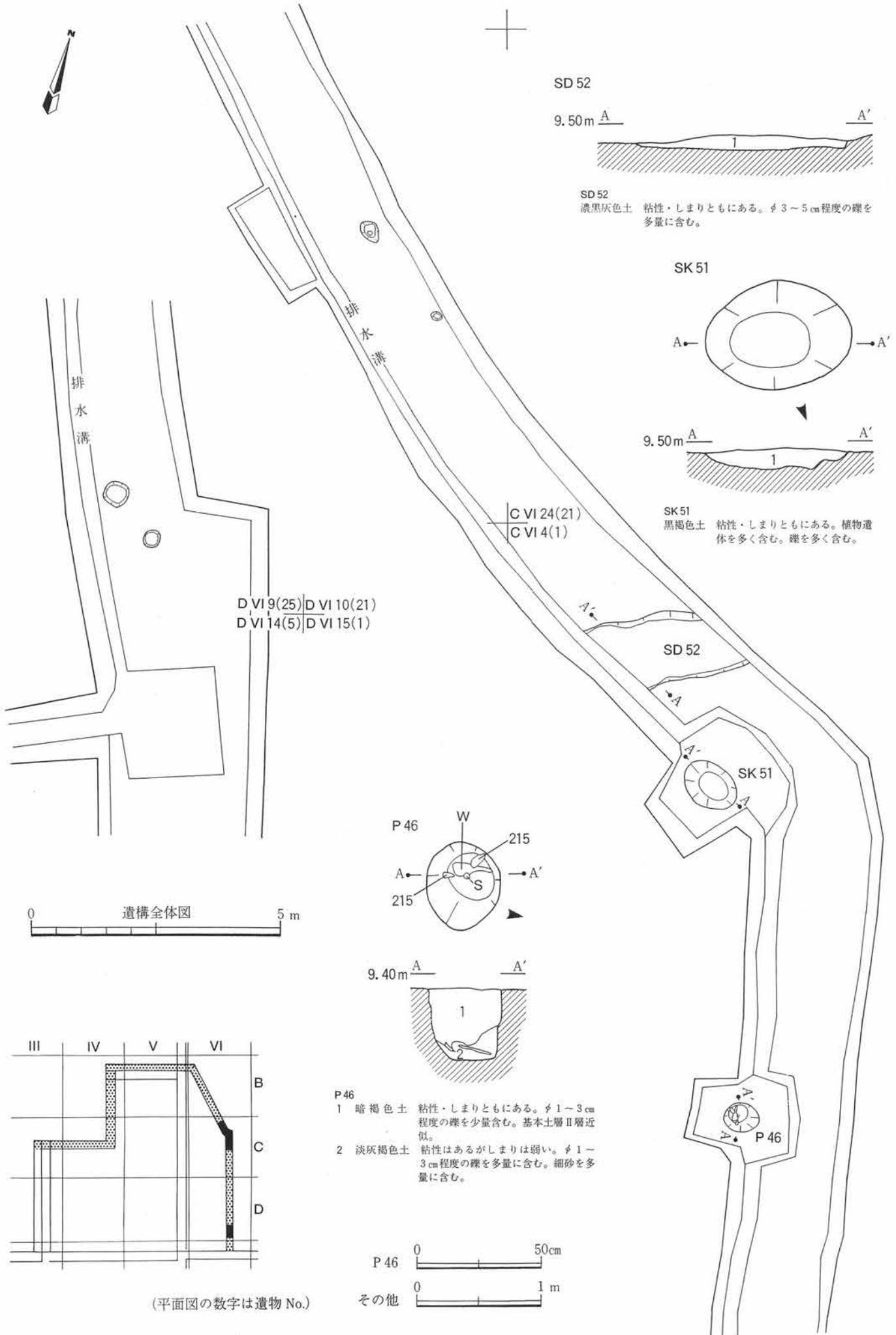
- SE 35
- 1 黒灰色土 粘性・しまりともにある。φ1cm程度の炭化物を極僅かに含む。基本土層Ⅲ層近似。
 - 2 黒灰色土 粘性・しまりともにある。礫を多く含む。
 - 3 黒色土 粘性はあるがしまりはない。腐食植物を多量に含む(ゴミ層)。地山(青灰色土)を少量含む。
 - 4 黒灰色土 粘性・しまりともにある。

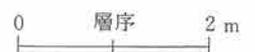
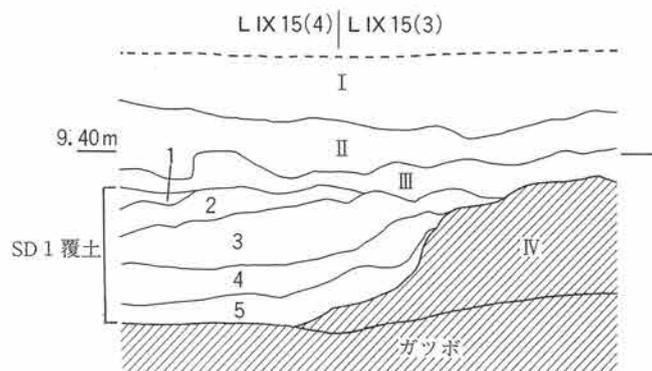
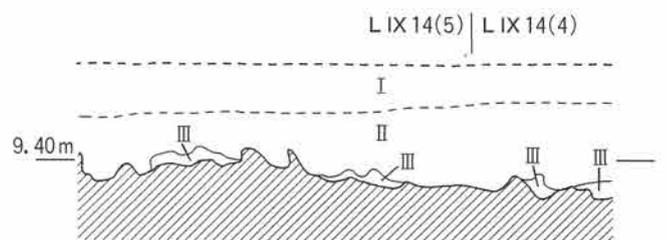
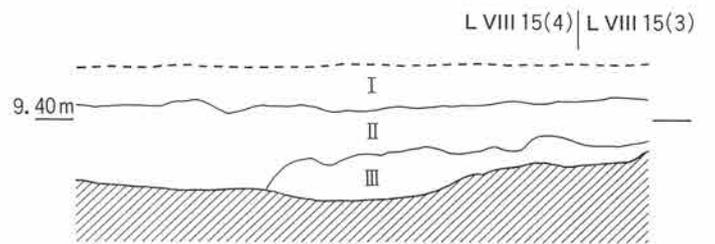
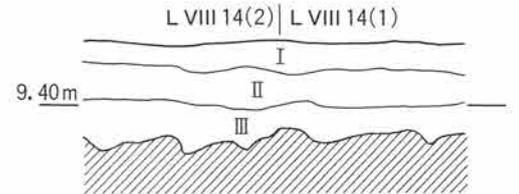
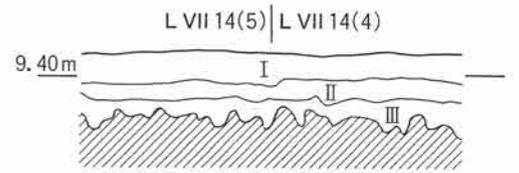
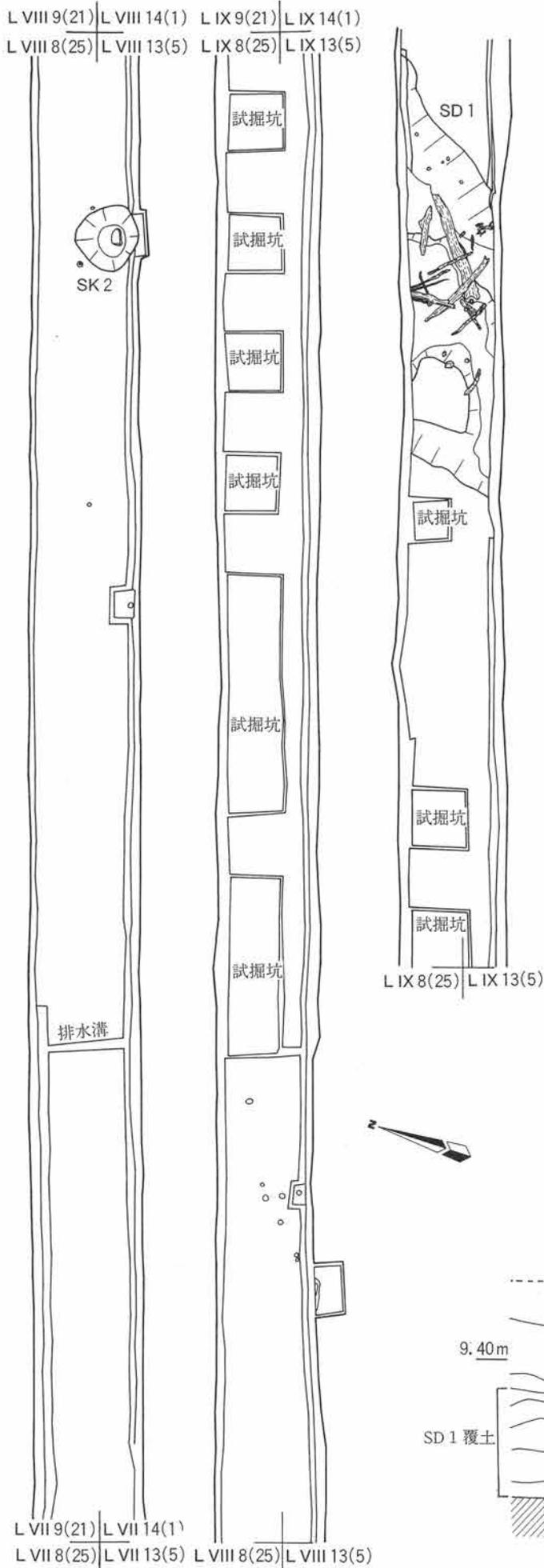
- SE 50
- 1 褐色土 粘性・しまりともにある。φ0.5-1cm程度の炭化物を多く含む。酸化鉄の沈殿が多く見られる。
 - 2 淡暗褐色土 粘性・しまりともにある。礫を含む。僅かに炭化物の沈殿がある。
 - 3 暗褐色土 粘性・しまりともにある。僅かに炭化物を含む。礫を多く含む。
 - 4 灰褐色土 粘性・しまりともにある。基本土層Ⅳ層近似。

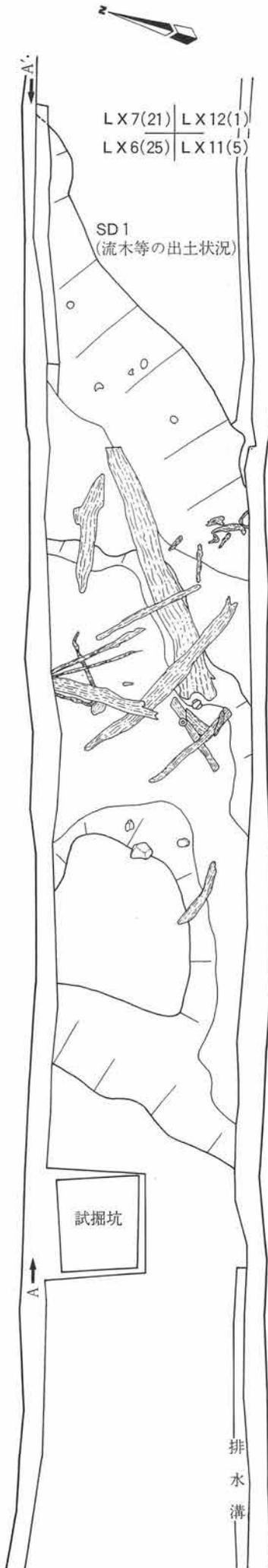


- SE 45
- 1 暗褐色土 粘性・しまりともにある。礫を多く含む。







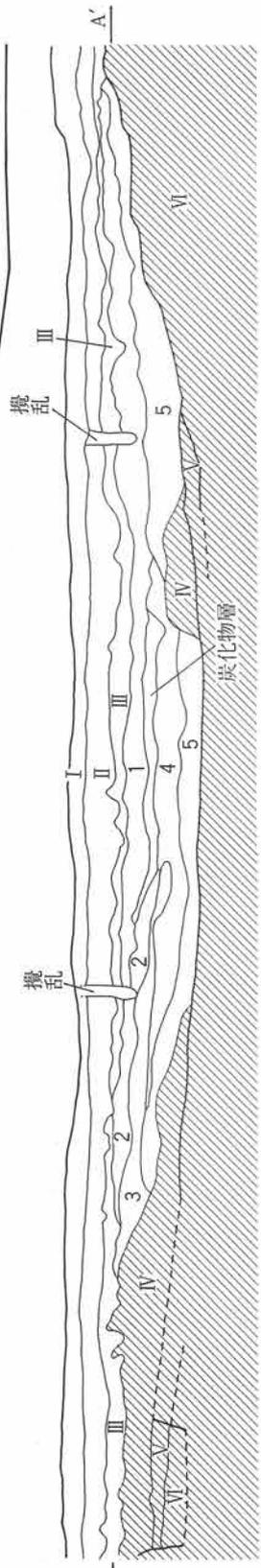


L X 7(21) | L X 12(1)
L X 6(25) | L X 11(5)

SD1
(流木等の出土状況)

試掘坑

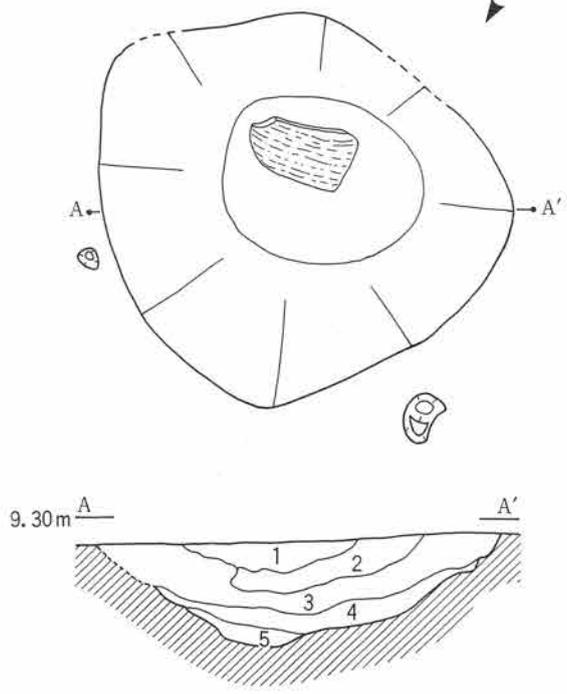
排水溝



SD1

- 1 黒色土 粘性・しまりともにある。φ0.5~1cm程度の炭化物を多量に含む。土師器を多量に含む。
- 2 暗灰色土 粘性・しまりともにある。φ0.5cm程度の炭化物を少量含む。遺物の出土量が多いが量は1層よりも少ない。
- 3 淡黒灰色土 粘性・しまりともにある。遺物の量は1・2層よりも少ない。
- 4 暗灰色土 粘性・しまりともにある。遺物をほとんど含まない。地山(基本土層IV層：青灰色粘質土)に大変近似する。
- 5 淡黒灰色土 粘性・しまりともにある。φ1~2cm程度の炭化物も少量含む。非ロクロの土師器を多く含む。

SK2



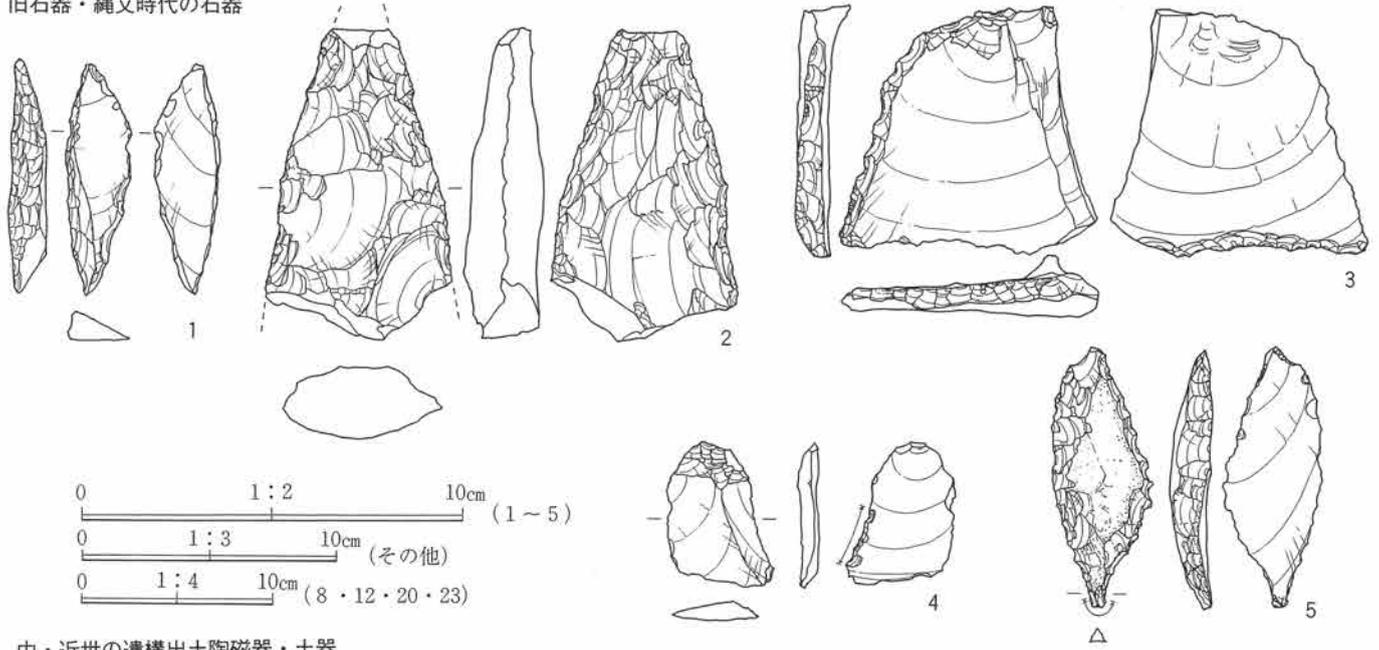
SE1

- 1 黒色土 粘性なし。植物遺体を多量に含む。ガツボに近似。
- 2 黒色土 粘性・しまりともにある。上層に近いが粘性が強い。細かな地山粒(基本土層IV層：青灰色シルト)を少量含む。
- 3 黒灰色土 粘性・しまりともにある。2層に近似するが地山の混入が多い。
- 4 黒色土 1層に近似。
- 5 暗灰色土 地山と上層の混合土。粘性がある。

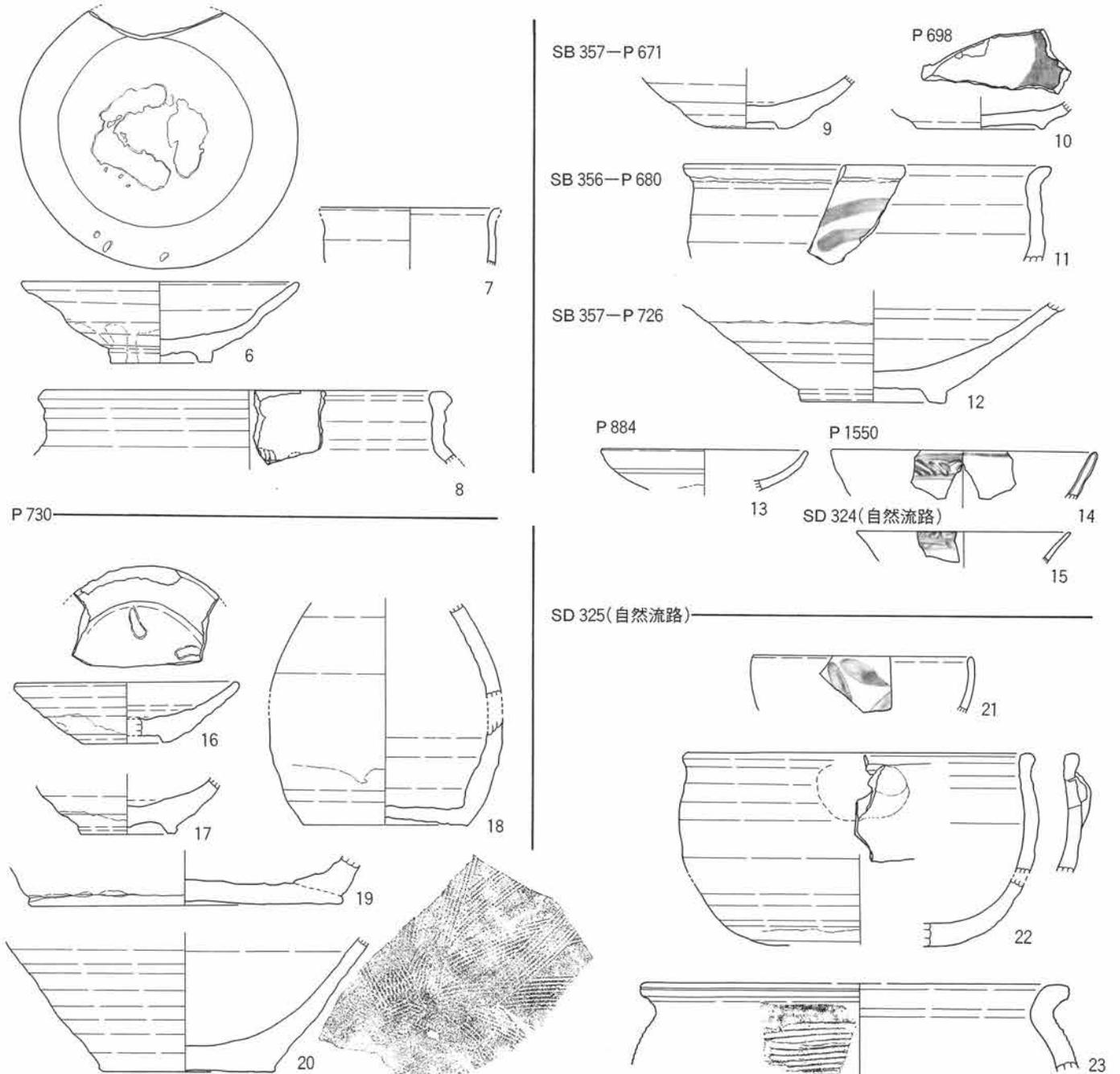


SB 358(P 542)、SB 357(P 671、P 726)、SB 356(P 680)、P 698、P 884、P 1550、SD 324(自然流路)、P 730、SD 325(自然流路)

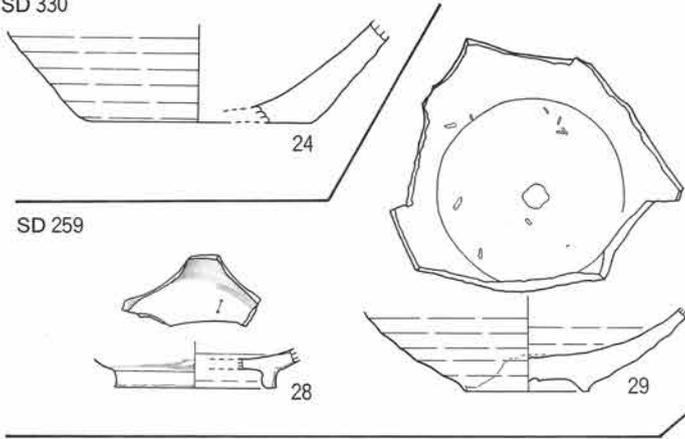
旧石器・縄文時代の石器



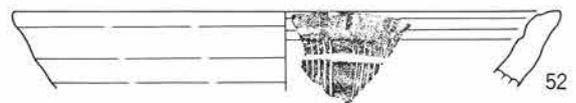
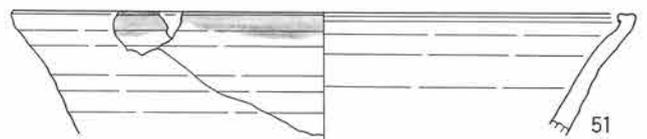
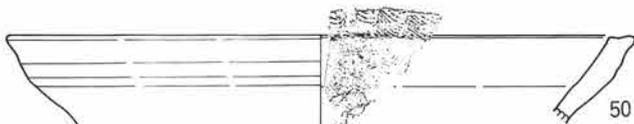
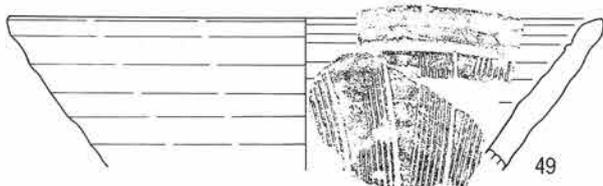
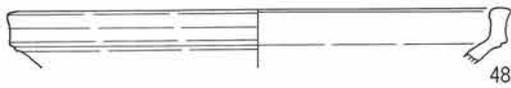
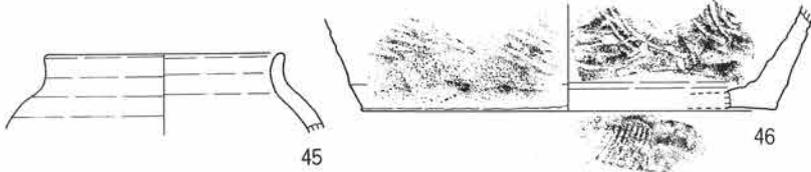
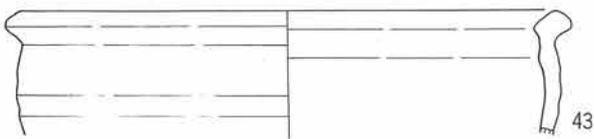
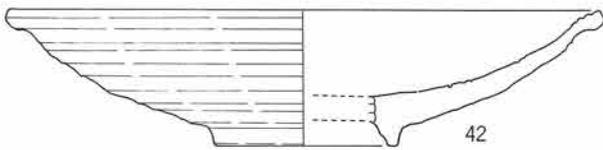
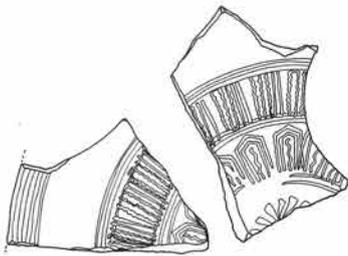
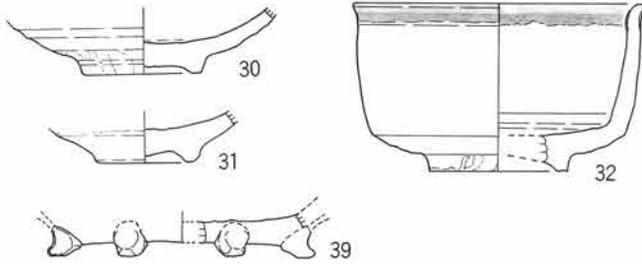
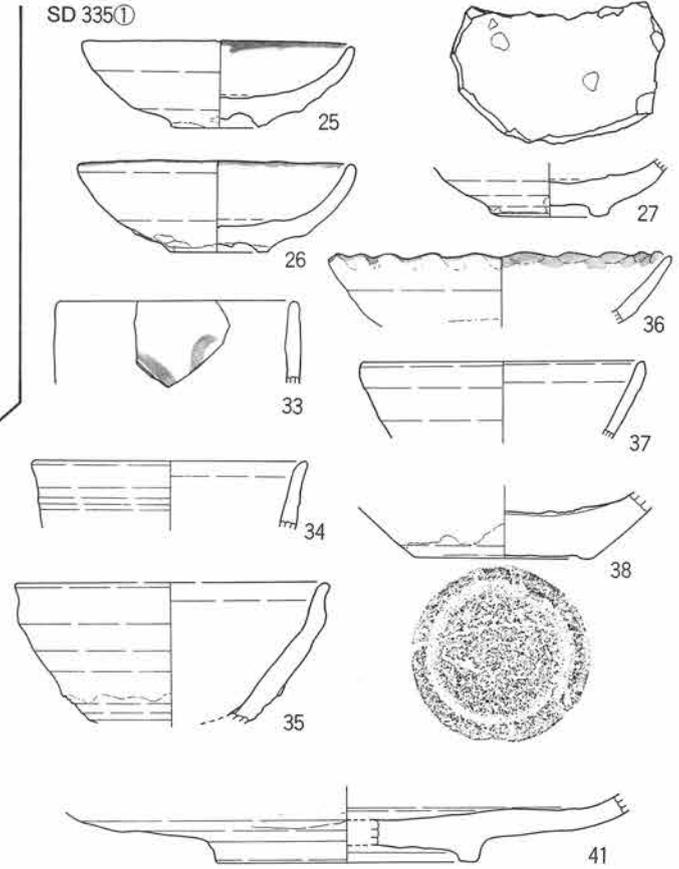
中・近世の遺構出土陶磁器・土器
SB 358-P 542



SD 330

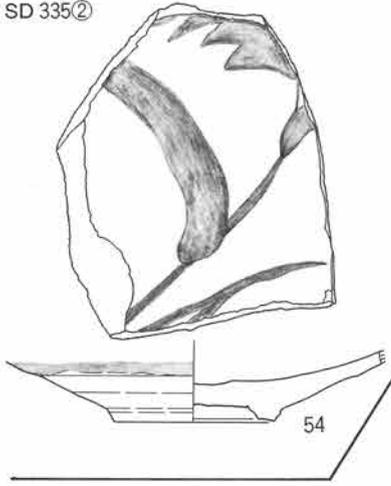


SD 355①

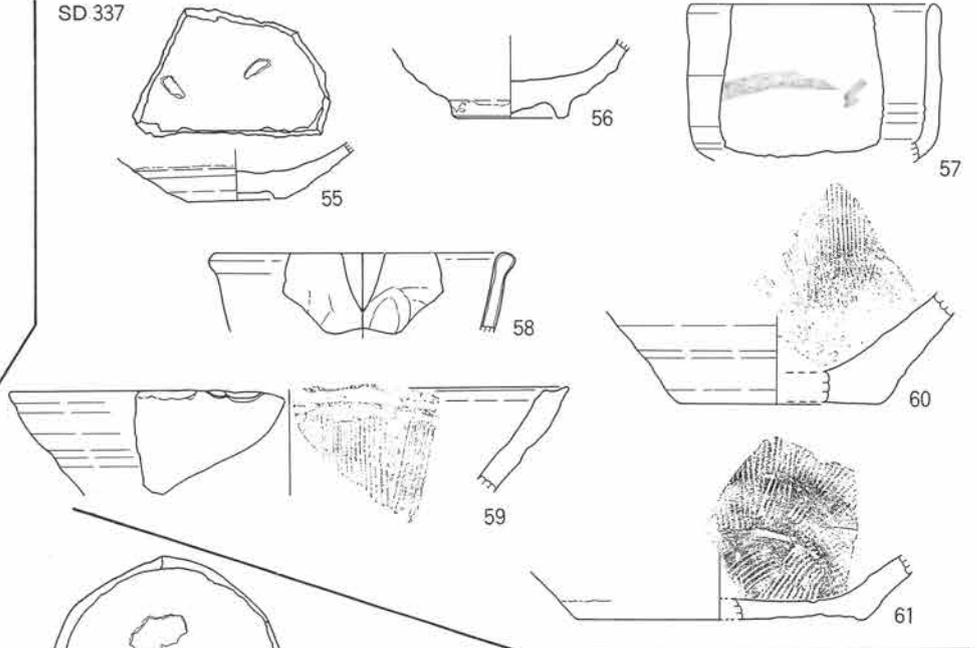


0 1:3 10cm (25~47) 0 1:4 10cm (その他)

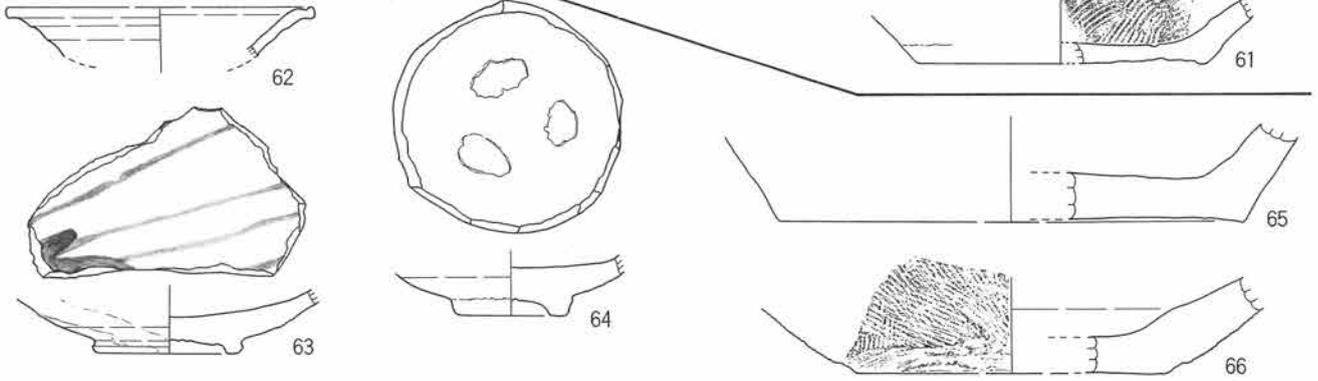
SD 335②



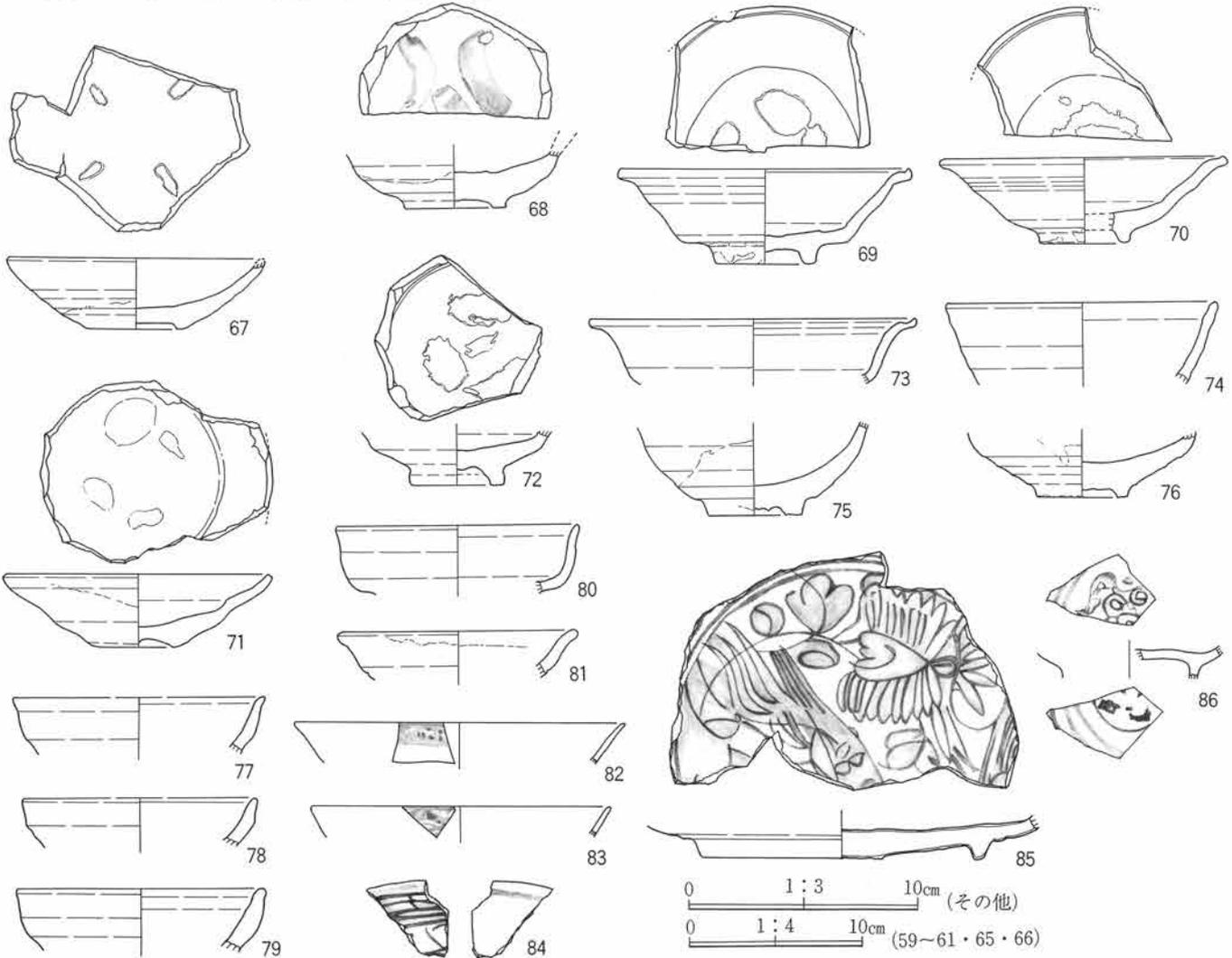
SD 337

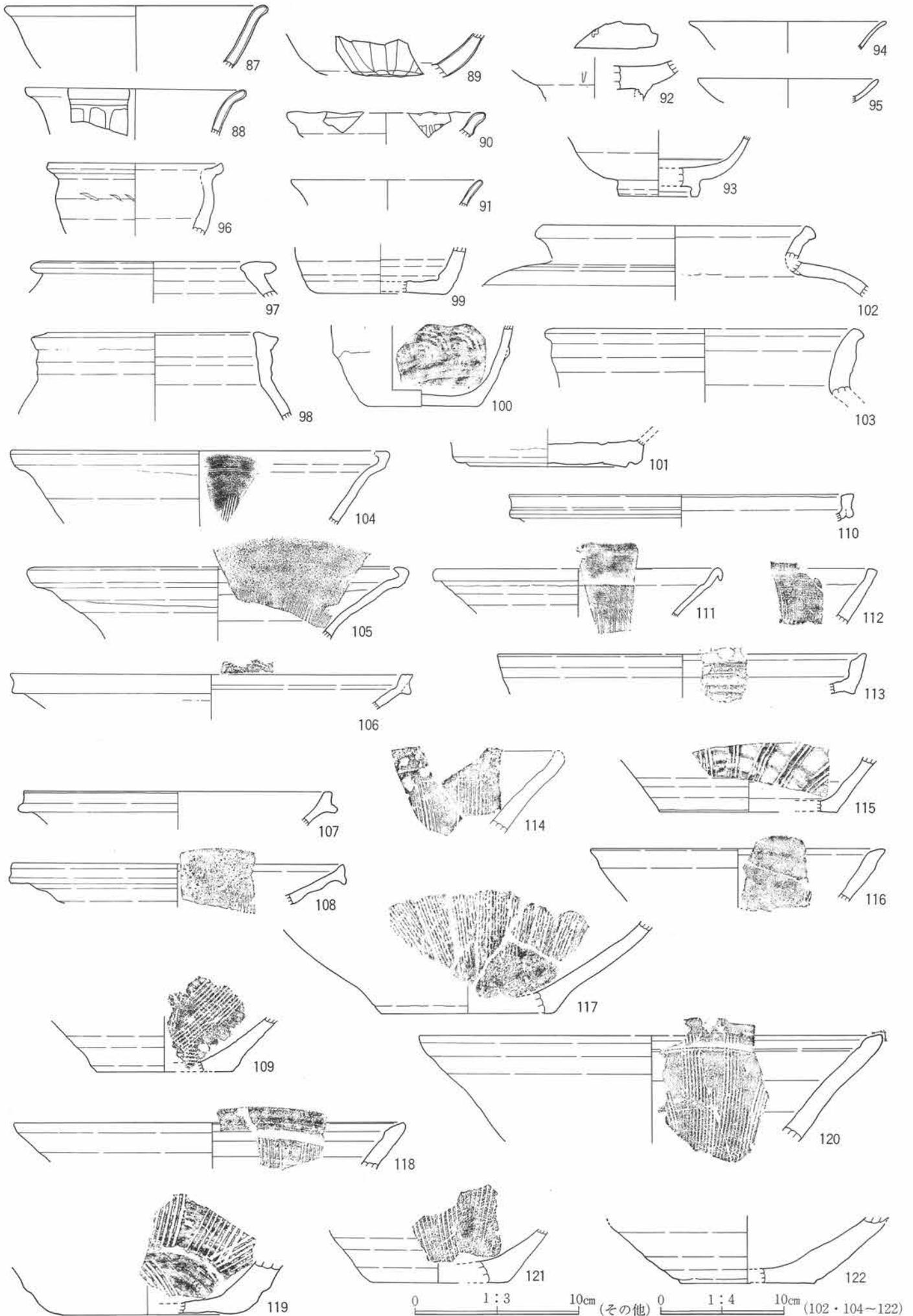


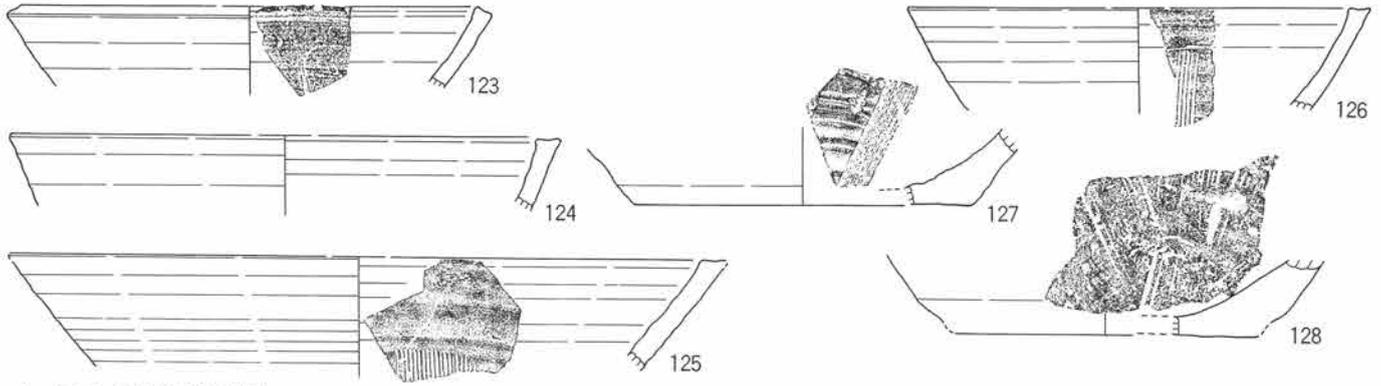
SX 327



中・近世のその他の遺構および遺構外出土陶磁器・土器

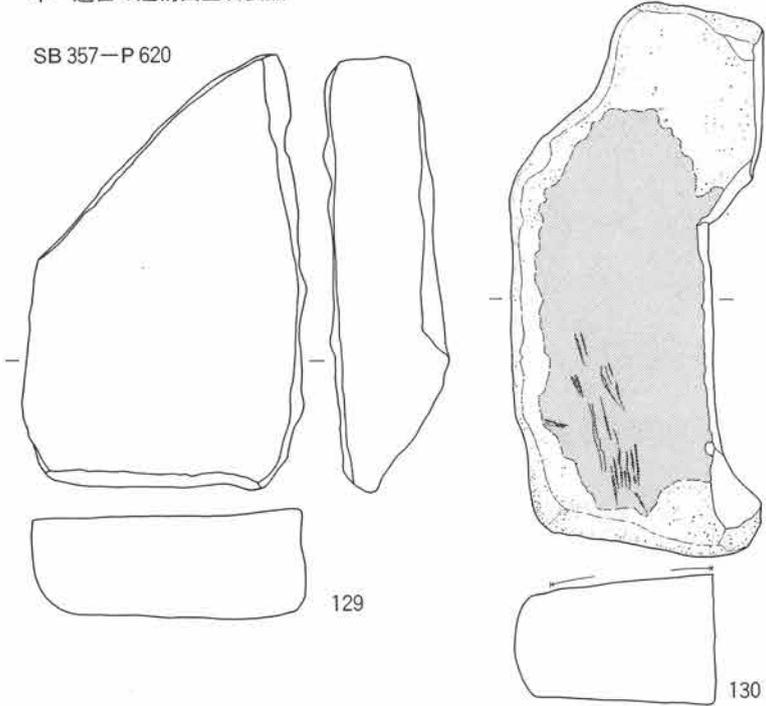




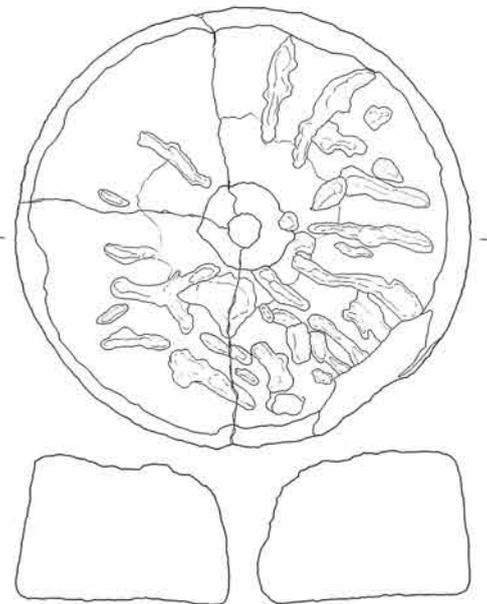


中・近世の遺構出土石製品

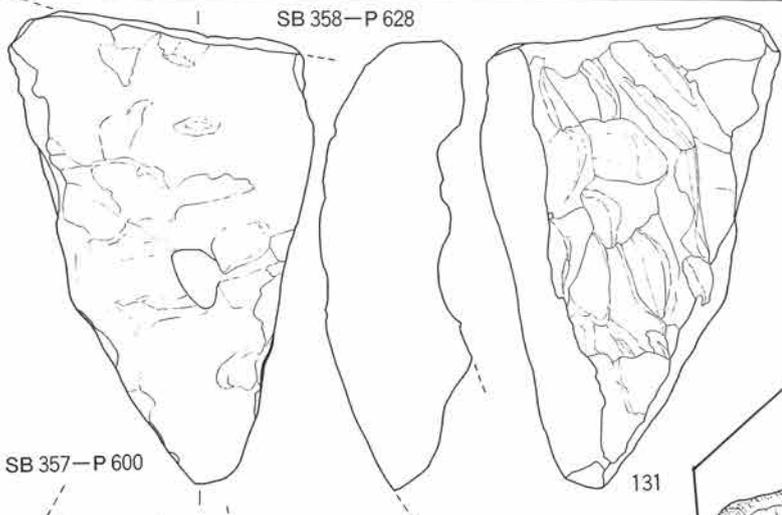
SB 357-P 620



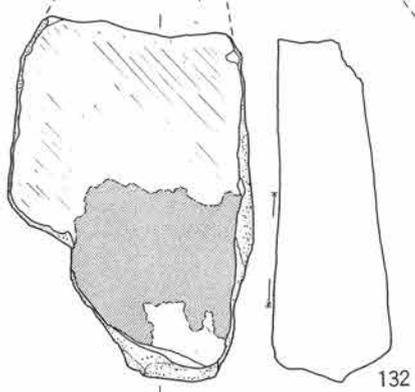
SB 357-P 605



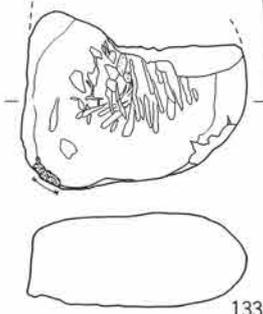
SB 358-P 628



SB 357-P 600

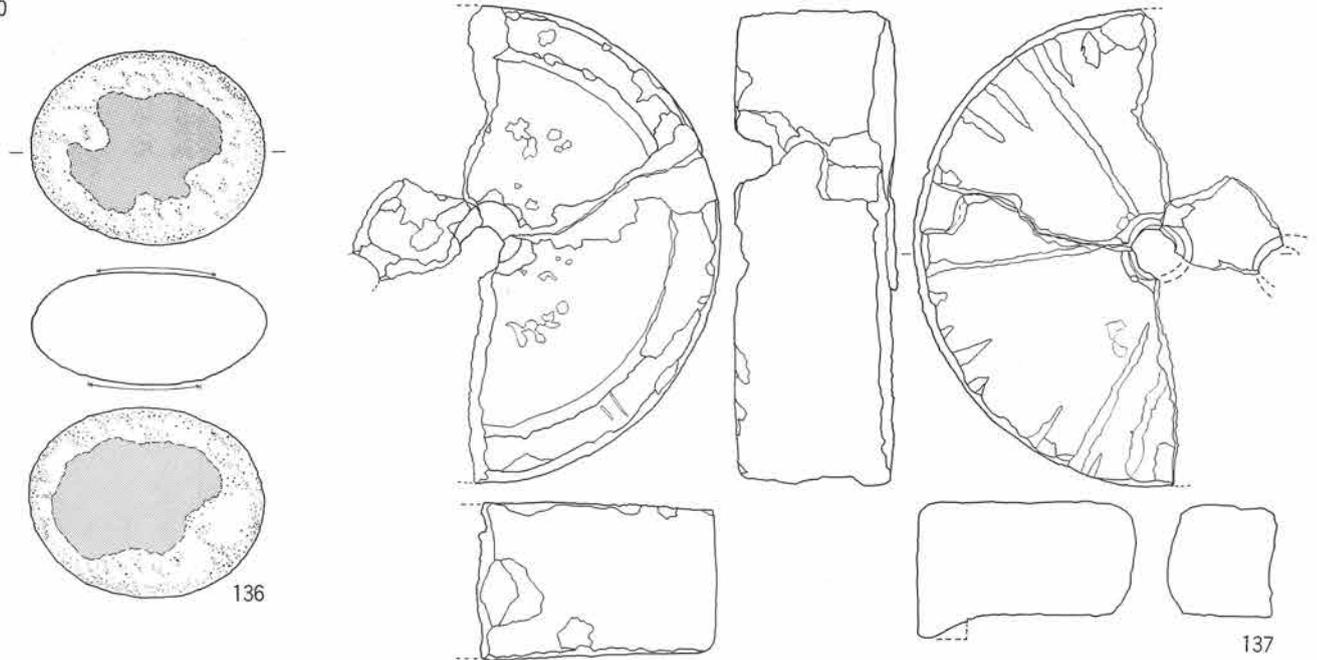


P 659



磨耗 0 1:3 10cm (131・133)
 タタキ 0 1:4 10cm (123~129)
 0 1:5 10cm (その他)

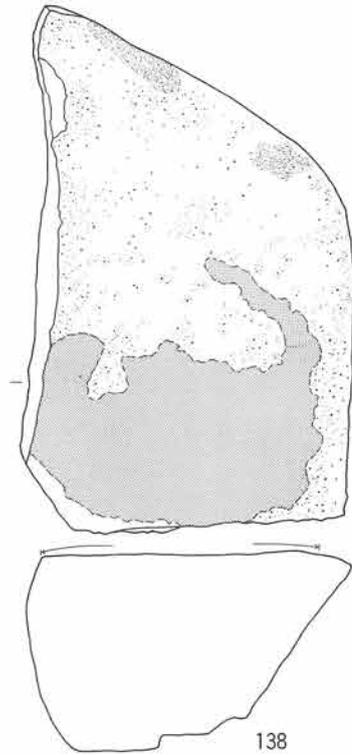
P 660



136

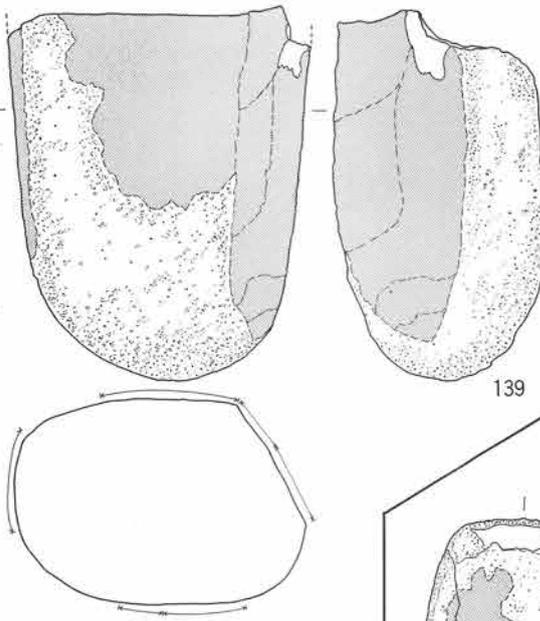
137

SB 357—P 676



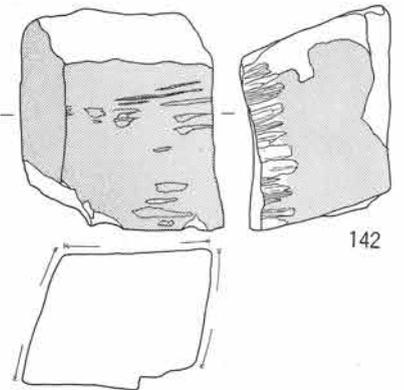
138

SB 357—P 682



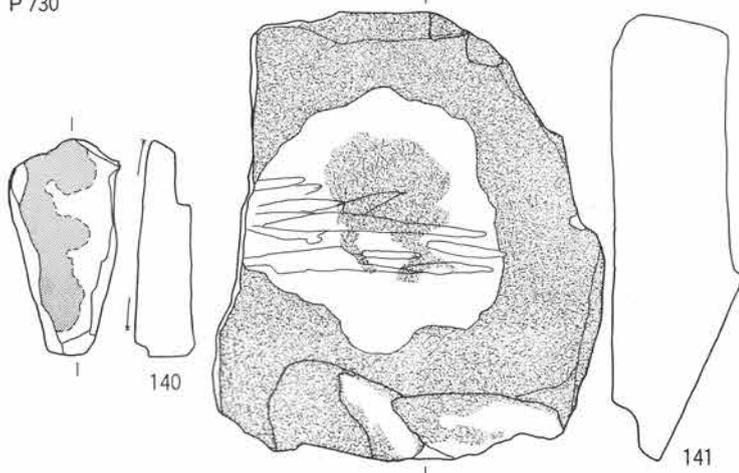
139

P 726



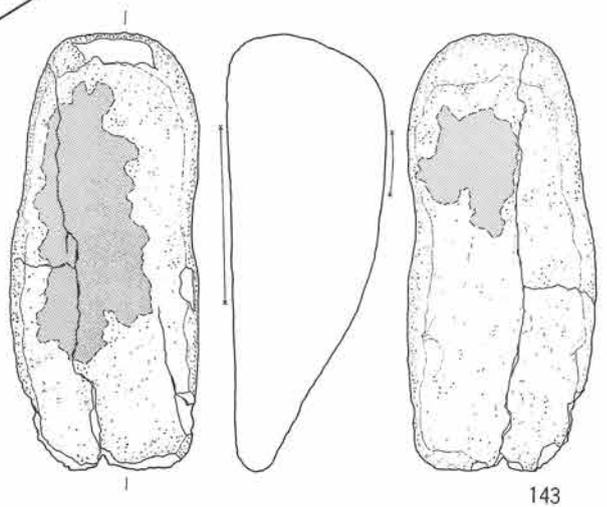
142

P 730



140

141



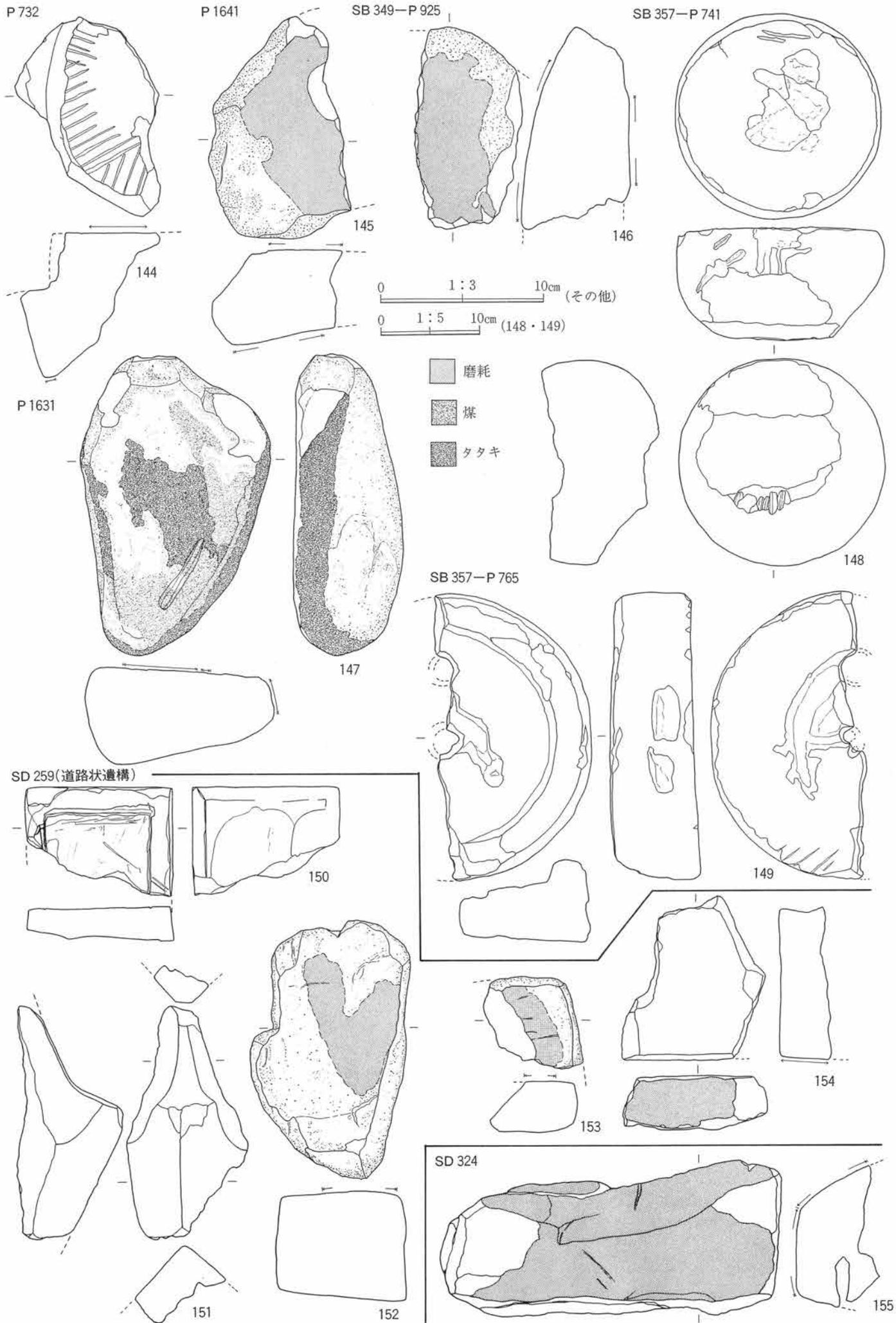
143

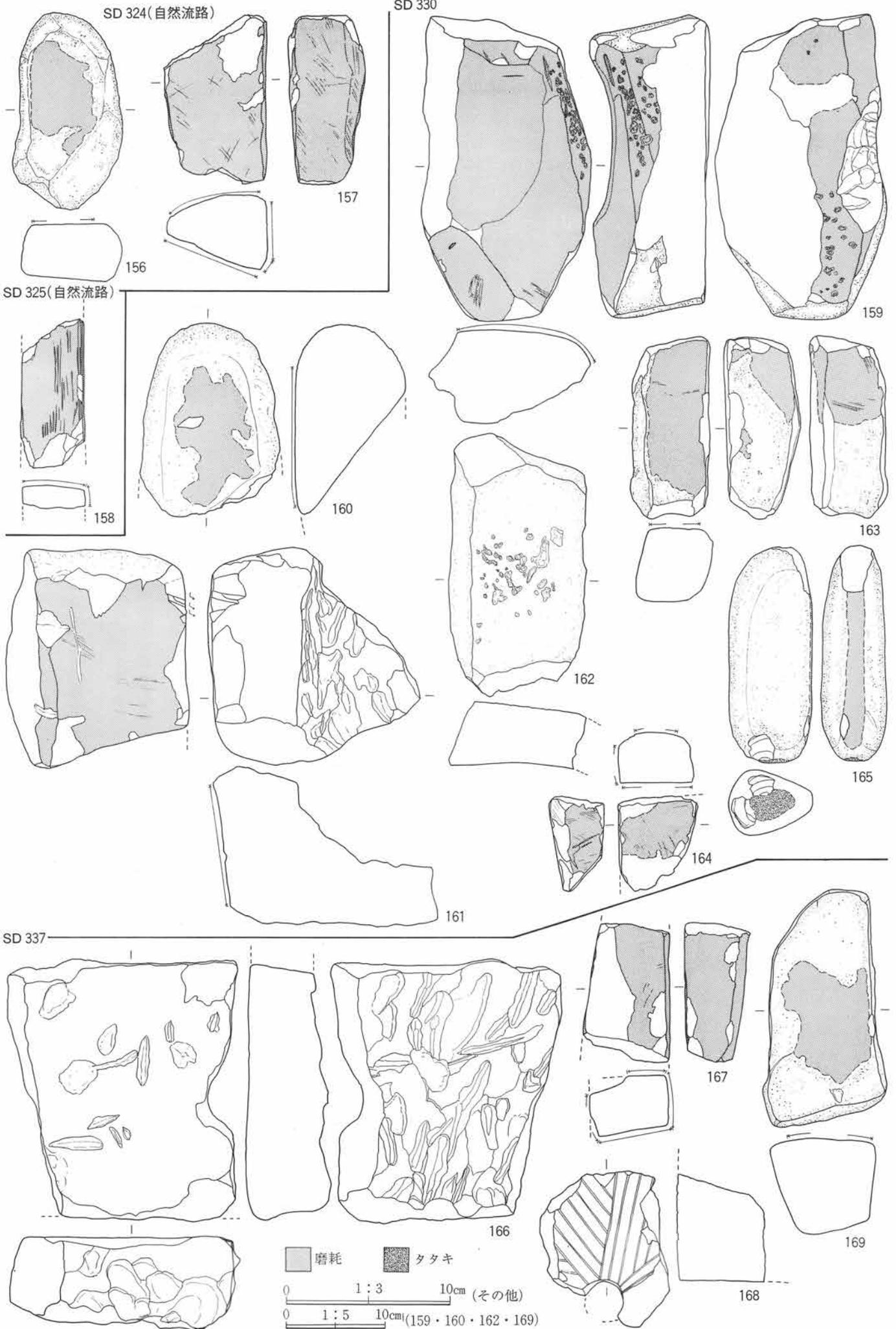
■ 磨耗
■ 煤

0 1:3 10cm (その他)
0 1:5 10cm (137・143)

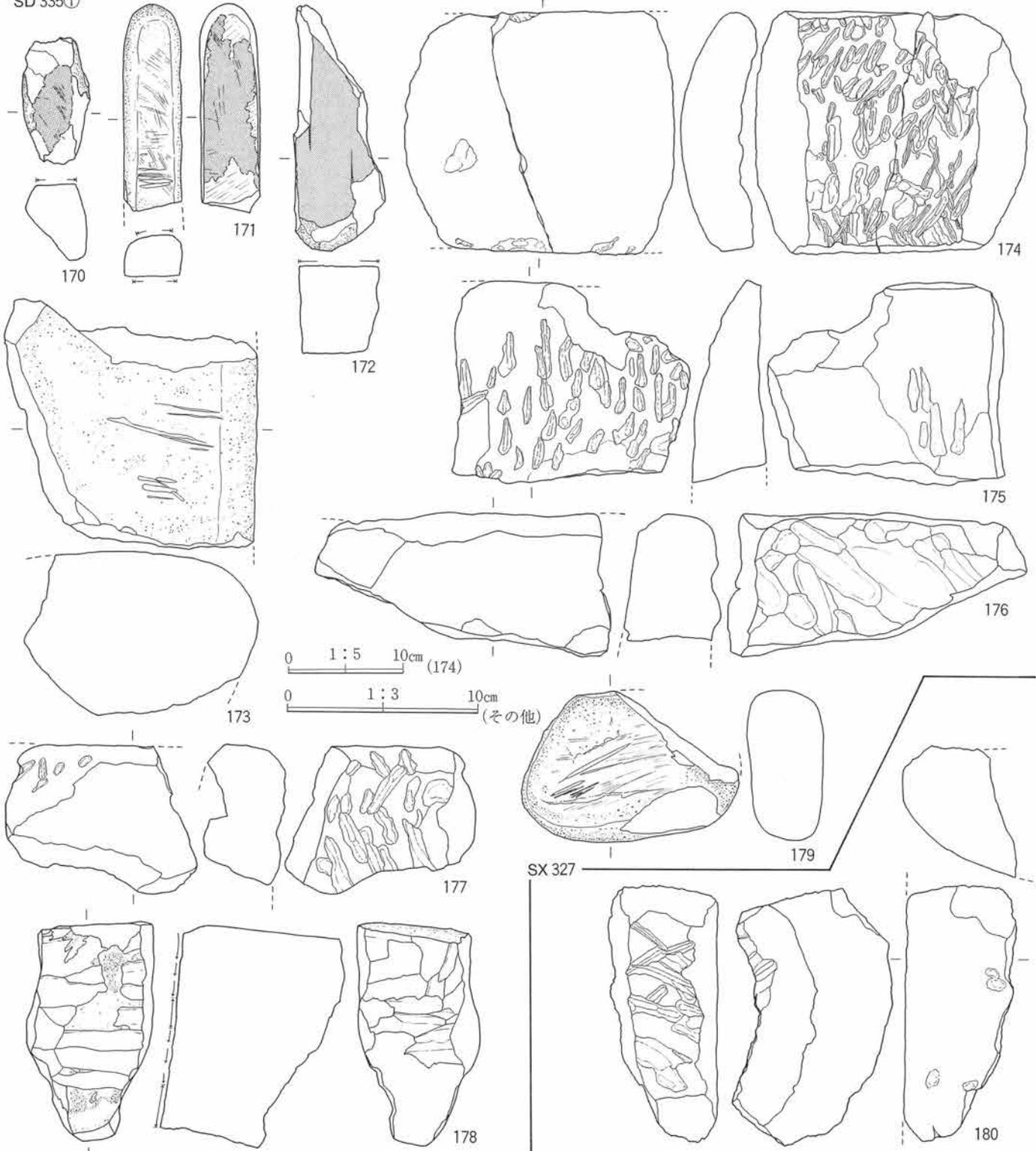
天王前遺跡 中・近世の遺構出土石製品(3)

P 732、P 1641、SB 349(P 925)、SB 357(P 741、P 765)、P 1631、SD 259(道路状遺構)、SD 324



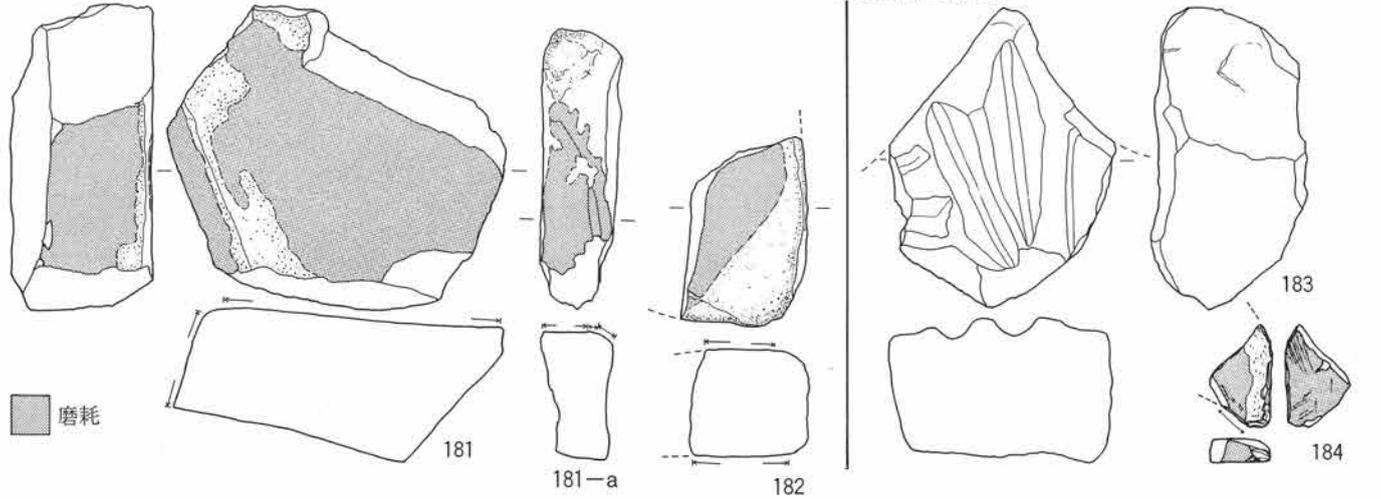


SD 335①



SD 335②

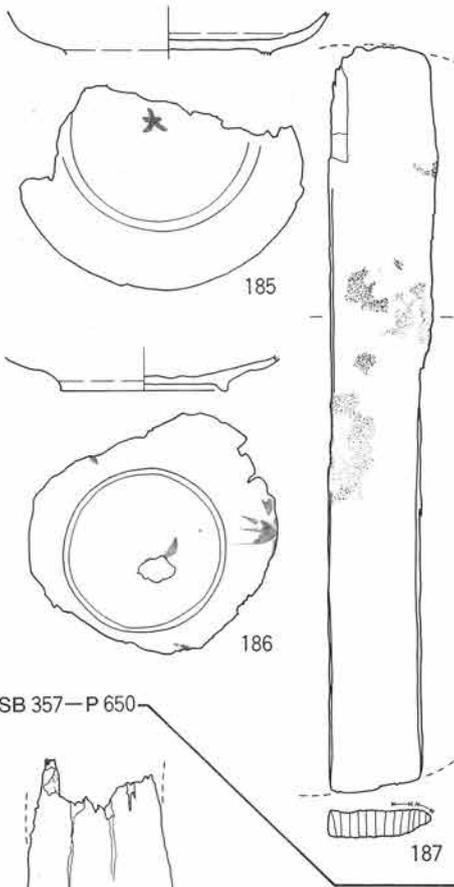
遺構外出土石製品



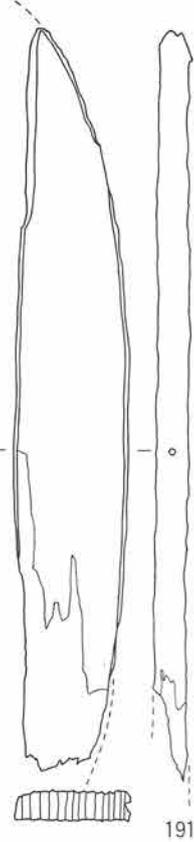
磨耗

SD 337、SB 357(P 620、P 582、P 650、P 670)、SB 358(P 531)、P 574、P 578、P 518、P 669、P 865

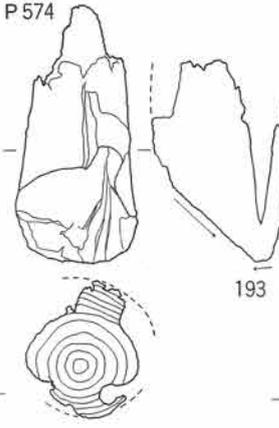
SD 337



SB 357-P 620



P 574



P 518



SB 358-P 531



P 578



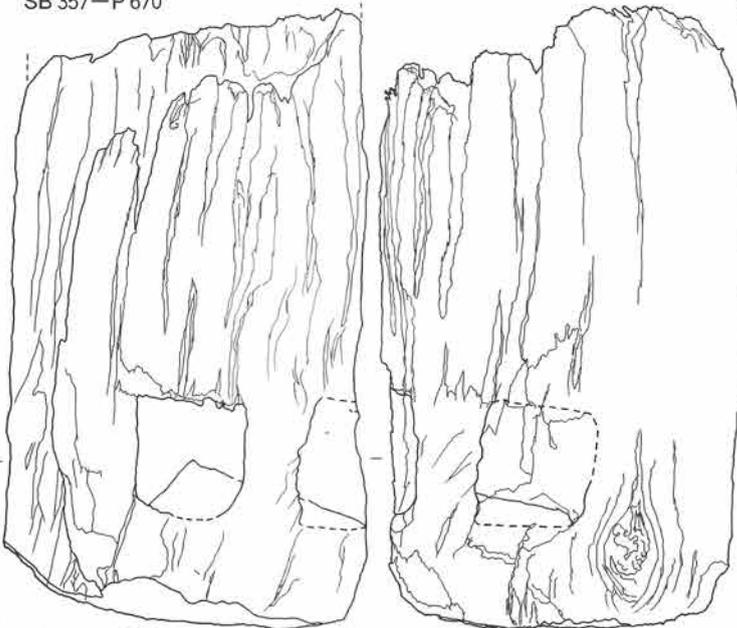
SB 357-P 582



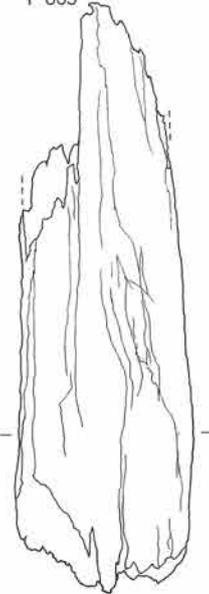
SB 357-P 650



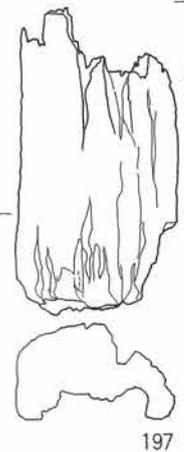
SB 357-P 670



P 865



P 669



■ 黑色付着物

0 1:3 10cm

0 1:5 10cm (185~187・191)

(その他)

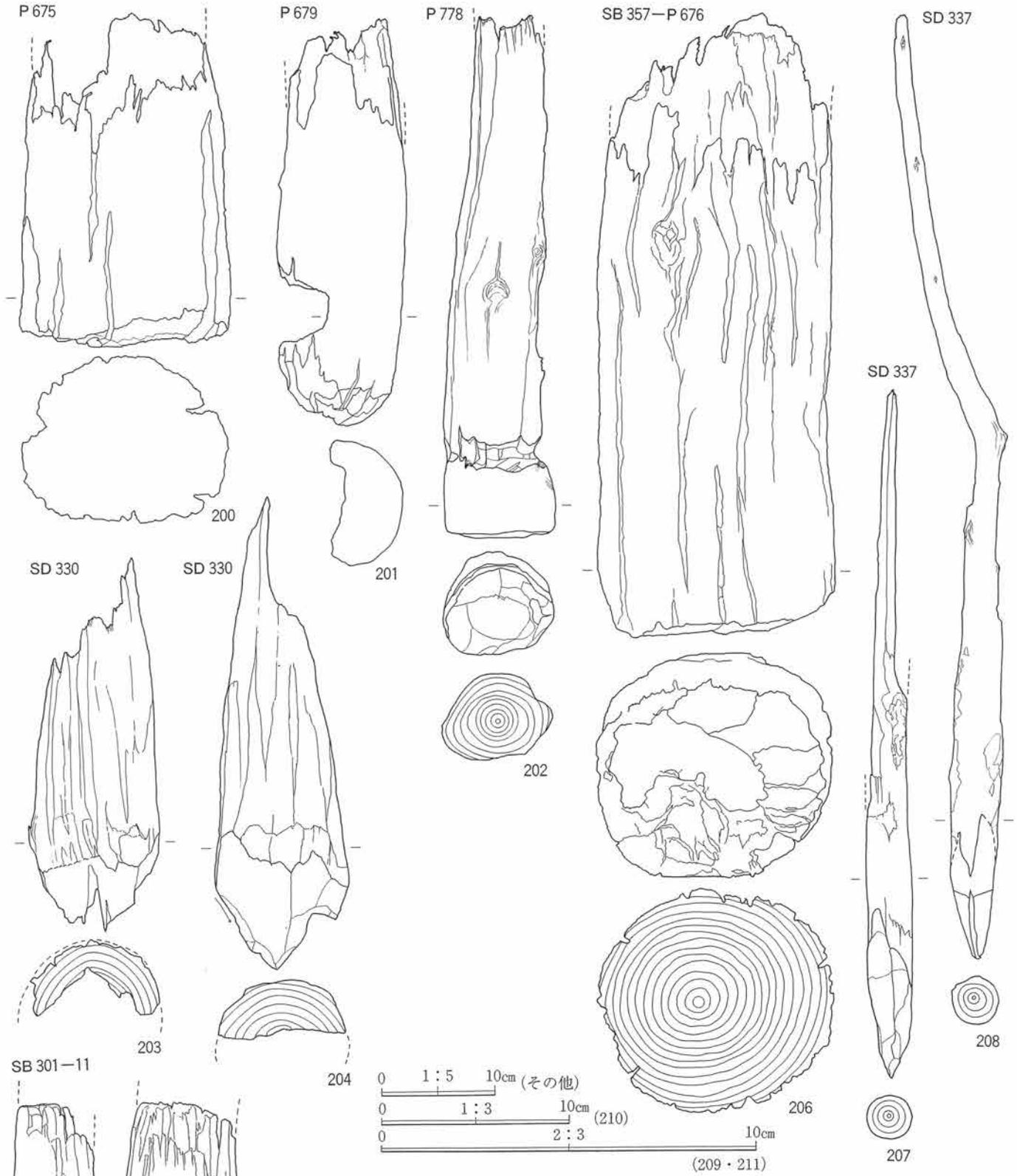
190

197

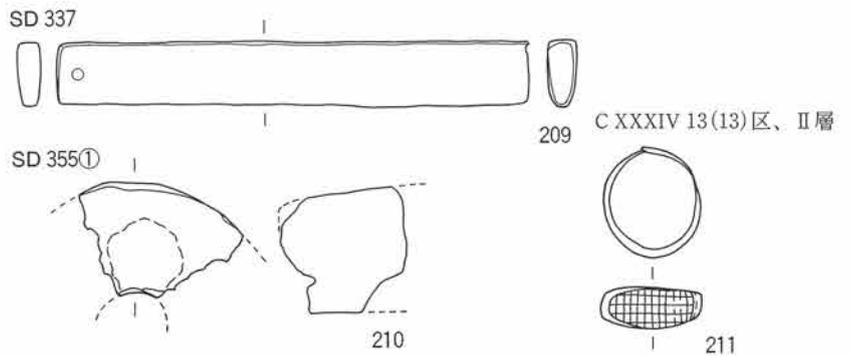
198

196

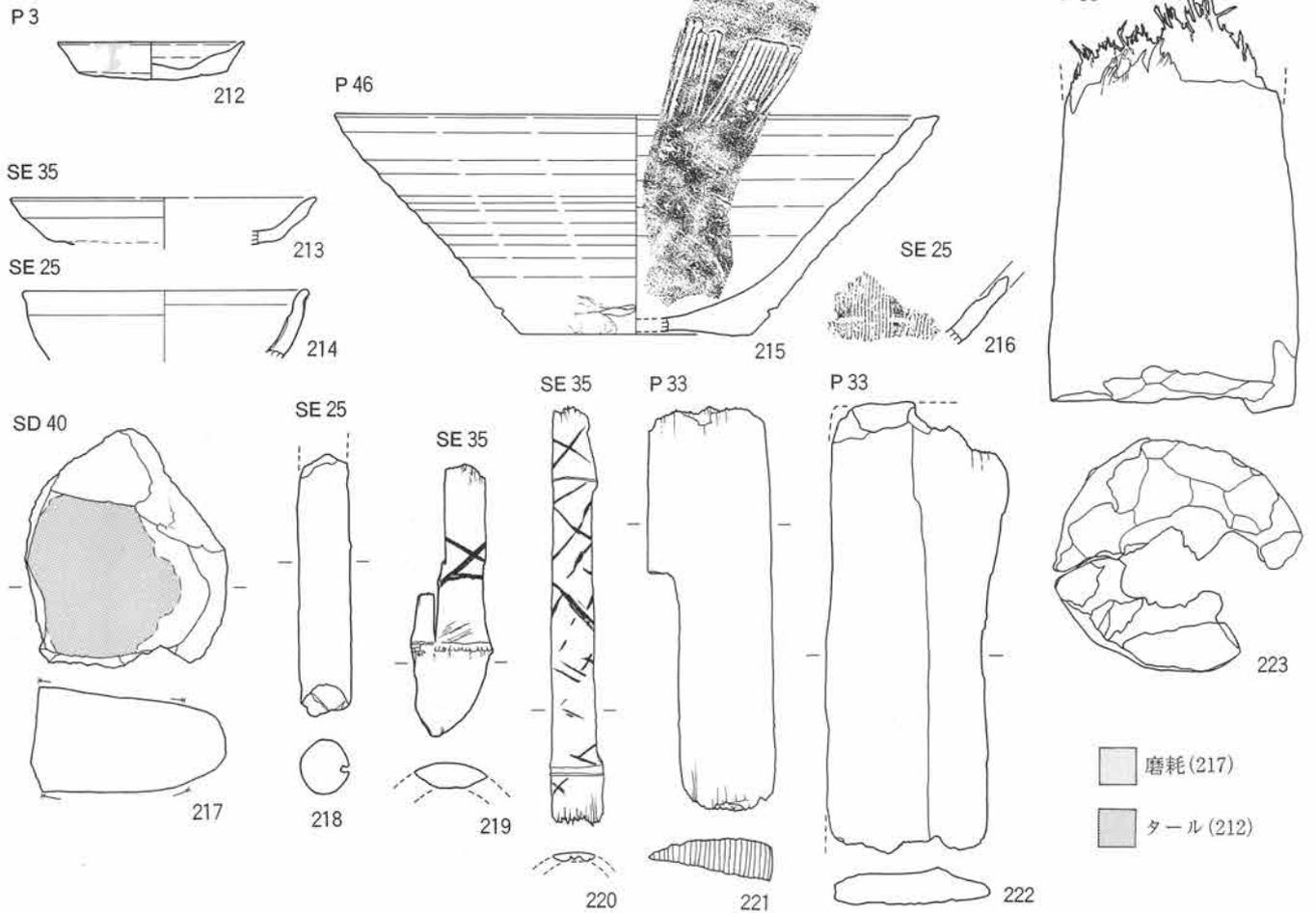
199



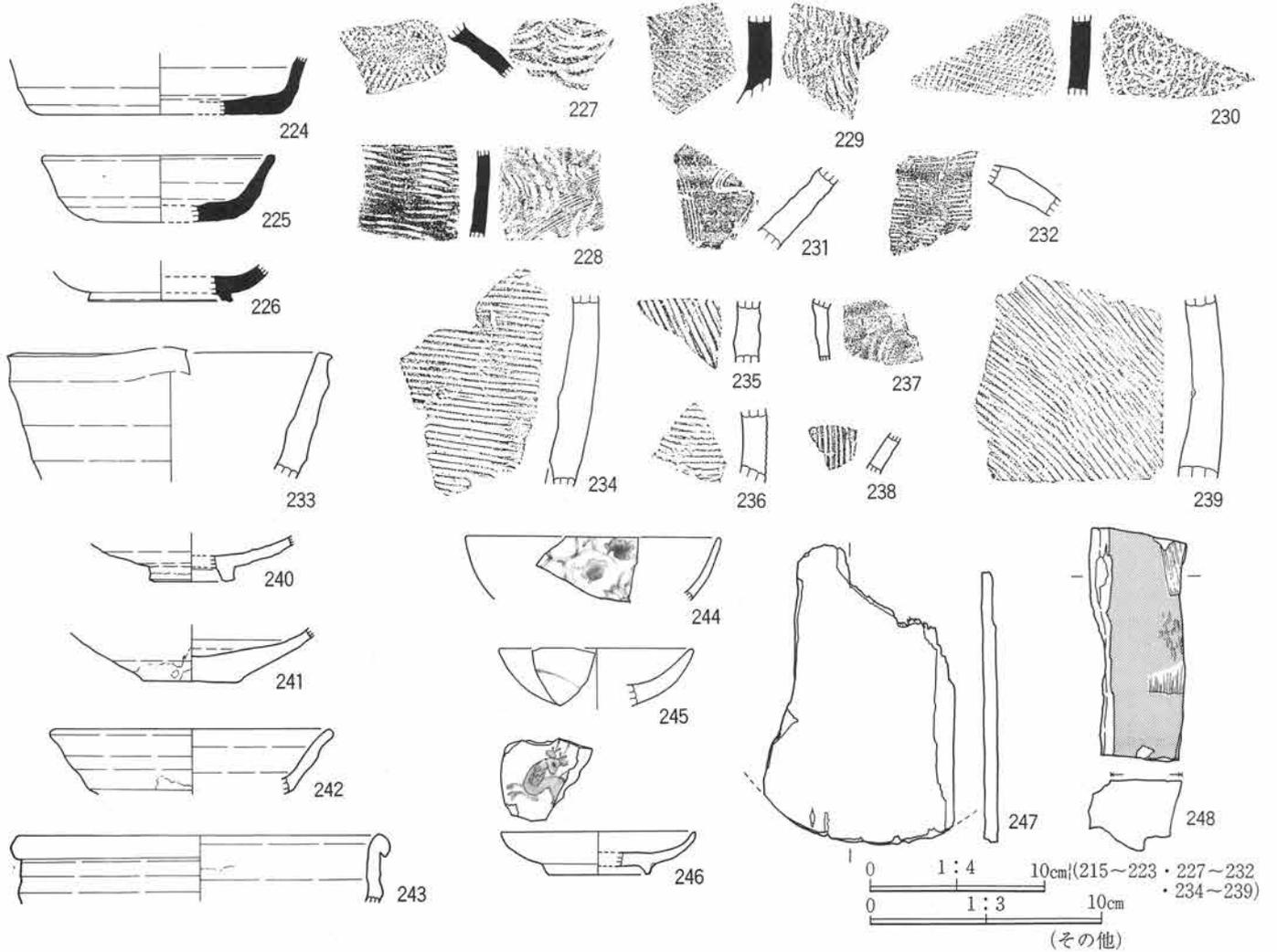
中・近世の金属製品・土製品



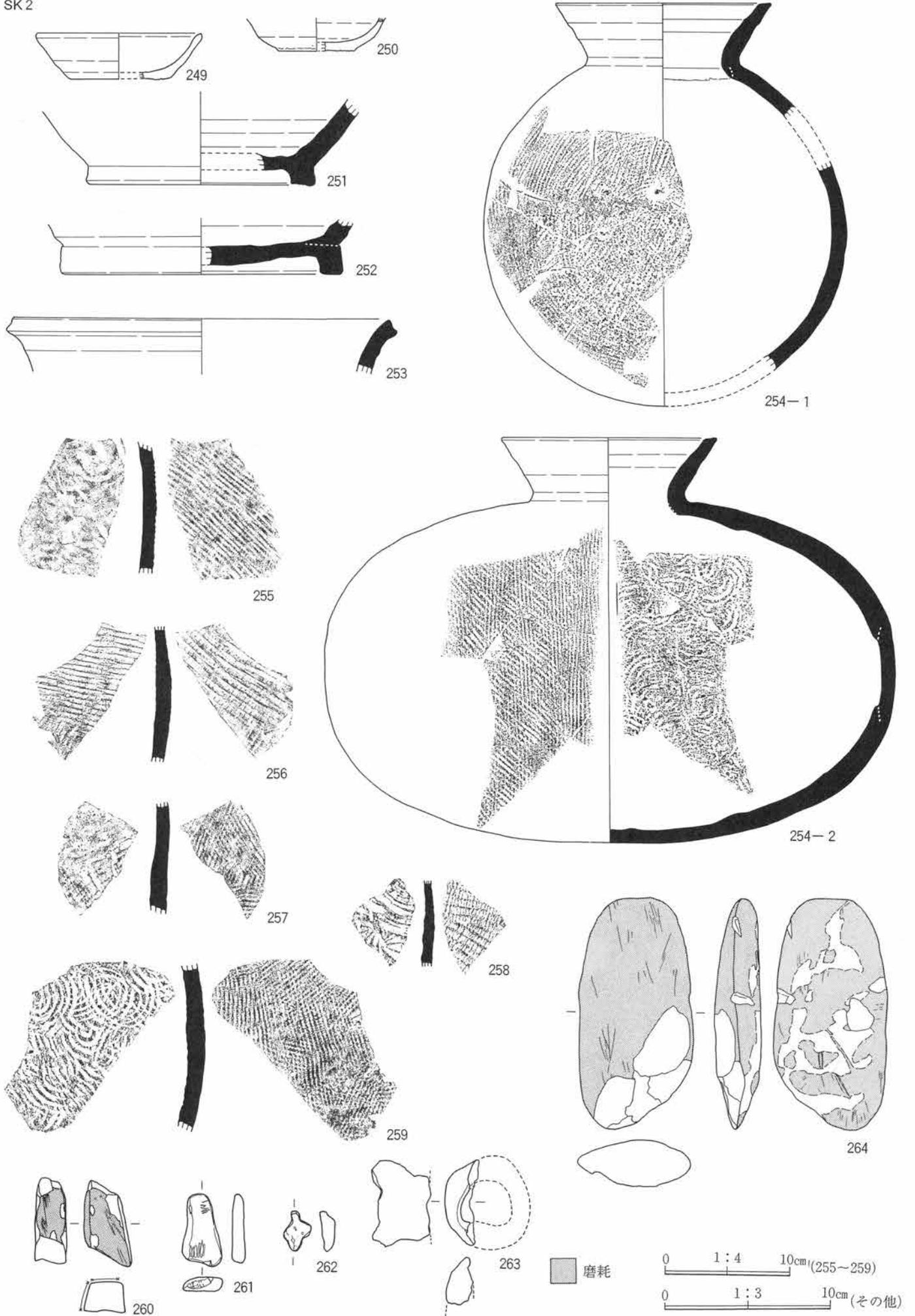
遺構出土遺物



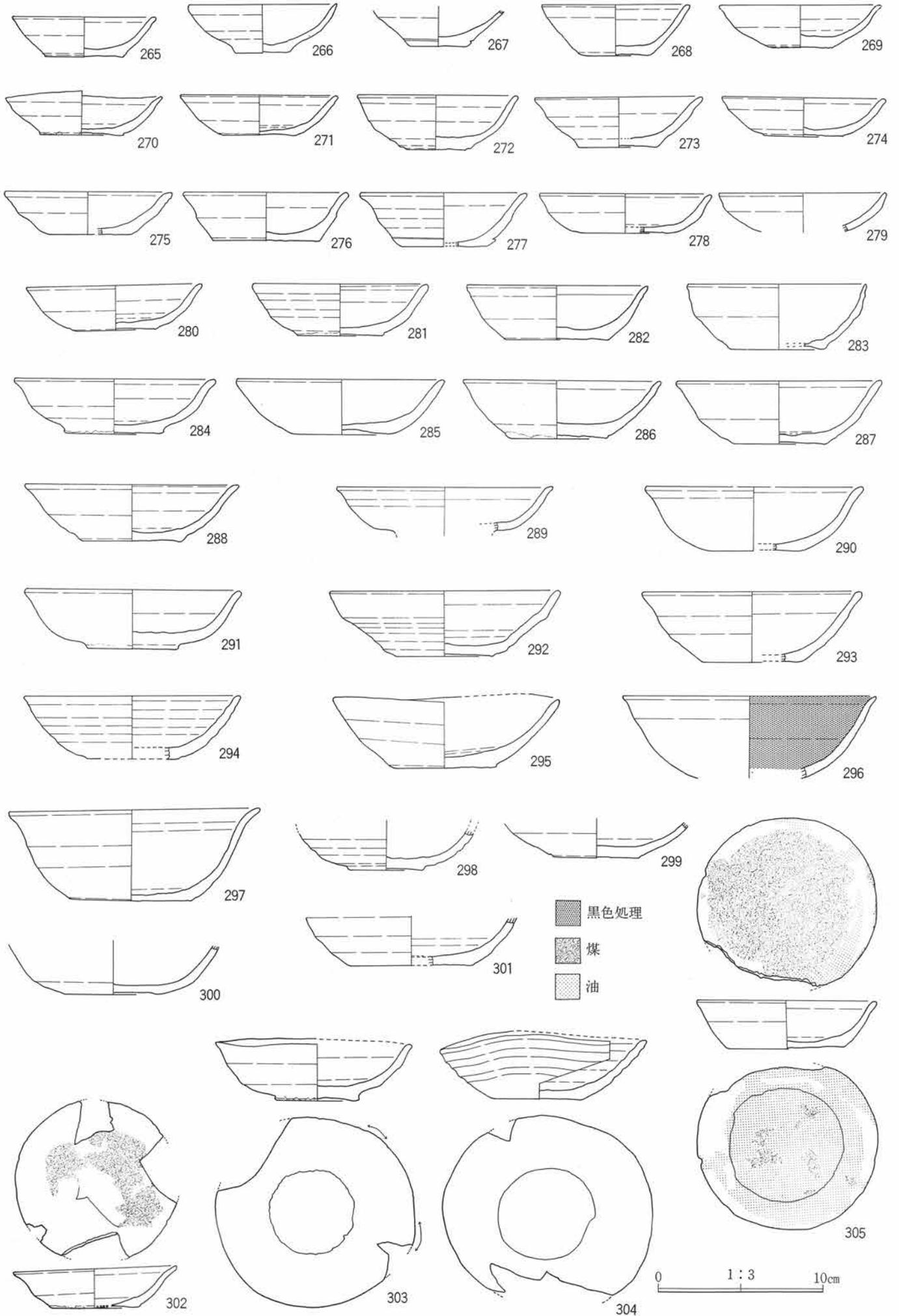
遺構外出土遺物



SK 2



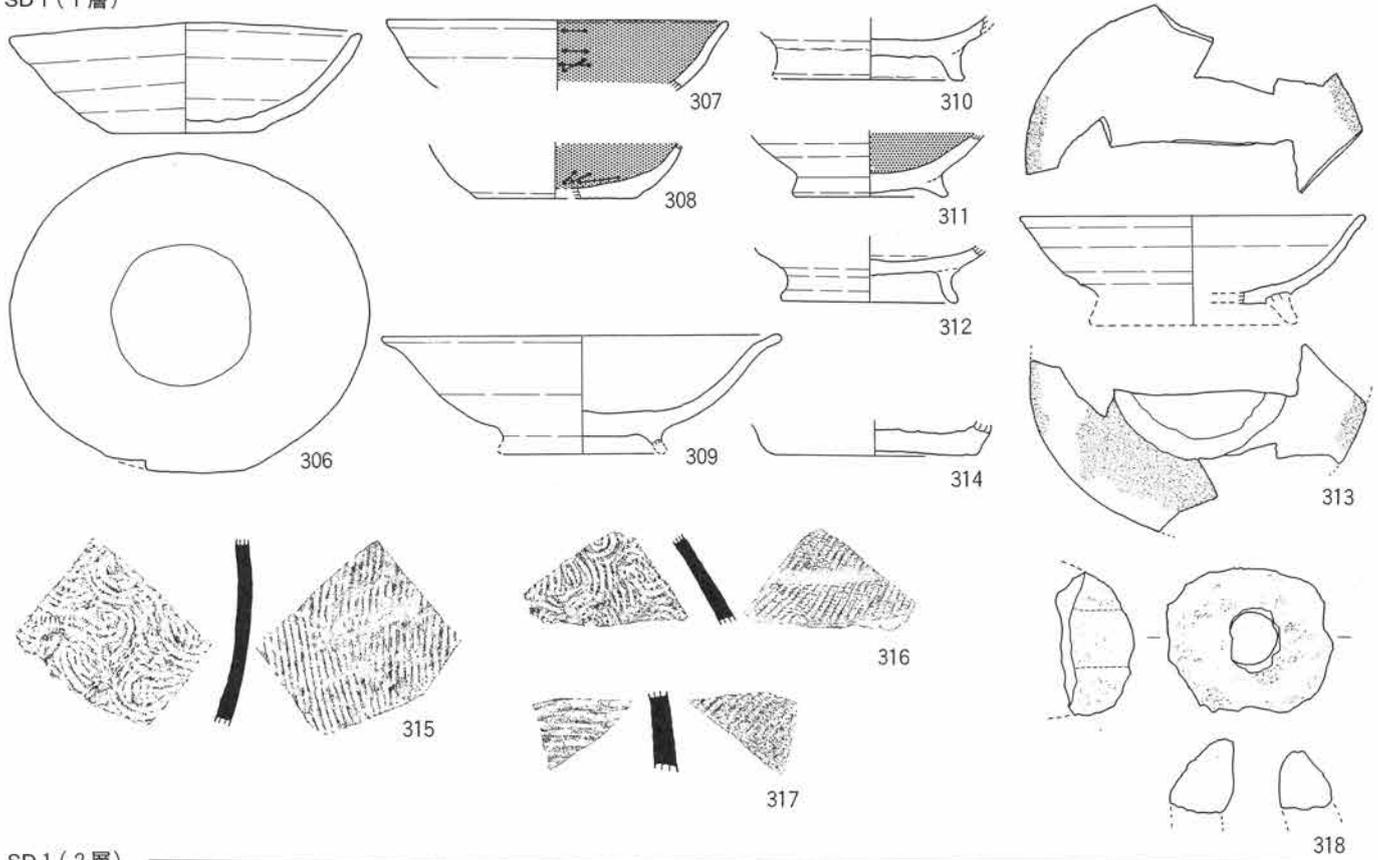
SD1(1層)



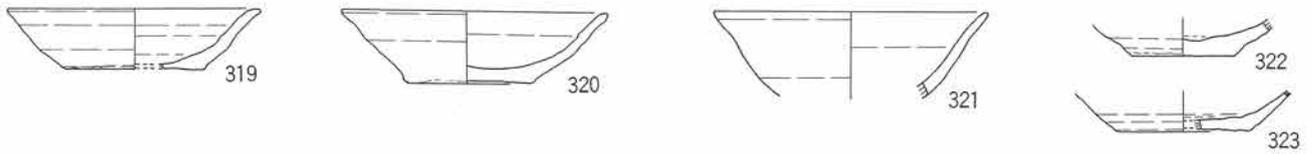
■ 黑色処理
 ■ 煤
 ■ 油

0 1:3 10cm

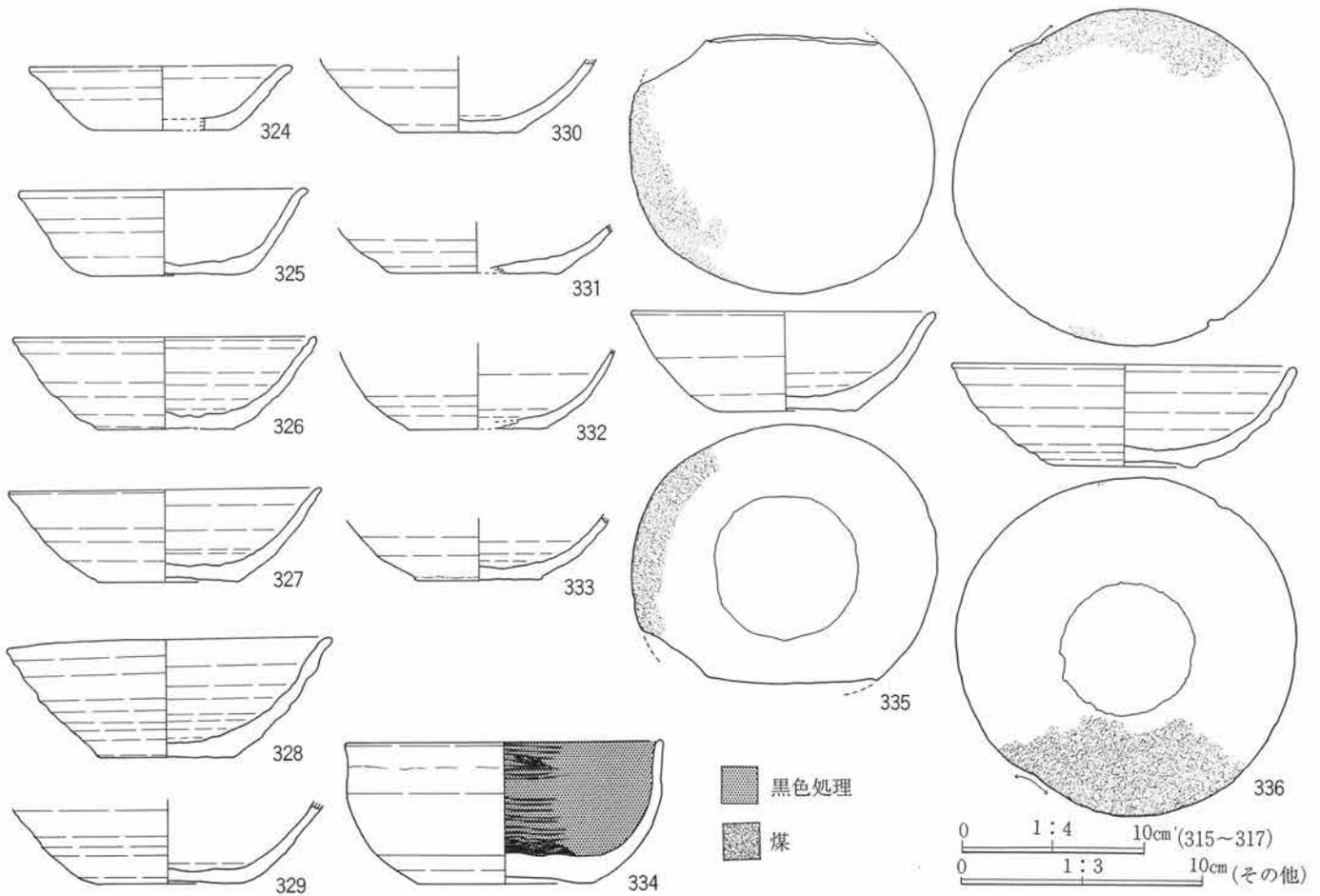
SD1(1層)



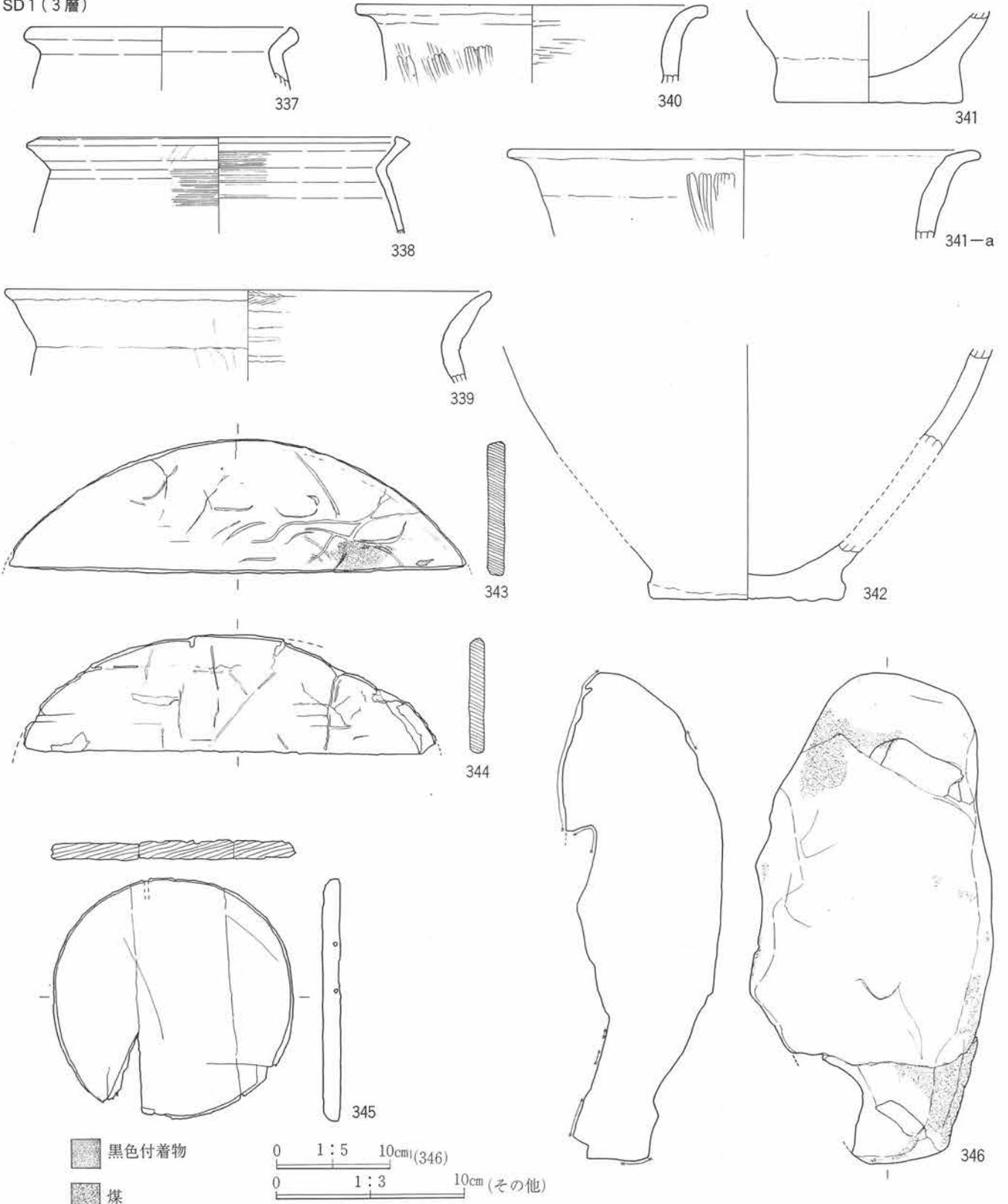
SD1(2層)



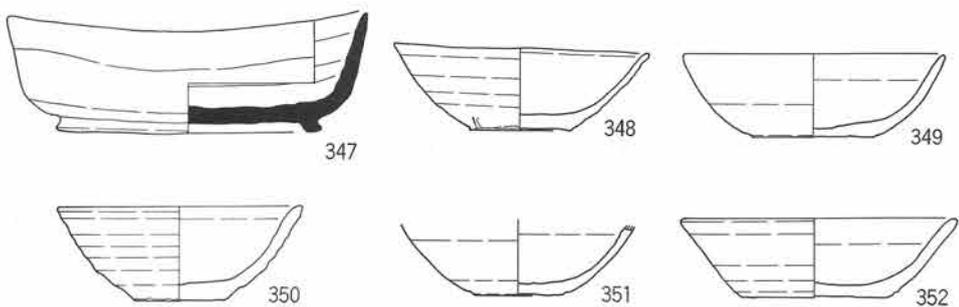
SD1(3層)



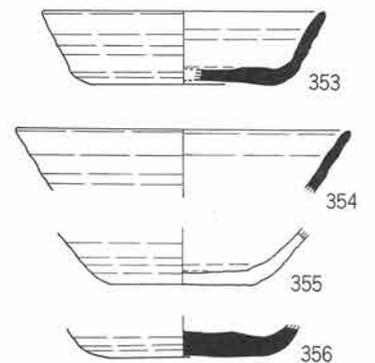
SD1(3層)

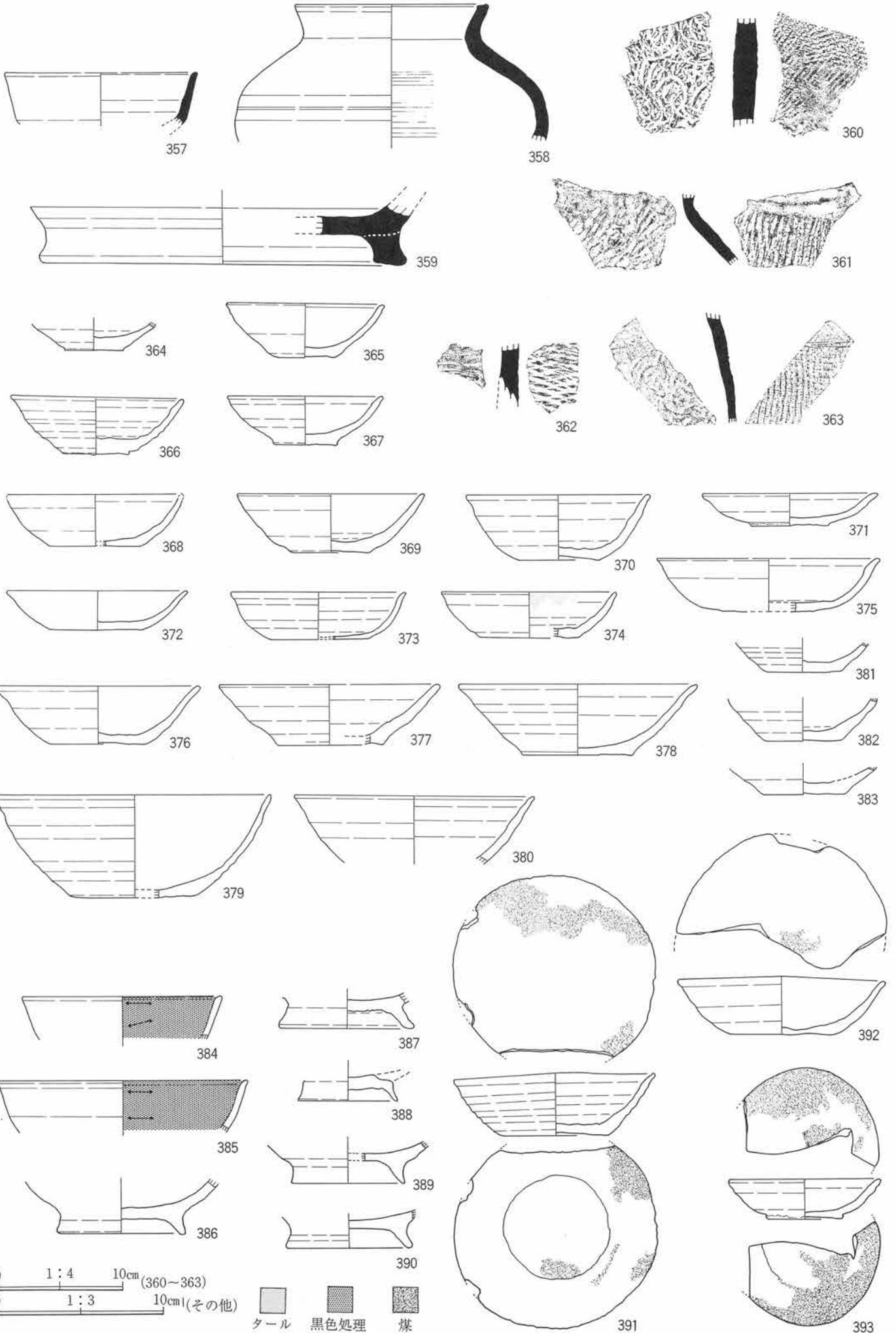


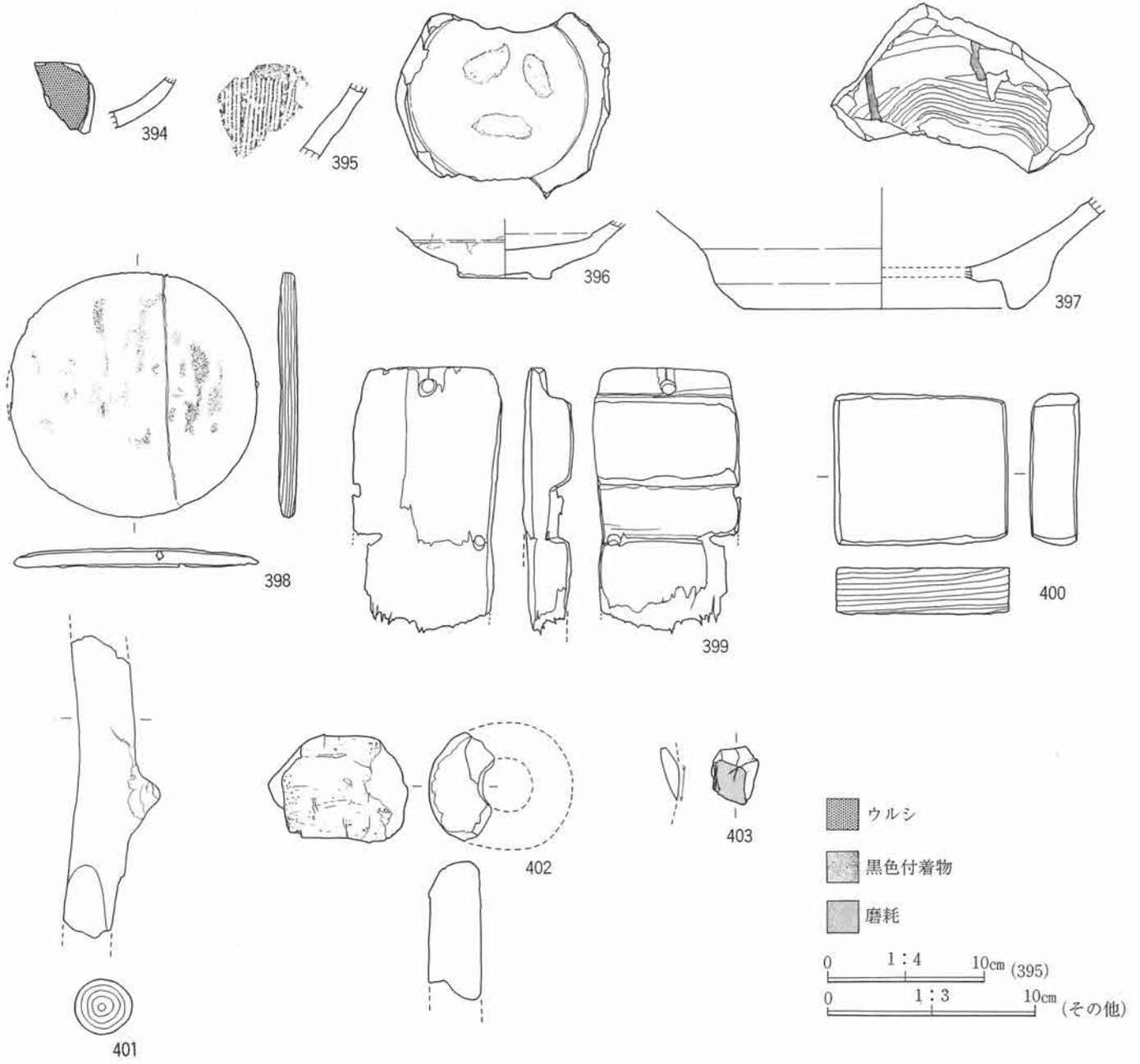
SD1(5層)



SD1(層位不明)





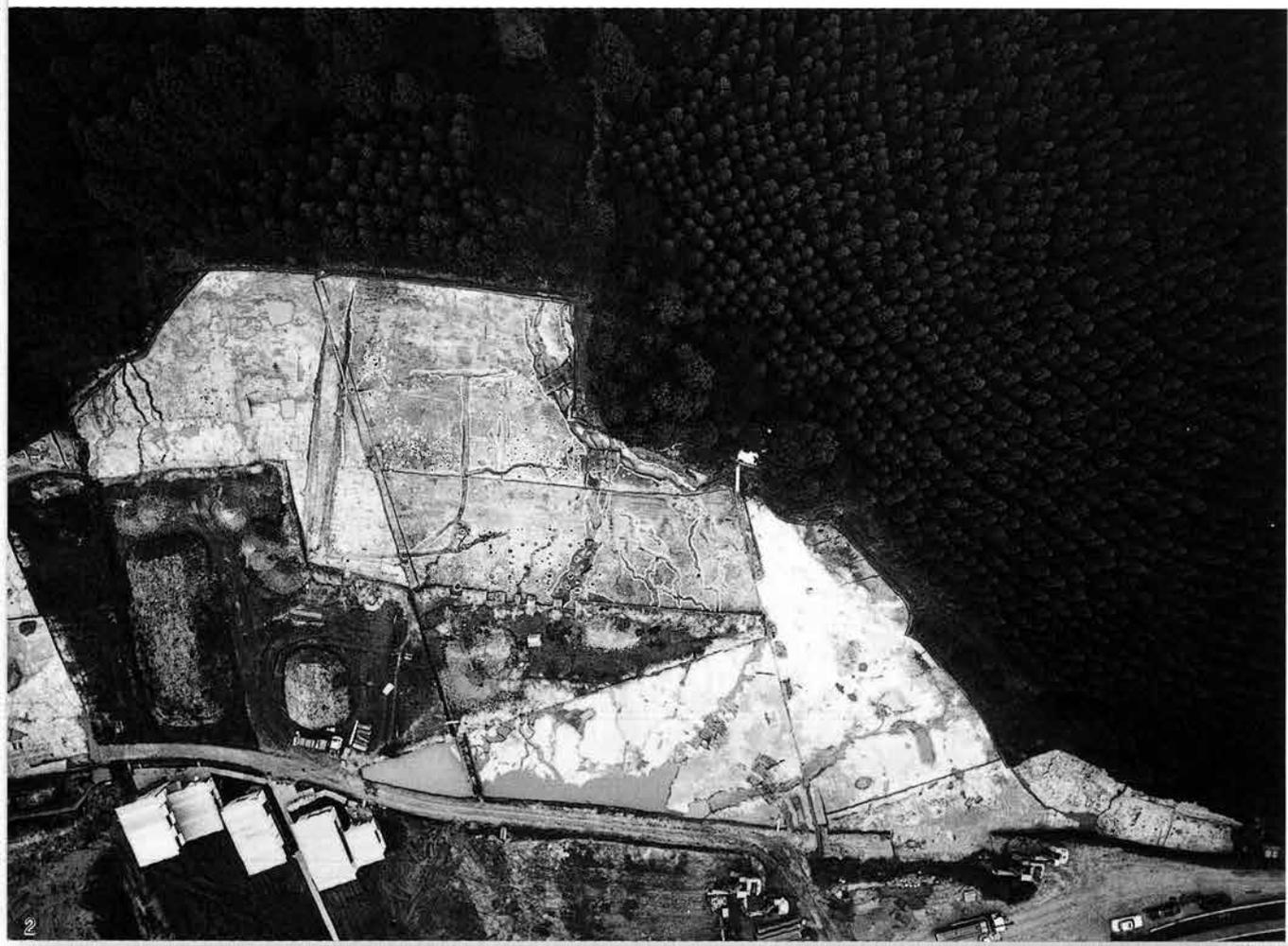




事業団調査範囲



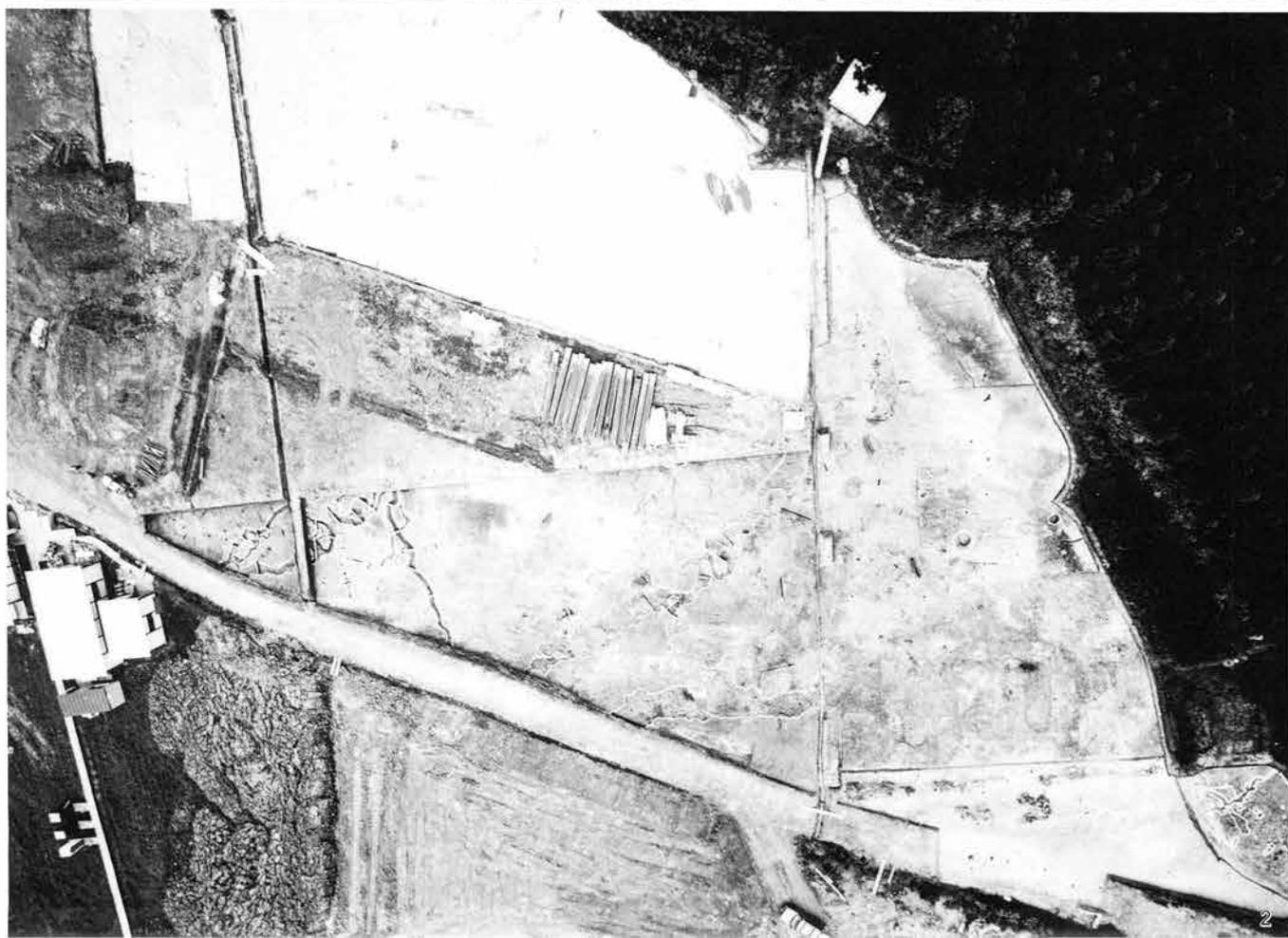
1. 遺跡遠景
(東から)



2. 遺構配置
(調査区全体)



1. 遺構配置
(BC XXXIV区)



2. 遺構配置
(CD XXXIII~
XXXV区)



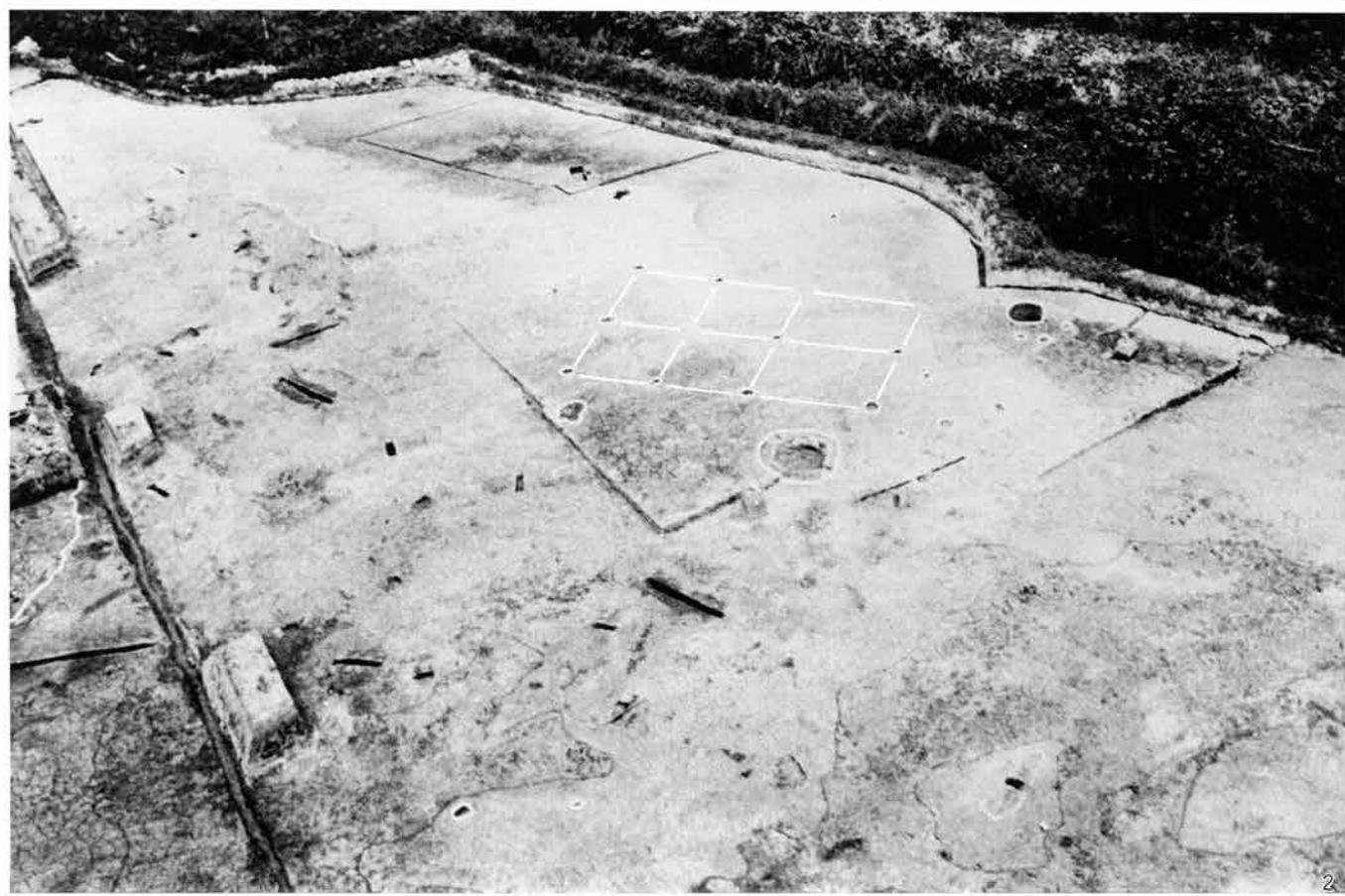
1. 遺構配置
(BC XXXIV区)



2. 遺構配置
(BC XXXIV区)



1. 遺構配置
(C XXXIV 区)



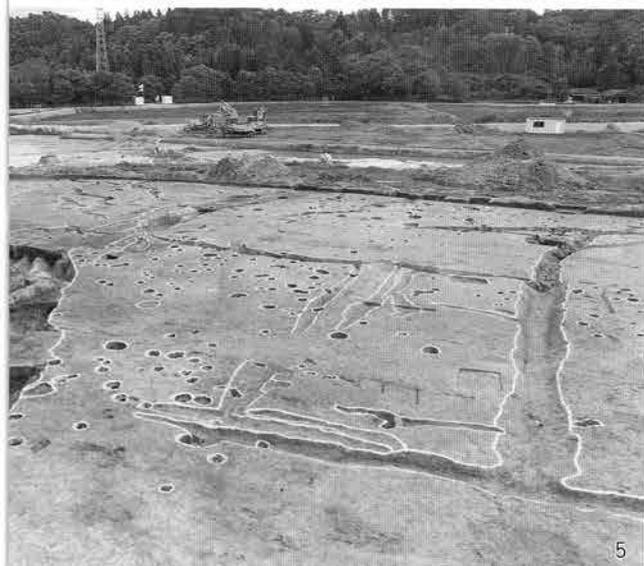
2. 遺構配置
(CD XXXV 区)



1. 試掘状況
(東から)
2. 42 T 試掘坑
断面および
試料採取位置
(西から)



3. 遺構配置
SB 345・346、
SX 328
付近 (北から)
4. 遺構配置
SD 335①、
SB 349・350、
SA 359・360
付近 (北から)

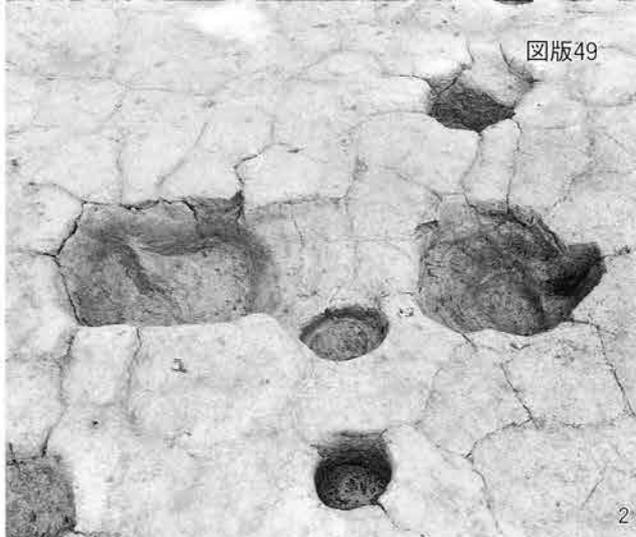


5. 遺構配置
SD 355①・
332・336・338、
SB 348、
SX 327
付近 (西から)
6. 遺構配置
SD 330・331、
SB 353・354
付近 (東から)



7. 遺構配置
SB 356・355・
357
付近 (北から)
8. 遺構配置
SB 301、
SE 311・320、
SD 309
付近 (南から)

- 1. SB 357-
P 740・741
断面 (南から)
- 2. SB 357-
P 740・741
完掘 (南から)



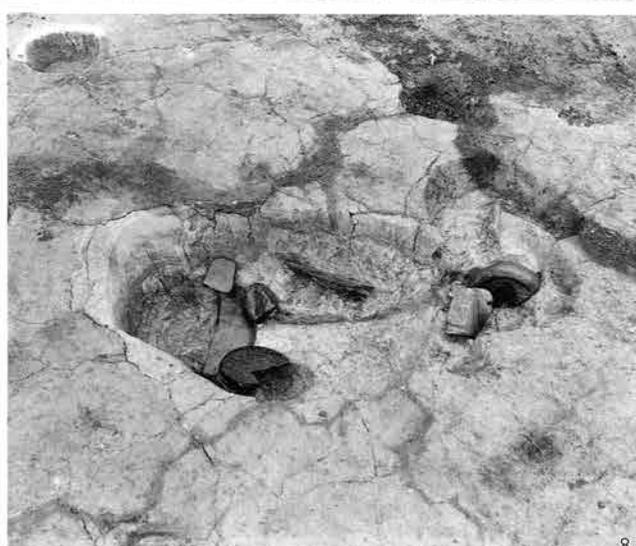
- 3. SB 357-
P 630
完掘 (南から)
- 4. SB 357-
P 600
断面 (東から)



- 5. SB 357-
P 600
完掘 (東から)
- 6. SB 357-
P 605
断面 (西から)



- 7. SB 357-
P 605
据石・根固石
出土状況
(北から)
- 8. SB 357-
P 620・765
遺物出土状況
(南から)



1

2

3

4

5

6

7

8

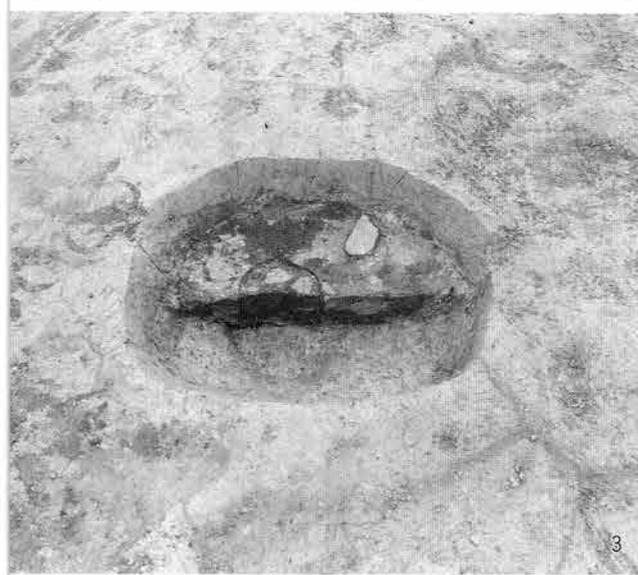


1



2

- 1. SB 357-
P 620
断面 (南から)
- 2. SB 357-
P 620・765
完掘 (南から)



3

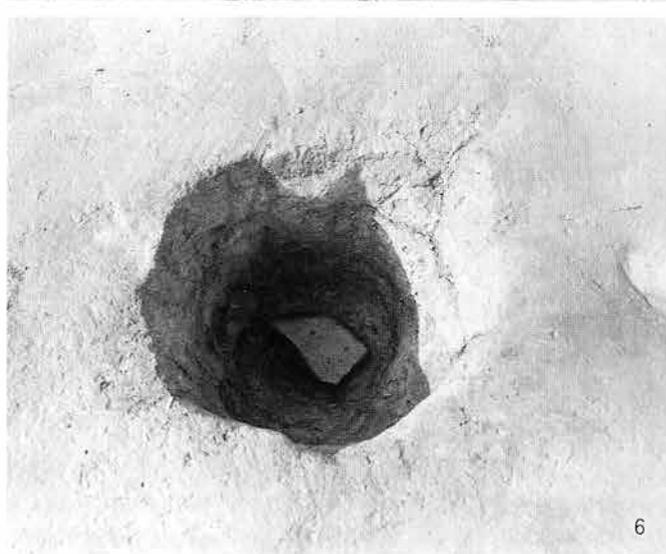


4

- 3. SB 357-
P 700
断面 (北から)
- 4. SB 357-
P 700
完掘 (北から)



5



6

- 5. SB 357-
P 676
柱根出土状況
(東から)
- 6. SB 357-
P 676
据石出土状況
(東から)



7



8

- 7. SB 357-
P 650
断面 (東から)
- 8. SB 357-
P 650
柱根・その他
出土状況
(東から)

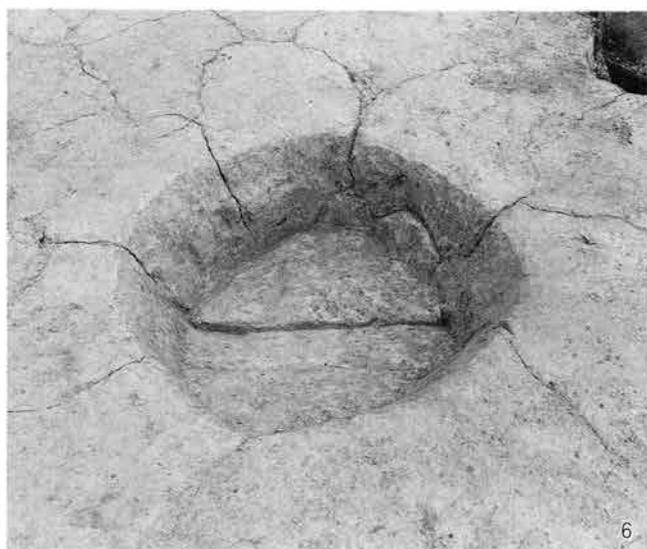
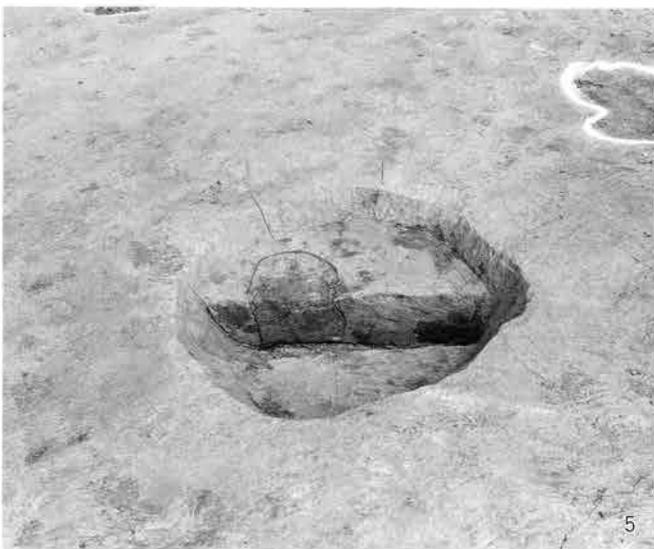
- 1. SB 357-
P 705
断面 (南から)
- 2. SB 357-
P 705
完掘 (南から)



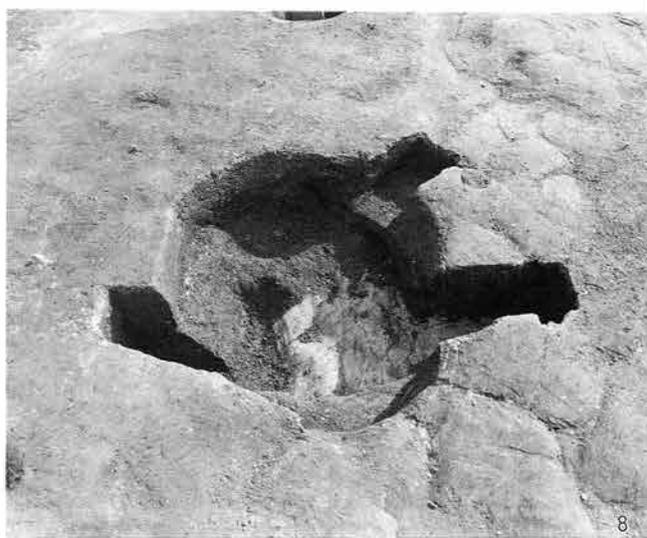
- 3. SB 357-
P 670・675
柱根・根固石
出土状況
(南から)
- 4. SB 357-
P 670・675
完掘 (南から)



- 5. SB 357-
P 710
断面 (東から)
- 6. SB 357-
P 710
完掘 (東から)



- 7. SB 357-
P 726
据石・根固石
出土状況
(西から)
- 8. SB 357-
P 726
完掘 (西から)





1



2

- 1. SB 356-
P 734
断面 (南から)
- 2. SE 344
断面 (西から)



3



4

- 3. SE 344
完掘 (西から)
- 4. SE 343
断面 (西から)



5



6

- 5. SE 311
断面 (南から)
- 6. SE 311
完掘 (南から)



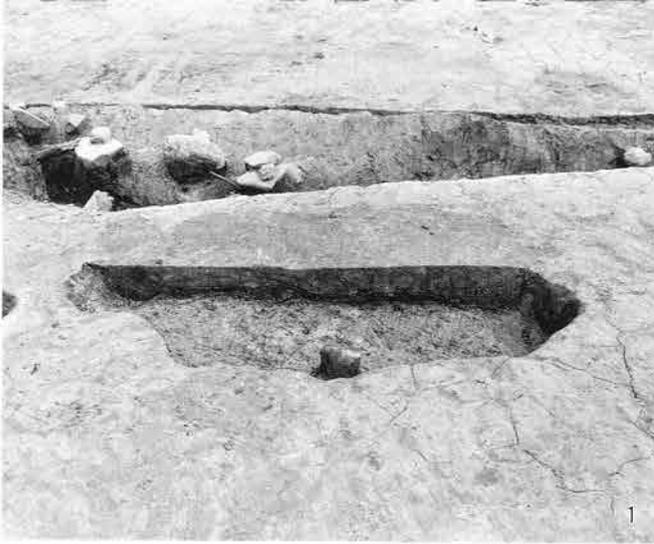
7



8

- 7. SE 320
断面 (南西から)
- 8. SE 320
完掘 (南から)

- 1. SK 341
断面 (西から)
- 2. SX 328
断面 (東から)



- 3. SB 358-
P 542
断面 (東から)
- 4. SB 358-
P 542
遺物出土状況
(東から)



- 5. P 660
断面
根固石
出土状況
(南東から)
- 6. P 730
遺物出土状況
(北から)



- 7. P 730
断面 (東から)
- 8. P 730
完掘 (東から)





1



2

- 1. P 720
断面 (東から)
- 2. SD 330・331
断面 (南から)



3



4

- 3. SD 330
C XXXIV 2区
遺物出土状況
(北から)
- 4. SD 335①・
330
断面 (東から)



5



6

- 5. SD 335①、
SX 345
断面 (南から)
- 6. SD 335②・
337
断面 (南から)



7



8

- 7. SD 335②・
337
断面 (北西から)
- 8. SD 335
B XXXIV 17・
22区
遺物出土状況
(南から)

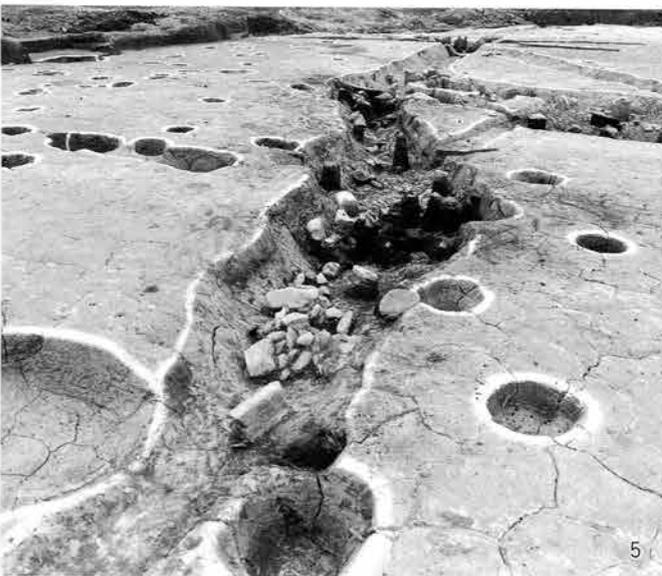
- 1. SD 335①
B XXXIV 17・
22区
遺物出土状況
(南から)
- 2. SD 335①
C XXXIV 2区
遺物出土状況
(北西から)



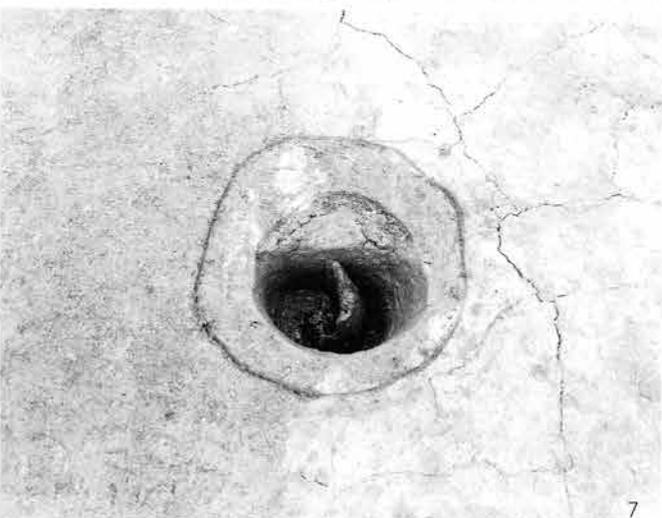
- 3. SD 335①
C XXXIV 2区
底面礫
出土状況
(南東から)
- 4. SD 335①・
337
C XXXIV 6区
遺物出土状況
(南から)



- 5. SD 337
遺物出土状況
(東から)
- 6. SD 337
漆器出土状況
(東から)



- 7. P 523
柱根出土状況
(東から)
- 8. SB 358-
P 531
柱根出土状況
(東から)





1. 遺跡遠景
(西から)



2. 調査西地区
(南から)



1. 調査東地区
(南から)



2. 調査西地区
遺構配置



1

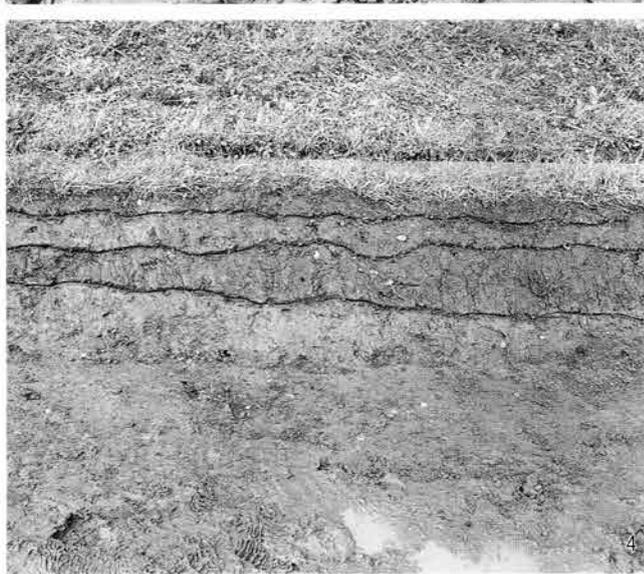


2

- 1. 土層堆積状況
a地点(南から)
- 2. 土層堆積状況
e地点(東から)

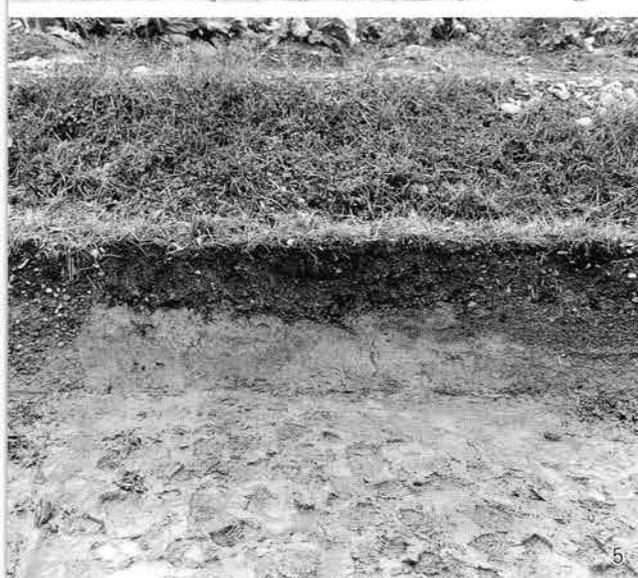


3



4

- 3. 土層堆積状況
k地点(南から)
- 4. 土層堆積状況
g地点(西から)



5



6

- 5. 土層堆積状況
j地点(西から)
- 6. P3
遺物出土状況
(東から)



7



8

- 7. SE 15
断面(南から)
- 8. SK 15
完掘(南から)

- 1. SE 25
断面 (南から)
- 2. SE 25
完掘 (南から)



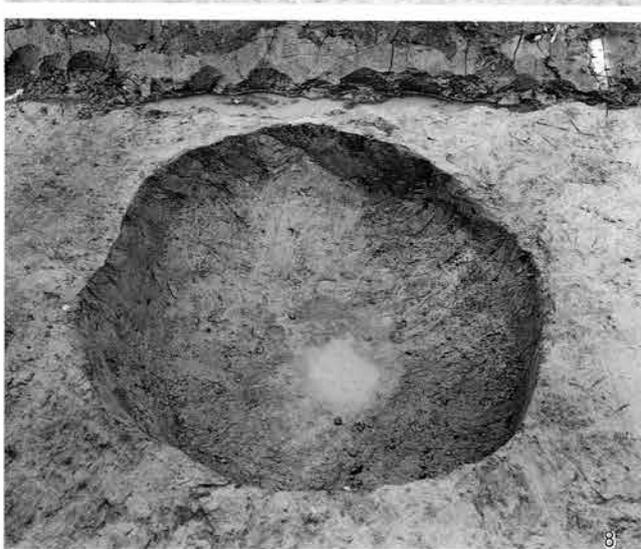
- 3. SK 53
断面 (南から)
- 4. SK 53
完掘 (南から)



- 5. SE 30
断面 (北から)
- 6. SE 30
完掘 (北から)



- 7. SK 20
断面 (南から)
- 8. SK 20
完掘 (南から)





1

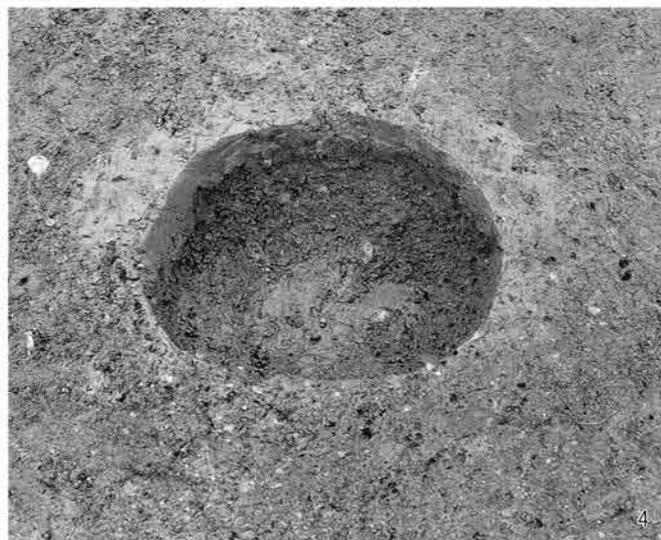


2

- 1. P 33
断面 (南東から)
- 2. P 33
柱痕完掘
(南東から)



3



4

- 3. P 32
断面 (東から)
- 4. P 32
完掘 (東から)



5



6

- 5. P 44
断面 (東から)
- 6. SE 50
礫出土状況
(東から)



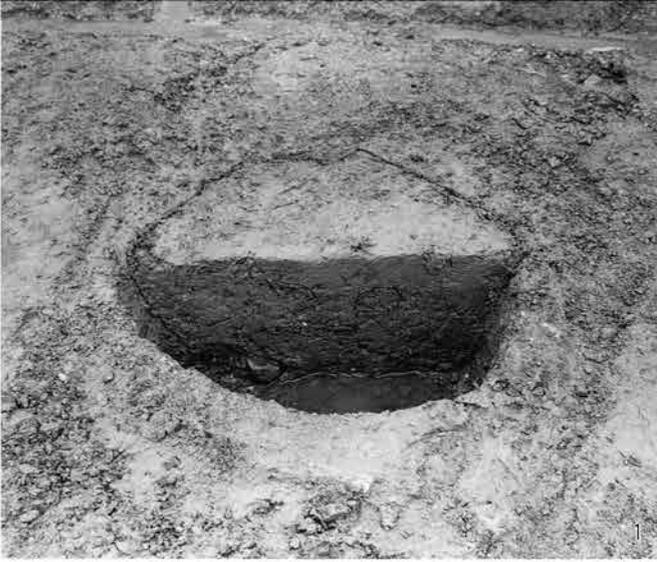
7



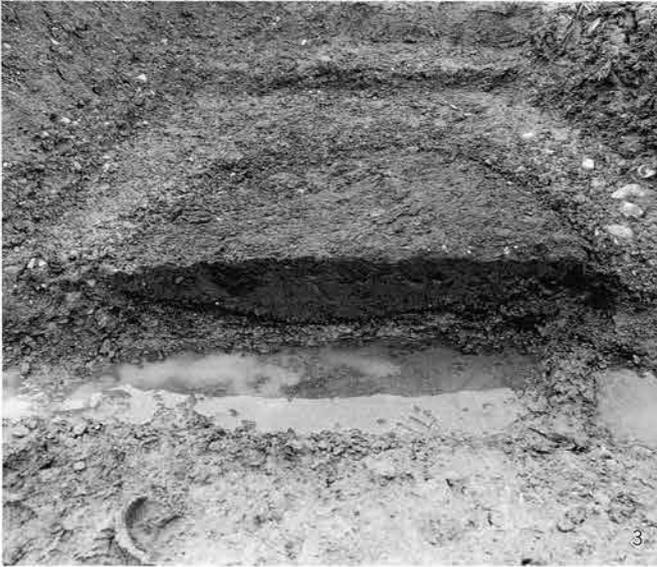
8

- 7. SE 35
断面 (東から)
- 8. SE 35
完掘 (東から)

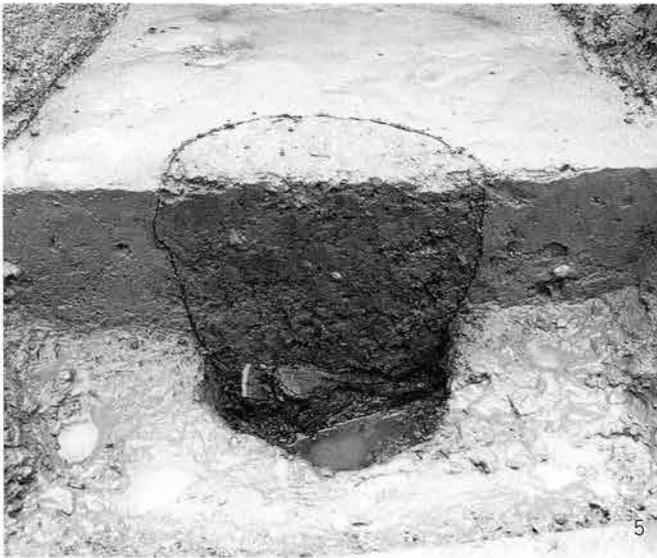
- 1. SE 45
断面 (東から)
- 2. SE 45
完掘 (東から)



- 3. SK 51
断面 (東から)
- 4. P 33
礎板出土状況
(東から)



- 5. P 46
断面 (東から)
- 6. P 46
遺物出土状況
(東から)





1. 調査地点遠景
(西から)



2. 調査地点近景
(西から)

石川遺跡

- 1. 土層堆積状況
SD1 西隣試掘坑断面
(南から)
- 2. SK2
木器出土状況
(北から)



- 3. SK2
完掘 (北から)
- 4. SD1
木器出土状況
(北西から)



- 5. SD1
完掘 (西から)
- 6. SD1
断面 (北から)



- 7. SD1
断面 (北から)
- 8. SD1
断面 (南から)



2

3

4

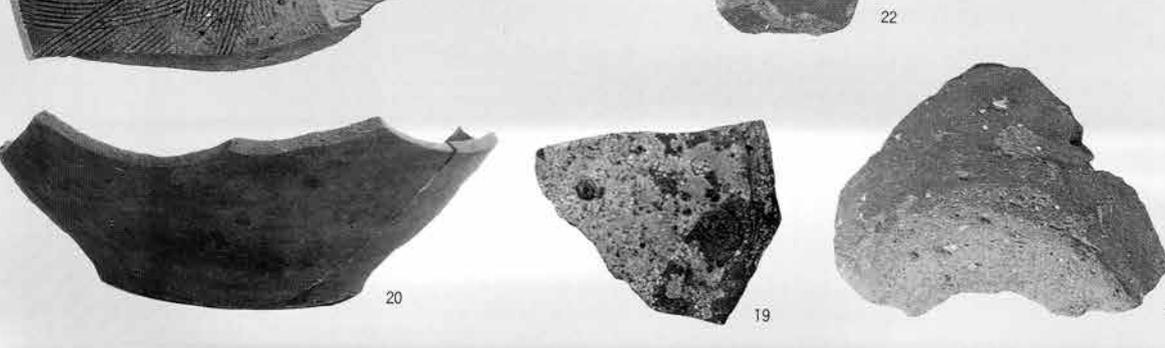
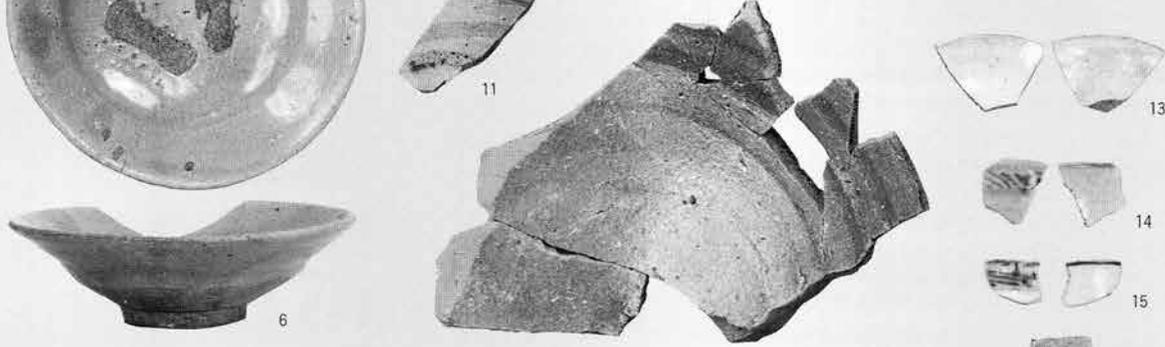
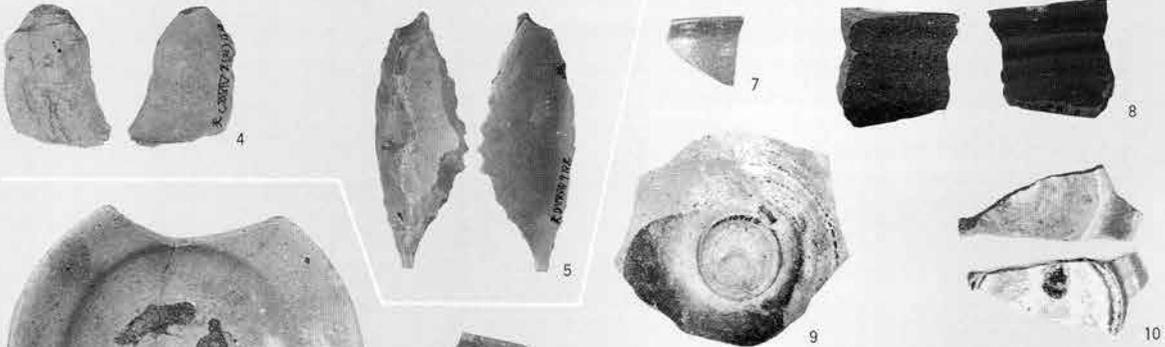
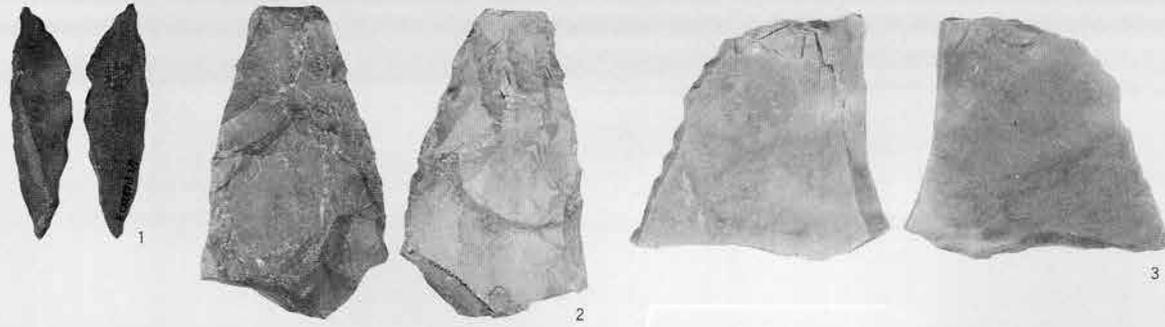
5

6

7

8

1~5 1:2
その他 1:3



旧石器・縄文時代の
石器
(1~5)

SB 357-P 542
(6~8)

P 671
(9)

P 698
(10)

P 680
(11)

P 726
(12)

P 884
(13)

P 1550
(14)

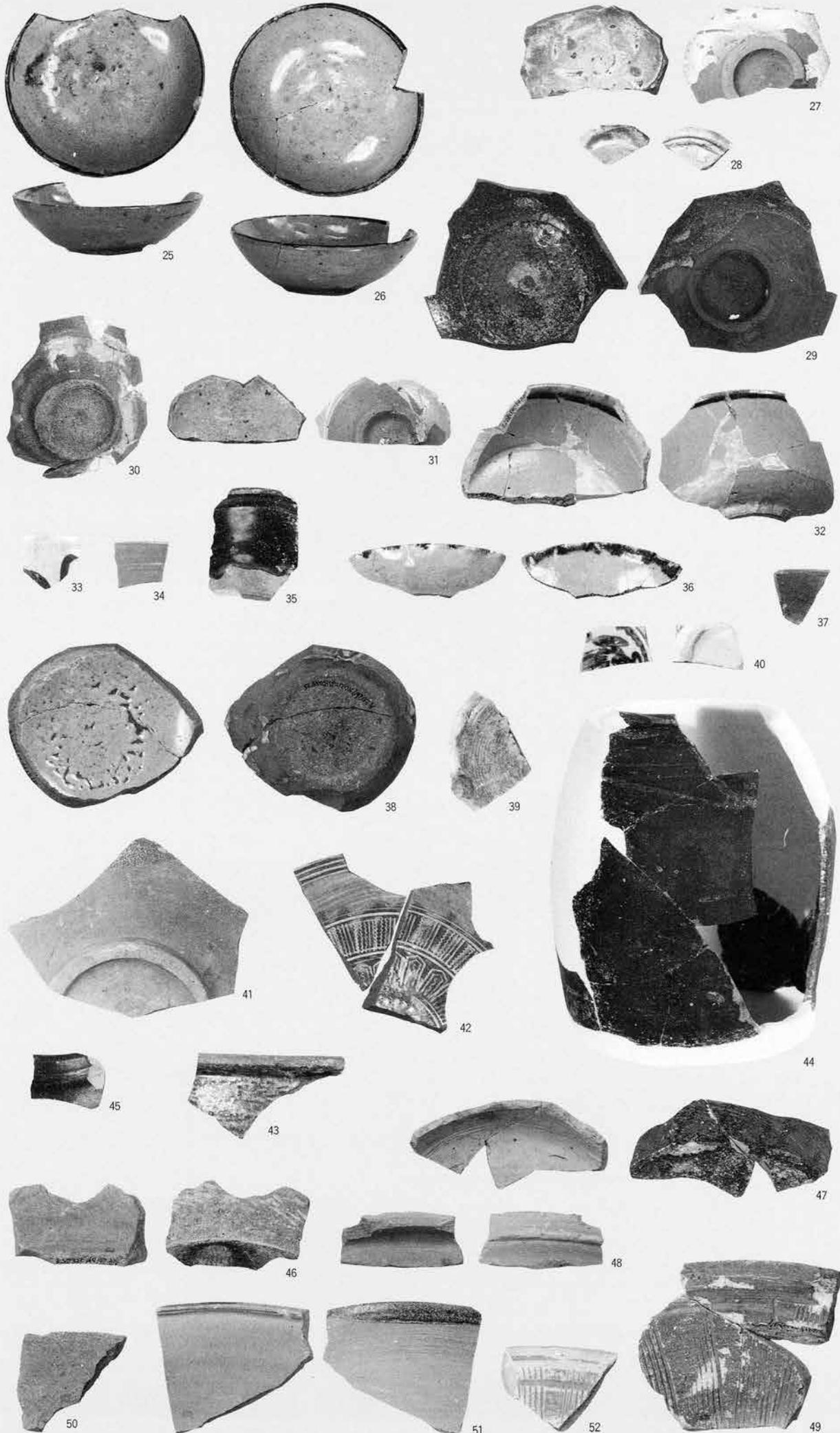
SD 324(自然流路)
(15)

P 730
(16~20)

SD 325(自然流路)
(21~23)

SD 330
(24)

1:3



SD 259
(28・29)

SD 335①
(その他)



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



73



74



71



72



75



76



77



78



79



80



81

SD 335① (53)

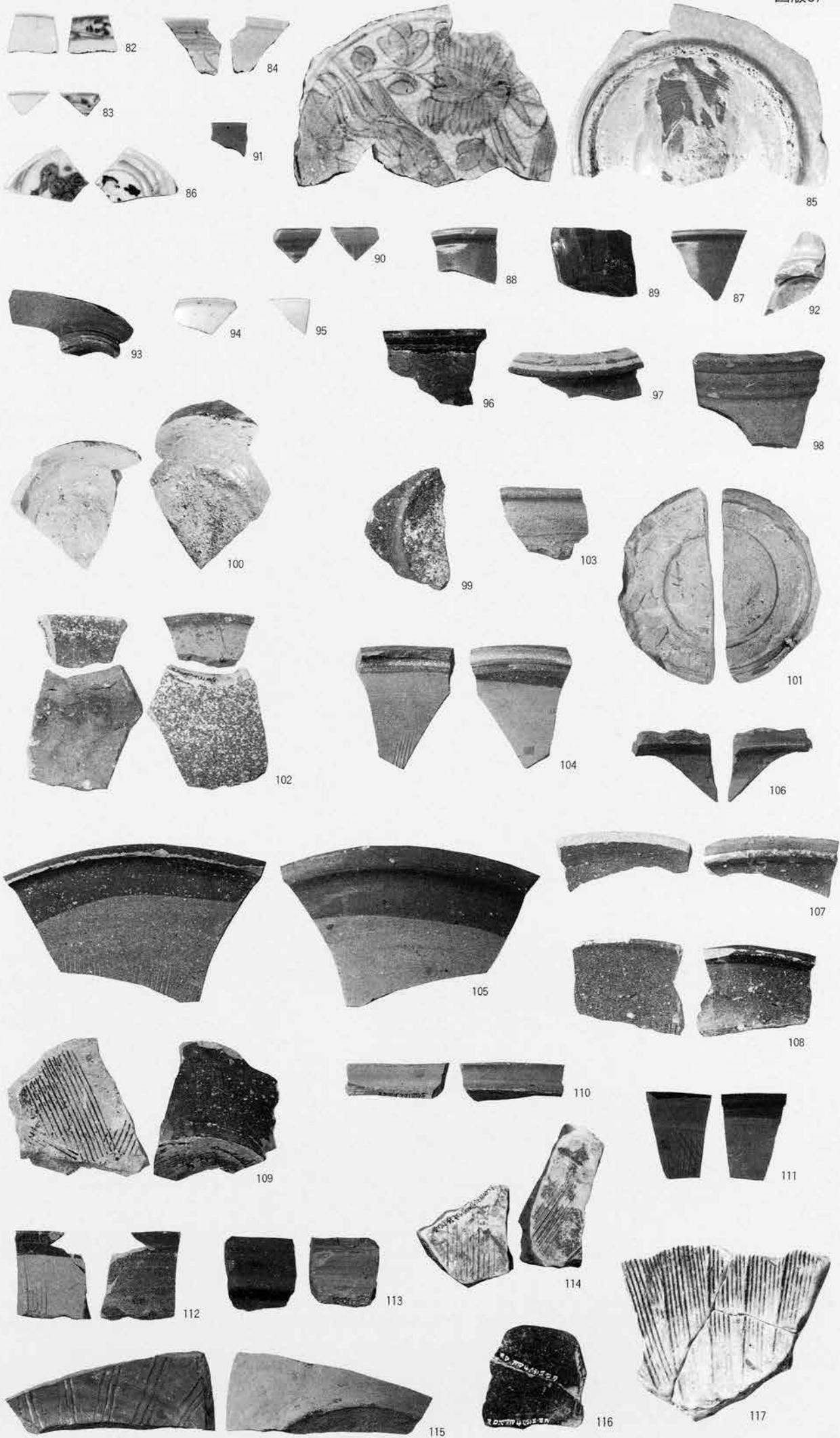
SD 335② (54)

SD 337 (55~61)

SX 327 (62~66)

遺構外出土土器 (67~81)

1:3



その他の遺構および
遺構外出土土器

121・122・127・128・
 132 1:4
 123・129・131・133
 1:3
 その他 1:5



遺構外出土土器
(118~128)

SB 357-P 620
(129・130)

SB 358-P 628
(131)

SB 357-P 600
(132)

P 659
(133)

SB 357-P 605
(134・135)

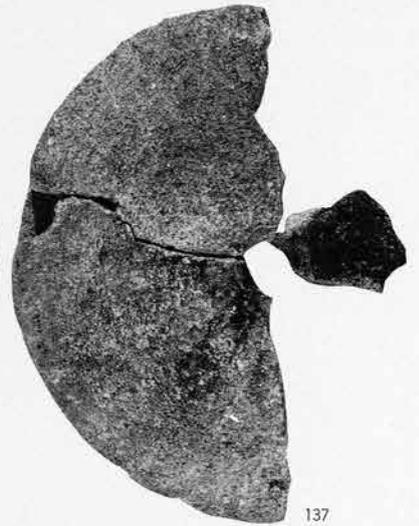
137・143・148 1:4
その他 1:3



136



137



138



139



144



140



142



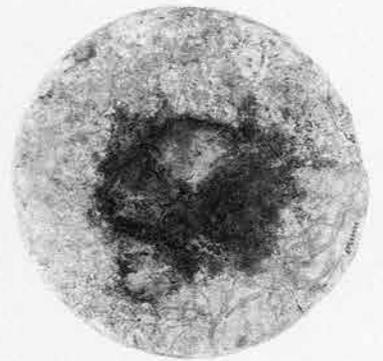
146



143



141



P 660
(136・137)

SB 357-P 676
(138)

SB 357-P 682
(139)

P 730
(140・141)

P 726
(142・143)

P 732
(144)

P 1641
(145)

SB 349-P 925
(146)

P 1631
(147)

SB 357-P 741
(148)



145

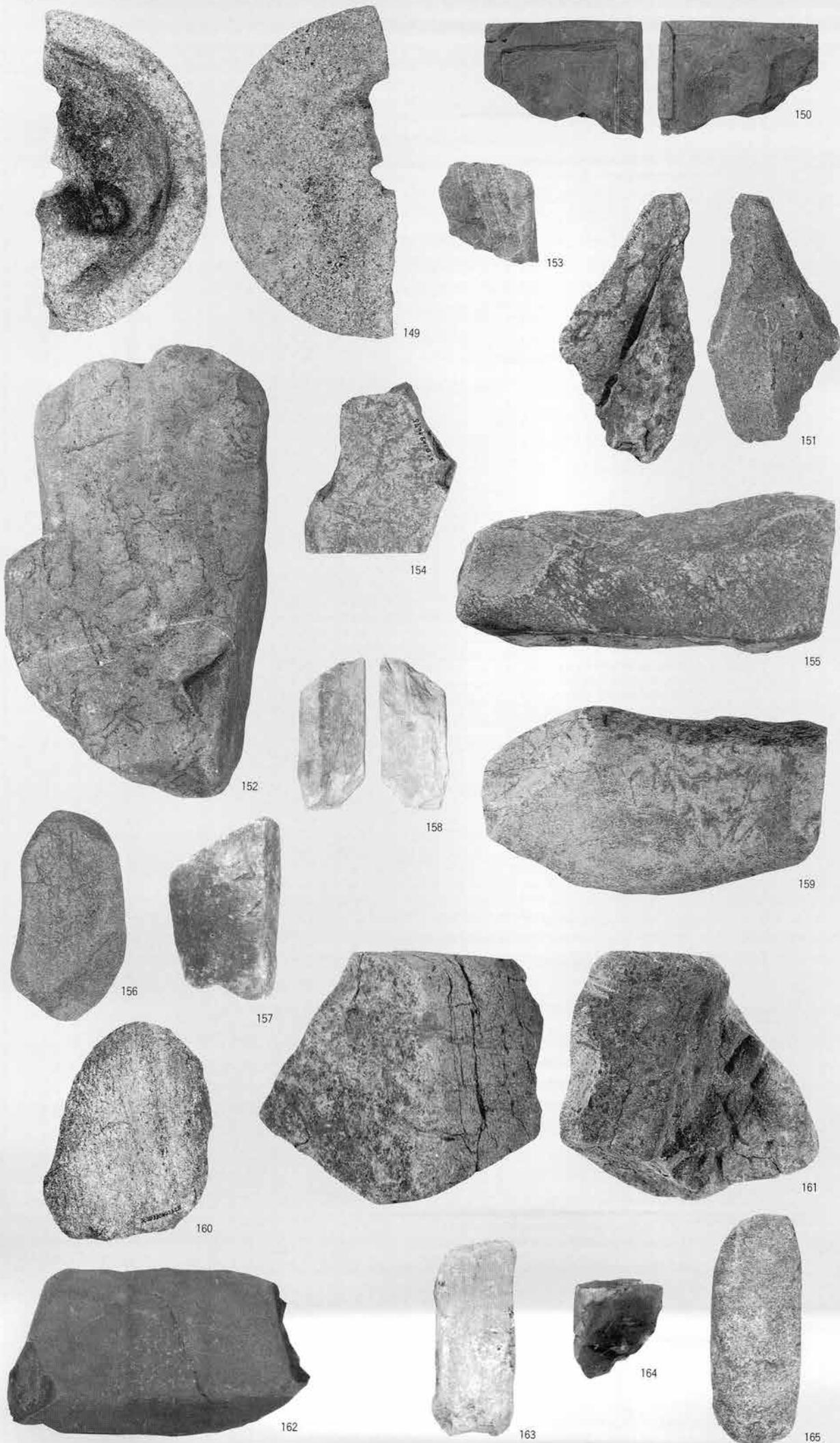


147



148

149・159・160・162
 1:5
 その他 1:3



SB 357-P 765 (149)

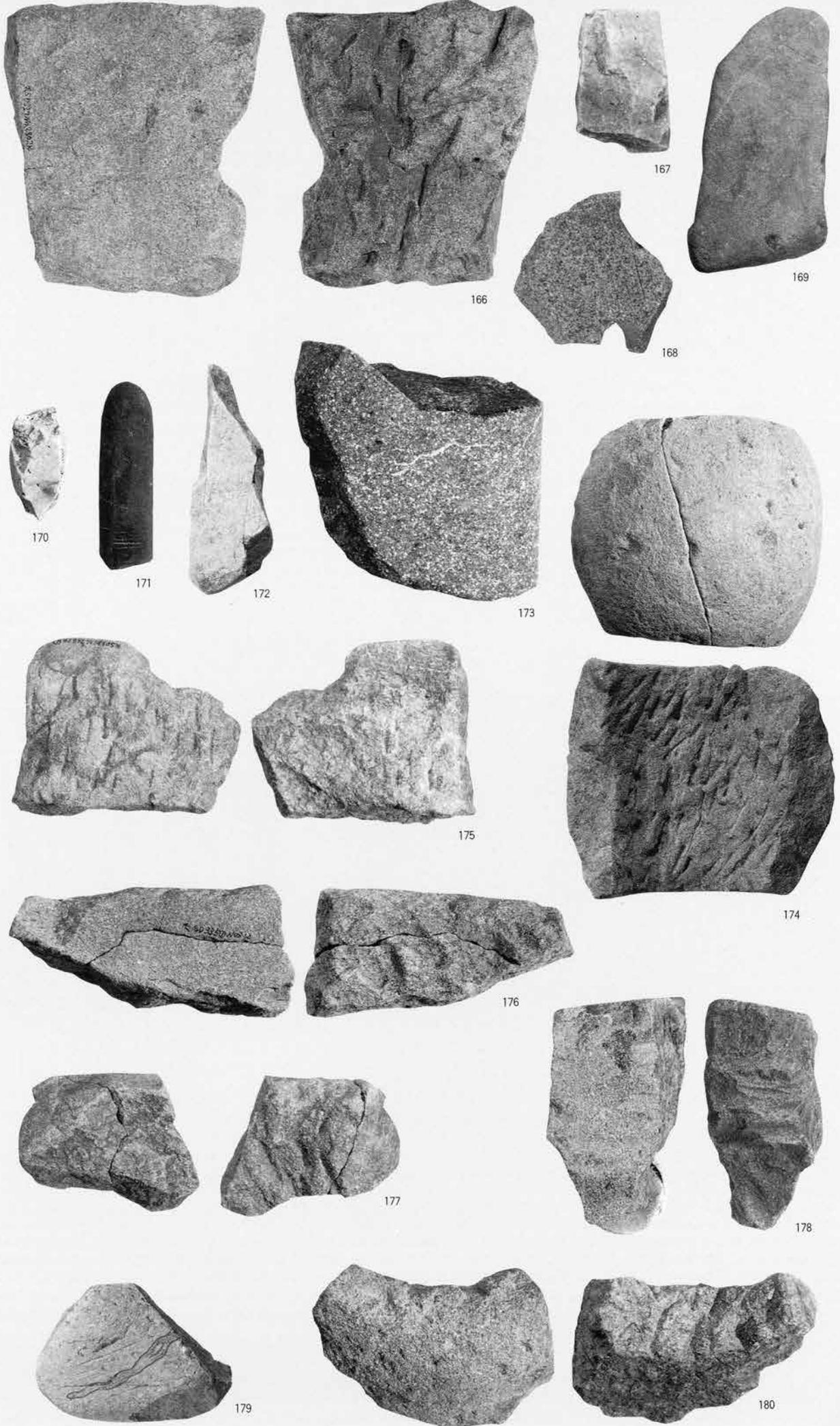
SD 259(道路状遺構) (150~154)

SD 324(自然流路) (155~157)

SD 325(自然流路) (158)

SD 330 (159~165)

169・174 1:5
その他 1:3



SD 337
(166~169)

SD 335①
(170~179)

SX 327
(180)

196~201 1:5
その他 1:3



181



181-a



182



183



184



185



188



189



193



191



197



186



187



198



199



201



196



199



200

SD 335②
(181・181-a・182)

遺構外出土石製品
(183・184)

SD 337
(185~187)

SB 357-P 650
(188・189)

SB 357-P 620
(191)

P 574
(193)

P 518
(196)

P 669
(197)

SB 357-P 670
(198)

P 865
(199)

SB 357-P 675
(200)

P 679
(201)

209・211 1:2
210 1:3
その他 1:5



202



203



204



206



207



208



209



210



211

P 778
(202)

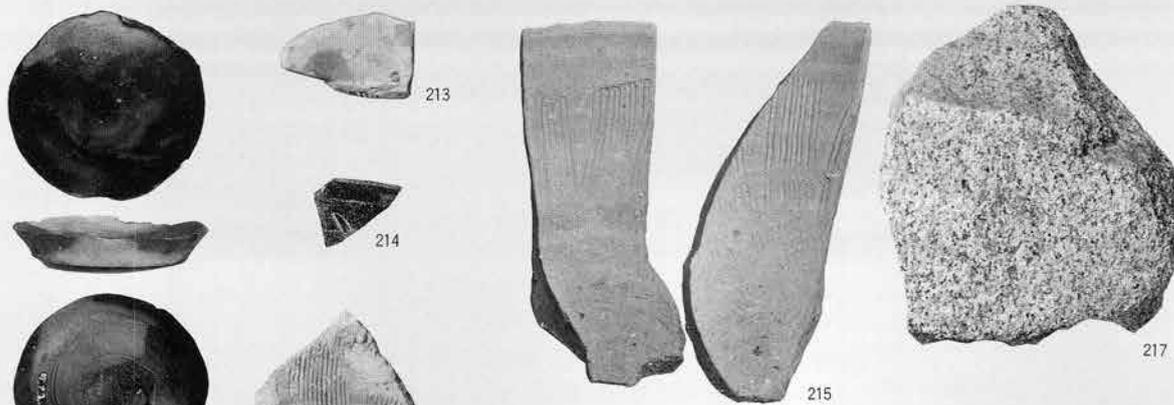
SB 357-P 676
(206)

SD 330
(203・204)

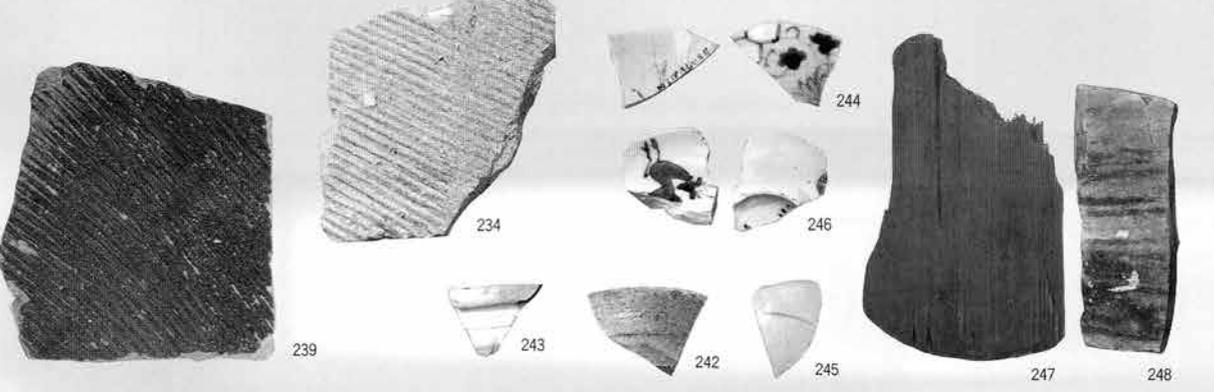
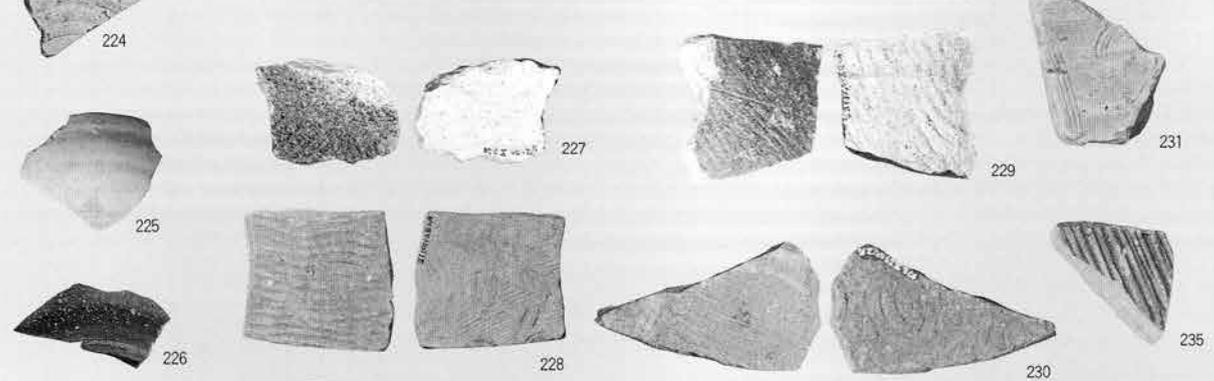
SD 337
(207~209)

SD 335①
(210)

遺構外出土金属器
(211)

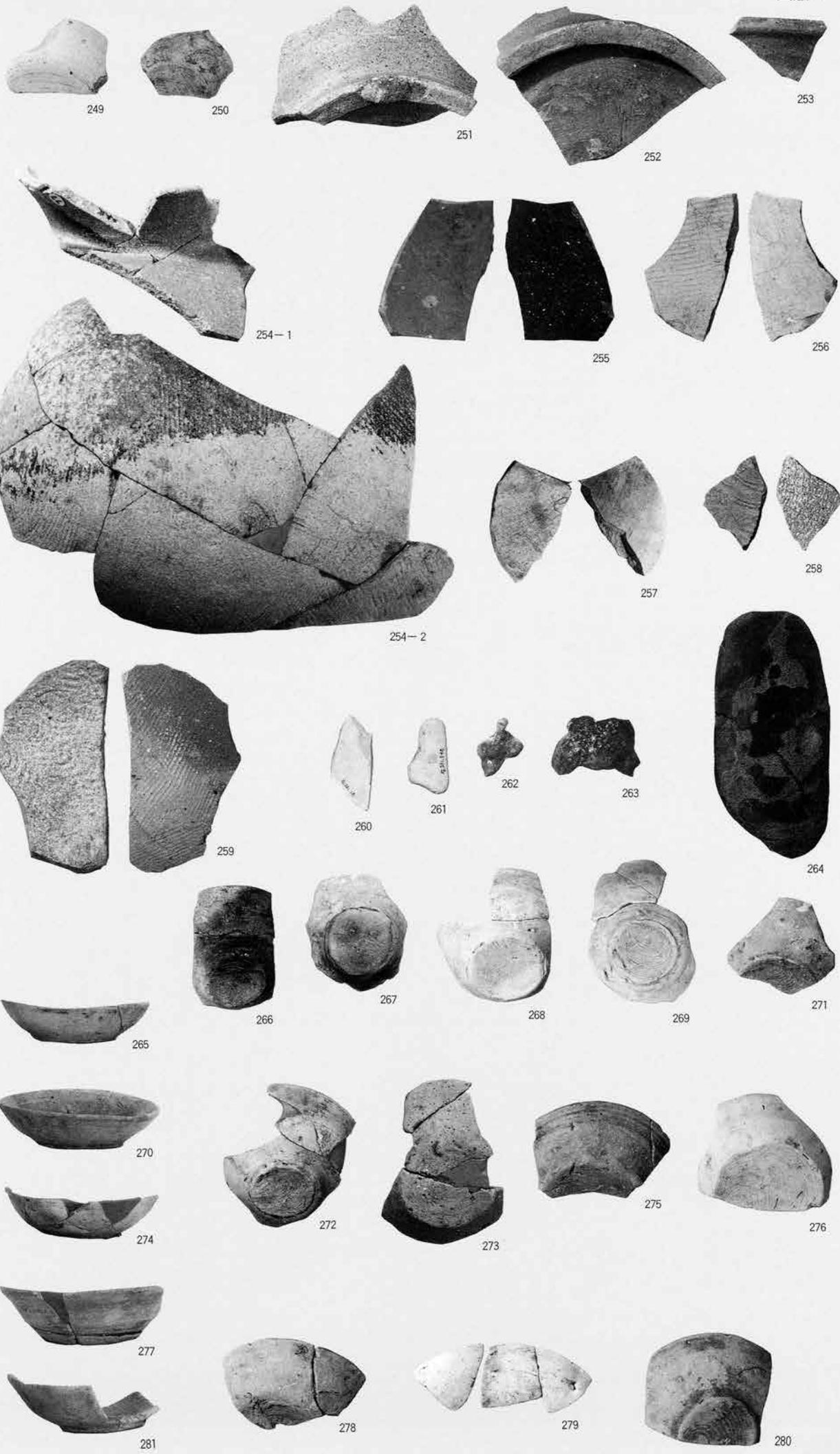


223 1:5
 215・216・227~239 1:4
 その他 1:3



P 3 (212)
 P 46 (215)
 SD 40 (217)
 SE 25 (214・216・218)
 SE 35 (213・219・220)
 P 33 (221・222)
 P 38 (223)
 遺構外出土遺物 (224~248)

255~259 1:4
その他 1:3



SK 2
(249~264)

SD 1 (1層)
(その他)

1:3



285



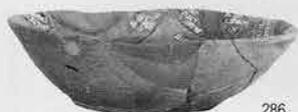
282



283



284



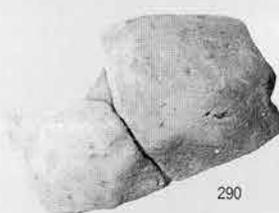
286



288



289



290



287



292



293



296



294



291



299



295



298



297



301



300



302



303



305

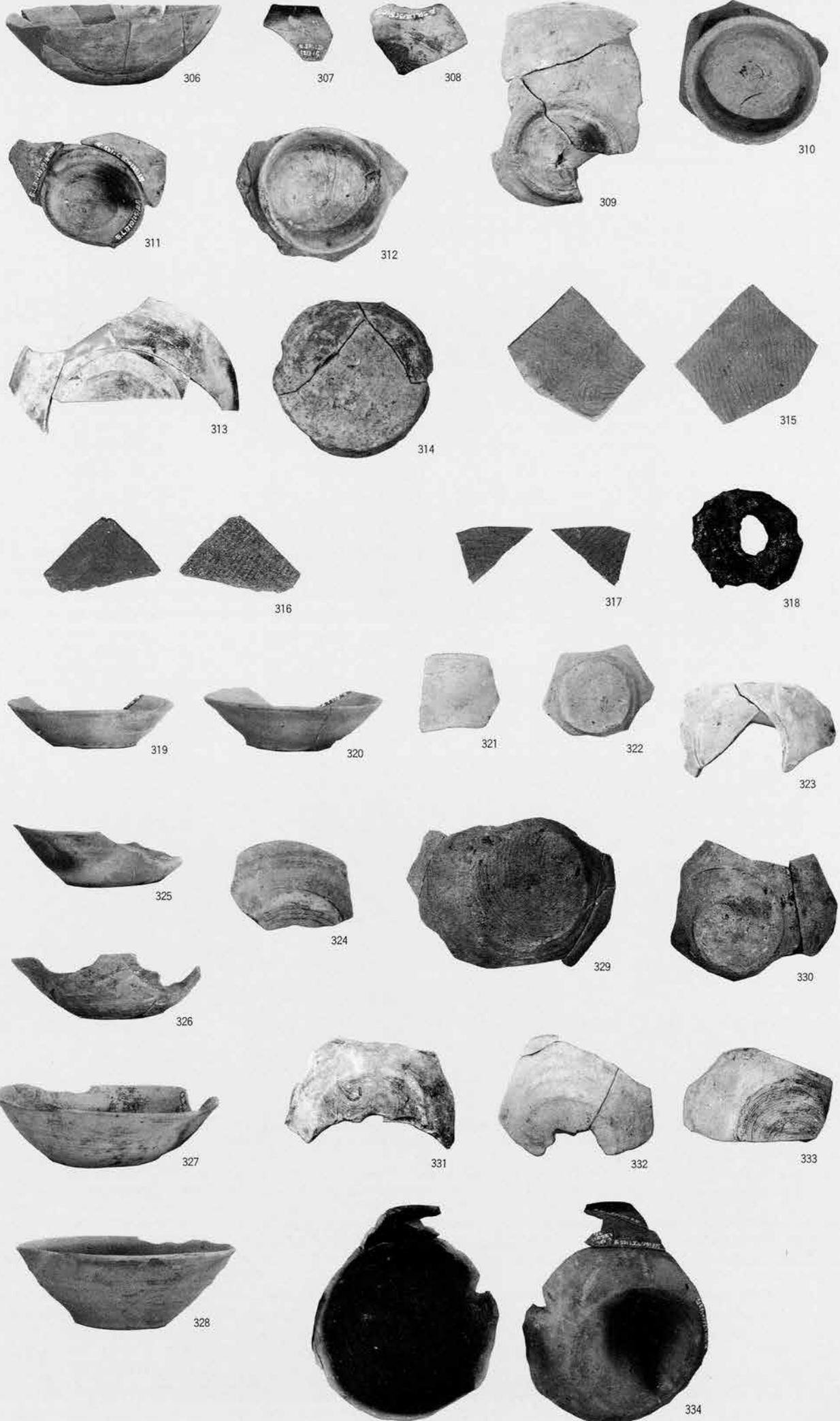


304



SD1(1層)

315~317 1:4
その他 1:3



SD1 (1層)
(306~318)

SD1 (2層)
(319~323)

SD1 (3層)
(324~334)



346 1:5
その他 1:3



342

344

345

343



350

347



348



352



349

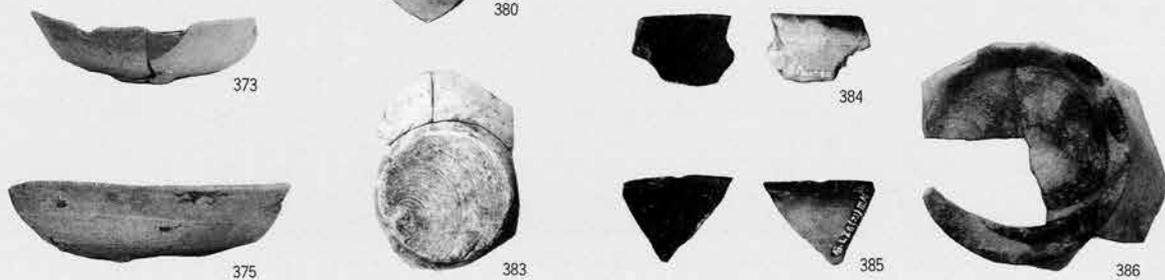
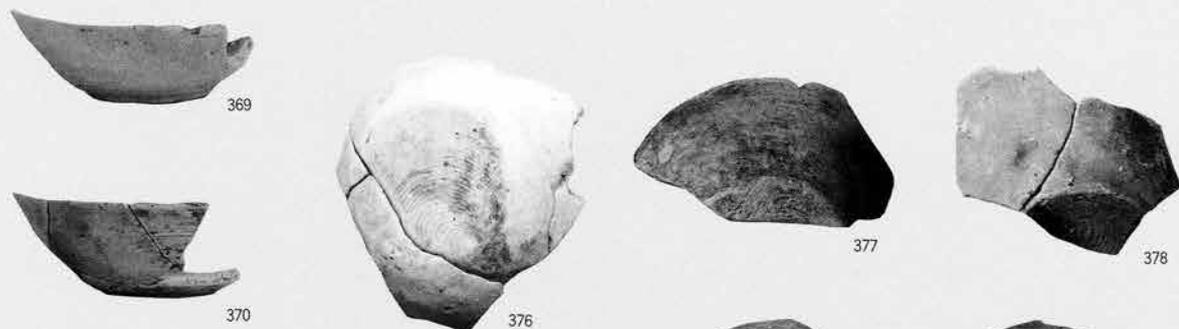
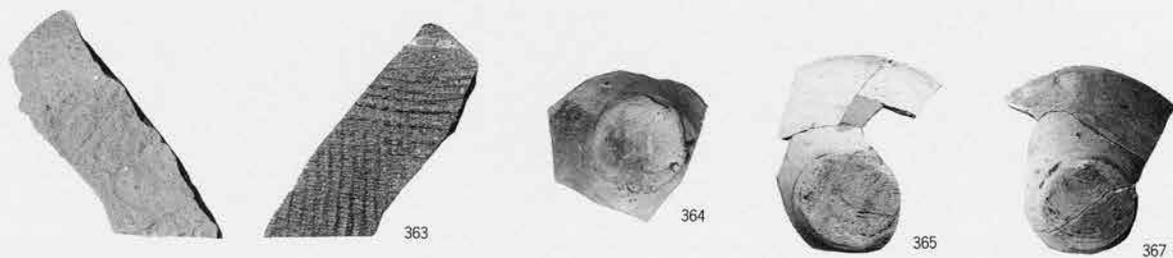
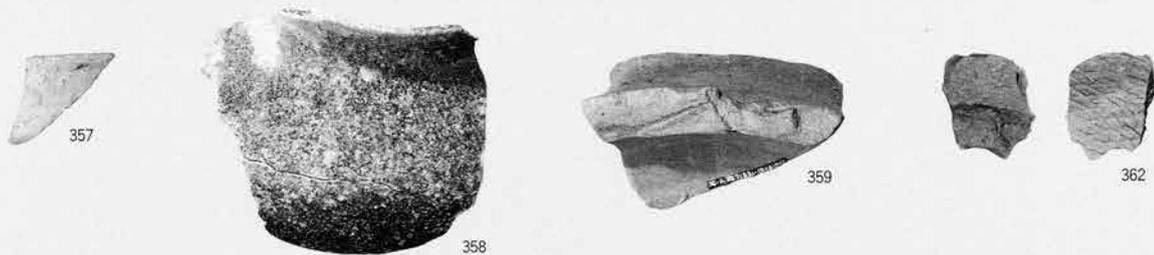
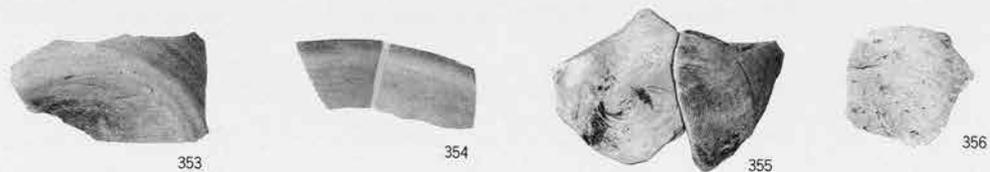


351

SD 1 (3層)
(335~346)

SD 1 (5層)
(347~352)

360~362 1:4
その他 1:3



SD 1 (層位不明)
(353~356)

遺構外出土土器
(357~386)



379



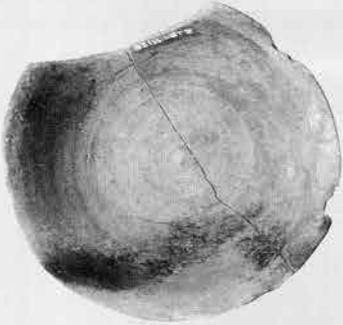
387



388



390



391



392



393



394



395



396



397



398



399



400



401



402



403



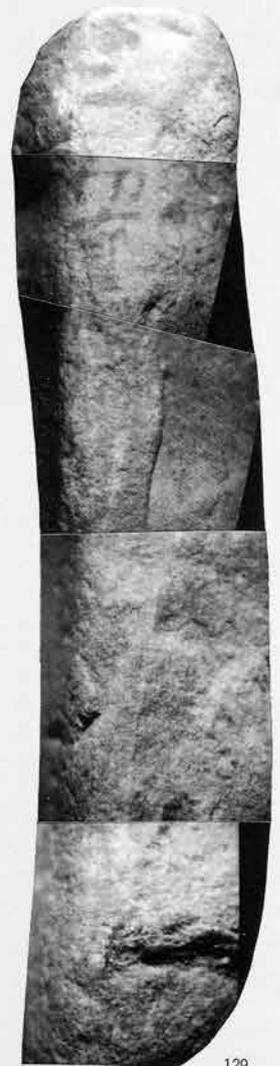
209 1:1
129 不等



209



正面

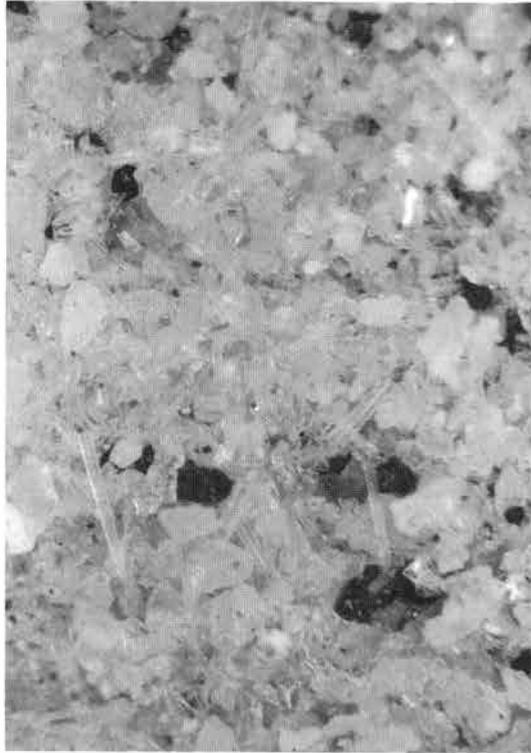


右側面

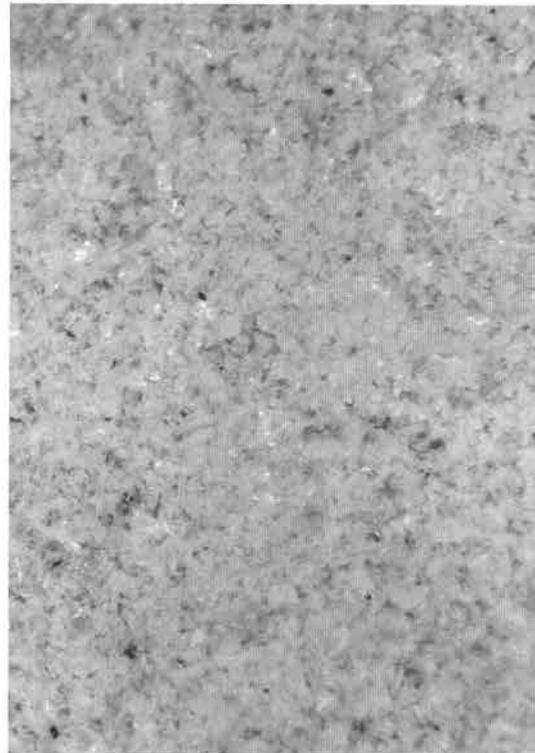
129

SD 337出土柄
X線写真
(209)

SB 357-P 620
出土墨書石
赤外線写真
(129)



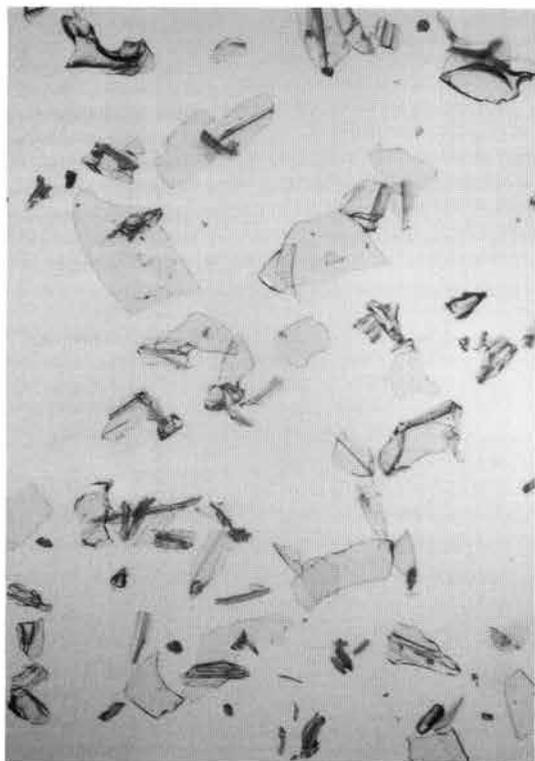
1 砂分の状況(試料番号 5)



2 砂分の状況(試料番号 9)



3 As-K 火山ガラス(試料番号 5)



4 AT 火山ガラス(試料番号 9)

0.5mm

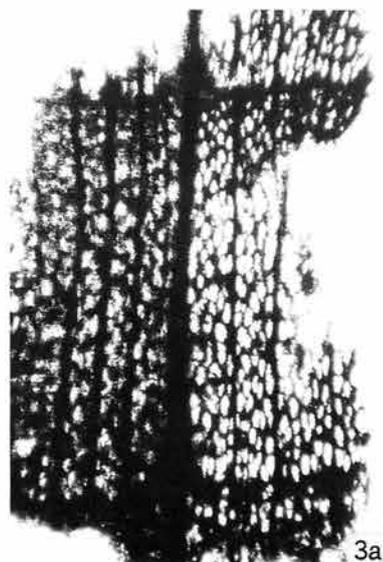
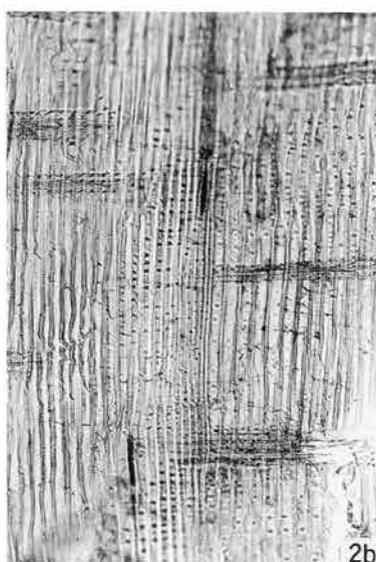
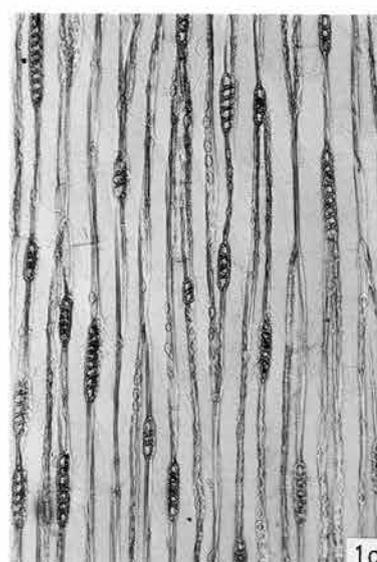
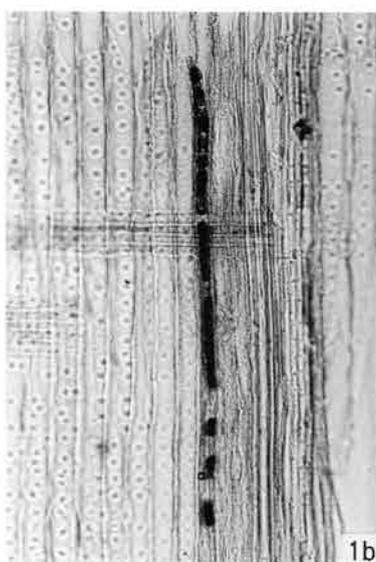
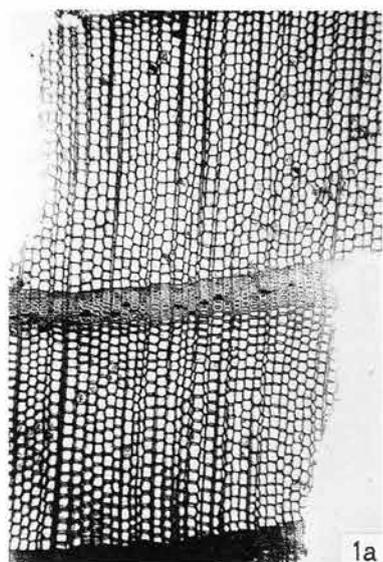
1.0mm

0.5mm

(1)

(2)

(3・4)



1 スギ(試料番号35)
 2 ヒノキ(試料番号27)
 3 ブナ属(試料番号34)
 a: 木口、b: 柘目、c: 板目

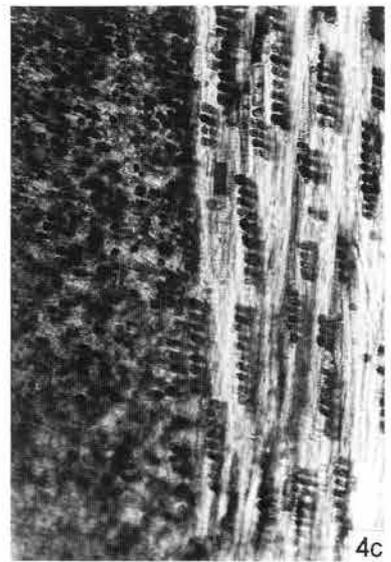
200 μm : a
 200 μm : b・c



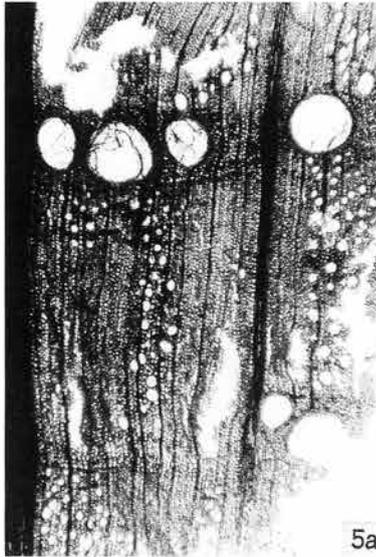
4a



4b



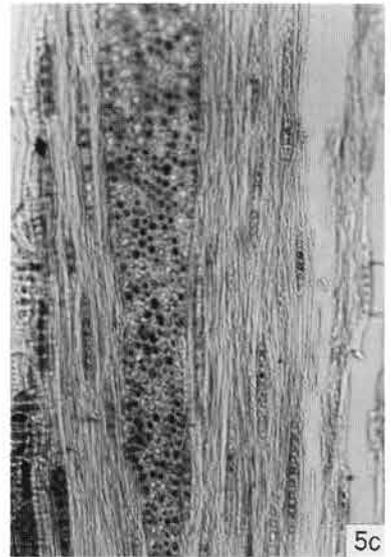
4c



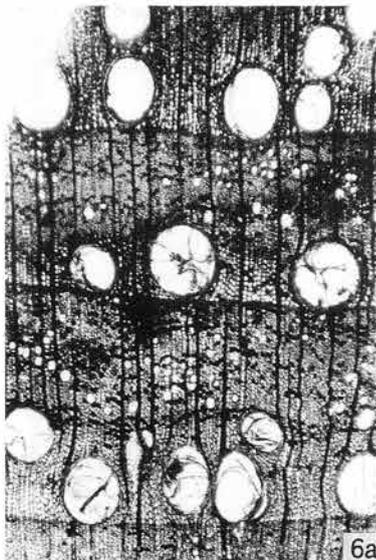
5a



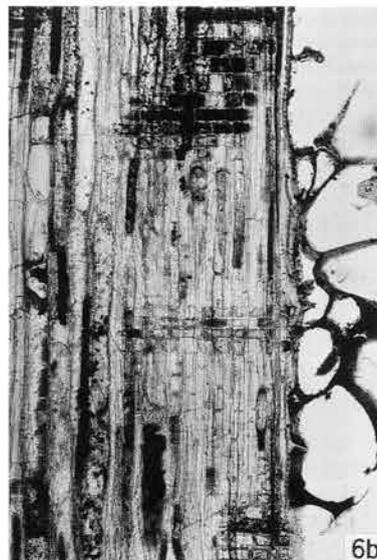
5b



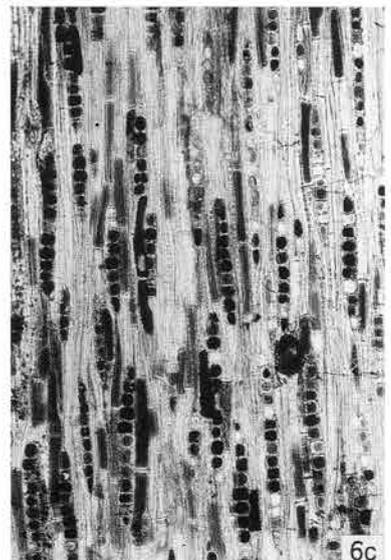
5c



6a



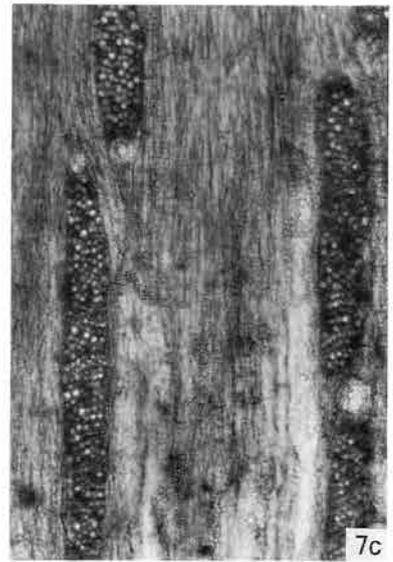
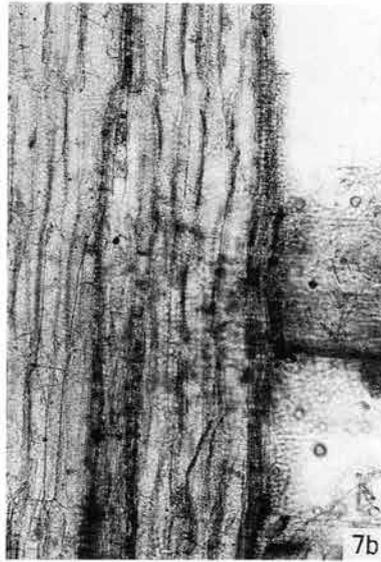
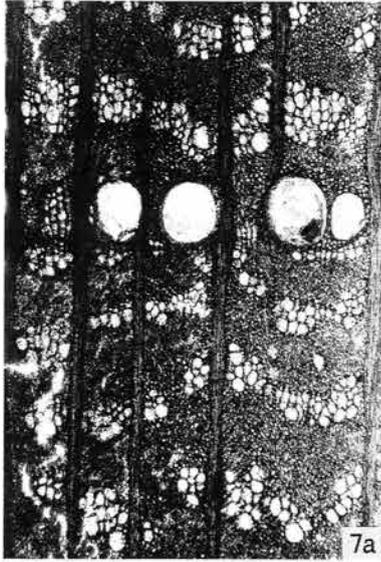
6b



6c

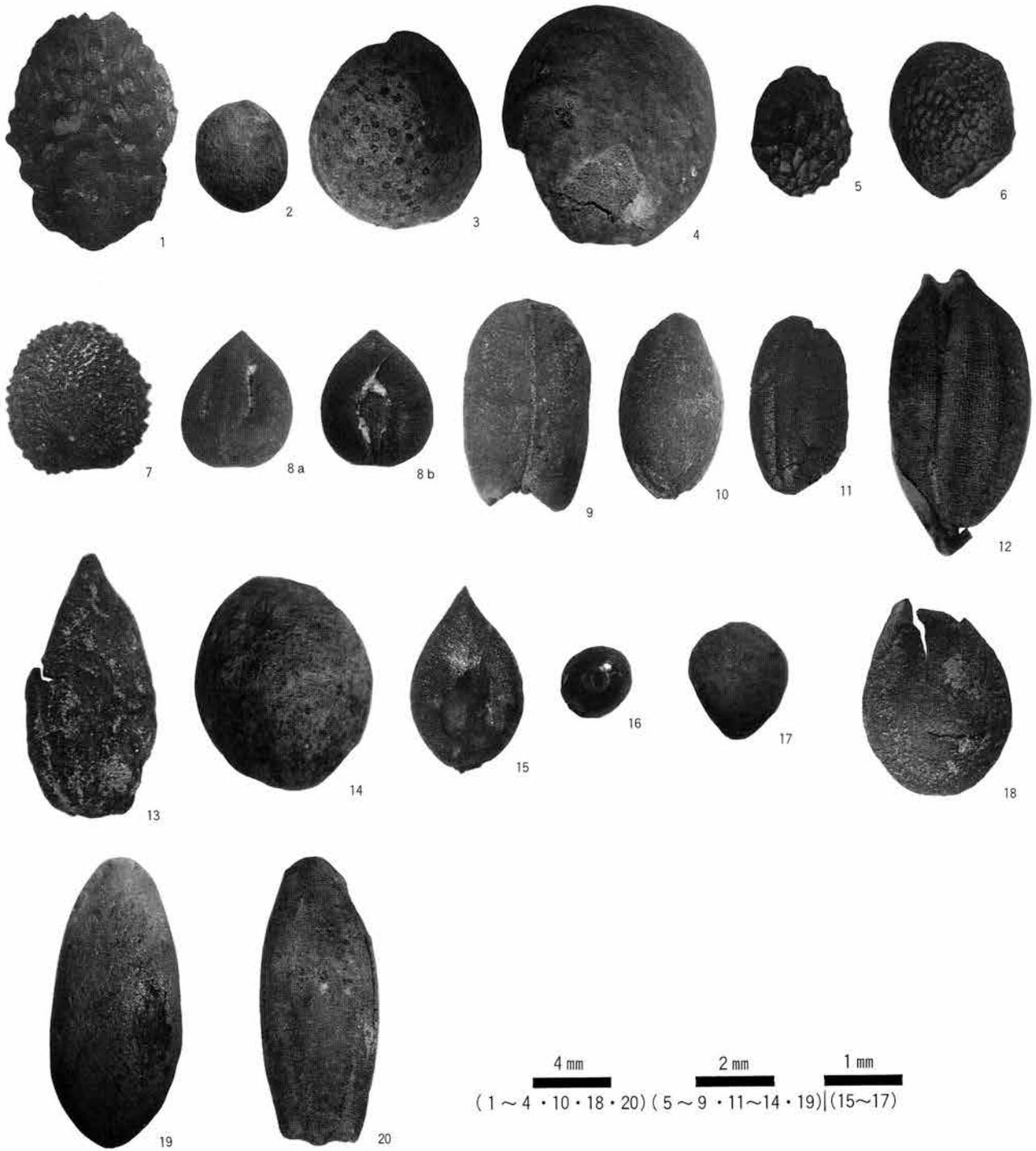
- 4 コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料番号18)
 - 5 コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号21)
 - 6 クリ(試料番号2)
- a: 木口、b: 柾目、c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b・c



7 ケヤキ(試料番号44) a: 木口、b: 柾目、c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b · c



- 1 ブナ(SE 320 2層土壤)
- 3 ウメ(SE 344 8層)
- 5 カラスザンショウ属(SE 344 8層)
- 7 アカメガシワ(SE 344 8層)
- 9 クマヤナギ属(SE 344 7層)
- 11 イネ(SE 344 8層)
- 13 オオムギ(SE 344 6層)
- 15 タデ属(SE 344 8層)
- 17 シソ属(SE 344 8層)
- 19 メロン類(SE 344 8層)

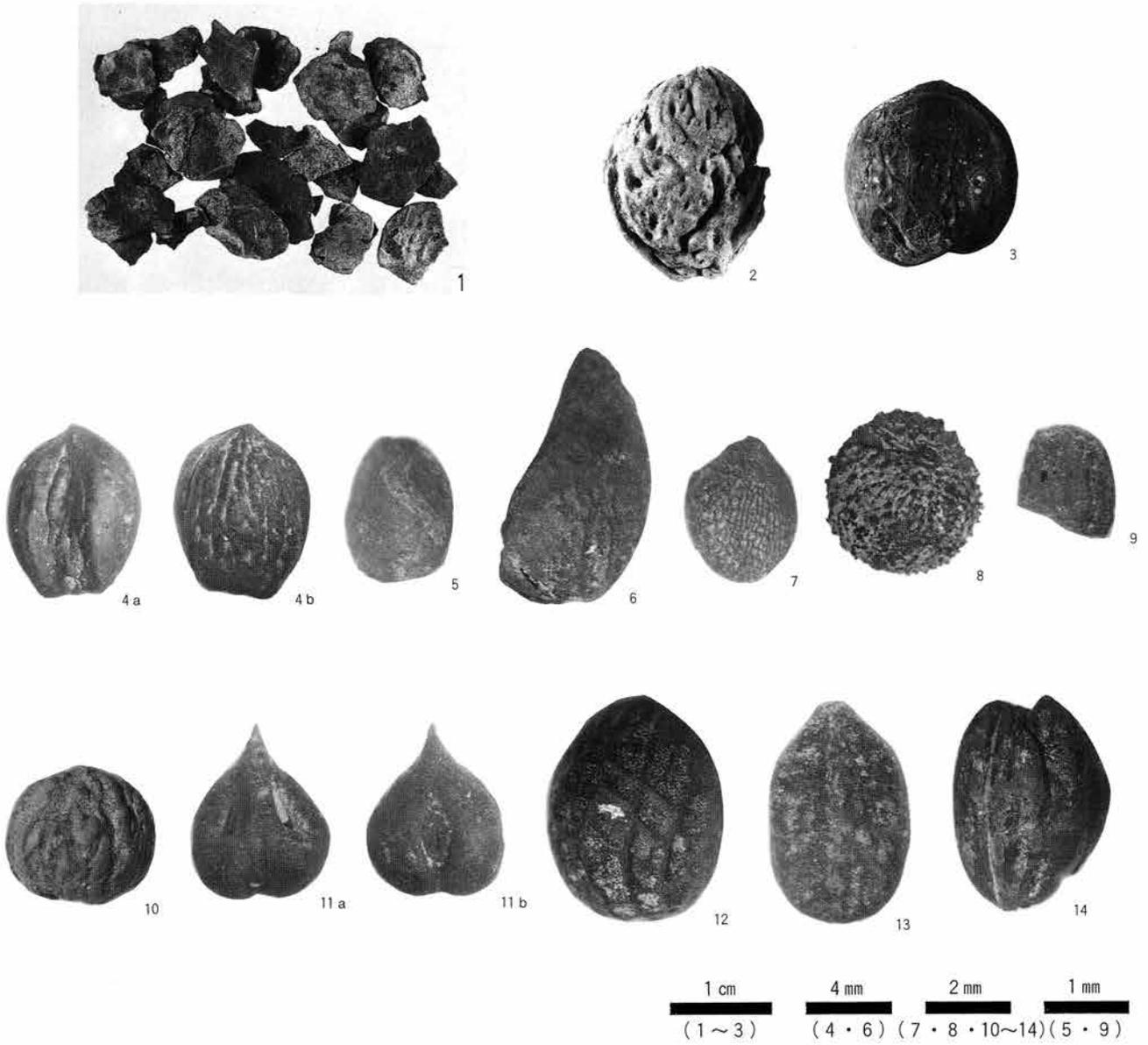
- 2 サクラ属(SE 344 8層)
- 4 スモモ(SE 344 8層)
- 6 サンショウ(SE 320 2層)
- 8 ブドウ属(SE 344 8層)
- 10 エゴノキ属(SE 344 8層)
- 12 イネ(SE 344 8層)
- 14 クワ科(SE 344 8層)
- 16 アカザ科—ヒユ科(SE 344 8層)
- 18 トウガン(SE 344 8層)
- 20 ヒョウタン類(SE 311 3層)



1 cm 4 mm 2 mm
 (1・2・15・16) (3) (4~14)

- 1 トチノキ(SE1 4層)
- 3 ホウノキ(SE1 4層)
- 5 アカメガシワ(SE1 3層)
- 7 ブドウ属(SE1 3層)
- 9 イネ(SE1 3層)
- 11 オオムギ(SE1 3層)
- 13 クワ科(SE1 3層)
- 15 イネ(SE1 3層)

- 2 モモ(SE1 3層)
- 4 カラスザンショウ属(SE1 3層)
- 6 クサギ(SE1 4層)
- 8 イネ(SE1 3層)
- 10 コムギ(SE1 4層)
- 12 カナムグラ(SE1 4層)
- 14 タデ属(SE1 3層)
- 16 コムギ(SE1 4層)



- 1 堅果類の皮(SE 25 1層)
- 3 オニグルミ(SE 25 1層)
- 5 クワ属(SE 25 3層)
- 7 サンショウ(SE 25 3層)
- 9 タラノキ(SE 25 3層)
- 11 ブドウ属(SE 25 3層)
- 13 ガマズミ属(SE 30 6層)

- 2 モモ(SE 35 4層)
- 4 ホウノキ(SE 30 6層)
- 6 スモモ(SE 25 2層)
- 8 アカメガシワ(SE 25 3層)
- 10 ミズキ(SE 25 3層)
- 12 クサギ(SE 30 6層)
- 14 イネ(SE 30 6層)



- | | | | |
|----|--------------------|----|-------------------|
| 15 | イネ(SE 30 6層) | 16 | コムギ(SE 30 6層) |
| 17 | オオムギ(SE 30 6層) | 18 | カヤツリグサ科(SE 25 3層) |
| 19 | アサ(SE 30 3層) | 20 | カナムグラ(SE 25 2層) |
| 21 | クワ科(SK 52 1層) | 22 | タデ属(SE 30 3層) |
| 23 | アカザ科-ヒユ科(SE 25 3層) | 24 | マメ類(SE 35 4層) |
| 25 | シソ属(SE 25 3層) | 26 | ナス科(SE 25 3層) |
| 27 | トウガン(SE 30 6層) | 28 | ヒョウタン類(SE 30 6層) |
| 29 | メロン類(SE 30 6層) | 30 | オナモミ属(SE 30 6層) |

報告書抄録

書名	天王前遺跡 有明の場遺跡 石川遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業(神林村)関連埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第89集							
編著者名	鈴木俊成・金子泰之・高橋保							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新津市金津93-1 TEL0250(25)3981							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天王前遺跡	新潟県岩船郡神林村大字山屋字天王前	15583	193	38°12'40"	139°29'66"	19960711～19961008	4,150㎡	県営ほ場整備事業に伴う事前調査
有明の場遺跡	新潟県岩船郡神林村大字有明870番地ほか	15583	165	38°10'48"	139°28'88"	19961016～19961120	2,130㎡	県営ほ場整備事業に伴う事前調査
石川遺跡	新潟県岩船郡神林村大字桃川3060番地ほか	15583	196	38°10'25"	139°28'77"	19961030～19961129	365㎡	県営ほ場整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天王前遺跡	集落	中・近世(14世紀～17世紀)	掘立柱建物11棟、井戸4基、土坑1基、道路状遺構1条、溝・ピット多数	青磁・白磁・珠洲・越前・瀬戸美濃・瓷器系陶器・信楽・肥前・越中瀬戸・漆器・木製品・石製品・金属製品		石製品の中に五輪塔片を含む。据石をもつ大型掘立柱建物から呪いの墨書石が出土		
有明の場遺跡	集落	平安時代、中・近世(14世紀～18世紀)	井戸6基、土坑3基、溝2条、ピット7基	須恵器・土師器・かわらけ・珠洲・肥前・木製品・石製品				
石川遺跡	祭祀?	平安時代(11世紀)	土坑1基、ピット11基、自然流路1条	須恵器・土師器・木製品・石製品		自然流路から多量の土師器碗が出土し、祭祀遺構の可能性もある。		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第89集

県営ほ場整備事業(神林村)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

天王前遺跡・有明の場遺跡・石川遺跡

平成10年3月30日印刷
平成10年3月31日発行

発行・編集 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市新光町4-1
電話 (025) 285-5511

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845
新津市大字金津93番地1
電話 (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986

印刷 長谷川印刷
新潟市小針1-11-8
電話 (025) 233-0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第89集『天王前遺跡 有明の場遺跡 石川遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	天王前遺跡 北緯	38度12分40秒	38度12分28秒
抄録	天王前遺跡 東経	139度29分66秒	139度29分42秒
抄録	有明の場遺跡 北緯	38度10分48秒	38度10分25秒
抄録	有明の場遺跡 東経	139度28分88秒	139度28分49秒
抄録	石川遺跡 北緯	38度10分25秒	38度10分13秒
抄録	石川遺跡 東経	139度28分77秒	139度28分45秒